
白世界

白龍閣下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白世界

【著者名】

白龍閣下

【あらすじ】

私こと秋津晴希は身長は低めで顔は中性的、体力はおそらく陸に上がったコイキングに劣る程度、趣味といえるものはこの執筆くらいで、基本的に無気力ニートと言つた具合で、家から電車等を駆使し約三十分の所にある董城高校という所に通つていて、部活動はと言えば、文芸部所属。活動は面倒ながら平日ほぼ毎日ある。あー……後、対人運が酷く悪い。もはや終了していると言つても過言ではないだろう。これぞというような原因があるかといえば普通にあるわけで、その全てはあの男　内藤嘉光に出会ってしまった事だと

言つてしまつていい。それから似非無口だのレズの後輩だと、懸案事項は後を絶たない。かくして私は頭を悩ませながら文芸部ライフを送る羽目になるのである。一→十四話、大幅に修正もとい悪化させました！（2011／9／6現在）

序章　白世界は白より現る（前書き）

えー、であるからして作者初の作品であるわけですが。
最初からこれです。作者は偏屈です、シニカルです。

序章 白世界は白よつ現る

「……どうこう事だ」
「……」
「……おい内藤、どうこう事かと訊いている」
「？ 何がだ？」
「しらばっくれるな。どうこう事が答えてくれ」
「待ってくれ晴希、まず日本語で話すんだ」
「鼻から尻尾まで日本語だ。更に念を押すと、かつて琉球王国じゅりゅうおうこくと呼ばれた場所で発達した沖縄弁おきなわべんでも発音がフランス語っぽいと言われている津軽弁つがるべんでもない。れっきとした標準語で言つたんだが？」
「そうか、じゃあ俺がお前の話をよく聞いてなかつたんだな。悪かつた」
「いや、聞いてたろ」
「……エ？ ボクキイテタヨ？」
「そいつが図星か。やつぱりちやんと聞いてたか」
「ホワツツ？」
「……往生際むこうじが悪いな」
「何事も諦めないからな」
「まさかポジティブに受け取られるとは思わなかつた」
「俺なりの至高の精神だ」
「今のもポジティブに受け取られるとは思わなかつた」
「失礼な。俺は俺なりにちゃんとやつてているんだぞ。例えば毎月の小遣いも晴希のプロマイドプロモード[写真を買]この話は終わりにしてよつ待て、今非常に気になることを言つたぞお前は」
「安心しろ。パソコンの「トスクトップとかにはしていない」普通はしないだろ！」
「普通の待ち受けにはしてるけどな」
「結局するのかよ！」

「他の人に見られて『これ誰ですか?』とか訊かれたらいちやんと『はい、僕の彼女です』とか返してるぞ」

「やめろよ! いい迷惑だ!」

「え? そんな……彼女じゃなくともう妻として?」

「何故そつ話が全力で逆方向に突き進むんだ!…?」

「……ま、「冗談はさておき、本当に携帯の待ち受けだけだな。抱き枕にすらしてないぞ」

「当然だ。抱き枕なんぞにされてたまるか」

「三次元は本物で満足出来るから一切持つてないわけだ」

「油断した! そんな理屈か!」

「俺は晴希とは違うからな。そいらへんの境界は厳しいんだ」

「そこで私の名前を出すな! 抱き枕は疎かすきか、私はお前の写真にすら興味は無いぞこのセクハラ野郎!」

「へ? 誰も俺の写真がどうこうなんて言つてないぞ?」

「お前の名前を出したのは全面的な信頼その他諸々の計算の結果だ」
「まさか誘導尋問に引っかかるつてくれるとは……」

「成り立つてないよな、誘導尋問」

「これでお前のツンデレも立証されたな」

「されてない。そして私の話を聞け」

「ん、どういう話だ」

「だからなあ……」

「最初の方に言つた、どういう事か、つて話か?」

「そうだ。そしてそこでお前は先ほど私の話をちゃんと聞いていた」という事をあつさりと告白こわくせつするんだな

「……参つたな、誘導尋問とは」

「まさか、ばれてないと思つてたか?」

「ああ……お前は天才か」

「……お前は馬鹿か」

「それはどうでもいいとしてだ」

「そこで流すか」

「流すさ」

「そうか。それで、うんざりするくらい話が脱線したような気がするんだが」「るんだが」

「その通りだ。ちゃんとしてくれよ、晴希」「私のせいか

「そうだ」

「なぜそこまで自信が持てるのやひる……。まあいい、とにかくこれはどういう事だ」

「何の事やら」

「あー、まだ分からんか。とにかく私が言いたいのは、どうしてお前なんぞと一人つきりという偏屈な状況なのかって事だ」「

「神のお導きだな」

「嫌な神だ。チエーンソーにでも切られてしまえばいい」「これは『ティー』トみたいなもんだ」

「最近はこういうのも『ティー』トと言つのか」「愛があればいい」

「……もういい、私が馬鹿だった。とにかくこの対話だけのグダグダなスタイルで話を進める理由を教えてくれ」

「いいんだよ。これは最初の最初。アニメで言つオープニングテーマの前奏までだ」

「本当に最初の最初だな」

「だから構わない。それより、この話のちよつとした紹介でもしようじゃないの」「

「やっぱりそうか。だと思つたよ」

「とりあえず俺が一人で話す。だから晴希は安心して体を俺に預け

る」「

「早速安全性に問題のある発言だな」「

「では、話を始めよう」「

「無視かよ」

「俺は董城高校一年で文芸部の内藤嘉光。^{ないとうよしあき}これといって語る事も無

い、普通と言つ要素が服を着たような男子生徒だ

「そりやつて自分をフォローするには遅すぎるんじゃなかろうか。

焼け終わつた石に水を掛けようなんだ」

「そう。こりやつて全力でアピールしてくれることのは秋津晴希あきつはるき、俺と同じく文芸部の二年であり、かつ俺の嫁だ」

「待て。お前の所に嫁入りした覚えはない」

「こりやつ恥ずかしがりやさんなんだ。見た目は中世的だけどハートは乙女なんだよな。それを男口調で隠そうとしてるのが残念だ」

「よくもそりやつて出鱈でたらまじ目めを言えるもんだな。お前の事だからそつこののは常に脳内で温めてるんだろうけど」

「こりのシンデレラめ

「黙れ内藤。……あー、分かっているだろうがこの馬鹿の言つ事は大体が出鱈目だ。情報化社会に生きる諸君ならそれくらい正しく取捨選択できていると信じるぞ。私は」

「それで真実が闇に追いやられる事が無いよつにな

「いいから黙つとけ。……それで、私はさつきの阿呆が申した通り文芸部一年の秋津晴希あきつはるきといつ。誤解の無いよつに言つとくとあいつではなく私が主人公だ。自分で言つのもなんだが男容姿男口調男性格まあこれについては育つてきた環境と言つものがあつてだな。この話は文芸部において、私が色々と苦悩を抱えてたりするわけだな。あと念を押しておくとシンデレラではないしここいつの女でもない。まあとにかく、文芸部には内藤みたいなのが色々といふ。實に悩ましい」

「……いや、晴希も十分変だが?」

「……氣のせいだ。目の錯覚だ」

序章 白世界は白よつ現る（後書き）

いやーせんと、プロローグにすりなつてないってどうなんでしょ。
……あー、次からはまともこしますとも。

第一話 秋津晴希の憂鬱（前書き）

サブタイトルの通り、ここから本当の始まりですとも。
では、4649！

第一話 秋津晴希の憂鬱

「なあ 晴希。頼みたい事があるんだ」

その男は元のその整った顔立ちを決して崩す事なく、普段のような軽い調子ではない、これが勝負どころだといわんばかりに女の名前を呼んだ。いや、よく見れば顔が赤くなっているようにも思えたが、それは夕暮れの影響でそう見えるだけかもわからない。

ここには本来閉鎖されているはずの学校の屋上だ。そこに、男と女が一人ずつフェンスにまっすぐもたれかかっていた。

男の方は学ランのボタンを全開にして中には白のカッターシャツを着込んでいて、すでに制服を適当に着崩すのに慣れているじく普通の男子高校生といった格好だった。

女の方はと言うとすごく特徴的なもので、スカートからそれほど長くもない足を伸ばしているのはまあ普通なのかもしないが上に着ているのはセーラー服でもブレザーでもなくやはり学ランをきつちりとボタンを締めて着ていた。そのため服だけではスカート好きな男が学ラン好きな女か一瞬見分けがつきにくいが、その背丈の低さと声の高さで女だと判別できる。

ただこれは仮にの話であって、女が特に学ランを好いているわけではない。別に誰かの趣味嗜好でこうなったわけではないので悪しからず。またこの学ランは男の着ているものとも多少デザインが異なっているが、これも別に誰かの趣味嗜好ではない。悪しからず。

夕焼け空は少し曇つていて、大抵の人は快晴よりは少しばかり曇つていた方が快適と感じるだろう。おかげで暑くはなく、むしろ風が強いせいでの寒いくらいだと女は思った。

「……何だよ」

女は大体男の言いたい事を大体は理解しながら、それでもそう訊いた。こう言う時、言いたい事をはっきり言つるのは普通男の方だと相場が決まっている。別にこの場面に限つた話でもなく、元々そ

いうものなのだ。なおこの女が男口調である」とも、誰かの趣味嗜好などではないので悪しからず。

男だつてそんな事分かつてゐるのだろう 一応説明しておくと趣味嗜好云々ではなく、誰が言い出すべきなのかといつ話についてだ。戸惑つてゐるかのようにきょろきょろとあちこちうろこ田を動かしながらもやがては覚悟を決めての方を見据え、

「文芸部に来てくれないか？ そんで俺の近くにいてくれよ。いや出来ればだけどさ……なあ、どうだらう？」

ここが勝負とばかりにその頼み事をやけに直接的な物言いで一気に口にした。

で、まあ、その様子が面白くて思わず女は口元で軽く笑つてしまつた。それに多少の動搖を覚え、次の言葉を口にじょうとする。

「……あのさつ、俺はお前に」「待つてくれ」

女はその苦笑をこらえながらも手を男の方に出して言葉を留めた。そして額に手を当ててしばらく考え 具体的には今強引に話を切つたそいつの言語を理解してやるのに若干の時間をかけたのだが

「それより先にこちらから少し訊いておきたい事がある」

と言つた。正確には、時間を稼いだとも言えるか。

「……おう、分かった。一体何だ？」

男がいいというので、女はその一つの疑問を出した。彼女自身も正直に言つてこんな奴に言われなかろうが文芸部に入つてやろうとは思つていたが、しかしそんな彼女を悩ませているものはあつたわけで。だつて人間そんな簡単に思い切つてやつていけやしないのだ。

「今回の件で私は救われたか？ そんでお前のその気持ちつてのは、本当に本當なのか？」

一つ目の疑問 自分は確かに手を差し伸べられはしたが、それはイコール救われたという事なのか、なんて事はこの時の彼女にはつきり分かりやしなかった。人間、案外自分の事なんて分かりやしないものだ。後で考えてみればこの疑念は正しかつたわけだが、

まあそんな話は今はいいだろ？

そして二つ目の疑問　男は自分の事を異性として好きだのなんだと言っていた。要するにその気持ちが本当かつて事だ。今さつき自分の事はよく分からないと言つたが、その典型は人への好意の形だと思っている。愛だといわれれば愛になるし同情といわれれば同情になる、そんな不安定な気持ちだつてある。

特に彼女については、分かるとは思うが色々誤解されやすい人間だというのもある。

要するに、その愛などという言葉がどんな意味を成しているのかを求めていたのだ。後で失望などしたくない。失望するくらいなら最初から何も望まない方がいい。臭い台詞だが、彼女の心境は要するにそんな所だった。

彼も色々とやつてくれたんだろ？　そんな事は分かっている。だがそれは果たして愛なのか？　もしそうだとすれば私はこれから悩みながらもいてやるわ。もしそうでない、単なるお人好しだとしても義に基づいてこれからもいてやる。結局は彼女自身の心構えといふものに帰結する、小さくも決して浅くはない問題だつた。

「ああ、一つ目は確かだ。お前は救われた、と思ひ」

思ひ？　そんな彼女の内心を悟つたのか、彼は首を横に振つて、「……いや、確かに救つてやつたよ。そしてこれからも守つてやる。俺が保障するよ」

そんな頼もしい事を言つてくれた。なんともまつすぐな言葉だつた。良くも悪くも。まるでなんだ、主人公のようで、彼女にはそれが本当に羨ましく、そして呆れるような話であつた。

「……二つ目は？」と訊きながらも彼女は思つた。なんだこれ。まるで告白みたいじゃないか、と。あまりにも気付くのが遅いものである。

すると、彼は迷うことなく、しかしそれでも若干恥ずかしいのか照れ隠しのように顔を背けながら、

「……そんなの、言つまでもないだろ？」

と答えた。はつきり言わせよつとした事に多少罪悪感を覚えたが、それと同時にどこか安心した。さて、彼女はどうして安心したのやら。

「……せこい回答だな」

はつきり言えよ、そりゃいながら体をフーンスから離す。かくいつの方も同じような顔をしていたはずだ。ここに他の誰かがいたら、そいつは罪悪感を覚えてどこかへ飛んで行っている所だろう。それくらい恥ずかしい話もある。ああもう。どうしてだよ。どうしてそうやって、つい最近出合つただけの私の癖を知つたよ。ピントポイントで突いてくるんだよ。

そんな回答されて私が、来てやらんわけがないだろうが。

と。

畜つまでもない　それくらいにお前は、私の事を考えてやれるというのか。そんな大口を叩けるくらいにやつてくれるのか？　すぐつたいつたらありやしないんだが。

でもまあつき待つてやつたんだから感謝しつつ思つたけどさ、私としても待つてやつてよかつたと思つんだ、と。

「……なんだ、イーブンじやないか」

聞こえないよう、彼女はそつと呴いた。

……で、その時は確かに、私こと秋津晴希は自分の傍に常にこの馬鹿がいてくれると、そう信じていたわけだが。

…………ふう。

まあお察しの通りだつが、あの女は、昔の私の姿だ。……かつつけた言い方をしてしまつてなんだが、比喩的な意味と深読みす

る事なく単純にそのまんま過去の私であると受け取ってしまつてい
い。

で、お前は誰だと言わると何とも言えないんだが、とりあえず
はこの物語の基本的な語り手だと言わせて貰おう。

思えばあれからもう一年近くか。一年として長かったか短かつた
かと訊けば、おそらくは前者だろう。

しかし今痛感するのは一年の間隔的な長さがどうのいつのではな
い。何しろ私こと秋津晴希がこの文芸部に入り、大変間違つて
であろうラブコメを展開する事となつた所以である、あの出来事な
のだ。あの出来事について今、仮に何か一言言えと頼まれたならば、

『顔から火が出るほど恥ずかしかった』

やはりこの一言に及ぶ。まあそれだけ純粹だつたつて事だな、
一年前の私。うん、何なんだろうこの気持ちは。集合写真を撮つて
後で見たら自分だけ明後日の方向を向いていたのに気付いたような
この虚しさ恥ずかしさは。そう、それはあの時

「 津さん。おーい秋津さん! 」

誰だ、これから回想に入ろうつて時にタイムリーにも流れを止め
ようとするのは。ちょっとは私のモノローグにも氣を使つてもられ
ないだらうか。

「 何だ 」

顔を上げ、その無礼な客人の方を見た。すると、そいつは私の見
知つた人物だつた。

「 ……邦崎か 」

「 や、どうも 」

そこにいたのはクラスメイトの邦崎綾女。中学の頃からの友人で、
奇遇にも今年含め五年間ずっと同じクラスという謎の縁を持つ。親
友と言えば親友なのかな?……まあいいか。前髪をシンプルな白の
ヘアピンでまとめていて、表情は結構口々口々と変わるタイプ。性

格はまともと言えばまとも、変と言えば変。要するに一般的という言葉がふさわしいかもしれない。「一般人＝まとも」ではないというのが悲しいところだが。諦めろというのかそこには。

あと そうだ。今日は始業式で、確かに午前だけだつたか。もうクラスの生徒は私と邦崎を除き誰もいない。家に帰ってしまつているか、もしくは早くも部活だらう。始業式の日にも部活とは全く元気なもんだ。私も一応今日は部活あるんだけどや。

とりあえずそんな教室の中で私はどうやら沈思黙考の世界に迷い込んでいたらしい。四月病か何かか。これはかたじけない。そういうや四月病つてあつたつけ？ 何月病があつたかすっかり忘れてしまつたな。まあ私は年中そんな感じの気がするが。

それでも、中学の頃はもうちょっと違つたと思うんだけどな……。

「……それにしても『秋津さん』はやめろつて言つたら

頭を切り替え、早速邦崎に文句を垂れる。

「仕方ないじゃん。秋津さんの部屋にあんな本があいてあつたら……ねえ？」

「だからあれは不可抗力だと言つたろうに！」

誰しもおかしいと思うのは分かる。だつて一般的な女子高生の部屋にエロ本が置いてあつたらスルーする方が珍しいだらう。ただあれは決して私のものではない。あの後親に詰め寄つたら、兄が私宛に名指しで送つてきただと、そう言つていた。今度奴が帰つてきたら存分にクレームをつけてやるつ。当然素直に従う親も親だが、それは既に文句を言つてやつた。の人たちが手遅れなのは分かりきつているが、あの怒りはどこかにぶつけなければならなかつた。

……ちなみに、いかがわしい本が一応私の机の引き出しの奥底に眠つているというのはここだけの話だ。安心しろ、理由はある。だから引くなお前ら。感想欄に「主人公のムツツリつぶりが気持ち悪いです」とか書くつもりならもつよつと考え方直すんだ！

「あの人ねえ……でも秋津さんも」

「あの兄が悪いんだ」

「だから秋津さんはやめる。晴希だ晴希」

何度も言つてくる。根本的な接し方を変えられると結構傷つく。親友なんて所詮は設定だけである。自分で言うのもなんだが、私がそれほどいい奴でなければどうにこんな関係は断ち切つてしまつていて信じたい。

「 晴希もちょっと男みたいな顔立ちだし」

「それを言うな」

流石にコンプレックスとまでは行かないが、それは元来私が抱えている重荷なのだ。他人に中性的ですねと言われるくらいまだいいんだが、男みたいなどという直接的な物言いはされたくない。本来許されるべきものではないのだ。

「しかも男子の制服だし」

「それもある兄だ」

むしろスカートを死守して更に差別化のために男子制服を改造までさせた私のたゆまぬ努力を誓めてもらいたいくらいだ。実際は私がやつたわけじゃないけど。

いやあしかし本当、何度もこの前の前でふてくされざるを得なかつた事やら……。

「秋津さ……晴希、予定はある？」

また秋津さんと言いかけたなこいつ。ま、訂正してくれるならいいけど。

「いや、部活がな」

「残念。一緒に帰ろうと思つたのに。それにしても部活つて　」

「当然あの文芸部だが何言つてんだ。お前も知つてるだろ？」

忘れたのか？　お前も四月病か？　それじゃあ仲間だな。特に嬉しいな

しいなけど。

「いや、覚えてはいるけど……たしか内藤君ついていたよね？　あの
かつこいい人」

「いたな。というか去年同じクラスだつただろ」

休み時間とかでもよく私の机に来て他愛もないことを話してたはずだが。つーかかつこいい人ってなんだ。あれはただの変態だぞ。せいぜい顔のおかげでメインキャラとして成り立っているだけの。メインキャラでいるためにはまず顔が重要だと教えてくれているだけの。そんな糞みたいな設定で構成されただけのバグみたいな存在なんだぞ！？

「そいつがどうかしたか？」

「いや、何でも……」

どうやら簡単には話せないことらしい。……邦崎、お前まさか「あいつに恨みがあるのか？ なんなら相談に乗るが」たとえ設定だけでも親友なのだ。それくらいの悩みは私にも聞いてやれる。

「いやいや全然そんな事ないけど…」

「そういえばそうだつたな」

どうやら恨みではなかつたらしい。確かに仲は良かつた気がするからな。と言うことは

「ただ純粋な好奇心からあいつを陥れたいと

「どうしてそうなるの！？」

「この反応 なんだ、違うのか。今こいつの考えている事がどうも分からん。私にはあいつの顔を見ると心から陥れたくなることがたまにあるんだが。

「つていうかその態度、彼つて晴希の何なの！？」

「何なんだろうは果たして。まあ強いて言うなら

「分かりやすく言つなら 婿つてところか？」

「ええ！？」

「おいバグ！ 変な法螺を吹き込むな！ てかいつの間にいた！」

馴れ馴れしい態度に、ホストにでもなれそうな無駄にいい顔立ち

噂をすればなんとやら。いつのまにかそこに立ち、邦崎に変な法螺を吹きこんでいたのはまさに話題に上がっていた、日々私の好感度を上げる事に日夜力を惜しまない男、糞設定の集積こと内藤

嘉光ではないか。^{よしあき}

ここでこいつが来ると、全くもって疲れる。嫌になる。邦崎は邦崎で放心状態だし、誰かこの状況をどうにかしてくれ。ついでに腹いせにあいつを吊し上げる。

……つてそんな都合よく行かないよな。どうせ誰も来ないさ。いわゆる孤立無援。ああほんとに……どうしてこんな疲れなきやならないんだよ。少なくともこれを学園ラブコメとするなら間違いもないところだろうね。

ああまたたく、どうなってんだ。私のこの対人運の無さときたら。しかしながら男だろう。今こいつやって邦崎が放心状態になつているのも私が悩みを抱えているのもバブル崩壊もトキ絶滅も地球温暖化も全てこいつのせいだというのに。私の中ではこいつはそういう設定だというのに。それなのに全く悪びれた様子がない。

「安心しろ。何とかなる」

「ああん？」

呑気な事を言つ内藤を私は即座に親の仇のように睨みつけた。何言つてんのこいつ？ 全部お前のせいじゃね？ 馬鹿なの？ 死ぬの？ 死にたいならさつさと窓から飛び降りてくれよ頼むから。

「本当だぞ。本当にあるぞ」

……随分と必死だなおい。そんなに私の好感度とやらは心配か。まあ確かに下がるけど。今もちゃんと下がつてるナビそれがどうした？ ……まあいいやもつ。

「もういいから言つてみろよ。その手段とやらを」

「キスだ」

「……はあ？」

今こいつは何と言つた？ キス？ 雑誌のKissなら知つているが、そっちの方だと是非信じたい。脈絡なんていらないから。飾りだから。どのみち読んでないから話に乗れないけどな。こいつなら案外詳しそうな気もするが。

「もちろん王子様の接吻だ」

……どうやら希望的観測などとこいつのものは、裏切られるためにあるものらしい。少なくとも私に関しては。せつか、こいつに対して期待を抱いちゃいけないんだな。

「いや待て。邦崎の気持ちはどうなるんだ」「こんな男に唇を奪われるだなんて、立つはずのフлагも立たなくなる。

「嫉妬する気持ちは分かる」

「出来れば分かるな。それより邦崎の気持ちを汲み取れ」

「そうだな。じゃあ晴希がやるか」

「私はレズじゃない」

同性のクラスメイトと接吻なんてまっぴらごめんだ。勿論異性とでも同じくらい嫌だが。そしてそんな事でもし邦崎が起きてしまえば再び『秋津さん』に逆戻りだ。そういう事は絶対に避けたい。評価は地に落ちるビコロではなくたちまち地下へのめり込むことである。たまに体感温度も氷点下のヒヤヒヤ学生生活にイノベーションだ。ちなみに今でも結構摂氏〇度近いんだが。

「じゃあ俺がお前とキスすると」

「ちやっかり目的を入れ替えるな。ほれ邦崎、ひとつと起きあ」
結局、目の前で手をパンと叩いてやつたらびっくりしてすぐに起きた。よかつたな、こいつとキスするなんて事にならなくて。

第一話 秋津晴希の憂鬱（後書き）

えー、大体一話2000字ほどを心がける事にしますとも、はい。
ちょっと少ない気はするけども。

第一話 恋と鯉といき口の衝撃

かくして文芸部室への廊下を、嘉光と並んで歩く。振り切らうとか後ろ行こうとか考へてもどうせ歩幅を合わせてくるので、横並びについてはもう指摘しない。寧ろそこを指摘すると私の親とはまた違い、なんとフハフハ喜んでくるのだ。それは全くもつて耐え切れない。他人を虜げるのは恥ずかしながら嫌いじゃないんだが、そこまで行くと勘弁だ。

ちなみに目を覚ました邦崎は、嘉光の顔を見ると顔を赤くしてダツシユで帰つていった。おそらく嘉光に純潔を奪われそうになつた事を直感で悟つたのだろう。「ご愁傷様です。絶対に忘れないよ……お前のような似非親友がいた事を……」

「綾女、行つちまつたな……」

「惜しかつたな、色男」

名残惜しそうに呟く嘉光に、私は心底呆れながらも言つてやつた。

「へ？」

「べじやないだろ。綾女にキスなんてしようとしたくせに」

「ああ、嫉妬か」

「近寄るな変態そして消え失せろお前の事は忘れないぞきっと」「さつき邦崎に対しても」「丁寧に最後に付け足しておく。私の人間関係ってなんなんだ。早急に消えてほしかった。いやホントに。お前との一年間は長い付き合いだったよ。きっと覚えてるつて。一ヶ月くらいはな。そつから先は知らん。でも努力はすると思うな。忘れる方にだけど。

「いや、許せ。半分冗談だ、晴希」

「たとえ半分でもそこに本音があるとすればただちにようなら願いたいが？ なあどうすんだよ性犯罪者？」

「勘弁してください」

「…………」

急に嘉光は立ち止まり、膝からつま先まで、肘から手の指先まで、そして額を接地した。

土下座、平身低頭、アポロジー　それは本気の、本気と書いてガチの土下座だった。なあ、ここで許さないという選択肢が選べるのかな？　まあ一瞬選びそうになつたのは秘密だけね？

「……分かつたから。立て馬鹿」

結局私は選べなかつた……クソッ。

「ああ……」「めんな」

ああもういいよ……いつもの事だつたわけだし。始業式に意表突かれただけだしな。
考えてみれば、この春休みの間に嘉光耐性が薄まつっていたのかもしれない。

「いや、勘違いすんなよ？」

立ち上がるなり、嘉光はそう言つた。

「俺は綾女にキスなんてするつもりは一切なかつた」

「おい王子様どこ行つた」

「晴希と一緒に探そそうと思つてたんだよ」

「意味わかんねえよクソが」

思わず汚い言葉遣いになつたぞ。どうして始業式終わつて部活行く前の小イベントでそんなクエストを達成させなきやならないんだ。最初のスライムと戦うのに一時間かかるあのドラクエじゃあるまいし。まあ私はあの作品結構好きだけどさ。

「晴希の好感度が上がる。あわよくばきっと晴希ともキスできる」

「できるわけないだろ」

第一にそういう事は口に出すなよ。信用無くすよつた事ペラペラ

喋つて、そんなの別にカツ口良くないからな？

「よし決めた。今ここにするか

「…………」

さて、反応に困るので視線は明後日の方へ。そうしておいて改めてこいつの紹介をしておこう。内藤嘉光。文芸部の一年。特徴とし

ては 気持ち悪い。

変態のくせにやけにイケメンフェイスで、そのおかげでこいつの事を良く知らない女子には人気がある。逆に言えば接すれば接するほど評価を下していく残念な属性の持ち主だが。気持ち悪い。あと若干フュミニースト。女をみんな下の名前で呼ぶ。気持ち悪い。

それでなぜか、私に大してはこの通りぞつこんときた。容姿性格にも長けていない、この私ごとにだ。頭でも打つたかもしくは変なものを飲んだかもしねないが、おそらく一次元に萌えるという一般男子学生の通過儀礼をスルーしたであろう事が大きいのではなかろうか。もはやリア充とかのレベルじゃないな、うん。気持ち悪い。

「ん？ どうした？ 恥ずかしいか？」

嘉光が声をかけてくる。もちろん私が黙っているのは照れているわけではなく、単に無視しているだけなのだが。まあ恥ずかしいといふ点では正解か。勘のいい奴め。

「まあいい晴希、ちょっとばかり目を瞑つてくれればいいんだ」

「いや、その必要はない。寧ろお前が目を瞑つて歯を食いしばれ」まあ私が殴つても大して威力は出ないのは分かつてるんだけどな。誰か奴を右ストレートでぶん殴つてよ。

「ふつ……素晴らしいかな、リアルツンデレ」

「誰がツンデレだきめえ。なんだそのドヤ顔は」

そんな会話をしているうちに、本館一階の部室へとたどり着いた。久しぶりの日常の欠片が目に入つてくる。引き戸である他の部屋と違い、開き戸が特徴のいつもの広い部室。何台もあるいつものパソコン。一方で隅にあり様々なジャンルの本を蓄えたいつもの本棚。なんか所々にある関係ない、一言では名状しがたいものたち。名状しがたい部員達。そして目先五寸に落ちてくるいつもの黒板消し……いや、違うな。黒板消しはいつもじゃない。こんなのが日常茶飯事であつてたまるか馬鹿野郎。

「……天森さん、何ですかこれは。角に当たつたら結構痛いんです
あまもり

よ

ドアを開けたすぐ横の壁で腕を組み、さつきの嘉光にも負けないドヤ顔でもたれかかっている、おそらくこのトラップを仕掛けたであらうその人物に声をかける。

「あれ？ ハルちゃんに当たりそうだった？ いや『じめん！』

「まあいいですけど。少しは自重してくださいよ」

私ときたらそりやもうひ弱な草食系女子つて設定だから、黒板消し程度でも致命傷なんだよな。ま、あつちは速いからな。すぐ瀕死になるけど。

「了解！ 合点承知よ！」

そんなテンションの高い返事で期待が出来た物ですか……まあ前向きには捉えてみますけども。

さて、このあからさまキチガ……少しばかり変わつてらつしやる先輩は、天森小枝さん。

改めて言うがこの通り気さくを通り越してキチガ……少しばかり変わつてらつしやる人で、実は強い。ウルトラ強い。パーフェクト強い。いうなれば『プロジェクトがあるまいしこんなこと普通の人間には出来……いや、の人なら出来そうだ』現象が普通に成り立つてしまふような。百メートルを五秒フラットで走れるとかいう噂も一時期あつたくらいだし。噂は誇張されるものだというが、まあ逆に言つてしまえばこの人はそれくらい誇張されてもいい存在だつて事だ。見た目は黒髪清楚な美少女みたいな感じなのに。

「でもハルちゃんつてばす』いよ！ 扉開けた瞬間に判断してノリツツ「ミつて！」

「勝手に人の思考を覗かないでください！」

私はそう、目の前の長身の見た目清楚のドヤ顔の先輩に対し、必死に言い聞かせる。「うんうん！」と先輩はまるで他人事のように首を縦に振り、

「あ、ちなみにその黒板消し二・〇キロあるからねー！」

「あなたは私を殺す気ですか！？」

身を翻しバーンと小学生のするような手で銃で撃つようなジェスチャーをしながらそんな説明をする先輩に思わず私はハイに叫んでしまった。鉄アレイの重さじゃないですか。地味にリアルな重さに、私は思わず鳥肌が立つた。まだ「十三キロや！」とか冗談みたいに言われた方が安心できたよ。どつこにしろ嫌な事に変わりはないけどさ。本気なら軽く死ねるけどさ。

第一話 恋と鯉といきの衝撃（後書き）

文芸部の紹介……と思いまや次話まで持ち越しになつた用で。
次話には更にキチガ……少し変な仲間たちがいますとも。ではこ
こで。

第三話 残酷描写と手榴弾（前書き）

第一話から一続きみたいな感じでしょうか?
……読むか？　いや、読め

第二話 残酷描写と手榴弾

「なんですか一キロつて。まともに私に直撃したら赤文字で『残酷描写あり』と付けられるか救命病棟に搬送されるかの一択ですよ」

そう抗議しながらも私はその辺にあつた席に着く。

「そんなに重傷か」

会話に加わってきた嘉光が突つ込んでくる。いや全く、こいつは何も分かつちやいない。まさに大馬鹿者だな。

「馬鹿だなお前は。頭に鉄アレイ投げつけられて平氣な奴なんて多分忍者ハツトリ君くらいのもんだぞ」

「もう、確かに……竹輪がないと厳しいか……」

なぜかそこで納得してしまいながらもわざわざ別の席に置いてあつた荷物を動かしてまで私の隣の席に座つてくる気持ち悪い嘉光を横目に私は一つの疑問について考える。その一キロのハイパー・グレート黒板消し（仮）を当てるつもりだったのは私に対してもうなかつたんだろう？　といふことは……。

なんだ、嘉光じやないか！　簡単な話だネ！

「天森さん、奴を潰したいといつその気持ちはよく分かります！」

「晴希！？」

「フッ……」などと満足げな表情で髪をかき分けている天森さんに同意する。嘉光は一瞬動搖したものの、すぐ復帰して、ため息をつきつつも話を続けた。

「それにもしてもその表現は大袈裟すぎるだろ……なあ、晴希はちょっととした段差で死ぬとかそういう病気なのか？」

失礼な事を。お前は主人公補正的な何かで生命力がゾンビ並だからそんな事が言えるんだ。言い忘れてたがお前も鉄アレイ当たつても平氣だよな多分。勿論竹輪もいらないよな。

「ま、晴は^{はる}コイキングより弱い男だからしゃあねえもんな」

これまた失礼な事を言ってらつしやる声がする。とつさに「男じ

やないです」とだけ返しておいた。その前の言葉は残念ながら否定できない。

声がする方 部室の一一番奥に目を向けると、そこにはこの文芸部をまとめる一人の先輩方が座っていた。

おおぞねまさかぶみ

私の事を晴と呼ぶ、さつきの声の主は大曾根誠文さん。黒髪短髪に眼鏡、ボタンもしつかり全部締めていていかにも優等生です的なオーラを発している。これで何もしなければ、だが。実際は口調からもある程度は感じ取れるが、『キチなんたらは讃め言葉』と言つた感じの相当な傾奇者なのだ。文章媒体のおかげでその辺りのキャラはまあわかりやすいんじゃないかと思う。趣味はスプラッター。主にやつていることとしてはピッキング、手榴弾製作など（本人談）。勿論自称であつて実際はそんなわけじゃない。もつとすごいのだ。あと、大曾根さんはいつもいつも、毎度のように私を男呼ばわりしてきて正直うざい。「それはお前の利点なんだから頑張つて伸ばせ」とか言つてくる。ふざけんな、誰が伸ばすか。

バーン！

「モガガル！？」

と、私の顔のすぐ横を何かが高速で通過し、当然のように隣の席にいた嘉光の鼻先に直撃。嘉光は情けなくそんな断末魔を叫びながらぶつけた箇所を抑えた。なるほど、私は大曾根さんの行動の意味を即座に把握する。

「先輩には優しくするもんだ。な？」

笑顔で拳銃を握りながらそんな事を言う大曾根さんに、私は無言で重々しく頷いた。多分飛ばしたのはBB弾とかだとは思うが、多分銃の方に改造が施してある。いや多分じゃないな。絶対だ。

「しかしそういつまでも弱キャラなのも困るよな。それじゃあ刺客に襲われた時とかに手も足も出せやしねえ。炸裂弾あるから売つてやってもいいぜ。文芸部のよしみで割引してやる。大曾根さんプラ

イスだ」

……これである。一体日本の警察は何をやつているんだろう。もしくは自衛隊関係とか？……いや、考えるだけ無駄だけだ。

「…………」

それでもう一人、パソコンの前に座っている金と黒の混じつた髪の、黒のノートパソコンを操作しながら鋭い目をもってこちらを無言で見ている見た目ヤンキーの人は一宮敦次さん。いちのみやあつし一生徒の身でありながらそこらの一教員より強い力を持つているらしく、現に去年にもこの人が教師を動かしているのを目の当たりにしたことがある。その立ち位置から『参謀』なんて呼ばれ方をする時もあるが、大曾根さんほどアクティブに話しかけてくるような人ではないため私はよく知らない。ともかく大曾根さん共々この二人は文芸部の重鎮、将棋で言うと飛車と角行といったところだ。

「将棋の駒とは失敬な……」

なんて事を説明していると、目を伏せながら一宮さんがそう呟いていたのが聞こえた。飛車角行は単に重鎮つてだけの意味を比喩しているんだけどな。せめて竜王と竜馬と言った方が良かつたか？……いや問題はそうじやなくてだな。

「……一宮さん、いつも思いますがその読心術どうやつたら使えるんですか？」

「知りたいか？　すぐ難しいぞ」

「じゃあいいです」

「即答か」

「当然です」

「謙虚な事だ」

いえ、その『すごく難しい』が不安なんです。

「読心術……いいのになあ。てめえの首狙つてる奴の正体とかすぐに分かるのに」

「大曾根さん、それはかえつて怖いです」

「頑張れば出来るのに」

「天森さんの『頑張る』はまともだと思えません」

「高さ一メートルからの一キロの落下物で重傷、読心術も使えない。

晴希は残念だな。でも俺はそんな晴希も」

「黙れとつとと帰れ内藤、落下物での重傷も読心術使えないのも人間として普通だ」

周囲からの問答に一人一人答えていく。周囲から「重傷は普通じやないだろ」という視線を感じたのは気のせいだ。おおかた春一番の悪魔が私によからぬ事を吹き込んでいるんだろう。私はちゃんと分かってる。

……ところでさつきから理不尽にも本を読みながらも憐憫の視線で私を見ている小娘がいるんだが。

「おい杭瀬、その視線は何だ」

「可哀相な晴希……」

「誰が可哀相だ」

はて、どうして私は比較的穩便な人間であるはずなのに、それが今殺意を覚えているのだろうか。

まあ……ついにこいつのターンが回ってきたと言つてもいいか。私が呼んだって？ そんなの野暮な質問だ。生憎あいつにとっちゃ私は『友達』らしいからな。実感ないけど。ガチで実感ないけど。

そいつの容貌は今している事（私をいじるとかそういう方ではなく）も相まって、無口な読書娘というイメージがある。わずかながら透明感のある茶色の髪を肩の後ろ辺りまで伸ばし、細い眉にも垂れ下がった目にも、小さな口にもまるで儂いような統一感がある。

一つ見た目的に違う点を挙げるなら身長が意外とあり、私より数センチ高いくらいのものだ。そう、ぶれている点を言つならそれくらいのもんだ……見た目的には、だが。

杭瀬弥葉琉。^{みはる} 教室では「落ち着きがありますね」などとすら言われない、最早存在すら気づかないレベルで空気さを極めている。苛め云々ではなく本当に誰も気づかない、最早異能力の領域にまで入ってしまう。それでも私が普通にこいつの存在を認識できる

のは何らかのバグだと信じたい。

一方で、部室にくるとやはつこの文芸部らしく血口主張が強くなるというある意味一番の曲者である読書娘であり嘉光に次ぐ私の天敵。そして、読んでいる本は常に変なタイトルときた。なんて奴だ。まあ杭瀬やら先輩方やら見ていると分かる通り、見た目と性格が噛み合ってないやつが非常に多いように感じられる。こうしてみるとどれだけ私が正直者であるかどうかがわかるな……全然嬉しくないけど。勿論悔しくもないけど。

ふむ、今日は日が日なのでこれだけしか人数がいないようだ。過疎ってんなあ……ってのは贅沢か。まあこれだけ来れば十分だよな。どのみち何人来ても文芸部としての活動とかしてないし。

「今日は何だ？　あー……鼻水が垂れるほど……またまた何だこれ？」

「『鼻水が垂れるほど速攻で極められる全力雑巾ブーメラン投法』
……読む？」

「遠慮する。読書の邪魔をして悪かったな」

一瞬での掌返しは実に安定した行動だった。そんな本渡されてもどうしたらいいのやら。私は読まないぞ。本を読む楽しさについてたい何だっけ。

しかし、わざわざ「読め」という寧にも杭瀬はしおりを挟んで本をこちらに渡してきた。

「命令形かよ」

ほんと部だと押しが強いなこいつって。他に誰も知らないからって調子に乗りやがって。

「……ん？　それでこいつ自身はこれを読んでどうするかだつて？
それはな

「杭瀬、改めて訊くがこんな本何のために読んでるんだ？」
「普通に参考資料。恋愛小説の」

「いや、がしかしそれを恋愛小説の参考資料として用いるのはどう

だそ�だ。さっぱり意味が分からないぜ。」

「いや、がしかしそれを恋愛小説の参考資料として用いるのはどう

「一キロの落下物で重態になるよりは普通だと思ひけど……」

「貴様まだそれを引っ張るか……！」

流石に私は杭瀬にガンを飛ばした。あんま触れんなよそれ。ネタだとしても私だって気にしてるんだからな。流石にこればかりは仕方がないで済ませられた話じゃないからさ。

「可哀相な晴希……」

「だからそんな田で私を見るな！」

世の中は理不尽だ。早く帰りたい。言えないけど。しかし本当にやる事ないからこいつみたいに何かの本でも持つてくれれば良かつた。やる事……ねえ？

「っしー やる事もねえし一ノ口二ノ口荒し口メ投下させてくつか！」

「待つて！ 私も手伝うわ！」

全く、どうしてもあちらには気を取られてしまつて仕方がないじゃないか。

大曾根さんに天森さんは、どうしてあんなテンションなんだろうか。ここは文芸部だったよな？……いや、紛れもなく『こうこう』文芸部なんだよな。

「秋津」

「あ、はい一富さん」

そんなことを考えながら、パソコンの前でワイワイやつている見た目だけ真面目な一人の先輩方の様子を眺めていると、ふと珍しくも一富さんが声をかけてきた。一体どうした事だらうか。

「ここに一つの御守りがある」

「はあ……」

「値段にして一個サンキュッパという破格の値段の交通安全御守りだ。金は必要ない、貰ってくれないだらうか」

「いえ、いいです。遠慮しちゃます」

だつて交通安全とか言いながら書いてある文字が『粉骨碎身』ってどういう事だよ……。そんなの貰いたくないっての……というか

別に金いらんなら安いだのなんだのってアピールも必要ない気がする。

「言ひ方を変えよう。貰え」

「そこでさつきの後輩のネタを使いますか。いえ、でも「ま、とはいえ先輩命令。結局は嫌々ながらも粉骨碎身サンキュッパを預かる身となつた。

「いいか秋津、それを手放すな」

「はあ……」

爆弾とか入つていたりしないだろうか。だつて粉骨碎身だもんな。メガンテだもんな。

「爆弾ではないな」

読心術絶好調のようだ。とりあえず言い方からして他に何かが入つているという事か。何だかモルモットか何かにされてる気分だなあ。爆弾じゃなかつたら盗聴器か発信機でもついてるんじやなかろうか。

しかし一富さんはそれには答えず、そのまま話を続ける。

「あと新入生の勧誘は必要ない。勧誘無しでも新入部員は来るはずだ。……そうだな、話はそれだけだ。後はもう帰つてもいい」

一富さんがそう言うので私はサンキュッパを胸のポケットに入れ、そして鼻水が垂れるほど以下略を鞄の中に入れ（結局これも預かることになつた）、帰る事にした。

ちなみに、勧誘無しでも新入部員が来るはず、と言つ自信にも根拠はある。それはこの人達自身が証明の材料になると言つてもいい。とりあえず一言でいうなれば、強いのだ。

「俺も便乗するかな」

大曾根さんが素早いタイミング音で荒しコメ投下をしながら言つ。便乗て。

「武器貰うか？　いや貰え」

いえ、本当に要りません。そんな言い方しても無駄です大曾根さん。手榴弾とか私が持つても仕方ないんで。それこそ粉骨碎身だ。

笑えやしない。

「じゃあ私もこの黒板消しを！ 預かる？ 預かつて！」

嫌です。そんな手榴弾と並ぶ殺戮兵器要りません。といふかまづ

重くて持つてけません。

「待った。俺も一緒に帰ろ」

そして待っていましたとばかりに颯爽と飛び出したのは

嘉光。こういう時に言ってやるべき事は、当然こんなところだらう。

「……一人で帰るか？ 帰れ」

「まあそう酷いことを言つな」

「……おあとがよろしく」

「いやちゅっ！ タンマ！ ちょっとぐらいいいじゃないか！」

「あのさあ…………うーん…………あー…………」

嘉光のあまりの迫力に気圧され困った私は天井を見上げたが勿論そんなところにこの場を乗り切る手段など見えるわけもない。後は皆非協力的である。なんてこつた。

結局、心優しい私は途中まで嘉光と共に帰つてやる事となつた。帰り道、特にこいつの話に乗つてやらなかつた事が私に出来るせめてもの反抗だつた。

今日の私、つくづく甘いな。まあ手榴弾貰わなかつただけまだが。あれを貰つてしまつたらいろいろな意味で終わる気がする。まだそちらの方に逸脱してしまいたくはない。……いや、まだつてのは言葉のあやね？ 本当はずつと逸脱していくくないよ？

というわけでまあ、そんな開幕早々にして意表を突かれたような、実際に精神面を削られる文芸部一日田であつた。

第三話 残酷描写と手榴弾（後書き）

さて、これでメインの一・二年生は出た感じでしょうか？
次回は新入生を出そうと思います、はい。

第四話 蟬逃亡記（前書き）

序盤は淡々としてるなあと、自分でも思います。

第四話 蟬逃亡記

早速、新入生が文芸部を訪れた。始業式の翌日とはなんとも積極的なものだと感心する。

事実、私がこの部に入ったのも仮入部期間を終えた後だつたりする。見ての通り元々私は帰宅部で行こうと思っていたキャラなのだが、まあ色々あつたのだ。

さて、普通文芸部といえば文字通りマイナーと言つ言葉の似合つ中々に埋没しがちな部活であり、決して学校を台頭する部活にはなりえないとと思うかもしれないが、この学校において文芸部は実質最強たる立ち位置と称しても過言ではない。それにはちゃんと理由がある。今回はそんな話だ……そんな話だという事にしてくれ。

まず、元々この学校の部活状況は斬新を通り越して末期だつたといふ事。

どう校長の気が違つたのかは知らないが、奇怪な部がたくさんある。ハンドボール投げ部やら紙飛行機部、あとロウ人形同好会とやらもあつたな。そこは現生徒会長が所属してるとか。もうこの時点で頭おかしいよね。

それで酷いことに、一般的にメジャーな運動部は全滅ときた。野球部も無いしサッカー部も無い。水泳部も無いという砂漠的な状況。ちなみに学校のパンフレットでは確かに「学生の本分である勉強を重視し、机と向かい合うことへの自然性を改めて身に染み込ませます」などと胡散臭い方針みたいなのが書いてあつたが、それならハンドボール投げ部とか残すなよと言いたい。紙飛行機部とか何なんだ。テスト用紙とか紙飛行機にして飛ばしてて聞いたぞ。学生の本分つて何なんだろうな。

それはともかく、何もただこの学校が衰退した状況であったといふだけで、文芸部がここまでし上がってきただけじゃない。要するに文芸部を突き動かすような大きな変化　言うなれば革命が起

こつたのだ。

確か二年前……うん、二年前だ。あの頃ピカピカの一年生だったであろう先輩方の中でも大曾根さん・一富さんの両名の存在は大きかつたらしく。いや、詳しい事は知らないし知りたくないんだけどさ。その頃私は中学で色々四苦八苦してたしな。

で、今はもう卒業してしまった先輩方と当時の恐るべき新入生を加えた新生文芸部がこの学園を制する存在と化すのに何時も時間がからなかつたとか。

「クツ……」

それで、どうして私がわざわざこんな回想を今更しているか分かる奴はいるだろうか？

隠すまでもない。現実逃避だ、エスケープだ。

誇りを持つて今一度言おう。現実逃避だ、エスケープだ。

だつてお前ら、蝉の死体が浮かんでるまつ黒のスープとか飲めるか？ 私は飲めやしない。進んで黒魔術の実験台になる気など更々ない。当然ながらもしこれが仮に漢方云々で免疫を強くするとかの作用があつたとしても断固拒否したい。食事というのは単なる栄養分の摂取ではない。人間の三欲の一つである食欲を満たすというのがあるわけで、それを蔑ろにする事などあつてはならない。

でもそれは、確かに私の目の前に注がれていた。う……見ているだけでも嫌になるじゃないか……。

ついでに言つておくが、ここは紛れもなく文芸部室だ。いやはや、調理スペースがあつたなんて知らなかつたぞ。どんだけハイスペックなんだ。ここ文芸部の部屋だぞ？ 料理部にお帰りください。

「晴希、うまかつたぞ。俺が保証する」

これを飲んだであろう嘉光が横から満足げに言つてくる。だがこの保証は当てにならない。大方舌でも麻痺させてしまったのだろ？ 可哀相に。

「晴、お前は何『考える人』みたいに固まつてんだ」

部室の奥にいる大曾根さんが文句を垂れる。そうは言つてもあん

た飲んでないでしょ。あんただつて飲みたくないんでしょう。

そして杭瀬、親指を突き立てるな。この分は後できっちり文句言わせて貰うからな。

ちらりと横に目をやる。そこにはこれを作った一年、菅原ト全が立っていた。嘉光が見つけ出し、早速文芸部室に連れてきた逸材（本人談）らしい。確かにこの人材は、色んな意味ですごい。本人談で。まあ逸脱した人材という意味では大正解だけどさ。

して今のこいつの顔には不安が垣間見える。一見平然としているように見えるが私にはわかる。あれは内心焦っているのだと。

そして私には分かる。その不安はおそらく「先輩の命大丈夫かな……」ではなく、「果たして先輩の好みの味かな……」なのだろう。
……一体何がどうなつてんの？ どうしてわざわざ強制されて命張つてまで無駄なフラグ立てないといけないの？ 君ら、そんなに私の人間関係が不安なの？

『ざわ……ざわ……』たちまち福本漫画のよつた幻聴が私を襲つた。考えろ……そう、考える人とは言いえて妙だ。

冷静に考えろ、蝉はどの季節だ？ 夏だよな？ でもって今は春だよな？ と言つことは当然、そこらへんから拾つてきたやつじゃないことは分かる。コールドチーンか？ 南半球からコールドチーンで送つてきたのか？ いや、北半球が春なら南半球は秋だし、残暑ですらなさそだしつつ……いや違う、品種改良か。聊かバイテクだが。ハイテク……そうだバイテクに違いない。いやあ技術つて進歩したんだなあ！ はっはっは！

……いやそういう問題じやないだろ！ あー、残念ながら今は社会科の勉強をしてる時間じやないんだ。さてどうするか。

- ・普通に批判して飲まない。
- ・先輩たる意地を見せて飲む。
- ・隙を見て手が滑つたと言ひながらひっくり返す（ただ後始末がクソ）

・飲むと見せかけて嘉光が杭瀬の口に放り込む（大曾根先輩も腹立つが、正直無理）

・今すぐ逃げ　　ぐはっ……

「男なら黙つて飲みやがれ」

大曾根さんが私の鼻をつまんで口を無理矢理開けさせ、口腔に無理矢理暗黒スープを流し込んだようだ。随分と暴虐の限りを尽くされた。全くもつて甘かつた。この人ならこうもしかねないと予測して、早めに退避しておくべきだったのだ。

いや、男じゃないんですが……。

そりや「ああ、終わつたな」って思えたさ。けど。

「ゲホッゲホッ……普通に……美味い……！？」

そう、あの見た目でありながら味は普通に美味だった。むせても美味しいと言えるくらいだ。どうしてこうなった。

「ほら、我らが部の新たな料理人は一味違うだろ？」

「確かに違うな、色んな意味で。といつかここ何部でしたつけ？」

「文芸部に決まってんだろ」

「…………」

そして、この後輩は満足げな表情で言った。

「当然の結果です。愛という最高級の調味料を使つていますから」「いや、見た目もある意味重要な調味料だとは思うが」

「見た目は非常に拘つてますけど？」

と言う事は、ひとえに芸術的センスが常人のそれと大きく違うつて事な。頼むからもつと緩い（？）路線を目指してくれ。これじゃ緩いのなんでお前の頭の螺子くらいのものだ。

「ま、色々言いたいことはあるが……一応美味かつたぞ。でもな……」

「光栄です。実は

菅原がやはり満足げに言う。すゞく悪寒がするのはおそらく外れじゃない。つか人の話を最後まで聞けよ。そんなんだから頭の螺子

が緩いんだぞ。

そして菅原後輩の次に放つた一言とは

「もう少し作ってあつたんですね」

「だと思つたよ！」

予感的中……いや、悪寒的中だ。私は素早く部室から逃げ出した。結果が分かつていても、逃げ出したい事がある。安全の保障されたスリルを楽しむ人間は確かにいる。バンジージャンプってのはその心理を利用した物なんだろう。だが私は生憎バンジーとか苦手なんだ。

「男なら黙つて飲みやがれ！」

「私は女です！」

後ろから聞こえる大曾根さんの言葉に、私はそう叫び返した。

「……くそ、たかが女子高生一人になんて仕打ちなんだ」

体力がコイキングにも劣る私は息も絶え絶えで、舌打ちしながらも女子トイレに逃げ込んだ。滑り込んだと言つてもいいかも知れない。必死で滑り込み、扉を閉め、その締めた扉に背中を寄りかかった。そのままやれやれと腰を下ろす。汚いかもしれないが、私の体力が体力だから仕方ないのである。恨むなら私の両親でも恨め。それか私の設定。

もう他に逃げ場がないんだが、手榴弾とか舞い込んでこないよな

? 大丈夫だよな?

「あ、こんにちは……秋津先輩……ですよね？」

誰だ、疲労困憊の私にわざわざ声をかけてくる奴は? 私に氣度もあるのか? ……なんてな。馬鹿げた話だ。

声をかけてきたのは、一人の女生徒だつた。

……いや、女子トイレだから当然だがな。

第四話 蟬逃亡記（後書き）

つーわけで、新キャラを一人。いや、一人目は最後の最後に出てきただけなんだけれど。

それにも、大曾根さんがここまで扱いやすいキャラだとは思いました、はい。

第五話 秋津晴希の熱弁（前書き）

第五話 秋津晴希の熱弁

「こんにちは、と。

私が蝉スープから逃げおおせてきて、辿り着いたのは狭い女子トイレ。そこに、私を名指しで言つその女生徒はいた。

身長は私と比べてももう一回りほど低く、髪はショートのストレート。目がぱっちりとしていて高校生にしては若干幼く見える。私を先輩と呼ぶからには後輩なのだろう。

私が「誰だ?」的な顔をしているのに気付いたのか、この後輩は「丁寧にも自分から名乗つてきてくれた。「人に名を訊く時はまずお兄ちゃん」と呼べ」等と言つていた嘉光とは大違いである。例えば私が知らない男性に向かいお兄ちゃん誰?と訊くとしよう……うえつ気持ち悪い。やつぱあいつは駄目だわ。何だかハツ当たりっぽいが、元々悪いのはあいつなんだから仕方ない。さつきも説明した通り、全ての災厄が須くあいつのせいなのだから。

「私、朱鷺羽みのりって言います。文芸部に入る事を決めていて」「ここでも文芸部の話か」

やれやれ、と肩を竦めた。ついさっきその文芸部の新入部員に酷い目に遭わされ、それでここに逃げてきたばかりなのだ。

「……本当、疲れそうな部ですね」「……分かつてくれるか」

理解力のある後輩で何よりだ。現に疲れてるしな。只今脾臓の血液が大変な事になつて破裂してしまいそうなところだ。横つ腹つてのは脾臓の事なんだとさ。豆知識だな。

「私なんかさつき蝉スープ飲まされたんだぞ。どこの漢方か知らんが、現代人に合うとは到底思えない。かといって古代人に合つかも微妙だが。誰が得するんだあんなの」

「ですね」

思わず毒づく事しか出来ないでいる私に、目の前の比較的まとも

そうな後輩は頷いた。いやしかし無関係な後輩に愚痴を垂れるとは酷い先輩である。まあ前向きに検討するよ。

「ところで……あー」

「朱鷺羽みのりです。下の名前で呼んでも構いませんから」「いや、朱鷺羽でいい」

後半の部分はやんわりと断つた。人のことを苗字で呼ぶのは、堅実な私の立ち位置がぶれる恐れがある。別にキャラ作りとかに拘るつもりもないのだが、簡単に言うと気恥ずかしいのである。嘉光は別。心の中ではあいつは私の宿敵である。きっと前世では血で血を洗う仲だったに違いない。

「それで朱鷺羽、お前はそれだけ知つときながらどうしてあんな部に？」

これが疑問だったのだ。これだけ文芸部の現状を知り、私と同じような認識を持っているにも拘らずこいつは文芸部に入ろうとするのか。その答えがさっぱりわからない。

「どうしても……言わなきやありませんか」

「んー、何だこの空氣？なんか辛い過去でもあつたのか？あのキチガイな文芸部に関する人に言えないドラマなんて あるけどさ。それも私が当事者で。あー突つ込みづらい。どうして否定する事自体が矛盾になるなんて微妙な立ち位置にいるんだ私は？」

「いや、言いにくいような事ならいいんだ。私が悪かつた」

結局引き下がつた。まあ論理の矛盾ゆえ仕方ない事はある。それは四大文化発祥の時から続いている至極当然の事実であると自分に言い聞かせ

「わかりました。言います」

「結局言つか」

「先輩がどうしてもつて言つから」

「いつ言つたんだよ、そう言いたかつたが言わない事にした。悟つたわけだ。ああ、結局こいつは言いたいんだな、と。これまで結構人間関係で苦労してきたからな。他人の建前と本音くらいはある程

度掴めるようになつてきているのだ。

いいだらう、言つてみろよ。お前のその理由とやらを。

「好きな人がいたんです」

「そうだ、いざれにせよ部室に戻らなきやいけなかつたんだな。鞄あるし」

「聞いてください聞いてください！」

トイレから出ようとした私だつたが、惜しくも朱鷺羽に袖を掴まれてしまつた。それも両手でだ。お前どんだけ私にその話聞かせたいんだよと思いながら渋々向き直り、話半分にでも聞いてやる事にする。だつて何かと思ったらコイバナだぞ？ いまどきそんな今時の女子高生同士の会話みたいな……ごめん、よく考えれば今時の女子高生同士だつたな。大丈夫か今日の私。いいから落ち着くんだ。

「それで、好きな人がどうした？」

何だか長いエピソードになりそうな予感がする。詳しく語ると大体一話出来上がりてしまいそうなくらい。お茶の用意が必要か？ ここトイレだが。大体女子トイレって言うと女子が下ネタトークで盛り上がる場所じゃなかつたか？……いや、それは流石に違うか。中学の頃そんな事を言つていたクラスメイトがいたんだが。

「私の好きな人が文芸部にいるんです」

「なるほどなるほど。なるほどなるほどなるほど……ん？」

「ええと、それだけですよ？」

「短いなおい！」

なんて話だ。折角自分が前振りをしてやつた（モノローグなので氣付かないだろうが）のに二十文字以内とか、国語のテストでもこんなお粗末な答えはないぞ。このゆとりめ。

「ええと……詳しく述べ、あの人かいきなり『それなら文芸部に入ればいい』つて。あ、あの人つていうのはその、好きな人じゃありませんよ？」

「はあ、話は大体分かつた。……それで、それだけの理由で文芸部に引きずり込んだ『あの人』とやらは誰よ？」

「あの人です、あの人。向こうにいる」

「代名詞の文法的な用法の質問なんぞしていない。こそあどくらい 小学校で習つたぞ」

「そうじやなくて、あそこにいる人です」「朱鷺羽が指を差した方向を向いてみると

「……お前かよ」

見た目は寡黙、中身は野次馬の何とも厄介な少女文芸部員がそこにいて、まあ当然のように私は溜息をついた。

「いつからいたんだ？」

「いつからつて……晴希が、架空の男性キャラと男性キャラをくつ付けるやおいという趣味の素晴らしさについてその後輩に熱弁していた辺りからだけど」

なんだそりや。

「生憎だがそんなシーンは今でも、そしてこれからも存在しない。期待に副えなくて本当に残念だったな、杭瀬」

「ノン、それはきっと人違い。私は杭瀬弥葉琉なんかじゃない。言うなればそう……似非弥葉琉とでも言えばいいかな」

「まあ確かにお前はいつも似非だけどさ。そんな冗談を言ってのける奴が杭瀬弥葉琉という人間以外にいるのか疑問だよ」

「それは分からぬけど、ともかく冗談は楽しいね」「は？」

いきなりなんて脈絡のない事を言い出すんだこいつは。

「お前、頭は大丈夫か？」「めんな、医者には詳しくないんだ」

「私は正常よ。でもこうやつて冗談を言つてしまえば、一人くらいは真に受ける人間もいたりするの」

……さつぱり意味が分からん。

「すまん、私は哲学にも詳しくは」

「やおい……いいと思いますよ。好みは人それぞれですから」

気付くとそう言いながら朱鷺羽が私の手を握り、上目づかいでこっちを見てきていた……クソッ、お前かよ。すぐさま私は目を逸ら

した。この後輩がどんな顔をしているのかは知らないし、知りたくない。

「なあ朱鷺羽、お前私がそれを語つていたのを聞いたことがあるのか？」

とりあえず朱鷺羽には手を離してもらい、額に手を当てる。「大丈夫ですか？」なんて訊いてくるが大丈夫ではない。脈絡のない話と思いまいやこいつ事か。やれやれだ。

こんな認識のすれ違いが起こるのはこいつが誤解しやすい人間なのか、はたまた私が誤解されやすい人間なのか……どっちもあるかもしれない。どうもこの後輩は人を疑うことを知らないタイプだと私は感じた。

「なんだ、冗談ですか。紛らわしいです秋津先輩。男同士よりもより女同士が好きなんて」

「そんな事も私は言つたつもりはない！」
「嘘ですよ。全くの冗談です」

体の後ろで両腕を組みながらそう言つた朱鷺羽の顔は、微笑みながらも何故だか寂しそうに見えた。深い理由は分からぬが、好きな人云々とも関係はあるのだろうか。残念ながら恋愛云々に関して私は助言出来ないからな。私に出来ることなんてせいぜいフラグを断ち切る方法論くらいのもんだ。嘉光？　あいつは特別しつこいしな。

「ま、いいさ。そろそろ部室に戻るか」

なんだか何かを忘れていそうな気もするが、ただクラスメート一人に後輩一人と一緒に女子トイレで語らつていっても仕方ない。このままガールズトークが成り立つとも思えないし、こんなシユールな状況はまあいいや。

「……晴希、死なないでね」

「無意味に死亡フラグを立てようとすんなお前は」

いつたい何が言いたいんだ。意味もなく不安になるじゃないか。そんなこんなで例の部室へと戻り、開き戸を開けるとそこには

「お帰りなさいませえ！」

皆の大声と共に目に入ってきたのは、大きい机の上に展開されていた
蝉。

本当、強烈な記憶なはずなのにどうしてだかこの一連の流れです
つぱりと記憶から抜け落ちてしまっていたな……。

「さらばだつ！」

「あつ、待つてください、先輩！」

かくして私は、ダッシュで素早く退散する事となつた。ああくそ、
脾臓が壊れそうだ。杭瀬の忠告を無碍にした事は本当に後悔してい
る。ちゃんとあいつの言つ事を聞いてやればよかつたんだ……！
あいつの言つ事は「ごくたまに深い意味を持つていたりするのに、私
はそれに気付けなかつた。本当に、ごくたまにだけ」
はそれに気付けなかつた。本当に、ごくたまにだけ。

「楽しかつたですね」

「……そうか？」

「あ、これ鞄です。文芸部の人たちから受け取りました」

「おう、悪い」

朱鷺羽の差し出した鞄を受け取り、帰り道を並んで歩く。何故か
この後輩は随分と楽しそうにしていた。

「楽しそうだな」

「ええ、私が求めてたのは本当はこういつ空氣感だったのかもしけ
ません」

……さいですか。まあ私も人の事は言えないけどさ。現にこういや
つて部の一員として存在して、初日から部室に出入りしたりしてい
るんだから。

「ところで、好きな人つてのは？ 入部希望期間つて事は多分二、
三年なんだろう？ いや、三年は手が届きにくそうだから一年か。少
なくとも一年間は一緒にいられるわけだしな」

朱鷺羽は「何故それをつ！」といった顔だった。分かるんだよ、
私には。

一年でこの純粹そうな後輩キャラに好かれそうなの……なんだ、

明らかのが一人いるじゃないか。あの主人公補正をふんだんに抱えた変態野郎が。全く嘉光め。

「……先輩は狡いです。今更になつてそんな話掘り出して……」

とは言つたものの、朱鷺羽の表情はまんざらでもなさそうだった。今の話の何が嬉しかつたのやら。私にはさっぱりわからないが、この後輩が結構な惚気野郎でありながらかなりいい奴だつて事ぐらいはまあ理解できた。

第五話 秋津晴希の熱弁（後書き）

まさかこのキャラ一人で一話潰すとは。作者自身びっくりです。
まあ今が彼女の見せ場つて事ですかね。

第六話 秋津晴希は最高の女（前書き）

久しぶりの執筆……の割に短いのは「愛嬌ですとも。

第六話 秋津晴希は最高の女

秋津晴希は、最高の女だ。……いやいや、君らが想像しているような性的な意味じゃなくてですよ？

秋津晴希が性的な意味でなく俺にとつて最高に最高な女であるといつその認識について「何故だ？」なんて疑問持つまでもないはずだ。これまでの話における晴希の活躍を見ていればまあ君たちはもう晴希にメロメロになつてていることだろう。渡さないけどな。

それとも君たちにとつて、そんなことはどうでもいいのかな？…いや待てそう言つたやつら、頼むからもう少し考え直そうぜ？このまま晴希のことを誤解されるのも俺にとつちや不愉快だしね。晴希は誰がどう言おうが最高なのだ。

たとえば小動物のような、敵意ではない若干の警戒心を持った鋭い目。

たとえば自分氣を使つてしまふんよとばかりにだらしなく跳ねるべすんだ黒髪。

たとえば平らとまでは言わないまでも服の上から判断できる程度の小ぶりな胸。

たとえばそれらへのコンプレックスを取り繕おうとするかのように使つている男口調。それらを含めた全体として中性的な雰囲気。

たとえば文句を言しながらも決して部活を休まない律儀すぎるくらいの律儀さ。たとえばそれでいて自分の幸せは内藤嘉光の不幸だなんて言つてしまつ遠慮の無さ。たとえば何にも興味がないようなふりをして本当はこころなことを知つてゐるといひ。たとえば入学

時に学ランなんて物を買つてしまつよつた、意外に抜けたといふ。たとえば何か気に触れるようなことを言つても本心から怒ることはほとんどなかつたりする優しさ。たとえば虫一匹殺せない非力さ。たとえば高校一年生にしてどこか悟つてしまつているところ。

そして何より、ツンデレだ。

これだけ言えればもうわかるだろ？ 秋津晴希は、最高の女だつてことぐらう。

さて、俺が突然晴希の話に割り込みつつこんな事を言い始めたのには理由がある。

その最高の嫁の秋津晴希が、何者かに攫われてしまつた。

これは大変だ。ゆゆしき事態だ。本来なら晴希に傷一つつけておきたくないのに、まんまと出し抜かれてしまつた。まさか拉致なんて大胆な行動に巻き込まれてしまつとは思いもしなかつた。

現に参謀の一富さんすらも「こんな事態くらい予想はできていた。手は打てる」と焦つてゐるわけで……

……はい？ 一富さん？

「Hi, Ichinomiya!!! What are you saying!？」

「I say that it's not in a hurry. In assumption this, the preparation has been thorough.」

「……日本語でお願いします」

「焦るなと言つてゐる。いずれ奴らがこんな風に仕掛けてくるのは想定の内だつたしな。準備もできている。それと

と一旦言葉を止め、黒色に金色の混じつたような髪の毛を軽くいじつたあと一富さんはこのように言つた。

「俺は間違つても参謀じやない」

新学期が始まり、新入生も新たに加わり、そつから一週間経過。今日の五限において、私はついに体育の授業と言う障壁にぶち当たった。

ご存じの通り運動能力というものが終了してしまっている私には一〇〇メートルをお天道様の中全力疾走するなんて真似不可能なわけで、普段なら見学と言う至極退屈な役割を全うするのが、やはり体力テストくらいはやっておけというわけで私も参加する事となつた。言つまでもなく結果は惨敗だ。上体起こしか出来るわけないだろ。

まあ保健室に行く必要がなく、悠々と六限目の化学の授業を受けられた辺り、私の勝ちと言つてもいいんじやなかろうか。内容はよくわからなかつたけどな。

で放課後。一介の文学少女であるがゆえに体育がかなり苦手で化學もちよつぴり苦手であるところの私は今、

「さて、話を始めましょうか」

この状態で何が話だ、と思つのだ。

その部屋はなんというか、生徒用の部屋とは思えないような清潔感を醸し出していた。逆に言えば実用性においては微妙とも言える。パソコンは部屋の隅の机に一個申し訳程度に置かれていて他はすつきり。部屋の真ん中に会議に使うような折り畳み式の長机を組み合わせ、それをパイプ椅子で囲つている。

パイプ椅子に腰掛けている生徒達は全員眼鏡装備。一番奥であるでゲン・ドウのように腕を組んで座つている三年生（やはり眼鏡）の女子は仁科由宇さんというらしい。そして横の壁際に置かれたホワイトボードには堂々と『報道とは九割の嘘と一割の偽りだッ！』と書かれている。……それは最早報道の欠片もないんじやなかろうか？　まさかの真実〇%配合。何故それを勢い良く言い切る。

で、かく言つ私はお縄にかかりてしまつていた。とは言つても私

が窃盗罪をやらかしたわけではないし、詐欺罪に手を出したわけでもない。ならばと麻薬の運搬密売に手を出していたわけでもない。犯罪は嫌だ。かといって別にそっち系のプレイが好きなわけでもない。マゾでなければレズでもない。レズでないといつてもバイでもない。元々語り手的な立場として危ういのに、そんな事があつてたまるか。

ここに至るまでの経緯を簡潔に述べるならば、とにかくわけのわからぬまま頭に袋をかぶせられ、新聞部に拉致されてしまったという流れだ。そして説得という名の脅迫を受けている。

それにも拉致とはスケールが大きい。現代の若者にもこんなアクティブな人はいるんだな。やはり偏見は良くないな。日本という国はまだまだ安全には足りないみたいだ。

……いや、なんかもうリアリティがなさすぎてかえつて客観的に思えてしまう。

仁科さんは組んでいる手を解き、口を開いた。

「新聞部って、どうでしょうか？」

「…………」

どうでしょうかと言われても困る。そうだな、強いて言つなら「強いていうなら、少々縛がきつかつたと思ひます。といふか解いて下さい。痛いです、色々な意味で」

こう答えるしかなかつた。

「ふむ、私たちがそんな簡単に解くとでも？」

仁科さんが眼鏡の奥にある目を見開き睨む。

いや、最初からそんな事は思つちやいない。待てと言られて待つ奴がないように。だからこその強いて言つならなのだ。

「仕方ありませんね。解きましよう

つて結局解くのかよ。いや嬉しいけども。

そうして彼らによつて私の忌々しい拘束が解かれる。試しに手首の関節を回してみるとバキバキと音が鳴つた。よしこれで全力が出せる。全力つて言つても普通の人の三割にも満たないけどな。

「縄の跡がついてますね。まるで縄文土器みたいですよ。ふふつ
「大して上手い事言つてねえ！」

思わずタメ口で突っ込んでしまった。いやだつて、縄の文様で縄
文土器だろ？ そのまんまじやないか。寧ろどう壊めると？
しかし勢いとは言えため口になつてしまつたのは事実。仁科さん
は部員に目配せした。

何かの音。そして数秒後に大柄の部員が運んできたのは コップ
に入った水。しかしこいつ、見覚えがあると思つたら同じクラス
の奴か。

「どうぞお飲みください」

そう言つたのは、やはり仁科さん。

「…………」

明らかに怪しい。裏か？ 何か裏があるのか？ そつやつて私が
訝しんでいる。

「怪しいと思うのなら、飲まなくとも結構ですよ。では秋津さん、
あなたもそろそろこの部室に馴れてきた所でしょうから、ようやく
本題に移りましょう」

仁科さんが眼鏡の奥の目を光らせながら私の目を見て言い聞かせてくる。そして再び手を組み直して、どうしたものかね……。

第六話 秋津晴希は最高の女（後書き）

ところで後書きって何を書いたらいいんでしょう？キャラの特徴とか、ショートネタとかつすかね？とりあえずサブタイトル、自重します。

第七話 新聞部室のスイートタイム

「で、話とは？」

私は結局差し出された水を飲み干し、新聞部部長である「科さん」に本題の提示を求めた。しかしその返事はと言ひと、

「まあ水でも飲んで落ち着いてください」

といつてにやけながら新たに水の入ったコップを差し出すだけだつた。

「いえ、水はいいですから本題を」

「冷静になつてください」

「もういいですから」

「水を飲んで話し合おうではありませんか。話せば分かります」

.....。

切れた。

千切れだ。

ブツツンした。

「だからこれが何杯目かつてんだ！ そんなデジャヴいらねえよ！」

第一何なんだなんだてめえら人をコケにしやがつて！ 人を縄で縛つてきて何が落ち着けだよクソが！ ジョークだとしても誰も笑わねえよ！」

拳句の果てにやらせる事はただひたすら水を飲ませるだけと来た
！ 見事なまでにふてえ接客だ！ 私をこの秋津晴希と知つての狼藉か！…………はい、「ごめんなさい。冷静になりますから」

思わず我を見失つてしまつた。危うくキャラがぶれてしまう所だつた。これは開き直つて嘉光のせいにするしかないか。そうだそ
だ、あの変態がストレスを蓄積させたに違いない。

とはいえた。今こうやってコップを投げ捨て、暴言を吐いたのは私なのだ。いや、本当にハッパ当たりしてすみませんでした。

「そうですか……まあ、落ち着いて水でも飲んでください」

仁科さんの言うことは至つて冷静だった。その眼鏡の向こうがそんな感じでなければだが。涙田は行きすぎだろう。どんだけ豆腐メンタルなんだよ。なにしろこつちはコイキングより弱いつてのに。「で、では本題に移りましょう」

仁科さんは表情を隠すように慌てて眼鏡を押し上げ、話を始めた。「簡潔に言うと、あなたに文芸部から新聞部に移つて貰いたいといった話なんですよ」

予想通り、ストライクゾーンの話だった。さつきも新聞部はどうかとか話していたし。

「それで、何故私が？ 普通に一年生でも攫つてくれればいいじゃないですか？」

「それは本気で言つているのですか？」

無論本気で言つているわけではない。確かに私が新聞部側ならば今の私のような位置の奴を攫うか、あるいは誰も攫つてこない。まあ普通に考えて誘拐という発想には至らない。よつてどうにしろこの人達の行動にはさっぱり理解ができないという事だ。

そんなさっぱり理解のいかない仁科さんは再び話を続けた。

「理由は四つありますよ」

この人の言つ四つの理由。それを要約すると。

まず、私と言う人間のカリスマ性。これは自分で言つのもなんだが。まあ悲しくも事実なのだから仕方がない。

私が一般人であるかと問われれば是非ともイエスと答えたい所だが、残念ながらそうではない。女が改造学ランに身を包んでいる時点で私のキャラは確定してしまっているのだ。

それで、何故だか人気がある。去年度のバレンタインの事とかは思い出したくもない。

とにかく、私が入る事で一種の新聞部の宣伝効果になると言つ事

だろう。

次に、内藤嘉光と言つ変態との関係。

嘉光は常に私に付いて回る。ここで私を説得して新聞部に入れれば、いざれ嘉光も関わってくる。その時が新聞部にとつての好機だ。そして嘉光を組み込めば嘉光のカリスマ（これも納得いかないが事実である）に釣られて大量とは言えなくもまた人が来る。

そして、こうやって攫うことの容易さだ。

時々誤解される事があるが、知つての通り私の身体能力はそりや酷いもんだ。それは実の兄に「コイキングより弱い」と評されたほど。だから実際は下手な一年よりずっと攫いややすいはずだ。

最後に、文芸部における私の立ち位置。

私の居場所が狭いという事だ。確かにその通りであり、嘉光然り杭瀬然り、あそこは私を悩ませる原因が多い。

実際に私はあの部に好きで入ったわけではない。他社にとつては一見どうでもいいような理由があつて、その上での部にずっといる。

これらの理由から、私はまさしく恰好のターゲットだつたと言うわけだ。なんて絶妙な位置にいるんだろうか私は。自分の身を呪う他ない。

と、ここで聞き慣れた電子音が流れた。私の携帯電話だ。

「MGSとはまた女子高生らしくないチヨイスですね」

「……放つておいて下さい」

ポケットから取り出して外側のディスプレイに目を向けると、そこにはこんな文字列。

『内藤嘉光』

そうか、嘉光か……

あいつはいつの間に私の携帯にこんなのを登録したんだろうな。私は携帯電話を人に貸した事すらないし、ましてやあいつとの番号交換もきちんと懇切丁寧に断り続けてきていた筈なんだが。

第七話 新聞部室のスイートタイム（後書き）

えー、一つ思つこと。

何で皆いつも執筆が早いんでしょうか。リズムですかね？ リズムの問題？

とりあえず近頃この話の一話一話が短くなっているのをどうにかしなければ。明日から本気だします。

第八話 虹色のペンと彼奴らの血で悪夢を繰りひつ（前書き）

久しぶりの更新です、はい……。

第八話 虹色のペンと彼奴らの血で悪夢を纏わつ

携帯が鳴っている。サブディスプレイには『内藤嘉光』の四文字。
……この私の登録した覚えが無いんだが。

場所は相変わらず新聞部室。相変わらず全員メガネという窮屈な
状態。そりや突然変わった方がおかしいけどさ。

そんな私の携帯に気付いた仁科さんが、声をかけてきた。
「文芸部からの着信ですか。しかし我々がそれを許すとでも思いま
すか？」

ふざける。当然思わない。

新聞部。一宮さんはそいつらが晴希を浚つたと言った。
彼奴らの腕前は確かだつた。誰にも発見されることなく晴希を攫
つていったのだから。その辺りはオドロキだ。

あそこは二年の仁科由宇さんといつたか。

とにかく由宇という人は交渉が上手いと聞いた事がある。それが
どういう事かは不明だが、仮にも晴希が説得されたら大変だ。俺が
新聞部に入るしかなくなるじゃないか。

「秋津と離れるという選択肢は最早ないんだな」

何て失礼な事をいうんだ一宮参謀は。

「だから俺は参謀になつたつもりはない」

こうやってモノローグにすら文句つけてくるし。

とにかく、もう一度言つ。新聞部の腕は凄かつた。

ただし、それと同時に相手が悪すぎた。文芸部を敵に回したが運
の尽きだ。

こうして一宮参謀によつて晴希の居場所も割り出されている。こ
こから取るべき行動はただ一つ。

「早く新聞部に突入して皆殺しだ！ 知つてるか！ 文学には紙も

ペンも必要ないんだ！ その時必要となるものはそう、愛と勇気とそれをねじ伏せるいかんともしがたい暴力だ！ 早速奴らの血で文學を綴つて

「落ち着け」

「

「何ですか一宮参謀！ 晴希の居場所も敵の正体も分かつたのに！」

RPGだつたらもうすぐボス戦だつてどこなのに！ アクションでももうすぐボス戦だつてのに！

「あくまで仁科由宇がしようとしているのは説得だ」「ああ、脅迫という名のな！」

「説得という名の説得だ」

冷ややかな口調で一宮さんは言つ。俺は心の中で舌打ちした。せめて大曾根さんがいればこの人を説得することも

「誠文は旅に出た」

しかし、一宮さんが告げたのは残酷な現実だつた。旅つて何だ。晴希も随分と適当な理由で見捨てられたもんだ。そして俺の心も簡単に読まれたもんだ。すると、

「秋津の奪還は何とかなる。それ自体は造作もないことだ」唐突に一宮さんはそんなことを述べた。つまり……どういうことだ！？ ならどうしてすぐ向かわない！？ そしてどうして他の部員たちは緊張感もなくトランプで遊んだりしているんだ！？

これは！ 僕ら！ 文芸部にとつて！ 本気と書いて！ ガチで！ 大変な！ 事態なんじゃ！ ないのかよ！？

「だから、落ち着け」

「待つてください！ まずは説明から」

「ここで新聞部を叩きに叩き潰しても、再びアクションを起こす可能性があるってことよ！ 新聞部でもない、また別の何者かが！」

「お前もいちいちうるさい。落ち着け。最悪喋るな」

近くに現れた小枝さんによつて、そんな説明が付け加えられる。

俺はなるほど、と腕を組んで考え込む。となれば

「晴希を攫つた新聞部を見せしめとして鉄釜の中に」

「

「内藤」

すぐさま忠告を受けた。いや、いい発想だと思ったんだけどな……。

「仕方ない。あれを教えてやるわ」「あれですか……。どうどう……」

思わずぶりな一言。「あれ」が何を意味しているのか即座に理解できた。

「すみません、『あれ』って何なんですか？」

口を挟んだのは後輩のみのりだった。確かに、今のは非常に思わずぶりな会話だったかもしない。

「ああ、教えてやろう。晴希の携帯の番号だ」

「秋津先輩の……あれ？ それっておかしくないですか？」

「ん？ 何がだ？」

首をかしげるみのりに、こっちが疑問を覚えてしまう。そんなことよりも早急に新聞部を血祭りにあげないと。

「内藤」

「……すみません」

「なぜお前の思考は今日に限つて誠文とシンクロするんだ」

「……すみません」

また一回せんに注意を促されてしまった。これ、今日で何度目なんだろうか。

「……それで、どこがおかしかったんだ？」

話が途切れてしまつたので、再びみのりに向かつて問い合わせる。

「ええと……いいんですけど、なぜさつき話が途切れて」

「気にしなくていい。ここは平和な日本国だから」

「……ええっと、それは？」

「いや、なんでもない。ここをイラクだなんて考えちゃいないから、イラクじや駄目ならレバノンにしてやるなんて考え方じゃないから、その変な所を教えてくれ」

「じゃあ言いますけど……。ええと……内藤先輩は秋津先輩の彼

女なんですよね？」

「おう……え？」

いやその理屈はおかしいぞ！ 何で俺の方が彼女になるんだ！？
「すいません間違えました……秋津先輩は内藤先輩の彼氏さんなん
ですね？」

「それも違つてかわつきと意味同じ！」

「じゃあ、ええつと……つーんと……秋津先輩は、内藤先輩の彼女
さんなんですよね？」

「おう」

みのりの問いに軽く答える。当然だ。超当然。むしろお嫁さんで
いい。でも晴希はなかなか踏み出してくれない。

いやそれにしても、なんでこいつは一度も変な間違いを
「じゃあ……なんで今まで番号を知らなかつたんですか？」

「…………ぐふつ」

「先輩！？」

非常に痛い。ロンギヌスで胸を貫かれた気分だ。

「ええと、あれだ。あいつシンデレラだからな。簡単には教えてもら
えないみたいで。下手すると『ときメモ』のメインヒロインより攻
略しにくいかもしけんぞあいつ。やつたことないけど」

あいにく俺の隣は晴希で埋まっている。一次元なんぞに心を許す
余裕はない。

「はあ……それで、なぜそんな人の番号を参謀先輩が？」

「偶然にも手に入れたとかな」

「ほんとに偶然なんですか！？」

「ああ、科学とオカルトの結晶だつてさ」

「なんと……」

みのりは驚愕していた。当然といえば当然だ。俺も初めて聞いた
時同じ反応だつたし。

ちなみに脇では一富さんが「俺はいつの間に参謀先輩になつたん
だ」などと言つていた。……一富さんは後できちんと謝つておこ

「お細かい

第八話 虹色のペンと彼奴らの血で悪夢を織りつ（後書き）

今回は若干暴走気味の嘉光を。晴希以外の一人称で一話書いたのは初めてかもしません。

まあ、もつと暴走させたいとは思つてましたけどね。

第九話 嘘と偽りの御物

「ふむ、文芸部からの着信ですか。しかし我々が、果たしてそれを許すとでも？」

新聞部部長は首を軽く傾げながら余裕綽綽といった態度でそう言った。

相手が許してくれるかどうか？ 当然ながらそんな事は思つちゃいない。この流れでそんな事を許すのは余程のアンポンタンしかおるまい。

「許しましょ！」

「許すのかよ！」

思わずタメ口で突つ込みたくなつてしまつぽぢにアンポンタンなのがここに一名いた。……いや違うか。よく考えてみると一知じやなかつたわ。何人か仁科さんに頷いてるし。

「落ち着いてください。そして水を飲もうとして手を滑らせてその携帯に水をかけてください」

「やめて下さいよ！？」

なんて注文だ。というかそれは決して落ち着いてはいないと思つ。それに私のは防水だ。

「とにかく早く電話に出てください。そしてその^{のうけばなし}惚氣話をカセットテープにして新聞部にお譲りください」

「無理です」

さすがは嘘九割と偽り一割だ。私は携帯を開き、困り果てながらも結局通話ボタンを押すしかなかつた。

で、それよりちょっと前のこと。

「まず代表の由宇を電気椅子に座らせて

「内藤」

「いや、晴希を取り戻した後暗殺して偽の由守を擁立すれば」

「内藤」

「いやそれも違う。だいたいこの学校には生徒が多すぎるんだ。新聞部員をひとつりえて、あえて隙を作つて逃がし部室で合流した所で装着しておいた爆弾を」

「内藤！」

「黙目だ晴希が巻き添えになる…………くそつー…『めんなれ』…」「分かつてくれたなら結構だ」

俺たち（たましほぼ一名）は、いつやつて至極眞面目に晴希奪還作戦の道程を考察しているところだった。
とここで、一宮さんが意見を出す。

「新聞部室に行くメンバーを決める必要があるな」

なるほど、これはもう数人で突入するということだ。

といふことは、最低限俺は当然だとして、他には……。

「小枝さんの力が必要になりそうですね」

「あれっ？ 私頼り？ うん、まあいいけどねー！」

俺の発言に、常に楽しげな小枝さんが答える。

「…………そうだな」

なぜか一宮さんは一人苦々しい表情をしていたが、どうしたんだろうか。ともかくあまり踏み込んで心地のいい話ではなさそうだが。「菅原はどうだ？ 僕はできるやつだと睨んでたんだが」

そう言って後輩、菅原ト全の方を見る。

「ちょっと無理ですね。今日は海苔も蒟蒻も持つてないので厳しいです。それに蝉も丁度切れててですね」

「その装備でどうやって戦うんだ……」

菅原は時々よく分からぬことを言ひ。それがこの前晴希に「お前は微妙ににおいては他の追随を許さないな」とまで言われただけのことはある。

「いえ、バイトで使つんですよ」

「バイト？」

「ええ、バイトです。疑問に思われるかもしけませんがこれは……
いえ、やめておきましょう」「

何その引き、すぐ気になるぞ！ くそつ、何だ!? 何のバイトだ！?」

呆れたように一富さんが助言する。

「というより戦力が欲しいなら杭瀬でも連れていけばいいだろ?」「…………」

部室の奥に、それなりに可愛いはずなのになぜだかやけに地味な女子が見える。

確かに杭瀬はああ見えて運動神経はいいらしいし、それにいきなり部室に忍び込むなんて真似も無理じゃないだろ? 同じ部じゃなきや存在すら認知できなかつたようなやつなんだから。

しかし、だ。

「でもね一富さん、それはちょっと承諾できないんですよ」「ほう」

「敵地に女の子を送り込むのは俺の主義に反するんで」「

「内藤、格好つけて言つている自分の姿をよく見直してみろ」「

一富さんの相変わらず冷静な一言。へ? 自分の姿つて言われても、右手の指が全部ねじ曲がつて肘がねじ曲がつて、足も同じつてだけじゃ なん……だと……? ？」

「ぎやあああああ！ 体が！ 右半身の関節が全部曲げられて新人類に！ 小枝さん！? あんたイチ、二のサンで何をやつてんの！?」

一瞬で右半身の関節をすべて逆に曲げられた。

「どうしたの？ 右半身がでたらめな人になつてるけど!」

「あなたの強さがでたらめですよ！」

「お前ら、痴話喧嘩は後回しにしろ」

「そう思つんだつたら俺の関節を元に戻していくださいよ……」

一富さんは小枝さんに目配せする。すると小枝さんはまた火中天津甘栗拳ばりの速度で俺の体を元に戻してくれた。

「さて、お前らが遊んでいる間に秋津のアドレスはお前の携帯に登録しておいた」

「俺はおもに弄^{もてあそぶ}ばれてましたがね」

「内藤は秋津に連絡を取つておけ。小枝の突入後は流れに任せろ」

「なるほど、ようやく突入か

「つて、結局力技ですか。さつきデジヤヴがどうとか

「お前があまりにも急かすからな。急襲をする側がなぜ焦る必要がある」

「…………すみません」

「気にするな。それより早く連絡を取れ」

「そうだった。俺にもすべき仕事がある。

携帯電話を開き、アドレス張に登録されたばかりの『秋津晴希』に電話をかける。届けこの想いつ！

。 。 。

「なんだなんだよなんだってんだよ！ 随分と待たせるなあー！」

「一富さん！ 晴希つてもしかして携帯持つてきてないんじゃ」「そんなことはない。見てみろ」

一富さんはそう言つと、こつものように使つているノートパソコンの画面をこちらに見せてきた。複数の長方形の組み合わさつたような図に赤の点が打たれている。これは……地図か？

「現に秋津に渡しておいたお守りの発信機と秋津の携帯電話に仕込んでおいた通信機で位置を調べてみるとどうだ、同じ場所にあるのが分かるだろ？」

「そうですね、納得です」

そうして再び応答を待つ。「ちょっと待つてください！ タンマ！」なんてみのりが叫んでいるが、何をそんなに慌てているのか俺にはさっぱりわからなかった。

「それよりは今出れない状況にあるのかもしねないな

「ところどきは…… わあ、虐殺の準備だ！」

「落ち着け」

ところたところでよひやく、相手が電話で出てきてくれた。聞こえてくるこつもの可憐らしこ声。どうやら無事だったらしい。

『内藤か？』

「おうそうだ、内藤だ！ 大丈夫か？」

『……チツ』

ツーッツー……。

「……舌打ちされて切られちまつたぜー！」

「静かにしろ」

その場でへたり込み天井越しで空に向かつて叫ぶ。今夜はきっと……いや確実に枕を濡らすことになるだらつ。

第九話 嘘と偽りの御物（後書き）

えど、要するに全力で助けにいつても全力で受け入れてくれるとは限らないって事ですね、はい。

愛つて難しいものです。俺には恋愛経験なんてありませんが。

第十話 イン・ザ・パラレルワールド

「参謀先輩」

電話で四苦八苦している嘉光から離れ、朱鷺羽は一富に話しかけた。

「参謀先輩じゃない」

「参謀先輩」

「誰が参謀先輩だ」

「参謀先輩」

「……朱鷺羽」

「はい」

「一富先輩だ。間違つても俺は参謀先輩じゃない」

「そうですか。参謀……の、一富先輩」

「どうした。そして確かに俺は一富だが参謀ではない
まずどうしてこの後輩は一富のことを参謀呼ばわりしたいのか末
だに謎だった。

「天森先輩一人で大丈夫なんですか？」

「天森なら大丈夫だ。もつとも、俺はそこまで信用していないが

「そなんですか？ ならなぜ」

「あいつくらいしかいなかつた。今日は誠文もいないしな」

「大曾根先輩ですか？ 旅に出たつて言つてましたけど、本当のと
ころどうなんですか？」

「それはプライベートの領域だ。それに、そんなものを明かした所
で面白くも何ともないだろう」

「はあ、すいません……」

「ちなみに天森は、召喚獣を呼んでおいたと言つていたがな」

「召喚獣？ それはどういう？」

「俺にも心辺りはない。だからこそ胡散臭いんだがな」

「は、はあ……」

頭に疑問符を浮かべる朱鷺羽を無視し、一富は新聞部のある方向へ軽く目をやつた。

「すいません、どうやらイタズラ電話だつたみたいで」

携帯電話を折り畳み、そう返答する。さつきの通話なんて最初からなかつたんだ。

「いえ、私の見る限りでは横に『内藤嘉光』と書いてあつたような気がしたのですが……」

「……誰ですかそれは？」

「へ？」

仁科さんが困惑している。躊躇わづ、寧ろこれは好機とばかりに私は話を続けることにした。

「内藤嘉光なんて人物は、この学校にはいません……いえ、この世界にもね」

『…………』

部室がしばしの沈黙に包まれる。

「そんな事は……なるほど、ありますね」

そしてまさか納得するとは思わなかつた。

「おそらくこれはパラレルワールド……どうとかして元の世界に戻らなければ！」

私には理解もできない決意を込めて仁科さんが立ち上がると、他の新聞部員達が次々に騒ぎ出した。

『そうだ、これは夢なんだ！』『昨日買った口本が地雷だつたのもきつと夢なんだ！』『俺はやればできる子なんだ！』『ヒヤハハハハハ！ ラリホー！』『キエエエエエエ！』『樂シイナア！報道ガデキテ樂シイナア！』

……もう駄目だこの新聞部。いつそ滅びてしまえばいいと心から

思つんだよね。

そうやつて私が文芸部にいた事にまさかの感謝を覚えながらも思考を放棄している所に、再び聞き慣れたMGSの着信音。とは言つても勿論サイボーグ忍者などではなく。相手が誰かはまあ見るまでもなかつた。

『おう晴希』

「誰だお前は」

『冗談はよしてくれ。ただでさえさつき電話切られたせいで死にたくなつてゐるつてのに』

そうか、あれが相当な精神的苦痛を与えるとは。嘉光はマゾだから大丈夫だと思つたんだがなあ。

「悪いがこつちだと内藤嘉光つて人間は存在しなかつた事になつてる

『へ?』

信じられないといふような嘉光の声。まあこれは無理もない。

「どうも新聞部は勝手にパラレルワールドに旅立つてしまつたらしい。残念だったな嘉光」

『……そうか、なら仕方ない』

だからどうしてお前も納得するんだよ。などと思ったが、果たしてこいつの次の言葉は、

『大丈夫だ』

私にとつて全く意味の分からぬ物であつた。

『……何がだよ?』

『お前が違う世界に行つてしまつても、俺は絶対にお前を見つけ出してみせるからさ』

思わず言葉になつていない何がが口から飛び出た。

『どうした晴希! ? 大丈夫か! ?』

『お前の歯の浮いたような台詞のせいだ馬鹿! ?』

おかげでさつきの水道水が逆流してしまつたじゃないか。どうし

てくれる。

『大丈夫ならいい。ところでおく分からんが、もつすべやからひ四
喚獸が来るとか……』

「はあ？ 召喚獸って何なんだ？」

いきなりよく分からぬ単語が出た。本当にパラレルワールドの狭間からやつてくるんじゃないだろうな？

『ひょっとしたらこれが科学とオカルトの結晶なのかもしれないな……一宮さんがお前の携帯番号を特定した時と同じようにさ』

「おい今の話は聞き捨てならんな！」

そんな私の訴えは見事にスルーされ、『まあいいけじや』と言われた。いや、それが本当にいいのかを決めるのはお前じゃないから。その辺後できつちり勘定してもらおうか。

『届いてからのお楽しみだとか言つてたぞ』

「そうか、じゃあ切るぞ」

処分を後でやるとするなりばもつ長話をしている必要もないだろう。私は遠慮なく携帯を切り、仁科さんの方に向き直った。

『つと、ちょっと待つ』

さようなら、嘉光。

「さて、ではこの世界のあなたに訊いておきましょ」

混乱からある程度回復した仁科さんが言つ。しかしまだパラレルワールドを信じ込んでいる辺りが半端ない。

「あなたは新聞部に入る意思がありますか？」

「ありません」

即答。

こんな水道水ばかり飲ませたり勝手にパラレルワールドに入つていく部活など、突つ込みが追いつかない。よつて直ちに却下だ。

「そうですか、では」

特に悔しくもなさそり、仁科さんは言つた。「はい」と相槌を打つておく。

「文芸部に残る意思はありますか？」

「…………」

難しい話だ。

確かに入りたくて入ったわけじゃない。だが、選択のチャンスは前にも一度あつた。そしてそこで、部活を続けるとの口で言ったのも事実だ。

「嫌だ嫌だなんて言つてる内は、本当は嫌じやないのかもしれないな……」

そんな事を呴いてしまう。

「新聞部入部を一瞬で拒否しておきながらこの質問に悩むなんて、我々はなんて顔すればいいんですかね……」

そして仁科さんもそんな事を呴いていた。あ、やっぱり悔しかつたのか。ざまみる。

……なんていうやり取りはともかく。

「分かりましたよ。答えましょう。私はあの部に

このまま文芸部に残るという選択肢を取る意思は

パーン！

と、狙つたかのようなタイミングで新聞部室の扉が吹き飛んだ。そして廊下から現れたのは……一人の男子生徒。くせの強そうな黒髪が逆立つていた。

「文芸部一年、神城羅央、見参！」

超！ エキサイティン！

空中で扉を吹き飛ばした後そのまま何回転かし、着地した後その神城とやらは両足を広げ両腕と腰を深く落としながらも斜めに構えた、俗に書つ『かつこいい姿勢』を取りながらそう叫んだ。

「……は？」

思わず今日何回田かと思えるような呆れを私は見せた。まさかこ

いつが『召喚獣』なのだろうか。それにしてもまたまた奇妙奇天烈な奴だ。

第十話 イン・ザ・パラレルワールド（後書き）

はい、そろそろ新聞部編も終わりが見えてまいりました。
それにしても杭瀬の出番がものすごく少ないような……いずれ奴
との会話であるまる一話使うときは来るでしょうが。

第十一話 神出鬼没の邪心礼賛

「総員、あの人を抑えなさい！」

『了解！』

突然の闖入者、神城羅央を取り囲む新聞部。

「おつもしけえ！ かかつてきな！ 全員俺がこのこの創始の力で

フォース・オブ・ジエネシス

ぶつ飛ばしてやるよ！」

何だそのやけに厨二病臭い単語は。ここに来て変な異能力出すのか？ やつちやうのか！？

「さて秋津さん」

新聞部一同が神城と交戦しているのを見やりながら、仁科さんが話し掛けてくる。ああ、あれは抑えられないな。キャラ的に。

「何ですか？ 新聞部に入る気ならさらさらありませんが

「いえ、そうではなく サッキの水の事ですよ」

さっきの水？ つい勢いで飲んでしまったが、やはり罠にかかったのか？

なんて事だ。という事はさっきの行動は油断させるために……してやられた。囮碁で初心者相手に「取った」と思つて油断してたら目を離していくうちに石を取られたような気分だ。そんなの、とんでも道化じゃないか。全く以つて私のキャラじゃない。腹立たしいな。

「さっきの水　ただの水道水なんですね

「…………」

やつぱり駄目だろ？ この新聞部。

「ところで仁科さん

「は？」

「あの一年、異次元的な力を使つてるようにな見えるんですが

「安心してください。彼が手から波動を飛ばしているように見えるのはあなただけじゃありません」

「ですよね」

溜息をつく事しか出来なかつた。本当にここに来て異能モノか。並行世界つて怖いな。

「あの一年は何やつてんでしょうつかねえ」

「困った侵入者さんですよね、本当に」

「ほんと、凄いわよね！　私も出来るけどー。」

「出来るんですか！　というか」

声をかけてきたその人の方を向き、はつきりとその疑問を言葉として飛ばす。

「なんで天森さんは当然の如くここにいて、会話に割り込んでいるんですか！？」

「あら、神出鬼没とハーモニカの演奏が私のアイデンティティだつたと思つけど！」

「どさくさに紛れて変な特技を付け加えないで下さいー！」

「そう　シンデレラがハルちゃんのアイデンティティであるように！」

「つるさいだまれ」

嫌な方向にまとめられたものだ。思わずため口で突っ込んでしまつた。いかん、焦りなのかついさつきの仁科さんへの接し方を引きずつてしまつたな。キャラ的にはどちらも同じようなものだとは思うが。

「誰と誰が同じようなものつて？」

ほら、こうやって焦つてているからこの人も読心術が使えたつていう事實を忘れてしまつたりするんだ。

本当に……私は馬鹿だ。とんだ道化だ。他に言い様のない弱者だ。

「さてハルちゃん、あちらでちょっと話をしようかしら？」

「えっと、それは　そうです、仁科さんが暇じやないですか」

みんなが手から出た波動に吹き飛ばされている間ずっと、この人は水道水を飲んでいなきやいけないのか。そんなのは残酷すぎる。私も泣く。といつてもこれから待ち受けの天森さんの処刑タイムにだが。ははは、全然暑くないのに汗が止まらないや。

「それは問題ないわよー。」

「……と、それはどういづ？」

「では、俺と話をしましょうか。由宇さん」

「……内藤」

今度は内藤嘉光。度重なる神出鬼没にもつかけてやれる言葉がない。

その嘉光が首だけ回してこちらを見ながら、いつ言った。

「言つただろ晴希？ お前がどの世界にいづが俺は必ずお前の所に行くつて」

「だからそういう並行世界じゃないからな」

「何……ですつて？」

今度は仁科さんが驚愕してしまっていた。敵同士の割に息合つてるなお前ら。増えたのは仲間じゃなくて敵なんじやなかろうか？ 仲間を増やして次の町に行く某ポケモントレーナーとは大違いだ。少なくとも「イギングより弱い女子高生が進むべき道じやあないと思うんだ。

「今まで並行世界だなんだと私を騙して、嘲笑つていたのですか？」

…

まだ信じ込んでたのかよ。あなたはもういいよ仁科さん。ただ一つだけ違うのは、笑えもしなかつたつて事だけ。なりばじつする？ こうするまでだ。

「内藤、後は任せた」

「こいつに頼むしかない。一対三よりは明らかに一対一の方がましだ。」

「すまん晴希、ちょっと調子が悪いもんで」

「こいつ……見事なまでに棒読みじやないか。言つておくがこんな私でもお前の口からいつものアホのよづな発言がスラスラと流れ出る事くらいは知つてるんだぞ。」

「何が目的だ内藤！」

「いや、つまりない事なんだが

「

嘉光は私の目を見据えて続けた。

「『嘉光』って呼んでくれ」

「いつ、まだそんなことを気にしてたのか。懲りない奴だ。ばーかばーか。

「ああ、分かつたよ嘉光！」

「急に力が湧いてきた！ 新聞部を皆殺しだ！」

「いや、そこまでやらなくてもいいだろ！ と、いうかやめろー。」

「半殺しだな！？」

「ああもうそれでいいよ！」

嘉光がいつもの十割増し（実質一倍）邪な気を纏っていた気がした。

「……私のいない間こいつに何があったんだ？」

「さてハルちゃん、こっちに来てくれるかしら？」

そして私の戦いも始まる。

バトルはこの後すぐつてところか。超展開にも程があるだろ。

第十一話 復讐の使徒（前書き）

今回、ノリ成分だけで書き上げました。若干病的です。

第十一話 復讐の使徒

『由宇さん、ちょっと話をしてよいじゃないか』
『ほう、あなたが内藤嘉光さんですね？ 名前は聞いて』
『由宇さん、ちょっと話をしてよいじゃないか』
『え、ええ、話をしましょーか。まず秋津晴希さんにについて』
『由宇さん、ちょっと話をしてよいじゃないか』
『は、話をするのならせめてその殺氣を』
『由宇さん、ちょっと話をしてよいじゃないか』
『落ち着いてください！ 水を』
『シャアアアアアアアアアツ！』
『いやあああああああつ！』

幸いにも（と言つていいと思つ）視界には捉えられていないが、同じ新聞部室内で惨劇が起きているのはよく分かる。仁科さん……哀れ。同情します。

「さてハルちゃん、こっちに来てくれるかしら？」

天森さんはそれが真なのか偽なのか分からぬ笑みを向けてきている。

本当に同情します。多分こちらも同じような事になるでしょう。

「……天森さん、何をする気ですか？」
「うーん……」

許してください。私の知っている天森さんはなんだかんだ言つて優しい天森さんですから。

「縄を首にかけたバンジーとかかしりー。」

なるほど、これはどうあっても避けなくちゃならない。身長への願望もないわけじやないが、流石に命と天秤にかけるものではないだろう。

「……あー、天森さん、私の体が弱いって知っていますよね？」

「ポケモンのコイキングだつていくらオーバーキルしても瀕死に留まるから大丈夫よきっと！」

「あのですね、きっと瀕死って事はもしかすると死ぬって事ですよね？」

「当然！」

いや、当然と言われてもまさか同じ部活の先輩に抹殺されたくはない。無論瀕死にされたくもないが。あと無論違う部活の先輩ならいいと言つわけでもない。本来なら現実とゲームをじつちやにするなども言いたいところだが、その辺の境界は今現在非常に揺らいでしまつている。

ついでに、仁科さんの「きやああああああっ！ 指と爪の隙間に粘土詰められた！」という叫び声が耳に入ってきていた。嘉光がどういう方向性で無双しているのか非常に気になる所だが、今の私はそんな状況じゃない。何しろ私のか細い命がかかっている。

「……天森さん、今度何か奢りましょうか？」

「そんな事しなくて、活路はあるのに」

活路はあつたんですか。よかつたよかつた。

あと地味に天森さんの台詞から「！」や「？」が消えた気がする。

「作者が疲れたからよ…」

さいですか。実に発言がメタでござりますね。

「それで、活路と言つのは」

「交換条件よ…」

「はあ」

天森さんが私の耳に口を寄せてきた。念のため言つておくと指をビシッと突きつけてやつぱり語尾に「！」をつけて叫ぶような感じで言つてきた後にだ。だがもしここで仮に「わっ！」とか大声で叫んだり、私の耳に素敵な事をしたら絶縁ものだ。下手すれば絶命だ。私の命運は文字通り天森さんの手の平の上にあると言つてもいいだろ？。そう考へると耳を貸すつて怖い行為だな。今度からは気を付

けよう。

だが優しい天森さんはそんなことをせず、

「……嘉光君との『テート』でどうかしら?」

「なるほど、それなりびつを行ってきて」

「いや、ハルちゃんが行つてくるんだけど!」

「ああああっ! 耳が! 耳があつ!」

訂正。ちゃんとヒソヒソ声で離してくれるとと思つたら、よりによつて一言田で大声に戻つた。優しくない天森さんだ。やつぱ次からじや駄目だな。

鼓膜への思わぬ不意打ちについ腰を抜かし後ろに倒れこんでしまつたが、そんな私にも構わず天森さんは続ける。

「そうね、ルートとかはこっちで考えるから! それで罰ゲームみたいな感じでビデオカメラでも持てば!」

「……………ですか。じゃあ『ホールディングス』にでも

「了解! あとそんなところで寝ると風邪引くわよ?」

全部あなたの責任でしょうが。くそ、鼓膜が……鼓膜がさつきから唸りを上げて……。

「口は災いの元つてね!」

私は何も言つてなかつた筈ですが。寧ろそつちでしう災いの元は。

修羅場を生還したので、崩れ落ちたままで周りを見てみる。

『うおおおおおおおおおおお!』

『侵入者め! 生きて帰れると思つくな!』

例の神城羅央といつ一年生は七色の分身を出しながら新聞部員達と交戦していた。あのままならいざれ全滅するだろうが、それでもここまで耐えている新聞部員たちは凄いと思う。例えその相手が一年生一人であれ。

「そう言えば天森さん」

「何？」

「あの一年生、何なんですか？」

竜巻を起こしている一年を見やる。何だか腕に紋章みたいなのが付いてる気がしたが気付かない振りをしておく。

「召喚獸しようかんじゆよ！」

「いえ、そうではなくて

変にはぐらかされても困るんだが。

「つまりは適当に知り合ったわけですね」

「いえ、召喚獸だから…」

「さっぱりだ。

「ま、いいんですけどね」

それはそうと、もうちょっと周りを見直してみよう。ポートピア連続殺人事件とかは勿論、逆転裁判すらやった事が無い私だが、それでも観察眼が大事である事ぐらいは心得ているのだ。あの一年は根本的に訳が分からぬから例外。

『死ねえええええ！ オラオラオラアー！』

『ぎゃあああああああ…』

嘉光は目にも止まらぬ動きで「科さんに攻撃（？）を仕掛けいた。ああ、今一瞬で地肌にガムテープを張つて剥がしたな。あれは痛い。というか一体何キャラになつてしまつたんだあいつは。もう既に戻れない所まで行つてしまつたのならもう戻つて来ないでいいんだが。

というか嘉光は女子全員下の名前で呼んでるし基本フェミニーストって印象があつたが、一気にキャラが定まらなくなつた気がする。思い当たる事といえばただ一つ。私が誘拐されていたのが嘉光を狂わせたのではないかという事だ。じゃあ私が止めなきやならんのか。なにこの罪悪感の持てなさ。

とはいえて立ち往生しても仕方がない。実際には座り込

んでるけど。

「やめろ嘉光！」

『血だああああああああ！ 奴らの血で、文学をおおおおおおおお…』
『ひやああああああああ…』

いかん、『れじや止まらない。折角下の名前で呼んでやったのに
スルーかよ。気遣つて損した。
ならば、『むちうにも考えがある。無益な争いを止めるための考
えが。

「頼むからやめてくれ！ 内藤君…」

これでどうだ！ お前も中学からのクラスメイトにさん付けで呼
ばれた私の苦悩を、屈辱を、疎外感を思い知れ！
すると。

「争いなんて無益だ」

と言つたのは他でもない、内藤君こと嘉光だつた。一瞬で止まつ
たなお前。ついでにさつきまでの行動と全く矛盾している台詞だな
それは。

「すいません由宇さん。俺、取り乱していたみたいで」

嘉光が仁科さんに頭を下げる。取り乱しすぎだ馬鹿。仁科さんが
凄く引いてるぞ。指と爪の間に何か挟まつてゐし。嘉光はどつから
持つてきたのか粘土なんて持つてゐし。

「まあそれはともかく、これで一件落着」

「いえ、そうでもないみたいよ…」

私の台詞を打ち消すよつた天森さんの一言。

「あれを見て！」

一年のほつを指差す。そこにいたのは、漆黒のオーラを纏つた神

城羅央。

「フォース・オブ・ジェネシス

「創始の力の暴走よ…」

波動、分身、竜巻、暗黒化……厨二病臭いにも程があるな。ふざ

け
る。

第十一話 復讐の使徒（後書き）

次か、次の次でラストって事になるんでしょうか。これは。いずれにせよ伸びすぎですね、はい。

ちなみにこの小説、最後の最後にどういう展開にするのか全く考えてません。いや、正直フラグの立てようが……。

第十二話 創始の理

「田^タデハナイ、心^ハ見ロツ！」

周りの空気が歪んで見えるほどの暗黒オーラを放つ一年生、神城羅央。なんか奴の持つ創始^{フォース・オブ・ジェネシス}の力が暴走したとか何とか。新聞部は熱気で充満している。機材とか壊れたりしないだろうか。そこらへん結構心配だ。でもってあいつの頭は多分手遅れだ。

「晴希が助かつてはいおしまい、ってわけでもないみたいだな」

「これは困ったわね！　たかが新聞部相手にあの子を出したのがいけなかつたかしら！」

「ああ……指と爪の間が……」

そして奴を前にしての反応は、文字通り三者三様だった。

本当、いつの間にこんなファンタジー展開に突入したんだ？　あと仁^{じん}科さんにはさつさと『指と爪の間に粘土攻撃』から復帰してほしい。

「くそつ、魔法先生でも呼んでこい！」

どうせ来ないがな。やけくそになつてそう叫んで見る。

「ああ、あの先生は産休なんだ！　タイミングが悪い！」

「今じやなきやいたのかよ！？」

嘉光の返答に驚愕した。

「田^タデハナイ、心^ハ見ロツ！」

暴走して口調までおかしくなつた一年生が再び叫び、暗黒オーラをもう一段階上げた。そういうえばこいつ、さつきからこれしか言ってない。

「俺が止めよ!」

「嘉光！　持ってきてたのか、それ……」

そう言つて嘉光が持ち出したのは例の黒板消し（^{2k}g）。

頭部にでも当たればただでは済まないであろう危険なティストを孕んだ一品だ。

「でいやああああ！」

黒板消し（2kg）を投擲）

いや、射出する。

高い速度と共に手首から繰り出されたそれは、初速のまま神城の頭部に突き刺さるように飛び

『なつ！？』

そのまますり抜けた。

一瞬でかわした？　いや、当たる直前まで見たが、体勢的にもそれは難しかった。同じ理由により、手足で弾いたり掴んだりしたわけでもないだろう。

「……残像」

いつの間にか復帰していた仁科さんが告げる。そつか、残像か。いや、残像ってそんなオカルトな……あいつならやるか。

待て、と言つ事は本体はどこに？

「目デハナイ、心デ見ロッ！」

もはや耳にタコができるほど聞いた一節がどこからかまた聞こえてくる。

「危ない晴希つ！」

嘉光が私の襟首を掴み、自分の方に引き寄せた。何をするんだ、と言おうと思つたらさつき私のいた場所を竜巻を纏つた足が通過していくた。もしかしたら三途の川をスキップで渡る所だったのかもしれない。嘉光には素直に感謝しておこう。

それにしてこの一年、何から今まで滅茶苦茶の出鱈目だ。天森さんみたいだな。

「いや待て！　天森さんなら！」

これ、天森さんなら余裕で鎮圧できるんじやないか？

天森さんの実力は折り紙付きだし、なにしろこいつを召喚獣と呼んでいたくらいだ。普通に考えて競り負ける方がおかしい。多分完全上位互換くらいにはなると思ってもいいだろう。じゃなきゃある人何しに来たんだ。

「それがな、小枝さんいつの間にか消えてたんだ！　俺があいつに黒板消し投げた辺りで！」

またもや嘉光の一言。

「どうして天森さんが消えるんだ！　逃げたのか？」

「こっちが訊きたいくらいだな！」

立場は同じか。生憎私達は逃げられそうにない。本当にあの人は何に来たんだ！？

「どいてなさい」

と、ここで仕切り直すような一声。

仁科さんだ。

多々の疑問が湧きあがつてくる。なぜここに仁科さんがいるんだ？　まさかこの人にあいつが止められると？　だとしたらどうやつて？

「……そして、どうして裸足に？」

いかん、ふとした疑問が口から出でてしまった。

「内藤さんに、上履きの中にステイックのりを塗りこまれましてね」嘉光が明後日の方向を向きながら口笛を吹いて誤魔化そうとしている。え？　だから何やつたのこいつ？

はつきり言って、爪の間に粘土を埋め込まれながら裸足になつている仁科さんはかなり心もとない。

「そういえば」

「は」

「どうして仁科さんは、助けてくれるんですか？」

逃げるチャンスはあつただろう。神城が私に攻撃してきた辺りとか。あいつに対抗できるような人が、その隙を見逃すだらうか？　いやそんな事はない。

すると、仁科さんは呆れたような表情で。

「世の中にはこんな言葉があります」

「こんな事を切り出した」

「昔の諺ですか。意外としつかりしてるんですね」

ことわざ

「いいから聞いて下さい。世の中にはこんな言葉があります。『昨日の敵は今日の友。今日の友は明日も友達』と」

「……とりあえず、仁科さんが義理堅いって事は分かりました」
場が場なので、「後半はめざせポケモンマスターの歌詞だろ」とかは突つ込まない。

「それと、ここは私の部活ですからね」

そう付け加えながら、仁科さんはコップに注がれた水を少し口に含み、飲み込んだ。

心もとないはずのその姿が、何故か頬もしく思えた……何故だ。

「あの人強いぞ」

嘉光が私だけに聞こえるよう小声で喋った。

「俺の攻撃を喰らつて怪我一つなかつたくらいだ」

それは嘉光の攻撃に問題があるんだと思う。あれは怪我するとしてもガムテープ攻撃ぐらいだろう。

「目デハナイ、心デ見ロッ！」

「さて、そろそろあちらも怒つてうつしゃるので 行きましょうかね！」

神城と仁科さんがぶつかり合つ。

火器も銃器も使っていないのに、なぜか眩しいほどの光が新聞部室に溢れ出た。

第十二話 創始の理（後書き）

新聞部室内で8話も使つのは、正直どうかと思つます……。

第十四話 終焉の呼び水（前書き）

「やあやあ……やあやあ新聞部を脱出できたわー！
あ、では、お楽しみください。

第十四話 終焉の呼び水

ドアを開ける。いつもの広い部屋、いつものパソコン、いつもの本棚……。

「いやく、文芸部室に戻ってきたといつ事だ。

「戦いは長かつたな……」

ついそう呟いてしまったくらい、新聞部室でのひと時は過酷だった。まあ、大変なのは新聞部相手じゃなかつたが。

時間が時間なので皆帰つていて、部室に残つていたのは一画やんと杭瀬、そして朱鷺羽だけだつた。

さつきの新聞部室での話のオチでも説明しておこう。

闇を纏い鬼神化した文芸部一年、神城羅央と新聞部部長、仁科由宇さんがぶつかり合い、まるでカメラのフラッシュが焚かれるように光を放ち、そして交差した。

私は見ていた。

擦れ違ひざま、神城の口に水がねじ込まれるのを。

仁科さんは振り返り、満身創痍になりながらも口を開いた。

「…………りあえず…………水でも…………んでも…………ち着いて下さいよ」

驚愕した。色んな意味で。

なぜ奴の隙を縫うことが出来たのか、なぜ最初で最後の一発を水道水に懸けたのか

「目テハグハアツ！…………普通の…………普通の水道水だ。…………待て、俺は何を！？」

なぜ、奴を正気に戻せたのか。

「いや、これにて一件落着！」

「そしてなぜ、天森さんがいつの間にか戻つてきているのか…………」

「いや、超必殺技一発で終わらせようと思ってね！」

つまり、隠れて機会をうかがつていたが、その間に仁科さんが解

決してくれたと。

「どうも腑に落ちないな。天森さんの実力なら、わざわざ私たちを囮にしなくてもよかつたんじゃないかと思う。ただ、そうなるとなぜ私たちを囮にしたのだろうか？ 戦いを長引かせ、新聞部の損害を拡大させたかったのだろうか？……なんとなく思い当たることはあるはあるが、私は敢えてそれに気付かない振りをし、自分を偽る事にした。

「……さて、文芸部の皆さん」

ようやく呼吸の整った仁科さんが床に腰掛けたまま、口を開いた。
「我々新聞部は、あなた方文芸部と協定を結びます」「つまり、もう俺の晴希を攫つたりしないと？」

「ええ」

嘉光の問いかにも仁科さんは即答した。

「お前の秋津晴希になつた覚えは更々ないがな。といひで仁科さん「はい」

「なんでそう急に？」

私の問いかに、この新聞部部長は喜怒哀楽の『樂』をそのまま現したような表情で、こんな事を言った。

「好きな人のために頑張れる人は、嫌いじゃありませんからね」「あいつの事ですか。ただの馬鹿ですよあれは」

「秋津さんは、内藤さんの事は好きですか？」

出たよ、こういう質問。好きと言つたら「異性として好き」つて解釈になるし、嫌いといつたら「友達として嫌い」つて事になる。まああいつだから後者でもいいんだが。

「嫌い……でもありませんね」

「では、好きと」

「全然です」

「即答ですか」

「いやもつやつぱり嫌いでいいです」

私の反射的即答に、仁科さんは呆れかえっていた。

「後始末は私達がしますから、秋津さんたちは戻つてください」「どうも」

私は嘉光と天森さんの所へ歩み寄った。

「いや、もうあれば大変でしたよ小枝さん！ 死ぬかと思いました！」

「嘉光君は殺しても死なないから大丈夫！ 何度でも蘇るから！」

ちなみにこんな会話を繰り広げていたお陰で、さつきの私達の話は嘉光の耳に入つていなかつたらしい。まあ、最後の天森さんの台詞には同感。寧ろ何度でも殺そう。

「無事でよかつたです！ 秋津先輩！」

部室に入った途端真っ先に駆け寄ってきたのは一年の朱鷺羽だつた。文芸部の中でもまともな方の部員だが、おそらく嘉光に好意を寄せているように見える。そこは残念な所だと思うが、まあそこは個人の自由だろう。他人の恋愛感情に口出しする権利は私にはない。「晴希先輩の居場所がわかつたのは、参謀先輩のおかげなんですよ……参謀先輩？」

「俺だ」

「……ですよね」

参謀先輩とは、一富先輩の事だつた。まあいかにも参謀っぽいのは分かるが、どうしてそんな渾名になつたのだろうか。一体私のいらない間に何があつたんだ？

「ちなみに、居場所がわかつたと言つのは」「偶然にも発信機を取り付けていただけだ」「プライバシーの欠片も見当たりませんね」

大曾根さんといいこの人といい、やる事がいちいち犯罪の域に片足を踏み入れている気がする。下手すれば片足以上、最早彼岸の存在だ。

「気のせいだ」

きつと大曾根さんはさつきの私の台詞と地の文両方に氣のせいだと言つたんだるつ。この人は肝心な部分でいつもしらばつくれるから厄介だ。いや他の点も十分厄介なんだけどさ。私に発信器仕掛けるとか。

「……そうですか」

「ちなみに秋津の携帯の番号も偶然

「

「だと思いました」

もう言いたいことが分かつたので、話を切った。

「晴希

「

横からいきなり話し掛けられた。この影の薄さは、一人しかいないうだろう。

「杭瀬か。さて、私は一人で帰るぞ」

「待つて」

「また今度だ。お前との話は無駄に長くなる。早く帰つて風呂に入りたい」

「風呂？ 僕と一緒に入

「黙つてろ内藤

「によるーん」

嘉光が機能停止したところで、また杭瀬が話し始めた。

「晴希の風呂なんてどうでもいい。どうせ清潔感とかは変わらない」

「杭瀬、今さりげなく私を中傷しなかつたか？」

「それより会話してくれないと訴えようと思つうの。晴希が私の処女を奪つた事もばらすから」

「待つてくれ。後半の事実は確認されていない

と言うか私は純粋な女だ。男でもレズでもない。他の奴らに聞こえないよう小声で言つてもそいつは限りなくアウトに近いアウトである。

「じゃあ、仕方なく後日話すとして

「ああ、何故そっちが妥協するような形になつたのかは定かじやないがそうしてくれ」

さて、帰るか。私は鞄を手にとり、部屋を出ようとしたら、すると、予想通りだが嘉光がついてきた。

「待ってくれ晴希、俺も帰る」

「だと思つたよ」

そのまま並んで部屋を出て行く。

「……羨ましいですね」

朱鷺羽が憧れるような眼差しを私たちに向けてきていた。「……」の相手は実際かなり大変なんだがな。

「なんだかんだ言つて離れようとしないのね！」

天森さんが余計な事を言つていた。私が離れようとしないのは單にもう諦めたからってだけです、はい。

「お幸せに」

杭瀬はもつと余計な事を言つていた。あの似非無口キャラは本当に……。

下駄箱を出て、また並んで歩く。嘉光と私の身長には、少なくとも15センチ以上の違いがあった。

「晴希」

そしてふと、嘉光に声をかけられた。

「どうした、内藤」

「いや、もう嘉光つて言つてくれないんだな」

「一緒だろ」

「なあ晴希、確か一年の春頃……ちょうど一年位前だな。あの時俺と約束した事、覚えてるか？」

「文芸部に入る事、だつたか？」

嘉光のほうを見ず、そのまま返事する。

「あの約束はもう契機を過ぎたはずだったな。いや、やめる気はないが」「いや、そうじゃなくてだな……」

「素直に感謝するよ、ありがと。私はあの文芸部が、案外好きみたいだ」

奇人変人ばかりだがなぜか居心地は悪くない、あの場所が好きだ。ほんの少しだがな。

「俺の事は？」

「知らん。黙れ」

「そこは厳しいんだな……」

「当然だ」

勢いで好きと言つとでも思つたか。嫌いじゃない、で我慢しつけ。「いや、そうじゃなくてな……もう一つの約束の事だ」

もう一つの約束……と言つと。

脳内の記憶を辿つてみる。確かに、あの話にはまだ続きがあったのだった。

『晴希の質問は二つあつたな』

『ああ、それがどうした』

『……実はもう一つ、頼みたいことがあるんだ』

『何だ？ あまり面倒なのは断るぞ』

『いや、簡単なことだ』

『……ほつ』

『俺はお前の事を晴希と呼ぶ。だからお前は俺の事を嘉光つて呼んでくれ』

なるほど思い出した。そう言えばそんな惚氣話があつたな。言わなくてよかつた。あんなの新聞部にばれたら一瞬でネタにされるはずだろうから。

「ああ、あれなら一週間でやめたな。それがどうした？」

それでも、考えてみるとあれには結構重要な意味があつたのかもしれない。現に私はあいつと話す時は内藤と呼ぶが、心中では嘉光と呼ぶ事をやめられていない。

「一週間じゃないだろ」

「そうだったか？」

「ああ、二日だ」

「残酷だったんだな、私は」

「そうでもないだろ。晴希は晴希だ。どんな晴希でも俺は好きだよ
……本当にこいつは。恥じらうのが無いのかね。

「待て嘉光、お前の帰り道は向こうにひだつたはずだが

「え？」

「『え？』じゃない。なぜここで疑問を覚えるんだ」

「今日は晴希と一緒に風呂に入るはずだったが」

「いや、そんな予定は未来永劫無いだろうがな

やつぱりフォローのしようがない。見つからない。こいつはただ

の変態だった。

ああ、また私の間違ったラブコメが変な方向に進むんだな、なん
て思うと同時に。

この時も確かに、あの馬鹿は嫌でもずっと私の傍にいてくれるな
どと思つていたわけだが。

あの事件が起つてからまた考え方直してみれば、生憎ながらそつ
でもなかつたらしく。

第十四話 終焉の呼び水（後書き）

よつやく新聞部編終結です。これで杭瀬との話が書ける……！

それはそつと、サブタイトルを全体的に大きく変えました。これで若干のシーカルつぱりも出でていると思います。

断章 乙女一人はかく語りき

まあ、いつもといえбаいつものやり取りに入るのかもしれない。

「……さて杭瀬」

「……」

「杭瀬ちゃん」と答えてくれ

「……」

場所は部室。アクティブに絡んでくる内藤嘉光をうまくかわし私が声をかけている相手、杭瀬弥葉琉は今でこや無口キャラを装つているが、私相手には本当に好き勝手言っている、いわゆる似非無口キャラだ。

普段文芸部室においてこいつは、DJのコンペーにも並んでいないうちの意味不明のタイトルの本を読んでいて、本人は「恋愛小説の参考に」と言っているが、こんな調子で執筆する恋愛小説がどんな出来になるかわたしには全く予想出来ない。

というわけで。

「よし、帰ろう」

「……ノリが悪い人」

「お前には言われたくないな」

そちらから呼んどいて「ミコニケーション無視なんだもの。

「そうだった。晴希は普段家で全裸になつてライオンキングやってるくらいノリがよかつたんだ」

「誰だそれは。普通に誰だ」

私はそんな性癖の人間じやない。

「……」

……なぜ私は何もしていないのにジト目で見られなきゃならんのだ?

「可哀相な晴希」

「可哀相なのはお前だ」

「大丈夫。晴希は晴希だから」

「さて、帰るか」

「死ね」

「人に死ねと言つな」

「生きる」

「いや、生きるけども」

「とりあえずもうやめろよ」のやり取り。一体誰が得するんだよ。

「本当にノリが悪い。それが全裸でライオンキングした人の実力?」

「だからそんな私は最初からいない」

「まずはそのふざけた幻想をぶち壊すから

「ふざけてんのはお前だろ。私はあれだ、凄く真面目だ!^{すごい}！ 品行方

正なんだ！」

「ん？ 感情が昂ぶつてつい変な事を口走ってしまった気がするんだが。」

「ただし、家では全裸」

「私はお前の目には一体どうこう風に映ってるんだ!？」

「常に全裸」

「まあ、最悪だな」

「と言うか服が透けて見える」

「どういう超能力だよ」

「というかどこのエロ漫画だ。」

「脱いでも大して凄くない」

「悪かったな」

「けど私は分かつてる。晴希が風呂上りに毎日胸が大きくなるマツサージをしてることは」

「だからお前はどうしてそうやって私に事実無根のキャラ設定を付け加えようとするんだ」

「というかこいつ会話する対象がいつも私なのはどうこいつ事なんだ。」

「晴希……胸は小さくてもいいんだぞ? 寧ろ俺は小さい方が好き^{むし}だ。

だ

「内藤は横から割り込んでくるんじゃない！」

「いや、そこはちゃんと彼氏として……」

「いつ彼氏になつた。まあいい、後でたゞぶり話してやるから黙つてろ」

「ラジヤー！」

「ネタ古いな、お前！」

某ポケサンでは未だにやつていてるけれども。
まあとりあえず外敵の襲来は妨げられた。

「晴希……わざわざそんなマッサージする事ないのに」「
マッサージの話はお前から言に出したことだからなー！」

「秋津先輩……わざわざそんなマッサージを？」

「朱鷺羽までそんな反応をするんじやない！」

と言つうかこの後輩、なんだかんだ言つてノリノリだな。普段はかなりまともだと聞いたが。

「じゃあ晴希」

「なんだ？」

「嘉光と入浴した感想を」

「本当に次々と嘘ばつか言つなお前はー！」

「秋津先輩……」

「だから朱鷺羽！ なぜシヨックを受けるー！」

「…………羨ましいです」

「羨ましかつたのかよー」

まあとりあえず、言い付けを守つて黙つてくれた嘉光に評価プラス一点点だ。よかつたじやないか、GDPの如く落ちていた私の好感度が少しでも上昇して。

「とりあえず嘉光と晴希のあの日の話は『R-1-8』 タグ付きの番外編でやつてもらつとして」

「それはきっとお前の妄想成分100%になるだろ？
本気でかかれば感謝料すら持つていけそうだ。」

「大体、晴希はオプションが多い」

「いきなり話題変わったな」

「何の話だよ 一体。」

「男女、シンデレ、コイキングより弱い、全裸でライオンキング、レズ」

「最初の三つはさておき、後ろの一一つはお前の妄想だからな！ と言つかお前ライオンキング好きだな！ あと朱鷺羽はなぜそつ私を尊敬の眼差しで見てるんだ！？」

「人間は怖いね。好感度が上がつたり下がつたりする」

「達観してるみたいだがこの事態を引き起^こしたのが誰か分かつてるのか？」

「全裸でライオンキングの人」

「そんな奴この部室にはいない」

「間違えた。全裸に一ソックスだけ履いてライオンキングする晴希」

「ある意味更に重症になつたな！」

「だとすればその裏をかい^て全裸一ソネクタイ……」

「話が不毛だ！ ライオンキングに興味は無いし私の好感度が変なことになつた原因も私じゃない！」

「晴希がこんな事態を引き起^こそうと願つたからこいつなつた」

「私は晴希であつてハルヒではない」

「こうやつて突っ込みを入れるために世界を動かしてゐるの」

「一体突っ込みに何を懸けているんだよそれは」

「実際は、作者のせいであつて私のせいじゃないけど」

「待て。今ものすゞく鮮やかにメタな台詞^{せきじんてんか}で責任転嫁した気がするんだが」

「晴希は本当に、本当に最初は男口調でちよつとシンデレなだけの普通の女子高生だったのに」

「だから台詞^{せき}がメタだぞ」

「今じゃこんなおつさんになつて……」

「誰がおっさんだ！ 大体世の中はおっさんって言つた奴がおっさん呼ばわりされるんだよ！」

「IJの後付け設定の塊かたまつと違つて、私は無口キャラだから大丈夫」

「……そうだったな。お前のポジションはつくづく羨ましいよ」

「……」

「おい、どうした似非無口キャラ」

「……いや、何でも」

何だか一瞬杭瀬の調子があかしかつたような気がするが、まあ氣のせいかもしくは杭瀬の演技だろう。

「私も元は地味じゃなかつたけど」

「人の事言えないな、おい」

「……」

「だから無口キャラを演じるな」

「分かつた」

「分かつてくれたか。……といつかなぜたかがお前との会話でこんな無駄に一話使うんだ？」

「それは私が、作者のお気に入りで「やっぱり発言がメタだな！」

「……言い出したのは晴希」

断章 乙女一人はかく語りき（後書き）

はい、今回は超省エネレベルでモノローグを減らします。流石に最初の最初みたいなのはありませんが。この話、書きたかったんですねー。

第十五話 戯言の交錯

「晴希！」
「何だ邦崎、大声を出して」

「いいの！ 晴希は私のライバルだから！」

「何がだ。天森さんみたいなテンションでいきなり何を」

「私は頑張つて、晴希の大好きな内藤君を奪つてやるんだから！」

「別に大好きじゃないからな、うん」

「ツンデレ？」

「言動が内藤と被つてゐるぞ、それ」

「そう……？」

「たつたそれだけで頬を赤く染めるな。とりあえず私はツンデレじゃない。内藤への好意もこれといつてない」

「あつ、そうなんだ……」

「ただ内藤の方が私に好意を寄せているだけだ。……まあ泣くな邦崎、諦めたら終わりだ」

「うん、ありがとう……」

「それにしても、いつの間にか注目集めてるな私達」

「え、そう？」

「お前が大声出すからだろ」

私こと秋津晴希が理不尽な理由で新聞部に拉致され、文芸部が助けに来てくれたと思いきやそこでまた一波乱。なんだかんだあって新聞部との同盟が結ばれたのが、つい先日の出来事。そして今現在、私はいつものように文芸部へ赴く道中だ。ただし今日は一人で。

この横に並んでいる内藤嘉光という男は、顔だけは良く他は馬鹿で変態でどうしようもないキチガイだが、まあ性悪というほどでは

ないので無垢な女子生徒達にはかなりの人気がある。

例えば私のクラスメイトの邦崎綾女。何が起こったのかは知らないが、いきなり私にライバル宣言をしてきた。なんのこっちゃと思ったら、嘉光の事が好きだそうだ。今日初めて知った。

例えば同じ文芸部後輩の朱鷺羽みのり。文芸部に好きな人がいるから入ったとか言つていたし、それに私と嘉光を見て羨ましいとも言つていた。あと文芸部室の席のとり方は自由となつていて、いつも嘉光の近くを取つていた。本人に直接訊いてもなかなか首を縊に振つてくれないのは、少しでも私を気遣おうとしているからだろう。いい後輩だ。

本人曰く「俺には晴希の愛があれば十分だ」と言つが、如何せん私はそんなビートルズが歌いそうなものを供給した覚えはない。どうか、出来れば嘉光争奪戦を辞退したい。

まあそれでも新聞部に拉致された時には本当に怒っていたようだし、あの暴走した神城羅央という一年生から私を助けてくれたのも事実なので、感謝していいわけでもないのだが。ただこういうものは常日頃の行い、いわゆる平常点というものが大きく関わっているので、「やれば出来る子」ならばいいと言つわけでもないのだ。ほら見る、私と一緒に歩いてるってだけでこんなへラへラしている。「それがいいんだ」なんて意見もありそうだが、私はそういう判定は下さない。嘉光はマジヒストだから、多少厳しい評価をしてもいいじゃないか。

まあ、だからといって無礼を働いていいってわけでもないか。

「内藤」

「おうおう」

「もの凄い食いつきっぷりだな。そんなに私から話し掛けてもられるのが嬉しいか。

「新聞部室での件、悪かったな」

「ああ、いいのいいの。とかあの日ちやんと言つてくれたる？」
感謝する、って

「そりいえばそうだつたな」

言つて損した。

「まあ……がめついた事を言ひと」褒美は欲しいけどな

「がめついたな」

「分かつてゐるつて。まあ適当にスルーしていいから」

「アイス落としたからつて道を塞いで通行料をせしめようとするジヤイアンくらいたがめついたな」

「そんなんにか！？」

まあ、冗談はこれくらいにしておいて。

「褒美なら出来るだ。丁度いい事に」

「本当にか！？」

「ああ、ゴールデンウイークまで待つて」

「本当だな！ 本当なんだな！」

うるさいな。しかも声が裏返つてゐるぞ。

それにして、廊下で擦れ違つ奴らは私達の事をどう思つてゐるんだろうか。やはり嘉光の言つ通り「付き合つてゐる」事になつてゐるのか？ それは認めたくない事実なのだが。

そうこいつしているうちに部室が見えてきた。考え方をしていると目的地につくのも早く感じられるな。

私は、扉を開けて

「失礼しま

「晴希先輩！」

いつもと様子の違う朱鷺羽に遭遇した。

「ほー、微笑ましい光景じやねえか」

奥では惨劇と兵器を好む大曾根誠文先輩が笑つていた。

「笑つてないで事情を説明してください！」

「晴希先輩……自分の胸に訊いてみて下さいよ！」

朱鷺羽が私の腕を掴んだままそんな事を言ってくる。何だ？ 私が何かしたのか？

「さて、朱鷺羽の行動にも理由がある」
中途半端な金髪をした文芸部の「参謀」こと一宮敦次さんがポケットに手を突っ込みながら部室内を巡回し、説明を始める。まるで探偵漫画のラストにでもありそつた展開であるが、意識してやっているのだろうか。

私が椅子に座つて話を聞いたすると、嘉光がわざわざ椅子を持つてきて私の右隣に座つた。朱鷺羽は私が言い聞かせると渋々（しぶしぶ）手を離し、しかしその後椅子を持ってきて私の左隣に座つた。要するに右から嘉光、私、朱鷺羽という隊列だ。若干窮屈だなこれ。

そして朱鷺羽はこれまで私の事を「秋津先輩」と呼んでいたが、今日は「晴希先輩」だ。

朱鷺羽に何があった？ 何が朱鷺羽をこんな風にした？

まさか一宮さん……あなたが……？

「変な想像をするな、秋津」

さすがは一宮さん。地の文まで指摘してくるとは。

「これを見ろ」

一宮さんが大きなプリントを渡してきた。これは……。

「……校内新聞」

先日一悶着あつた新聞部の発行したものだった。大きく見出しが書かれているのは……。

『『二年のスター、秋津晴希の謎に迫る』……いつの間に私はスターになつたんだ？』

この校内新聞といふものはあまり見ていなかつたが、『九割の嘘と一割の偽り』は嘘じやないよつだ。

「続きを読む」

促されるままに続きを読む。

・二年のスター、秋津晴希の謎に迫る。

一年D組、秋津晴希。

自身の恋人である内藤嘉光と並び、入学当初から多くのファンを出した秋津晴希。

「はいこなんですか」

「ん？ どこがおかしいんだ？」

嘉光がいかにも何も問題ないといったように疑問を喰える。

「一年の時に一騒動あつただろう。あれで結局皮相的には付き合つてることになつたはずだ」

一富さんの一言で納得する。何があつたか一言では表せないが、とりあえずあれば大変だった。
まあいい、続きだ。

『彼女を抱きたい、もしくは抱かれたい』という意見をもつものは男子の約31%、女子の約5%を占めている。

……おい女子の5%。

「敵は全校生徒の三分の一以上……上等だ」

なぜか嘉光が唸つていた。……いや、お前はもういいよ。

今回はそんな、秋津晴希の正体に迫る！

「正体も何も普通の女子高生だなうん」

「いや、全裸でライオンキン」

「しつこい上に横から出でくるなお前は！」

似非無口キャラ、杭瀬弥葉琉が横から変な事を言つていた。

「全てはこれを見れば出てくるから。ライオンキングとかたとえ私にやましいことがなくてもその言い方は怖い。

というわけで我々は、ある方から有力な情報を得た。

……誰だ。邦崎か？　いや、本当にそれぐらいしか思いつかないんだが。

『まず秋津晴希は、文芸部の貴重な一員です。人間国宝です』

「人間国宝とまで持ち上げられてたのか私は！」

まあ拉致された時に怒り狂うどつかの誰かさんもいたがな。

『彼女は文芸部にとつて貴重な、腹黒キャラなんです』

「そして知らないうちにそんなキャラが立っていたのか！」

「じゃあ晴希が腹黒だと思う奴、手を上げてくれ！」

すると次々と手が上げられた。なに、全会一致だと！？

『あと彼氏こそいるものの、若干百合傾向があります。レズでロリゴンで胸は大きくても小さくてもどっちでも行けます。つまりは節操が無いということですが、当然彼女のそういう所も好きですね』

「誰だよ！」

「秋津、落ち着け」

くそつ、これが落ち着かずにいられるか！

「今から新聞部に行こう！　そして新聞部室の壁を奴らの血で彩つて後々『赤壁』とか言われるようにしてやるんだ！」

「……晴希先輩」

朱鷺羽に呆れられた。うん？　どこかおかしかったのか？

「さて秋津」

場を仕切る一宮さんがプリントを取り上げ、話を纏め上げるかのように言った。

「朱鷺羽の行動の真相、分かったな？」

「……はい」

認めたくないが、認めたくない」とだが、この誇れる後輩はレズだ。

「いつの好きな人は嘉光ではなく、私だつた。」
「いつが嘉光の近くに座つたのは、嘉光が私の近くにいたからだ。嘉光のことが好きかと訊いても答えないのは、好きな人が嘉光ではなかつたからだ。」

「たいした朴念仁^{ほくねんじん}だな、晴希」

「普通は気付かないだろ馬鹿！」

「それで晴希先輩……」

「あのだな朱鷺羽」

「」の後輩に真実を教えてやるしかないと言つ事だ。

「言つておくがあればデマだ。私はレズなんかじゃない、ごく一般的な女子だ」

「え……」

朱鷺羽が呆然としている。その反応は少し傷ついたぞ、うん。

「晴希、自分を卑下するな」

「……嘉光、『一般的な』の所に突つ込むのかお前は」

「というか誰も朱鷺羽に間違いを指摘しなかつたのか。心優しくない部だな。」

とりあえず、新聞部に差し止めて回収してもううだけじゃいけない。

「富さん」

「簡単な情報操作なら出来るぞ」

「頼みます」

「これで変な噂を掻き消せば後は何とかなるだりつ。」

「あと秋津」

「はい」

「さつきのプリントだが、」のを見ろ」

「嘉光についてのテーマ情報も出来れば流してください」

「承知だ」

さつきの「メント」の後に（二年男子・Y・N・）なんて書いてあつたらそれはもう反射的に依頼を追加してしまっても仕方がない事だ。一体あいつはそ知らぬ顔で何を。

後日私についての噂は收まり、代わりに『内藤嘉光は秋津晴希にしか興味が無いと思わせて実はショタコンだ』という記事が上げられたが、すぐに噂は搔き消えた。なお、その噂を耳に入れた邦崎は口から泡を吹いて倒れていた。

第十五話 戯言の交錯（後書き）

久しぶりに長い一話を書いた、そんな気がします。

第十六話 テジャヴ 閻夜のワルツ（前書き）

今回は新キャラ一人だけしか出てきません。それもアホの子です。
……それにしても、相変わらずサブタイトルと内容が噛み合わんのはたまげたなあ。

第十六話 デジャヴ 開夜のワルツ

「あーもう、暗い。可哀相なわたし」
暗い廊下をわたし、葛原水月は歩いていた。ちなみに幽靈とかはものすごく苦手だから出来れば行きたくないんだけど……。
それでも、備えあれば嬉しいなって言葉が世の中にはある。これはわたしの好きな言葉。

「ジャジャーン。携帯のライトで懐中電灯の代用ができるのよねー」

やつぱりなんだかんだ言つてわたしは賢い。皆わたしのことを見生なのに実力試験で五教化合計114点だったってバカにするけど、世の中は学力だけじゃないってことがありありと分かる。
だからそう、人間の価値は点数なんかじゃ決まらないのよー……
ごめん、失礼したかしら。

とにかく、この明かりがあれば地面から生えた手とが足首をつかもうとしてもたつたつて逃げ切れるんじやないかしら？

「うん、そこらへんの動きは何度も脳内ショミレーションしたから大丈夫よ」

携帯を手放さないようにしながら階段を上る。ここは、前から突き落とされないように用心しなきゃいけない。

「そもそもこいつ事態になつたのは……」

状況を振り返る。独り言が五月蠅い？……静かだと怖いから仕方ないじやない。

確か……そう、教室に大事な参考書を忘れていたのよ。

あれがないと、わたしは枕を高くして寝られない。世界史と物理の組み合わせが結構快適なのよ。高さ的に。

「色々試行錯誤してたけど、やつぱり世界史と物理ーーこの二つば

つかり。おかげでもう参考書もボロボロよ」「まるで受験生みたい。実際に受験生なんだけじね。

無事階段を上り、そのまま廊下を歩く。

「目的地は教室なんだけど、鍵つって必要かしら。運がよければそのまま開いてるかもしないけど」

先生がおっちょこちょいだつたりとか、泥棒が侵入した後だつたりしないかしら。あ、泥棒が来てても参考書が盗まれてたら残念ね。けど、開いてなかつた時の対策も賢明な私は考へてある。

「ジャジャーン。伸ばしたクリップがあるのよねー」

テレビとかでこれを鍵穴に入れて適当に力チャカチャしてると扉が開いた気がする。実際にやつた事は無いけど、なせばなるでしょ。

階段を降りる。万が一お化けに後ろから突き落とされたりとかしないように用心しなきゃいけない。とりあえずクリップはしまつておく。

当然、賢明な私なので無事に降り終わつた。そのまま廊下を進む。そこもやはり、闇に包まれ怪しさを出しているものの見慣れた場所だつた。つていうか……

「何度同じ場所に来ればいいのよー」

実はこの景色、何度も見てるのよね……。これで四回田へらいかしら?

これはまずい。わたしが同じところをループしているだけのよくな気がする。

しかし「」でようやく、確実な変化が訪れたことになる。

ガシャン、ガシャン

そんな足音を響かせ、その悪魔は現れた。わたしはあまりに恐ろ

しくて声を出せなかつたし、タツタツと逃げる事も出来なかつた。
そして目の前に、無機物的な体が現れた。手にはアニメとかでよく見る光る剣が。

しかし、わたしの中ではおかしさよりも恐ろしさの方が上回つて
いた。あんなビームサーべルの攻撃を喰らつて、痛いはずがないん
だから。このシユールさによつて出来るよひになつたのはせいぜい
悲鳴をあげることぐらいで。

そのまま近づいてくる。足はまだ震えたまま動かない。

「 あうふ――。 あうふ――。 」

ザクツ

見事に刺さつた。ただし
煮干しが！？
そのモビルスーツの腕に、それも

• 10 •

怖い。この目で見ている状況がシユールすぎて逆に怖い。
と、そのままわたしは誰かに抱えられて、連れ去られるはめにな
つた。

もうやだ、これ……。

第十七話 その除靈館は兵器をも繰る

気がつくとそこは、広い広い教室だった。わたしはなぜかそこで、床に倒れ伏していた。いつもの参考書がないせいで首が痛い。

「ああ、気がついたんですね」

そんな少年の声が聞こえた。どこだと思つたら 真後ろ。

「ミナックス！」

そしてわたしは、口からスワヒリ語が出でてになるほど驚いた。仕方ないじゃない、こんな狙つたような対面。

「すみませんが日本語を喋つてください」

「そんな失礼な！ 誰がスワヒリ語なんて喋つ…… といつか！」はどこ？ わたしは誰？」

さつきどうなつたかを思い出してみると確かにきなりここに運ばれた。多分例のモビルスーシからこの子が助けてくれた可能性が高いと推測できる。うん、さすがわたしの名推理ね。

「ここは、文芸部室です」

「ここが文芸部室……」

それは思つてたより広かつた。同じクラスに文芸部員つて人がいたけど、の人たちは放課後いつもこんな所にたむらしているのかしら。

「そして、あなたはどこかの言動が馬鹿っぽい人です」

「誰が馬鹿なの！？ あとわたしが誰かなんて知つてゐわよー。」

「じゃあなんで聞いたんですか？」

「……うーん」

ちゃんとこの子に説明しないと。わたしは馬鹿じゃないって。

「あなたの考へてる事は大体察しが着きますがもう手遅れだと思います」

ふふ、またそんな冗談を。ちゃんとこの子に教えてあげなこと。わたしは自分の胸に手を当てて、口くちづけた。

「頭のよせりてものはテストの点数だけじゃ決まらないのよー。」

「あ……テストの点数も悪かつたんですね？」

「なにそれ！ まるでわたしの言動が馬鹿だと言わんばかりの……」

「え……？」

「あのね、きみ一年生よね？」

なんか一年上の人に対する態度じゃなこと思つ。いくらわたしの才能が妬ましいからって。

「あなたは……三年生、ですよね？」

「なにそれ！ まるでわたしが留年した一年か一年だと言わんばかりの……」

「……ごめんなさい」

「その返しはナチュラルに傷ついた！」

「でもその……あなたの言動はこいと思こますよ。みんなに愛されそうだし。漫画やゲームに出てきそうですね」

「へへ、そう言つてもらえると……」

「え？ 漫画？ ゲーム？ フィクション？」

「盛大に馬鹿にしたわね、今！」

「気付くのが遅いです！」

むかつく。何がって、この子に悪気がなさそうながら一番。

「とりあえずわたしは馬鹿な人じゃないわ。葛原水月よ

「そうですか。僕は、葛原ト全くわいと申します」

そうやってお互に頭を下げる。こちらの方がちよつぴり深く頭を垂れていたのがなんだかむかつく。

「そう。じゃあ菅原くん、わつきの怪異について説明してくれる？」

そう聞くと、この子は人差し指を下唇に当てるて考え、言葉を発し

た。普通そんな動作をするのは女性ばかりだと思っていたけど、これも結構様になつていて利する。

「怪異と言つと、携帯電話を明かり代わりにしたことですか？」

「違う！ それは発明！ 偉大なるエジソン先生の…」

「さすがに携帯の明かりとは関係ないのでは？」

「発明王だから！ 発明王に不可能はないの…」

「……ではそういうことにしておきましょ」

「何その言い方？ まるでわたしのが聞き分けのない馬鹿みたいな言い方を……」

「では携帯電話ではないとすれば、怪異と言つるのは夜の校舎を徘徊して独り言を言つていた……」

「それもわたし！ 怪異関係ない！」

「ちょっと不気味な怪異ですね」

「余計なお世話よ！ 静かだと怖いじゃない！」

「知つてますか？ シュミレーションじゃなくヘンリーハウジング

なんですよ」

「そんなの知らないわよ！ とつあえずそんな話じゃない…」

「まあ、とりあえずこれでも飲んで落ち着いてください」

そういうて菅原くんは、飲み物の入つているペットボトルを差し出してきた。これ、なんかふかふか浮かんでるんだけど……。

「……念のために聞くけど、中身は？」

「基本的にコンセプトは蝉ですね」

「ゲゲ——ツ！」

本当に聞いといてよかつたわ。この子、一体わたしに何を飲ませるつもりなのよ…

「素数ゼミジューースですよ。海の向こうで売つてるじゃないですか？」

「聞いた事はあるけど本物の蝉は入つてなかつた気がするわよ！ こんな蝉だけのジューース……」

「安心してください。そう言つとかと思い 砂鉄も入れときました」

「ゲゲ——ツ！」

何なのよ！
そんなにたつぱり鉄分いらぬいわよ！

「なんかもう」これは化学兵器よ、化学兵器!」「

「料理を馬鹿にしないで下さい！」

「少なくともそれみが言ひ事じやないわよ。」

話を戻して。

「也」に墜嫡となふと
やせつ

また思考を始め、そして数秒後に答えを出した。

二三九

「そう言うオチだつたの！？」

怪異にわたしの

「アーティストの翻訳」を圖書化するアドバイス

で！

徒に方位磁針を配布するべきだと思ひます。

「ものすごく画期的な方策ですね。小学生に防犯ブザー配るのとまるで違うと思うんですが」

間違しなしね。この実行で確実に日本は変われるわよ！」

確かに纏わるでしょ二ね。色々な意味で上

一息ついたから、そろそろ本題に入らなきや。一応今つて夜なのよね。といふかさつきも本題に入らうとしたのに、気付くと話がそ
れてたから。

「そうよ、それよりあの連邦のモビ

ゴオオオオオオオオオ!

すると、ここで轟音。タイミングが悪いわね、もう！
すぐさま彼は窓を開けた。

「しかし、おまかせは窓を開けた。

「しかし掘まつてくださいー。」

何が起ったのか説明すると。

彼はわたしを抱きかかえて　そのまま窓から飛び降りた。
が正しければ、ここは一階だつたような……。記憶

「アーニー、アーニーは死んでる」

「敵はドアのほうから来ますからー

「二〇二〇年九月三十日」

卷之二

落下、そのまま着地し、さつきの部屋よりもっと広いグラウンドに到着した。後ろを見ると明らかに半透明のお化けのようなものが追つて来ていたけど、非常に不気味。

「あんなの映画でしか見た事ありませんでしたか」

「いや、映画でも見ないわ！」 だって苦手なんだもの！

椎茸の小さいのが密集してるのを見るだけで気を失いそうになる

「まおーは、二二ら『ご立身』しますから
わがにはかで『晴画』など見れるわけないじゃ
ない！」

「元」

菅原くんの一閃で、飛び出してきていたお化けが一匹消えた。

卷之三

「改めて自己紹介をしましょ。僕は一年生の菅原ト全。文芸部員兼コック 兼、夜のゴーストスイーパーです」

第十八話 例えエゴイズムの塊であつたび、彼は本物であることを望んだ。

「改めて自己紹介をしましょう。僕は一年生の菅原ト全。^{すがわらほくせん} 文芸部員兼コック 兼、夜のゴーストスイーパーです」

幽靈（みたいなもの）を搔き消しながら、「この子はそんなことを言つた。

……え？ コック？

「……どうして文芸部から一人も食中毒が出ないのかしら」「そんなことはどうでもいいです。まずはこの弱い悪靈たちを一掃しましよう」

そんなことを言いながら身構える菅原くん。周りを見れば、その奇妙な幽靈たちは何十匹もいた。

「いつもより多いですが、こんなこともあるつかとね。今日大安売りしてて助かりました」

そう言いながらどこからか取り出したのは……

「海苔！？」

海苔だった。

「札や掃除機なんかは高額ですからね。結局安い消耗品で済ませた方がお得なんですよ」

「掃除機にも驚いたけど、それらがないからって海苔なんて……」「大丈夫かな……これ、ものすごい大ピンチのような気がしてきたんだけど……」

「僕を信じてください」

「手元で海苔を並べてる絵面で言つ台詞かしらそれは？
とはいへ信じないよりはマシかも。というわけで結局わたしは彼を信じることにした。頼むから上手くやつて……」

「シャルウィダンス？」

そう言つて彼は、手元の海苔を連ねて鞭のようなくだれつて呼ばれるものを作り上げた。

「嘘……」

ちなみにさつき彼が何を言つたのかはよく分からない。さつとフランス語か何かでしょ。

「あ、僕と背中あわせになつてください」

「……え？」

見たいのに！ 海苔の南京玉すだれ見たいのに！

「あのお化け、背中を見せると近づいてくるんですね

「それなんてテレサ！？

「さつき弱いと言いましたが、それでもファイアーボールすら効きませんからね。気をつけてください」

「だからそれなんてテレサ！？ そしてそれ海苔で死ぬの？」

「安売りだからつて馬鹿にしないで下さい。この海苔は瀬戸内産ですから」

「知らないわよー！」

「後ろ！」

南京玉すだれがわたしのすぐ後ろにいた幽靈を貫いた。

「とにかく背中合わせになつてください！」

南京玉すだれが見たいという思いを泣く泣く殺して、言つとおりにした。さつきのもなんだか危なかつたみたいだし。

「あれに触れたら頻繁にタンスの角に小指をぶつける呪いがかかりますから」「後から聞こえてくる。

「なんて半端なの！？」

確かにすごく厄介だらうけど！

「さて、半分潰しました。場所を交替してください。もう半分を潰

します「

「分かつたわよ。」

何かもつ言われるがままに交替换する。

幽靈の破裂音をBGMに、少年は瞬く間に全てを消滅させた。

「これで、この辺りにいた幽靈は全滅しました。さて、行きましょ

う

「待って！」

どうしても言わなきゃいけないことがあつたのよ。やつ、これは
ずいぶん重要なことで……。

「？ なんですか？」

「上履きでグラウンドに出ると、裏に砂が挟まって面倒なのよね」

ものずいぶん呆れられた。それも一いつの後輩に。

というわけで玄関から入つて必死に砂を落とし、再び校舎に入る
わたしたちだつた。

「さて、行きますよ」

この子はそういうのを気にしないからしく、そのまま鞄箱を上がつ
ていつた。なんて子なんかしぃ。やつと避難訓練の時とかも同じよ
うな感じなのよねー

「さて、萩原……じゃなくて萩原くんだけ?」

「いえ、菅原です」

.....。

「あみは今日から萩原くんよ。」

「つまらないエゴイズムで人の名前を変えないで下さい 茅原さん」

「わたしは葛原！　茅原違ひー。」

「失礼、噛みました」

「なにそれ！？」

よく分からぬいけど、何かのネタなのかもしれない。

「喋つてないで行きましょう」

「先に喋ってきたのそつちよねー？」

「そつちですけど

え？　こやこや、そんなはずはないでしょ。だつてほら、振り返つてみると……

……。

「さあ行くわよー」

「もはやめりめへりめですね」

今度は一人して廊下を進む。前列が一年の子で後列がわたし。まずはこの萩　菅原くんが文芸部室の戸締りとかをしなきゃいけないらしいから、先にそこに行くことになった。

さて、じゃあちゃんと説明してもらおうかしら菅なんとかくん廊下を歩きながらわたしは話し掛けた。

「僕は菅原ですが、あなたが求めているのは何の説明ですか？」

「そうだった。菅原だつたわね。

「あの廊下に突然出てきた連邦のモビルスーツよ

「白い悪魔（仮）ですか」

え？　かつこ仮？

「それは本当の名前とかあるの？」

「だから白い悪魔（仮）ですよ」

「（仮）って何よ（仮）って！」

「業界では白い悪魔（笑）とも呼ばれます」

「 もう括弧の中身がじつのじつのより除霊業界なんてものがあった
」との方がトリビアじゃない！」

道理で札とか掃除機とか言つてたわけね。納得してしまえるわた
しはもはやおかしいんじゃないかしら。

「それにしても、頭が柔らかい方ですね。こんな話を信じられるな
んで」

「 そうかしら？ わたしはそんな……そんな……

「わたしはそんな狂牛病なんかじゃじゃないわよ！ 誰がスponジ

脳なの！？」

「 自分を卑下しすぎです！」

……それもそりね。

「 ……なんかこいつやって叫んでいたりすると、またさつきみたいな
のが出てきそうで不安なのよね」

「 大丈夫です」

そう言つて態度で彼が説明を始めた。相変わらず動搖とかをしな
さそうな、何だか腹が立つたりもする態度で。

そもそも今日は例が特別多く、それにも理由があるというじと。
その理由というのは例のメカニズムが地震のようなもので、自然
に蓄積していくから早いうちに小さな爆発を起こさせて対処して
いった方が効率的、そのため菅原くんが今日と言つ曰に多くの幽靈
を起こしたこと。

そしてさつきそれらを全て倒したこと。

あと、それより前にわたしを襲つた白い悪魔（仮）は強大な幽靈
であり、運悪くこんな時に便乗して運悪くわたしも来てしまったと
言つこと。

きてれつな話だったけど、この説明だとおかしい所が見つからな
かつた。

……まあ、どんな説でもわたしはおかしな点なんて見つけられないと。いんだけど。

「若干大変でしたが、あとは白い（仮）だけです」

「今大幅に省略したわよね！……まあいいけど。それで、わたしちが騒いでいる所に（仮）は来ないの？」

「来ませんよ。そんなことが出来ないより、釘を打つておきましたから」

「？」

「すぐに分かりますよ。……どうやく部屋に戻つてきましたね」

彼の言つとおり、開け放たれた文芸部室の明かりが見えてきた。

それにしてもね……。

「文芸部室の窓閉めと電気消すのと蝉の処分をやるのは分かつたけど

「蝉の処分はやめてください」

「蝉の処分をするのは分かつたけど、この後どうに行けばいいのよ？」

「蝉の処分はお薦めできませんが、この後僕たちは

第十九話 ラストダンジョンは曲がり道（前書き）

まさかこんな番外の番外でこんなに話数を使いつゝは……。
あ、まだ続きますとも。

第十九話 ラストダンジョンは曲がり道

いつもと同じように、わたしたちは廊下を歩いていた。

「あのや、といふで」

ちょっとした疑問を口に出す。

「（仮）を倒してからわたしの教室に行くみたいだけど、普通に考
えてわたしを教室に送つてから一人で倒しに行つた方が楽よね？」
ちなみに（仮）っていうのは菅原くんの言つ強力な幽霊「白い悪
魔（仮）」のこと。ほんと、正式名称なのになんで（仮）なんてつ
けるんだろ。

「ああ、色々理由があるんですよ」

「理由？」

（仮）に理由が？……いや、そうじゃなくてこのプロセスがどう
のいつのって話よね。

「だつてほら、あなたも見たくないですか？」
幽霊

「見たくないわよ！ お断り！」

わたしがこういつの苦手だと知つてながら……そつか分かつた。
単にわたしが怖がるのを見たいからこそこういつ道程なのね？
「冗談ですよ。ただちょっと喋る相手が欲しかつただけで」

「そう……」

わたしが独り言を言つていたのと同じような理由でね……。

確かにこんな仕事なんて校内に複数いる方がおかしいだろうし、
この子はずつと一人で戦つてたわけね。そりや寂しくなるわよね。
けど

「わたしは本当にお化けとかが苦手なの。さつき壱つたでしょ？
ホラー映画とかも見たことないって。だから」

「後輩を気にかけてくれる先輩は、優しくて知的だと思います」

「 まあ行きましょう。手を取り合って、いざ決戦の地に……」

わたしは「こう見えて知的なのよ。人間の価値は点数なんかじゃ決まらないわ、行動よ。そう、行動が全て！」

「……扱いやすい人ですね」

「ん？ なに？」

今菅原くんが何かつぶやいていた気がする。

「何か聞こえましたか？ きっと空耳ですよ」

「そうよね、空耳よね。

「ああ、気は進まないけどわいつと行くわよー。」

「……本当に」

空耳まで聞こえてくるなんて、夜の校舎つて思つた以上に怖いわね……。

「僕、仕事柄から言つて夜行性になるじゃないですか」

ふと菅原くんが、そんなことを言いだした。まあわたしとしても静かだと怖いし、会話で場をやわらげてくれるのは嬉しいし、ここは適当に相槌を打つて話を進めてこいつかな。

「うん、それで？」

「おかげで毎晩は半分寝てるようなもので、『お前はよく分からんなんて言われたりするんですよ』

「うんうん、今は夜だけどそれでもよく分からぬよ」

だからおかしいのは絶対眠氣から来てるわけじゃないこと思つ。

「まあ昼間でも料理とかしてる時は冴えますけど」

「その時が一番おかしいんじゃないかな？」

結局、この子は眠つてる時が一番普通なんじゃないかしら？ どんな生物でも同じだとは思つたけど。

「夜の校舎で独り言を言つようつぱいこと思つてます」

「最悪ね！」

「知つてますか？ シュミレーションじやなくてシミュレーション

なんですよ

「知ってるわよー。」

「冗談ですよ。話題ならたくさんあります」

「じゃあ何が出してもよ」

そう言つてやると、彼は口を開

「.....」

かなかつた。

「え！？ ネタ切れた！？」

「ＺＺＺ.....」

「寝た！？」

「ああ、ちゃんとありますよ。むにゅ むにゅ」

「むにゅ むにゅのところがわざとひしきるー 絶対寝言とかじやないわよね！？」

もう、あるならあるつて普通に言つてくれればいいの。意地が悪い。

「モンスターハンターでもしましょー」

「なにその謎展開！？ どこからそんな発想が出てくるのー？」

忘れ物を取るために学校に来て、何でそんなことをー？

「だつて僕らはお化けハンターじゃないですか」

「どうして複数形！？ わたしは除霊とかしないわよー。」

「じゃあモンスターハンターですか？」

「それでもない！ わたしは犬や猫を殺して三味線の皮にしたりするゲームなんてしないの！」

生き物の死体なんて見たくないわよー バイオハザードじやあるまいし！

「犬や猫……？ 三味線の皮……？ すみません、モンスターハンターって知つてますか？」

「ふ、ふん、知つてるわよー！」

実際知らないけど。……でも、わたしの演技力なら誤魔化せる！
さあ見なさい！わたしの力を！

「あの……あれでしょ？ モンスターを、あーしてこうしてハンテ
イングしてウレシイナーツてやつ！」

「…………」

ああっ、後輩に確実に白い目で見られてる…

「まあいいです。モンハンは『冗談です』」

「そうよね、『冗談よね』。

じゃあ『冗談じゃなくて、いつこいつ時にネタになるものとこつたら

…………

「もしかして……怪談とかじやー…？」

「階段？ 階段ならわっつき下りましたけど」

「そうじやない！ 怪談つて怖い話のほうよー。」

「ああ

一応納得してくれたみたい。まつたく、なんて古典的なギャグ…

「…………それで、怪談とかじやないわよね？」

わたしがそう言つと、菅原くんは振り向き、邪氣のなさそうな笑
顔を見せた。そして、前を向いて言葉を紡ぐ。

「…………これは僕が初めて靈に出会つたときの話なんですね」

「きや——————！ いや——————！」

もう嫌だこの子…

そして目的地の体育館。ここに最初にわたしを襲つた幽靈　『

(仮)』がいるとか。

「さて、そんなこんなで到着しましたが……」

「そんなこんなじやないわよー。わたしがどれだけ甚大な被害を受けたか！」

あれからずつとずつと怪談を聞かされつづけた。邪氣のない顔で

邪氣たっぷりのことを言つてくるのがすぐ辛かつた。まったくもう、ダチョウ俱楽部じゃないんだから！

「ハリウッドの映画」

一 ど、言、う、か、何、？

「……何度も同じ景色を見ませんでしたか？」

-
h?
L

一見会話が成立していないよう見えるけど、なんとなく書いた

いことが分かった気がする。

「おれか……？」

「想像にお任せします」

一九四九年五月一日

二〇〇回

今日は参考書があつても、さすがに眠れそうにないかも……。

第一十話 全力の魂は決して呪われない（前書き）

はい……」こんな出来で、すんません……。

第一十話 全力の魂は決して呪われない

「さて、行きましょ~」

除靈師の菅原ト全くんが精悍な顔つきでわたしの方を見た。その瞳からは確かに「覚悟を決めた」という意思が見える。

「やつとここまで来たけど、本当に長い道のりだつたわね……」

わたしはついそんな言葉を垂れ流してしまう。

確かにここまで長かった。時には道に迷い、何度も同じ所を回りもがき、時には大きく道を外れた。

けどそれも、もうすぐ終わる。

そんなわたしの思いを汲み取ってくれたのか、菅原くんもわたしのほうを見て頷いてくれた。

「この向こうに、やつがいる。やつはわたしの大切なものをことごとく奪つていった。

わたしたちは、悲しみの連鎖を断ち切らなきやいけない。悲劇は終わらせなきやいけない。

確かにやつを倒しても失つたものは戻つてこない。だからこそわたしたちは何も失っちゃいけないんだ。

絶対に、負けるわけにはいかない。

しかし

「ぐつ……！」

「どうしたの菅原くん！？」

突然菅原くんが苦しみだした。

「まさか四天王がこんな厄介な呪印を残していくとは……油断しました……」

どうやらさつき戦つた四天王の呪印が、彼の体を蝕んでいるらしい。現に彼の顔が少し青く見える。

「菅原くん！？ 大丈夫！？」

「難しいかもしませんが……せつかくここまでいたのです……全力を尽くすしかないでしょ？」

「そんな！？ ジヤあ今すぐ戻つて」

「いえ……それより葛原さん……いいですか？……これだけは覚えておいてください……魔法の言葉です……から……ぐふつ！」

床に血の赤が花弁^{はなひら}を散らせた。

「菅原くん！」

「大丈夫です」と言いたそうな辛^{くさ}そうな笑みを浮かべて彼は足を重く引きずりながら、わたしの耳のほうに口を寄せ、じゅうじゅうした。

「うへらへめへしゃへ」

そしてわたしは、恐ろしさのあまり悲鳴を上げた。

「まつたく、最悪ですね」

そして彼がそんなことを言つ。当然異変など何もないといった様子で。

勿論わたしにとっては、そんなことを反省する気なんてない。それどころか

「最悪なのはそっちよ！ 耳もとでそんなことを言わないで！」

「言わなきや駄目^{ダメ}じゃないですか。そうでなきや面白^{面白} やつが倒せませんから」

「今面白くなかったー？」

「多分この子、わたしを玩具か何かと間違ってるんだわ……。

「面白いやつが倒せませんですから」

「むりやり繋げた！？」

確かに見た目がモビルスーツで正式名称が『白い悪魔（仮）』なんて面白いといえば面白いけど！

「大体四天王つてなによ！ いつ出てきたの！？」

「いましたよ。道が長いから忘れたんじゃないですか？」

「道が長いのはきみがわざわざわたしをもてあそぶためにわざわざ先導して同じ所をぐるぐるぐる回ってたから！」

「ギャルゲーにだつてごまんとあるじゃないですか。ループなんてそんな風に彼は肩をすくめて言ひ。それはやけにさまになつていただけど

「ごまかさないで！ あとその例えが分からない！」

「だから成績が悪いわけです」

「成績は関係ないわよ！」

それに何度も言つけど、人間の価値は成績じや決まらないもの！

「知つてますか？ シュミレーションなんて言葉はないんですよ」

「そんなの耳にタコが出来るほど聞いたから！ シミュレーションでしょ！」

怪談の合間にも聞かされたくらいだし！ だからもうそのネタやめてくれないかしら！ 馬鹿じやないんだしさ！

「よく知つてましたね。努力すれば成績も上がると思します」

「なにその上から田線！？」

「成績といえば……そうですね、扉を開けましょう。（仮）が待つていてますから」

「もう流れが破綻してる！？」

なんて話題転換がシャープなの！？

……とまあ、わたしが何かを言ひ前に彼は扉を開けてた。

そういえば説明してなかつたことがあつたけど、彼が（仮）に最初に突き刺した煮干しの効果によつて、（仮）は体育館という場所に縛り付けられる暗示にかかっているらしく、それが煮干しの効果

だとか何とか。ちなみにわたしは煮干しにそんな効果があるなんて18年間の生涯で一度も聞いたことがなかった。

「ところでどうして鍵なんて持つてたの？ 依頼人みたいな人がいて受け取つてるとか？」

「惜しいですね」

「じゃあどういう？」

学校にそう言つ説明をしてるとか？ そういうえば宿直の人とかいないけど。

「学校に許可を取るのもいいですが面倒なので先輩が偶然にも持つていた合鍵を貰いました」

「全然惜しくない！ あとさうっと犯罪行為！？」

そういうえばクラスにも犯罪じゃないかつて思えることしてるのはいるけど……っていうかそれ文芸部員だつた！

「菅……」

「どいててください！」

突然突き飛ばされた。そして光る刀の一閃とそれを止める音が聞こえた。

田を凝らすと、暗闇の中に（仮）がいたらしいと言う事が分かった。あの白いボディからすぐわかる。見間違える方がおかしい。で、ビームサーベルを止めたのはなんなの？ まさか素手とかじやあるまいし。

「この『魔剣ノーブ・オブ・カジキ』の前にはそんなものただの光る棒です！」

カジキマグロの鼻！？ 確かにあれギザギザしてるけど！ だけど！ く……つっこみたいけどへたに出て彼が集中力切らせたら元も子もないしあれでも本気かもしれないしなんかもうなにがなんやらさつぱりでわたしとしてはどうすればいいのか分からずただこうやってループの中に身を任せて菅原くんのわざわざわざわざ言つてくれたおぞましい怪談の諸々を思い出して吐き気を覚えるしかないつていうのはすごくなれなことであれがああなつて……はつ、頭が

錯乱してた！？

ああ……つっこみたい……。

「そんなことが分からないからシユミコ レーションの事をシユミレー
ションなんて言つたりするんです！ あと蟬の良さが分からん
です！」

しばらく殺陣たてを続けた末、そんなキメ台詞（？）とともに悪靈・
(仮)を真つ二つにした。その間、なんと三十秒！

……けど今のセリフのそれわたしだよね！？ 悪靈関係ないよね
！？ あと蟬は大体の人が分からんと思つんだけど！
そしてもう一つ！

「こんなにあつさり終わつて、これまでのあの長い長い道のりはな
んだつたのよ！」

力の限り叫んだ。それはもう全力と書いてマジで。

第一十一話 戦には終わるか（漫畫也）

みやめへだり。みやめへざひへざひです。

第一十一話 戦いは終わらず

菅原くんの一閃（カジキマグロの鼻）が、（仮）を両断した。勝負は僅か三十秒。

いや……！ れは虚しゆせぬ。

「無駄な回り道ばかりしてたけど、これでようやく終わり、わた
しは大事な大事な参考書を持つて帰つて終つておけ？」

もう本当に疲れた。早く家に帰って、世界史と物理を枕に敷いて眠りたい。

「え、そういう風でないですか？」

まさかと思って体育館の闇の中を見やる。そこには、なんと三本の足と二つの頭を持つた人間がいた。どうせあれも幽霊なんだうけど……。

一
ノ
モ
ト
ル
一
ノ
モ
ト
ル

まさか、『煉獄兄弟』までいると思ふ。

「大丈夫です」
「また変なのが出て来た！」
「どうか見てくれる」「怖いんだけど！」

そう言つて彼は、煉獄兄弟とやらに向かつて走り出した。

ズバババババツ！

纏めて一閃。この間、なんと十五秒！

「だからやんなあつやつ終わるなり難しぃやつな顔をするのせやめて
」

!

「まさか……この上、『天魔六芒星』まで！？」

更に奥を見ると、翼を生やした六人の人間
いや、幽霊がいた。

「よかつた……これはまだ怖くなこ……」

「見た目だけで判断しないで下さこー……あいつは

「

ズバババババッバ！

「とても強いですかー。」

「とか言つて五秒で倒してるけどー!?」

まあ、いざれにせよ、これでよしやく

「あれは……『冥皇神』ー?」「

「もういいわよー!」

話はそこから劇的な展開をする。

何があつたのやら、田を覚ませばそこは教室、わたしは自分の机で寝ていたみたい。

まさかの夢オチがなんて思つたけど、上履きの裏がぞりぞりしてると思つたら砂が挟まつてたから、そんなことはないと思う。もし

かしたら「夢じやないけど夢だつた」なのかも知れないけどね。

昨夜のことはよく覚えちゃいないけど、とりあえず彼が何らかの術でわたしをここに寝かせるという不親切極まりないことをして、せつかくわたしが怖い怖い夜の校舎に入り込んだといつ苦労を不意にしてくれたのは確か。

だから、放課後わたしは文芸部室に行つて、彼に責任を取つてもらわなきゃならない。

……ところで、文芸部室つてどーだっけ？ まあいいが。
わたしは立ち止まり、叫ぶ。

「荻原くんの馬鹿あ！ 何してくれてんのよー！」

叫んだ後、歩き出そうとして机に引っかかり、わたしは派手に転んだ。

周りの田?……もういいもん、わたしは諦めが早いから……。

第一十一話 戦いは終わるか（後書き）

杭瀬「とにかくで、『』を読みありがとうございます。白龍閣下の次回作に『』期待下さい」

晴希「待て。話を終わらすな」

杭瀬「確かに晴希の気持ちは分かるけど。今回こんな短い話を書くくらいだったら余白で全裸になりたいっていう気持ちは」

晴希「だから待て。初見の人にはわたしのおかしなイメージを与えてくれ」

杭瀬「そして、次回からは通常巡業で晴希が脱ぎます」

晴希「それも嘘だ。お前はそんなにこの小説を消されたいか」

第一十一話 悪意と悪夢の結晶（前書き）

と言うわけで作者の大好きな杭瀬回です。

第一十一話 悪意と悪夢の結晶

朝、教室までの長い廊下を歩く。

今日はやけに早く目を覚ました。しかし当然だが私こと秋津晴希は基本的に消極的自由を振りかざすつまらない若人であり、感想など「爽やかな朝だ……」の代わりに「わざわざ起きていなきゃならないのか。面倒臭い」などといったところだ。

いや、それでも爽やかといえば爽やかな朝のかもしない。今日は早く登校したおかげで内藤嘉光に絡まれなかつたからだ。

そんな朝の爽快さを噛み締め、教室の扉を開く。さすがに某文芸部とは違ひ黒板消しは落下してこなかつた。

しかしやはり、こんな朝に来ても暇だつた。よく会話するのは邦崎綾女にさきあやめだつたが、あいつは比較的朝が遅い。例に漏れず今日もいなかつた。

さあどうする。私自身は有名らしいが私が知つてるやつなんてクラスに……。

「…………」

いた。文芸部で意味不明の本を読んでいるあれだ。ただあれは駄目だ。

「こんにちは」

「…………おひ、こんにちは」

向こうから来たよ、もう。しかしクラスメイトがこの似非無口キヤラえせむくわこと杭瀬弥葉琉を見て「こいつ誰なんだ」的な視線を向けてきているのはどう言つことだ。地味どころかクラスメイトに存在の認識すらされていないのかこいつは。

まあ大丈夫なはずだ。あの以外にも口数の多い杭瀬弥葉琉はあくまで部室での姿。教室でのこいつは無口キヤラだ。そいつが何故向こうから話し掛けってきたのかなんて知らんが。

「今日は早いね」

「そうだな。早く起きられた」

適当にそう返しておく。こいつは私の苦手な人物リストに入つてから適当にスルーしておくことに。ちなみにその苦手リストには最近レズだと判明した朱鷺羽みのりが追加された。

「こんな朝だと口数が多くなる気がする」

なんて事だ。嫌な予感がする。

「すまない。お前と話す事なんてないんだ」

「そんな……家で全裸になつてゐるときの感想とか欲しかつたのに……」

「だからいちいち私に変なキャラを『えようとするな』

「仕方ないからあれでも……」

そう言つて杭瀬は自分の机に戻つていつた。あれつて何だ? 一体何なんだ?

「これ。私の書いていた恋愛小説」

……それかよ。あの『爪が割れても死がない方法』とか『撲殺用マグカップ論』とかの本で得た知識を活用して書いたと言つ幻の恋愛小説かよ。

「感想を貰いたいの」

感想も何も、現時点ではオオスの予感しかしないんだが。

「読んで」

「……」

仕方ないな。なんだかんだと訊かれたら答えてあげるが世の情け。これで杭瀬ルートに入つたら全力で後戻りしなければならないが、まあこいつはレズではないので過度な心配は必要ないだろう。さて、

読むか。

「……すまん、一行目からあからさまな悪意が感じ取れるんだが」「こんにちは。私は文芸部の秋津春姫。はるき顔立ちのせいでたまに男子に間違えられたりするけど、心は恋する乙女のつもりなの。

「…………すまん、一行目からあからさまな悪意が感じ取れるんだが」

「気のせいに決まってる。目の錯覚でそう見えるだけ」

「馬鹿言え」

「馬鹿じゃない。気のせいに決まってるから。確定的に絶対なんだその言い回しは。」

出合いは一年生の頃。

「文芸部室に行きたいのかい？」

私が迷っていると、突然横からそんな声が聞こえた。だからそっちのほうを見ると、そこには私と同じ一年生の男の人がいた。その人はものすごくカッコよくて、それでいて愛想がよかつた。とりあえず、まあ、なんていうか、見た途端に全身に電流が走ったような、それでいて温かみもあるような感情に襲われた。

それが私、秋津晴希の初恋だった。

「……うん」

「おう、ちなみに俺は内藤義晃。よしあき俺も文芸部に入るつもりなんだ。よろしくな

「うん！」

「……保健室に行つていいか？」

「何？ タミフルが欲しいの？」

「違う。民馬タミフル鹿じやない。寧ろ馬鹿むしはお前だ」

誰だよ内藤義晃って。悪意バリバリだよこの似非無口キャラ。

「違うの。これは言うなれば光の屈折」

「屈折してるのはお前の心だよなあ！」

「とりあえず読みなさい、晴希」

「おいつの間に上から目線になつた」
寧ろ最初からかもしれないがな。

「あつあの、義晃！」

「ん？ どうした？ 愛の告白かい？」

「そ、それが……」

何でこんなときだけ義晃は鋭いの？それになんで私は首を縦に振
れないの？もう、馬鹿！

「なんてな。冗談だよ」

そう……つて、いつは冗談じやないのにー。私は本当にあなた
のことが……

「…………」

「…………」

反吐へどが出だすだが、まだ大丈夫だ。堪こらえられる。

「義晃！」

「ん？まだ話があつたか？」

私は覺悟を決めた。もう大丈夫、言つてやる！

「私は本気で、あなたのことが」

「ああ先輩！」「何やつてんですか！早く行きましょううよ、
部室に！」

「う、うん……」

「ここで残念な事に後輩が来て、わたしの手を引いていった。ああ
もう、どうしてこんなにタイミングが悪いのー？」

「…………後輩、よくやつた」

非常にグッジョブだ。寝覚めの悪い展開でなくてよかつた。

「そう？私はこの後輩大嫌い」

「だと思つたよ」

どうせこいつはネタに特化している義晃×春姫が本命なんて言つ
に決まつてゐからな。

「さて続き」

「読みたくない！」

「読んで。それが晴希の存在する理由」

「私の価値はやけに低いんだな」

とまあこんな風に話は続いていつたが、途中から変なシーンばかり出てきたりした。何がどう変かと聞えば全てが変で、例えばリモコンのネジを買いに行く時に寄ったメイドカフェにテロリストが乱入してきたと思つたら頭にパンストを被つた『トランプ脂肪酸仮面』に助けられたりする。あとは邪惡な魔王とか言つ明らかに高校生の領分じやない敵が現れた時に偶然予備校で習つていた必殺技『洗濯バサミライオンアタック』によつて一瞬の内に封印したり。名（『迷』と言つた方がいいかもしない）台詞と思われるものには「女子高生の絶対領域はアニメの作画より大切なんだ」などなど。そして、ようやく……だ。

「ここまでか

「その通り。まだ未完だから……ところで晴希、非常に疲れているように見えるのは私だけ？」

「ああ、非常に疲れたよ。お前のせいでな」

「失礼な。人を何だと思ってるの？」

「知り合いと同姓同名のキャラで妄想小説書く奴が言えた事かよ」あれで凄いプレッシャーが掛かつたんだぞ。だが安心しろ杭瀬、私はお前を非常に厄介な奴だと高く評価してるぞ。

「とりあえず第一にキャラの名前を教えてくれ

「嫌。やめて」

やめてはこっちだ。こんなの部誌なんかに載せられたら、即座に終了のお知らせだらう。

「私にはネーミングセンスが無いから」

「五月蠅い、自分を卑下するな。私達には無限の可能性がある」

おまえの持つその無限の可能性のおかげで今私は苦悩しているんだから。

「何なら戦場ヶ原とかでもいい

「それは大きくアウト」

「それもそうだな」

となると……それでもまあ適当につけていけばいいんじゃないかな
と思うんだが。私は。

「やっぱり開き直つて春姫と義晃しかない」

「開き直りすぎだ。やめなさい」

「やめない」

「やめろって。警察呼ぶぞ」

と、こんなやり取りを私達はまた暫く続けていたんだが、それも酷い形で終焉を迎えるに至った。

さて、それがどういう終わり方かといつと。

「おはよう晴希……ところでこれは？」

邦崎綾女の登場である。あまりに杭瀬の相手に夢中になつていて氣付かなかつた。

そしてその隙が災いし、杭瀬の小説を隠す事も叶わなかつた。

「晴希……いや、秋津さん……これは本当に……？」

「待て邦崎、全力で避けようとするな。これは私が書いたんじゃない」

「そう？　じゃあ他に誰が？」

「杭瀬が……待て杭瀬、頼むからそのステルスを発動させないでくれな！」

こんな時だけ影を潜める似非無口キャラなんて大嫌いだ。

「秋津さん……妄想の友達まで……！？」

「妄想じゃないだろ！　てか同じクラスにいたよなおい！？」

「私つて親友もいたのに……もういやつ！」

そう言葉を吐いて邦崎は教室から出て行つた。全く事情を知らなりやつらの視線が痛い。

「女の子泣かしちゃつた」

「私は何もやっちゃいないけどな、杭瀬」

またあいつの誤解を解かなきやいけないわけか。友情云々じゃなくて私のイメージが非常に心配だ。

しかし、本当に親友なら意味不明な勘違いをする事もないんじゃ

ないだれつかと戻つたが、さうだらう。

第一二三話 黄金週間は輝かない

ここ董城高校には様々な部活があるがその殆どが文化部であつて、その傾向は「運動部は生徒達の心の中にのみ存在する」などというフレーズが誕生するほど極端なものだった。

その文化部の中でも特に有名なのがかの『文芸部』であり、三年の大曾根誠文や一宮敦次がその代表であるが、一年の内藤嘉光、そして秋津晴希の二名も少なからず影響していた。

そこで、先日新聞部が秋津晴希を誘拐すると言う事件が起こった。それに対し文芸部は内藤嘉光らを送り込み晴希を奪還したが、その時に奪還部隊の神城羅央が暴走。結果的に新聞部と文芸部との同盟が出来上がったものの新聞部員数名が怪我をし、設備は壊れ、部長仁科由宇の指と爪の隙間には粘土が詰められた。幸い部員は骨折までには至らず設備の損傷も一割ほど、そして部長は実際無傷だったが。

ちなみにその犯人である神城はその後「修行に出る」と言つて姿を消した。

そして、ようやく新聞部の設備が回復したといった具合である。だが新聞部にとつて話はこれで終わりではなかつた。

最終的に同盟を結んだとは言え「文芸部に大敗した」という事実は揺るがず、その事実が新聞部の株を大きく下げていつた。よつて力を取り戻すために、ここで一つ大きなネタを出す必要があつたのだ。

「と言つわけで、手助けをして頂きたいのですよ」

「はあ……」

今日は文芸部室に来た所で、普段見ない人物がいた。眼鏡をかけ

た三年生の女生徒だ。

だが私はこの人物を知っていた。というか忘れるわけがない。この間私を誘拐していった新聞部の部長、仁科由宇さんだ。

どうも新聞部のネタが欲しくてこちらにSOSを求めてきたようだが、そんな面白おかしい話もない。単におかしい話なら佃煮にするほどあるが、殆どが自虐ネタなので勘弁してほしい。

「とりあえず他の方にも協力を仰ぎたいのですが、まだ来ていませんから」

「ですね」

実を言うとまだ放課後ではなかった。私のクラスは六時間目の教師が休んでいて、そのせいで授業が五時間目で終わりだつたからだ。仁科さんのクラスも同じようなものだつたらしいがやはり、皆考える事は「折角早めに授業が終わつたんだから遊びに行きたい」といつたようなもので、こうやつて律儀に部室に顔を出したりしているのは私や似非無口キャラの杭瀬弥葉琉くせみはるくらいのものだつた。

「それはそうと、ちょっと言つておきたい事があるんですがね」

「はい？ 何か？」

「この人には心辺りつてものがないのだろうか。

「先日の学校新聞。あれはないと思います」

あれは下手をすると基本的人権すら守れていないんじゃなかろうか。銃刀法違反やプライバシーの権利無視の私達が言つても説得力は皆無だが。

「あれですか……いいお礼になるとと思ったんですけどね……」

「仁科さんが額に手を当て言つ。いや、そつちからするとお礼だつたのか……そうとは夢にも思わなかつた。

「あのネタのおかげで新聞部の地位が失墜しつついするのは避けられましたが、まだ全快には至つていないんですね……」

知つた事じやない……と言いたいが、前向きに考えればあれで後輩（）の好意にも気付けた事になるんだよな。うん、こういう時は合理化だ。自分を納得させよう。あの取れなかつた葡萄ぶどうはきっと

不味かつたんだ。

と、ここでドアが

「あら、どうしたのよ新聞部の人！」

開かず、しかしそのまま外見だけ清楚な天森小枝さんが部室に入ってきた。

「天森さん……」

「ああ、先日の事件の時に我が部に来た人ですね……」

ドアではなく、二階の窓から

『何故無意味に窓から！？』

私たちが疑問を発したのは同時だった。しかしなんかもう、まるでアーセナルギアの天狗兵みたいだ。

「ああ、別に十足じやないわよ！」

そういう問題じやないとと思う。無礼とか迷惑とかじやなくて、ただ単純に意味不明なんだ。人の行動に意味を求めちゃ駄目か？……駄目なんだろ？な、少なくともこの部においては。

「それで新聞部の、えーと……ニシンさん？」

そんな間違いは普通しない。たつた一文字で響きが大きく変わつてくるじやないか。

「仁科です」

「そうそう仁科さん！　どうしてここに来たのよ？」

「かくかぐじかじかです」

仁科さんが端的に述べる。いや、漫画じやあるまいしその説明は説明にならないはずだが……。

「ああなるほど、前の争いで新聞部の人気が落ちたから頑張つてネタを集めなきやいけないって事ね？」

天森さんは化け物だな。まさしく化物語ばけものがたりだ。怪異だ。

「だったら、いい話があるわ！」

「ほう」

天森さんは私の方に視線を動かした。

「ハルちゃん、忘れたとは言わせないわよ？」

まずい、あれか……。

まずは私の口から言わせたいようなので、仕方なく口を開く。

「例の、内藤との……」

「嘉光君との?」

くそ、天森さんはその続きを私に言わせるつもりか。とは言え、逆らうわけにも行かない。それが例え有り余った身体能力で一階の窓から部室に侵入してくるような人であれ、先輩は先輩なのだから。

「……デートですね」

「よろしい！」

あの内藤嘉光との、デートだった。一部の女子なら歓喜のあまり死ぬかもしれないが、私は別の意味で死にそうだ。ああ、『ゴールデンウイークが待ち遠しくない。

第一二三話 黄金週間は輝かない（後書き）

> .+6020 - 948 <

というわけで（どうこうつけだ）、シャーペンでさうと晴希を描いてみました。

実はこのペジアルはずつと前から決まっていたり。ではでは。

第一十四話 内藤嘉光の出陣

まさかこんな事態になるとは、俺こと一宮敦次も思つてはいなかつた。

天森小枝が秋津に何を言つたかは知らないが、おそらくは新聞部室で何かがあつたのだろう。秋津はああ見えて上からの圧力に弱い人間だ。どうせ天森小枝はそこにつけ込んで無理矢理話をつけたわけだ。

しかし、相変わらず行動の読めない女だ。もしかしたら新聞部の損害は奴が狙つて生んだものかもしれないというのに。

「来たみたいですよ、参謀先輩」

同じ場所にいた小柄の後輩、朱鷺羽みのりがそんなことを言つ。彼女は女子ながら秋津に好意を寄せているが、だからといってこの流れを阻止する勇気もないのだろう。結果、その選択肢は見物のみ。どうせ動かないなら見る必要がないのではないかといつ声もあつたが、その意見を「私は逃げません」と断ち切つた。

そして物陰から見ると、今確かに秋津と内藤の合流した所だつた。カメラを秋津に持たせてある他に周囲からの監視も行つてゐるし、それでも見失うなどの事がないように無断で発信機を付けてある。準備は万全。

そして忘れてはいけないのが、後輩への忠告だ。

「俺は参謀じゃない」

後輩への指導は先輩としての義務だ。錯乱した内藤によつて俺は部室内で謎の呼称を付けられた。誠文も爆笑していたが、やはりあの事件は小さいようで大きかつたのかもしれない。

ああそんな話が合つたなあだるいなあ、このまま時が進まなければいいのにループしてしまえばいいのに、いやループしたらあいつ

とずつといなればならないからそれも考え方だな、いつそ目が覚めたらゴールデンウイークになつたりしないだろうか、それで「ゴールデンウイークオワツチヤツタネ、エヘヘ」なんて路線だとまだ許せるのに、何とかならないかな主人公クオリティみたいな発揮出来ないかな

そんな妄想が通用するはずもなく主人公補正がプラスに働く事もなく無情にも日は経過し、ついにゴールデンウイークに突入した。私の日頃の行いが悪かつたんだろうか？

当然といえば当然の事だ。悲しい事があれば雨が降り、怪しい事があれば暗雲が立ち込め、嬉しい事があれば快晴になるなんて法則は所詮空想の產物なのである。

合流地点である公園はもうすぐだ。そこであいつが待っているはず。

しかしある嘉光とのデートなんて、天森さんも面倒な交換条件を出してくれたものだ。というかあれって私が責められる義理なかつたよな？ 交換条件も何もただの脅迫じやないか。

ああくそだるい。けどすっぽかしたら首が飛びそうだ。

大体何なんだ文芸部。人のデート見て楽しむとか、お前らに妬みという感情はないのか？

ちなみに私は現在カメラ装備（天森さん指定）、衣服は適当なジーパンにジャケット。お前それ女子高生の恰好じゃないだろだのやつぱり本物だなどと野次が飛んで来そうな気もするが、これは私の教育を兄に委託するという意味不明な我が家の方針に由来する。おかげでまともに女物の服がない。親消極的すぎだろ。そして兄積極的すぎだろ。

「おう晴希！ こっちだこっち！」

そして到着、私の歩む先には嘉光がいた。おい大声出すな。少しは周りの目つてものを考える。

待ちに待つたこの日がやつてきた。この内藤嘉光、今日とこう今
日が晴れ舞台に立ります。

知らせを聞いたのは一週間前。部員達が俺と晴希がデートするな
んて根も葉もない噂が流れてるなんて思つたりしたら、まもなく
晴希の口から誘いの言葉が来た。

ああ、さすがに俺も夢かと思つたさ。けど頬ほおをつねつてみても普
通に痛いんだなこれが。それでも信じられなくて毎日毎日つねつて
それでも痛くて、気付けば右だけ赤くなつてた。

まあそんなわけで、俺はちゃんとこれは事実だと受け止めること
にする。あんまり疑つて逃げられたら敵かなわないしな。きっとこんな
ことになつたのも日頃の行いがよかつたからさ。

おつと、相手がついに來たようだ。

秋津晴希。俺の彼女、というか嫁。今日は制服ではなく、適当に
ジーパンやジャケットを重ね合わせた格好だ。やっぱ私服姿もいい
もんだな。ああ、可愛い。けどシャイな俺の口からそんなことは言
えっこないのが残念だ。

「おう晴希！ こつちだこつちー！」

シャイな俺は、こんな風に緊張してあまり声が出せない。ああも
う、折角のデートだつてのに。

……といひでどうして晴希はカメラなんか構えてるんだ？

第一一十五話 やして僕らは式場へ……。（前書き）

紛らわしいサブタイトルだ（苦笑）

第一十五話 そして僕らは式場へ……。

「待たせたな」

「いいのいいの」

晴希はまるで憮然とした表情だった。自分で誘つておきながらその様子がおかしくて、俺はつい笑つてしまつた。そしたら晴希は更に不機嫌そうな表情をした。

それは照れか、あるいは……いや、そういう考えはよそい。折角の晴希の厚意、俺が楽しまなくて誰が楽しめばいいんだと。一人で戸惑つて、それで幸せが逃げていつてしまつちゃたまんないもんな。

「……俺たちが楽しむんだろ？」

内藤の面白に、陰から本人に聽こえないうつに言つてやつた。

「参謀先輩、どうかしましたか？」

「いや、こちらの話だ」

どうやら心中ためらつてゐるようだった。内藤はああ見えて細かい人間で、本能に任せた暴走などそれこそ秋津の身に危険が及んだ時ぐらいのものだ。

「しかし参謀先輩も素直じやありませんよね」

案外物好きですね、と朱鷺羽が言つ。俺は、

「俺もまだ一人の学生だ。物好きで何が悪い」と返しておいた。

「そうだ。内藤、似合つてるぞ」

一つの礼儀のような感じで晴希。別にそんなこと言わなくともいいのに、変なところで堅いんだよなこいつ。まあそういうところも含めて俺は晴希のことが好きなんだけども。

「おつかれ、ありがとな」

「そんなわけで、じゃあな」

晴希は別れを告げると、その言葉どおり立ち去つていった……つて待て！ 僕適当にファッショノ誉めてもらつただけじゃん！ くそつ、まだ「腹が減つたな。どうかで食べるか」「晴希、今日はボクが弁当を作つてきたんだヨ」とか「晴希、あーん」「あーん。もぐもぐ、『じっくん』とかの甘い展開がないのに……あいつ、本格的にツンツンしゃがつて！ 幸せが逃げてつたらどうするんだよ！ ああもう！」

「晴希！ その格好似合つてるぞー。」

俺は追いかけながら、立ち去りうとする晴希の背中に向かつて声をかける。

「こんな適当な男子高校生みたいな格好誉められて嬉しい女子高生がいると思つた！？」

「じゃあ似合つてないぞ！」

「失礼な奴だな！」

じゃあ何て言えばいいんだよ。ああ、爺には女心がわかりのうござりまする。

……いや、考えるんだ！ こいつは時のベストワード！ とにかくそのまま晴希を帰らせちゃいけない、何だかそんな気がするんだ！ こまま放つておいたら何ががループしそうな、そんな気がする！

すぐさま俺は脳内Yahooの知恵袋にアクセス、そしてベストアンサーを弾き出す！ ここの間およそ0.0048056秒（体感）！

「晴希！ 今日は（パンツの色が）ライトブルーなんだな！」

「どういうスキルで見たんだよ！ わたしジー・パンだぞ！？」

いかん、更に晴希の歩幅が広くなつた。だが俺は負けないつ！

「昨日はバックにせんとくんがプリントされてる奴だつたな！」

「…………」

おかげり、晴希。

「大嘘つくな！」当地にも売っちゃいないぞそんなもん！」

「はは、晴希はパンツが好きなんだな。この可愛いやつめー！」

晴希は田を細め、呆れたように言葉を繰り出す。

「……三つ言つておひづ。まずパンツの話を切り出したのはお前でありわたしは何も喋つちゃいない。次にわたしたちを見る子供たちの目が非常に辛い。そしてパンツ好きと言つのがプラス評価になる理由がわたしにはさつぱりわからない」

ああ、的確すぎる突つ込みだよそれは……。

「晴希先輩に対しあの引き止め方、…… わすがですね、内藤先輩は私も見習いたい所です」

「……いや、見習つな」

「ヒーリング、どこ行くんだ？」

晴希は「お前は考えなくていい」なんてことを言つていたから俺は下調べとか全然していらないんだけれども。

「とりあえずは…… 式場だな

「うわ大胆」

そのあまりの心ある計画つぶりに涙が出た。やつぱりなんだかんだ言いながら晴希は俺のことを

「何言つてんだ？ わたしが言つたのは葬式場そうしきじょうのことだが」

「葬式場！？」

なんてこつた。というかそれ葬儀場つて言つだろ普通。

「そこで黒い車の数でも数えていればいい」

「すつげえうつ鬱うつだ！」

学生のやねー」ととは思えない。いやむしろ学生じゃなくてもありえないと思つ。

「何言つてゐる。お前も小学生の頃やつたことがあるだろ? 一田に

黄色い車を三つ見つけたらハッピー、赤い車を三つ見つけたらアン

ハッピーといつ

「……晴希、お前はこのトートをビデオしたいんだ?」

「……そんなこと、わたしの口から言わせる気か?」

ちゃんと楽しみたいんだよな? そつだよな?

「ちなみに、その後はどう?」

恐る恐る訊いてみる。

「ああ、汚水処理場の見学……と言つたのを考えた」

「何故! ?」

俺の晴希がそんなマニアックな趣味を持つてゐると言つた話は聞いたことがない。これはつまり……?

「わたしも一度嘉光よしあきが微生物と共に沈殿槽で泳ぐ姿を見てみたい

「やつぱりかああつ!」

やつぱりそういう企みですか! お前つて奴はもつ!

「ついでにゴミとして沈殿してテトラポットにでもなつてくれれば清々すがすが」

「…………」

だが断る

「今物凄く悩んだよな! ?」

いや、まあ晴希の頼みならいこかもつて一瞬だけ思つただけさ。やつぱり無理だけど。

「とこうわけでさようなら

「ちょっと待て! 葬儀場は! ? 汚水処理場は! ?」

「一人で見学して來い!」

「晴希! 新聞部に攫われた日のパンツは確かに『カブトボーグ』の

だつたな!」

「だから思いつきり嘘を交えるな! お前とはもういい加減

さようなら、と晴希が言おうとしたであらうその時。

轟音おとおんと共に、遠くにあつた木が 火を吹いて垂直上昇していく

た。

「……と思つたが続けよつじやないか。そのデートとやらを」

冷や汗を搔きながら晴希が言つ。というか今の晴希は漫画なら確実に顔に縦線が何本も入つてことだらう。

「それじや……行きますか！」

「デート開始！俺たちの戦いはまだまだこれからだあ！」

「誠文^{まさふみ}、公園の木に変な兵器を取り付けるのはよしてくれ」つい先ほどのロケットの犯人に忠告を促す。

「何言つてんだ。効果はあつたじやねえか。晴^{はる}の後押し^{はの}が出来た」

「それはそうだがな……あの子供を見ろ。呆然としたままあれから身動き一つしていないう」

「確かに。まあ大命には犠牲つてもんがつきもんだろ」

言葉でいうほど大して格好よくはないがな。

「先輩、私たちも移動しましょうよ」

「それもそうだな」

朱鷺羽の言う通り、秋津の後を追うことにした。

「……秋津に伝えるべき言伝があつたな」

そう思い俺は、隠れて移動しながらも懐から携帯電話を取り出した。

第一十六話 鍵、セーラー服、王道展開

胸ポケットを調べる

偶然にも保健室の鍵が入っていたりするかもしれない

謎のメール。そして……入っていた。保健室の鍵が。

「余計にも程があるだろっ！」

「ん？ どうした晴希？」

「何でもない！」

くそ、これは間違いなく一宮さんの仕業だな？ 何が「偶然にも」だよあんちくしよう！

生憎保健室で痛みと快樂を伴つはじめてのアレをするつもりはないんだ。しかしこれ、どう処理すればいいんだ？

迷った末に私は、鍵を再び胸ポケットに戻す事にした。

ああ、ちなみに。カメラだが流石に身体能力に著しい弱みのある私が持つと手首を骨折しかねないので嘉光に持つてもらつた。……というかこれ、必要あるのか？ これで録画してようがしてまいが一宮さんの事だから周囲から盗撮とか……。

「…………晴のへタレめ」誠文は、舌打ちしていた。ただただ、舌打ちしていた。「俺らのありがてえバックアップがあるってんのに何もしねえで、それでも男か！」

「晴希先輩……」反対に朱鷺羽は、安堵していた。ただただ、安堵していた。「よかつた……晴希先輩が決して欲望に流されないような人間で……」

公園で誠文の仕掛けた脅迫が効いたのか、晴希がこのデータを放り出す気配は一向に見られなかつた。最初は葬儀場だ汚水処理場だと言つていたがそれを実行する気にもなれなかつたらしく、実際に

そんな場所に行こうとする様子も見られない。

更に先ほどの秋津の推測だが、まったくもって鋭い。その通りであり、この光景も現在進行形で多方面から撮影されている。さて、内藤たちはどこへ行くか……。

「どこも糞もない。大体何が悲しくてこんな奴とデートしなきゃならんのだ。」

「……」という疑問はさつきから何度も何度も繰り返されているわけで、私はすっかり参っていた。

「毒を食らわば皿まで……か」

「俺毒呼ばわり！」

嘉光が驚いていたが、まあ今更なので突っ込まないでおこう。それより そう、やるなら徹底的にだ。といつても保健室などに行って一人で甘酸っぱい というより濃硫酸ぱりに酸味のある時間 を過ごす気などはさらさらしない。そんなのは秋津春姫さん（恋する乙女）に任せておけばいい。私は私だ。

「内藤、折角だから一緒にきて欲しいんだが」

「しかしデートの王道……なのかね？ 女の買い物に付き合つて」「違うだろ。王道はテーマパークとか、あとは海とかだな。なんなら墓地でもいい」

「いやあ……墓地は出来れば勘弁して欲しい」

晴希が言つには「わたしの服を買うからついて来い」と。それで二人してデパートへレッツゴー。もしかしたらこんな感じのラブコメ臭を俺は待つてたのかもしれない。そう感慨深く思つてみたりもする。

積極的なアプローチのあまり俺は涙が出たよ。ああなんだかんだ言つて俺は信頼されてんじゃん、とね。台詞では『内藤』なんて呼

んでるけど心中では『嘉光』なんて呼んでるんだ。きっとそうだ。
「……そつ言えば気になつてたんだが、晴希は家に文物の服がないのか？」

「馬鹿言え。三桁行つてゐぞ」

「嘘だ」

「……ああ、嘘だ」

本当だつたらそんな適当な男子高校生みたいな格好で来ないだろうからな。特に反抗したがる晴希の性格なら。

というか晴希は、そこで意地を張る必要があつたのか？ 本当に可愛い奴だ。

思い出したことでもあつたのか、晴希は更に説明を続けてくれる。

「兄が酷い奴ひどいでな」

「え？ お義兄さんいにしへがいたのか！？」

「その言い方やめる。……まあそいつが酷い奴で、実の妹たるわたしのことを男呼ばわりだ」

「酷いなあそりや。じゃあ本人に会つたら俺が晴希を女にしたつて言つとくよ」

「絶対に言つな。とりあえず我慢して息を止めろ。いやむしろ息の根を止めてる」

……なんだつてんだよ。俺なりに出来る事をしようと思つたのに。言つとくけど俺、大好きなことならメチャクチャ頑張れるぞ？

そういうしていいる内に売り場に到着。うわ、今まで気付かなかつたけど女性用の服売り場つてこんな異世界的な空氣なんだな。なんか張り詰めてる感じ。これが慣れの違いなのだろうか。

「お帰りなさ……いらっしゃいます。」「主……お密さま」
同じように困惑気味の晴希に店員さんが話しかけてくれた。
……ですが、これがプロの対応か。きちんとしている。

きちんとしているはずなのに、晴希は更に困惑していた。え
？ どうして？

「嫌な……予感がする……」

晴希の額に縦線。しかしそれを気にした様子もなく、店員さんば、

「ああ行きましょ。お客様」

そう言つて晴希の手を掴み、更衣室に連れて行つた。

「ああなるほど、俺は暫く待つてると。そういうことか」

しかし女性服売り場でデジカメ構えてるつて、通報されないか：

…?

数十分後のことである。息を切らせて更衣室から飛び出してきた……というか涙田で逃げ出してきた晴希はなぜか、ワザとらしいカラフルなセーラー服を身に纏っていた。俺はとりあえず録画しついた。

第一十六話 鍵、セーラー服、王道展開（後書き）

わあ、「」の波乱な「」トは、「」の波乱な「」トは「」なるやう。

……実は見切り発車で書いてます。どうごめんなれ（苦笑）

第一一十七話 ラヴァーズ・ムービー

時間も時間と言ひ事で、昼食タイム。学生の懐に優しい、少し安めのカフェにて。

「あの売り場は……魔窟まくつだ……」

息も絶え絶えになりながら女性服売り場から逃げ出してきた私は、一応ながら嘉光よしあきに対しそんな警告を促しておいた。

とにかく、あの場所は地獄だ。パンデモニウムだ。

「何が起きたんだ？」

何も知らない嘉光がそんな事を訊いてくるが、今の私にそんな事を言わせようとするのは残酷すぎるのではないか。

まず序の口にメイド服を着せられた。そして反論したらチャイナ服、更に反論したら というループの末まさかのクイーンズブレイドのコスプレをさせられそうになつたところで、私は命からがら逃げ延びた。

ああ、ちなみに今は大丈夫だ。嘉光が元のジーンズやらを取り戻してきてくれたので、とりあえずトイレで着替えておいた。

「別の所でもあたるか？」

と、ストローでガラガラと音を立てて氷だけのコップから水を吸おうとする嘉光。おい汚い真似はよせ。

「いや」

と私は

「まさかって話だが、別の場所をあたつても同じ事になりそうな気がする。とりあえず洋服店は暫くトラウマになりそうだ」

「そうか……じゃあ晴希、気分転換に映画でも見にいくか？」

なるほど王道。ここで嫌だといつたら……消されそうだ。嘉光ではなく、主に天森あまもりさん辺りに。仕方ないから了承しておくとしよう。じいつとゆっくりネチネチ楽しむくらいなら死んだ方がマシだと言いたいが、やはり私も命は惜しい。ござ言つとなると躊躇われ

る。

先ほどは秋津^{あきつ}が必死そうだった。もしかしたら悪い事をしてしまつたのかもしれない。

しかし、いいか悪いかなどつまるといひどつでもいいことだ。

このように店員を買収してあるようなことをやせるのが、俺たちの役目だから。

「俺さ、本当に嬉しいんだ。お前がこんな風に誘つてくれて」「映画館への道を横並びに歩く。途中嘉光が三度に渡りカメラを持たない方の手で私と手を繋いづしてきただが、私もそれを三度に渡り阻止した。

「分かつてる」

先ほどの嘉光の台詞には、そつ返事をしておいた。冷たいと思うかもしれないが、実際はこの反応のしよう、無視するよりは幾分良心的だとは思わないだろうか？

ああ、嘉光の気持ちも分かつてゐる。言い訳がましいが、今の返事だつて何の考え方なしに言つてるわけじゃない。

確かに嘉光の私への好意は凄い。それは前の新聞部との一軒で大いに理解している。こんな奴におかしくなるほど變されているのは邦崎辺りからいつか嫉妬^{しつと}で呪い殺されそつだが、しかし問題はそれだけじやない。単純に、重いわけだ。

こんな言い方もなんだが、私は一度、嘉光を好きになつた事がある。黒歴史もいいところだが、まあ黒歴史といつもの自体人間の背中を押すために存在するものである。だから赤裸々（せきらら）な過去というのも悪くない。なんて戯言^{ぎげん}も言つてみる。

まあそんなこんなで、免疫^{あんめき}が出来上がつてしまつたわけだ。

これでどれだけ愛されようが、盲目になることなど出来やしない。

ただでさえ私達には波風が立つてゐるのだから、そりや付き合えと言われても無理な話だ。ああ、当然命が懸かつてゐるなら例外だがな。何が言いたいのかと言つと、これはデートじゃないんだ。デートとは認めない。ただ一人で成り行きにより買い物に行つたり映画を見に行つたりするだけだ。なんだかデートっぽくなるのも偶然だきつと。

「ありがとな、晴希」

「うるさい」

見に覚えのない礼を言つ嘉光は、なんだか本当にしつづいたかった。ほら笑うなお前。

「ほらほら映画館だ。テンションが上がつてきた！　君の勢い感じる！　熱い気持ち伝わつてくる！」

「映画館が一体お前の何を刺激したんだよ！」「まづいな。嘉光が精神疾患に侵されている可能性がある。

嘉光が見たいといった映画は、やはりと言つたところか恋愛映画だつた。

席に座る。流石にここまで撮影してゐるのは確實に法律に違反するであろうため、カメラの電源は切つてゐる。

私の左の席にいるのは嘉光。油断すると手を触れられそうなため私は迂闊に左手が出せない。そして右隣にいるのは

「……晴希？」

「……なんて偶然だよ」

私のクラスメイトかつ自称ライバルの邦崎綾女^{あやめ}だった。

「よかつた。お前に頼みたい事がある」

そして私は邦崎に、互いにとつて有益な提案を出した。

現在、私の左隣の席には邦崎がいる。
どういう事だつて？ 簡単な話だ。席を交換しただけの事。
それにもしても冷静に見てみると席の左の方が凄い。嘉光は隣にい

る人物に気付かないまま邦崎の手に触れていて、それに対し邦崎は緊張による熱のあまりドライアイスのように昇華しょうかしてしまいそうだった。

ちなみに、私の左隣には

「……どうしてお前までいるんだよ」

「……なんて偶然」

「いや、お前の場合は故意だろ？が

見た目は無口系、中身は野次馬の文芸部員、杭瀬弥葉琉くせみはるがいた。

第一十八話 フィナーレのハンドテロップ

恋人たちが手を繋いでいる幸せそうな姿がスクリーンに映つてゐる。そして左方を眺めれば幸せそうな御一方。とりあえず嘉光には眞実を伝えないようにしよう。嘉光が邦崎の好意に気付いたら気付いたで私の肩の荷も一グラムほど降りそうだが。

「……杭瀬」

そうやって最近の若者らしからぬ多忙な自分に氣を配りつつ、私は右隣の席に座る似非無口キャラに声を掛けた。

「お前がここにいるって事は、やっぱり一宮さんたちもいるのか？」
その言葉に、杭瀬はそ知らぬ顔で頭上にクエスチョンマークを浮かべた。

「とほけるな。お前の無口キャラなんて私には通用せんぞ」

「……晴希」

「何だ」

「……これからあの一人、やるの？ やらないの？」

私ではなく、私の横の一人でもなく、スクリーンの方を見ながら訊いてくる杭瀬。

「実に斬新な誤魔化しだな。お前の興味はそんなところにあるのか」「そんなわけない。晴希じゃないんだから」

「私にもそんな趣味はない」

いつものように降りかかる杭瀬の妄言に呆れながらも、そう返事をしておぐ。スクリーンの中の男女は唇を重ね合わせていた。

「……ここからベッドに入るのかも」

「やっぱり興味津々じゃないかお前」

これを最後に、暫く私と杭瀬との対話は途切れた。下手に声を出して嘉光に感付かれると面倒なことになる。

「」の後、映画ではスイーツ（笑）が乳縹り合つてゐる所に破壊神

が舞い降り、ホームレスのおじさんが破壊神を倒す方法を探すために体に風船を巻きつけ偏西風に乗つて旅に出るという展開をし、最後の最後に「続編出します！」というメッセージで観客を半分呆れさせ半分昂ぶらせた。杭瀬が「おおっ！」といったような様子だったのにはもう何も言わないでおこう。私の優しさだ。

ちなみに嘉光には奇跡的にもバレなかつた。手が重なり合わない一瞬の隙を突いて邦崎を外してその後私が入る、そうやって席を再び交換したのだ。その後嘉光は鈍感にも邦崎と杭瀬を見て「おうお前ら、偶然だな」と言つていたのには全員呆れざるをえなかつたが。

「晴希先輩、思い切つたことをしますね」

朱鷺羽が感心したように呟く。確かに親友を身代わりにするなど、まともな発想ではなかつた。いや、普通に思いつきはしても、実行などしないものだ。

「さて、時間帯から言えばもうすぐデートも終わるはずだ」「どうやら秋津の方は、デートだと認めたくはないらしいが。

「んじゃ、そろそろフィナーレのエンドテロップってか？」

誠文が嬉しそうに訊いてくる。

誠文の言つことは当然だ。だがその前に俺の予測の範囲外だつたイレギュラー、あの秋津の級友をどうにかして排除しなければならない。

私と嘉光と邦崎、その三人で映画館を出た。ちなみに杭瀬はいつの間にか消えていた。

「内藤、私の首の方に手を回すな

」

そう言いながら変態の手を払いのける。

「家に帰った後入念に洗う必要があるじゃないか」

首周りは結構洗いづらいんだぞ。ふざけんな。お前は暫く落ち込

んでいる。ほら見ろ、さつきから沈黙している邦崎にも睨まれて
じゃないか……睨まれてるのは私もだが。

なんて思い私がこれから基本的人権について纏めて嘉光に説こう
とした所で。

「ああ、なるほど」

何故か納得したと。

「晴希はツンだなあ」

「これが本性だ馬鹿」

といふかやつぱりそつちか。

確かに綾女も見てるしな」

「いや、確かにそれはそれで合ってるんだがな……仕方ないな。邦
崎、もうこいつに本当の事言つてやれ」

さつきまで黙っていた邦崎に声を掛けてやる。

「え……そ、それはまだ！」

このへタしめ。少しほざつたたいほど噛み付いてくる嘉光を見習
え。

「ん? 何の話だ?」

「黙つてろ部外者」

「いや、俺への話つてさつき言つたよな!?」

部外者である嘉光を尻目に、私達は話を続ける事にする。

「そんな……私が内藤君の事をどうこうだなんて!」

「ん? おれがどうしたつて?」

「黙れ内藤。お前は部外者だ」

「だから今明らかに俺の名前出たよな!? 何だこれ、苛めか!?」

「苛めじやない、ただ苛んでいるだけだ」

「漢字で書くと同じだろ!」

「ねえ喚きつづける嘉光。仕方ないな。そんなに卑屈な態度を取つてく
れるなら渋々(しぶしぶ)言つてやうつか。」

「……分かつたよ内藤。いいか? こいつはお前の事を

と、私が言い掛けた所で。

「

「悪いぜえええええ！」

「おいてめえら、見せつけてんじやねえよウン」「マシにウン」「ハラシ

チ。死ね。爪割れて死ね」

「兄貴？ 見せてやります？」

「おう、先月ドライアイスでうっかり火傷したこの黄金の右腕を解
き放つ時が来るとはな」

絵に描いたような不良（？）の方々が、降臨なさった。

第一十九話 三輪車に君は何を思ふ

「待つてくれ、ここは……なんだ、ええと兄貴が出る幕じゃねえだろ」

「いや、悪いが、ええど、とりあえず適当に俺自ら頑張るぞ」
何だか物凄く不自然な絡み方をしてきた不良……かどうか分からぬ人たち。

とりあえず、ここは一つ鎌をかけておくか。

「あー、とりあえず訊きたい事があるんだが」

「おうよ、冷蔵庫の上手な収納法から玉子を片手で割るコツまで何でも答えてやるうじやねえのウンゴビッチ」

……いや、そんなお得な家庭情報はいらない。といつかやつぱりこいつら全然不良じやないだろ。

『董城高校の、大曾根さんと一宮さんって、知つてます?』

『…………』

おや? やつぱり黙つた。

「ん? どうしてそんな事を訊くんだ晴希は?」

「嘉光のアホめ。ドクター・ペッパーの飲みすぎで脳が溶けたか?」

少しは自分で考える力を持て

私がそう言うと嘉光が落ち込んでしまつた。そんな嘉光に邦崎は

「大丈夫?」と声を掛けている。

そして例の不良達といえば。

「そ、そんな誠文さんなんて聞いた事すらないなあ! はつはつは、
そうだよな!」

「と、当然だ兄貴! 僕たちやその敦次さんなんて人も知らないんだなああばばばばばばばば!」

……図星だ。完璧に図星だ。てか私はあの一人の下の名前を言つ

た覚えはない。

それであの御一方、私達にどういづコアクションを取れと? サ
っぱり意図が分からないぞ。

仕方ない。こういう困った場合の選択肢は。

「とりあえず私は帰」

と、ここで視界の隅には火を噴いて暴走する無人の三輪車。

「ううと思つたが歩きで疲れて足が棒になつてしまつたな。まあ逃
げられないどうするか」

それが似非不良君達の仕業でないことはすぐに把握した。だつて
あいつら顔が真っ青なんだもん。

口は災いの元。下手なことを言つと大曾根さんにあの三輪車みた
いにされるかもしれない。

「そ、そうだ! おい貴様!」

こちらに震える指を向けて声を絞り出す不良君(の振りをした奴)
。何だか哀れに思えてくるので、とりあえず応じておいた。という
か私もよくもまあ「うう」自体にもかかわらずこんな冷静に分析で
きるものだ。

「どうした」

「お、お前じやねえよ! 女の方だ!」

なんだ、邦崎のことか。あいつに用があるのか? といつか

「私も女だよ!」

「……あん!? てめえ何だその口の利き方は」

なんて理不尽な怒り方なんだそれは。とりあえず悔しいから難癖なんくせ
つけたつて所か。

「俺らにそんな口の利き方していいとでも思つてんのか?」

「いやそりや……思つてません、はい」

迷つた末に謝罪。大きく出すざる必要はない。何せ「ひらは」マイ
キングより弱いのだ。

「まあいいけどさ……」つちも「めんなさい」

結局いかよ。そして素直に謝つたし。おい、完璧に素すが出て

るや、なんて言つてやりたい。

「……と、とりあえずあんたを呼んだんじゃないんだ姐さん。おい
そこの娘！」

そう言つて邦崎を手招きする不良君（の振りをした奴）。といひで自分でも知らない間に姐さんにまで昇格してしまつたんだがどういう事だ。

「私を……じうする気……？」

声を絞り出す邦崎。やはり火炎三輪車に驚いたのか……いや、思い込みが激しいこいつの事だからまだ本物の不良だと思つてゐるかもしけないし、単にこいつらに怯えているのか？

そして、そんな邦崎の様子に威勢を取り戻す不良君達（の振りをした奴ら）

「ふつ、話はこっちに来てからだ」

「痛いようにはしねえからよ」

まだ迷う邦崎。似非不良と似非親友の対面だ。いや、それで私はどうすると？

「姐さんは向こうに行つてる……いえ、行つて下さー！」

そんな私の思考を読んだかのように呼びかけてくる。……つて、おい。

「だからなぜいきなりそんな扱いなんだ！？」

まずいな。邦崎にまたあらぬ誤解を受けてしまつたかもしけない。あいつ自身は本気のつもりだからこいつらとしては非常に辛い。

と。

「俺がいつドクター・ペッパー好きキャラになつたんだよ！」

嘉光が叫んでいた。

「……馬鹿が目覚めたか」

「いつも思つんだが晴希は最近俺に対する態度が酷すぎると思つんだ！」

「氣のせいだ氣のせい」

それはきっと杭瀬の言つ、光の屈折とくものだろ？。

「いやこの前晴希俺からの電話舌打ちして切ったよな！？」

「それは多分電波が悪かったんだ。きっと平行世界にいたからだろうな」

「晴希、ひょっとして怒ってるのか？」

「さあ、どうだろ？ かね。私は何も答えやしない。」

「とりあえずさつさと似非不良君達の言いなりになつて嘉光を邦崎から離そう。さつさとテーートを終わらせればそこでおさらばだ。」

「行くぞ内藤。ないとうどこへかは知らんが」

「場から立ち去りながらそう言つ。これに対し嘉光は。

「それはここから俺のHスコートといつ解釈でいいのか？」

「違う。」

「……内藤、脳の健康のためにも炭酸飲料の少しくらいは控えろよ」

「だから俺はそんなキャラじゃないし炭酸飲料で脳は溶けないから！」

「なんて奴だ。折角人のアドバイスを跳ね除けるなんて、こいつの体に人の血かよが通つているとは思えない。」

「ところで、邦崎は何をしているんだろうか。悪い人達に絡まれた後果たしてどうなったんだか。」

第二十話 一時終点

イレギュラー分子であつた邦崎綾女は偽の不良から内藤の写真を渡すことで処理した。なお、その写真の例を挙げると「風呂上がりの内藤嘉光」「寝起きの内藤嘉光」「寝起きの内藤嘉光その2」など。おそらくは嬉々(きき)として帰つていったであろう。「しつかしあいつら、めちゃくちや晴にばれてんじゃねえか。あれならまだ大根の方がマシだぜ」

そして先の対邦崎綾女用部隊の無能さに誠文は呆れていた。

「あれは大曾根先輩が途中で変に脅かしたのも問題だつたと思います」

朱鷺羽はそう反論を述べる。結局こいつも逸る気持ちを抑えて忍耐強くここまで来ていた。無駄な根性にしてはよくやつたものだ。「何言つてんだ、あのままじゃ晴も家に帰つてた。こんな面白……先輩としての義務を果たすためなら木の一本や一本、チャリの一台や一台の犠牲はあつても仕方ねえだろ。むしろあれよ」「本当に大曾根先輩は……どう思いますか? 参謀先輩」「だから参謀ではないと言つていい……」

思えばこんな呼び名がついたのも些細なきつかけだつた。人の噂も七十五日。たかが一ヵ月半なら上等だが、しかしこちらが僅かながらだが弱みを握(にぎ)られているというのは厄介だ。

「んで敦次(あつし)、この後なんか考えでもあんのか?」

誠文があるだろというように聞いてくるが、実際ない。

「ん? 考えてなかつたのか?」

「馬鹿言え。俺はあえて何も仕掛けないとにしただけだ」何も考えてなかつたから、あえてだ。

姐さん、小娘の説得、完了しましたb

「こんなメールが来ていた。さつきのあの似非不良からなんだろうが、如何せん私は他人にメアドを教えた記憶がない。どうせ嘉光の時と同じなんだろうな。プライバシーとかそう言つたものを悉く跳ね除ける一富さんの所業なんだろ?」

「そうだ、京都に行こう」

馬鹿嘉光の提案。だがそんなものに釣られる氣はさらへらない。

「黙れ、お前一人で地獄へ行け」

こんな感じで返しておけば万事オッケーだ。基本、対嘉光用コミニケーションは罵倒に始まり罵倒に終わる。ソースはこれまでの経験論だ。ベーコンさんは偉大だな。

「いや、冗談無しで尻切れ蜻蛉つてのはちょっとな……」

「尻切れ蜻蛉、良いんじやないか? 一部の価値観の偏つてる人なら多分風情があるとでも言つてくれるさ」

「じゃあ晴希、お前の行きたがつてた
葬儀場か? 別に行きたくなどないが」

「じゃあどこへ行けばいいんだよ!」

まあ確かに嘉光の言つ通りか。終わらせるなりきつちり終わらせないとな。区切りのよさは大事だ。

「なら、学校でも行くか」

文芸部室にでも行つてみるか。そこでも適当にメールにしてしまえばいい。

「保健室か? 誰かが偶然にも鍵持つてたりしないだろ? な
んてな。つておい、そこはすぐ突つ込んでくれつて!」
すまない。お前の勘の鋭さについ呆れてしまつた。

しかし冗談じやない。確かに私は貧弱だが保健室で休む必要もな
いし、ましてやデート以上の事をする気などまつさうだ。

「とりあえず、行くぞ」

「そんじゃ、保健室へレッツラゴー!」

「もういいお前は帰れ」

「ええ！？ ちょっと待……だから無視するなよ…」

こうして、私達は文芸部室に赴いた。

文芸部室は、なぜか鍵が開いていた。また一畠さんが事態を想定しての事かもしない。

ちなみに扉は先に嘉光に開けさせた。その時黒板消しが嘉光の頭に直撃してくれればありがたかったが、やはり今日も黒板消しはなかつた。

「……というわけでこれが大まかなあらすじです、仁科さん」

机に座つて空調でくつろいでいる新聞部部長にカメラを渡す。

「おう由宇さん由宇さん つていつの間にいた！？」

嘉光は驚愕きょうがくしていた。いやしかし、それを私に訊きかれてもだな…

…。

「仁科さん、なぜここに？」

嘉光の疑問をそのまま仁科さんに伝える。普通新聞部が勝手に文芸部室に入るなんて事はしたくても出来やしないはずなんだがどうした事か。

その質問に仁科さんはあははと笑い、それからゴホンと咳払いをし、改まって説明をした。

「この方が案内してくれたのですよ」

と、上からいきなり女生徒が降つてきた。そいつは誰かつて？そんな登場のしかたをするのは、私は一人しか知らない。ちなみにそのもう一人は新聞部の扉を蹴破けやぶる召喚獸しょうかんじゆなのだが、まあその話は良いだろう。

「や、ハルちゃんに嘉光くん、お疲れさん！」

それは、三年の天森小枝あまもりこえさんだつた。

隣で嘉光があまりの意味不明な展開に困惑しているようだが、そんなことは知つた事じゃない。

結局の所、私達は今日一日先輩方の手の平で踊おどらされていただけ

なのかもしない。唯一抵抗できたと言えるのは映画館での邦崎との邂逅かいこうくらいだ。

ああくそ、だるい。さつさと私は寝たい。

そう言えば保健室の鍵があつたんだつたな。折角だからベッドでも拝借はいしゃくしていくか？

「ん？」晴希、もう帰るのか？

「……ああ」

やっぱり帰ろう。せめて嘉光のいない世界で眠ろう。

私は、そう思った。

第三十話 一時終点（後書き）

えー、ちょっと聞いてくださいよ奥さん。

データとか実際どんなのか俺知らんんですよ。

あと最近の俺は妄想力に欠けてる気がしてならんんですよ。
んでぶっちゃけ微妙なんですよ。

つか会話部分だけやけにはつきり書ける自分はもうあれなんですよあれ。

つーわけで（どんなわけかなどと言う苦情は一切受け付けておりません。あしからず）、地球の皆、おらにネタを分けてくれ。後生だから。俺はその間保健室のベッドで寝てるから。つん。

第三十一話 茜色革命（前書き）

新章スタート！　しかし終わりが見えねえ！

第三十一話 茜色革命

「こちらスネーク、時は朝礼前、とある事情によつて結界のようないつの張り詰めた教室からは席を外し、階段付近に移動。

それでもまだ感じられる何者かの視線についてはもついい。この視線が消える日が来るとすれば、おそらくそれはこの騒動が収まるか私が転校するか、そのどちらかだ。妥協の末に開き直り。カルシウムを取つてゐる私、秋津晴希はあくまで寛容なのだ。

壁に背中を預けて、さあ話そつじやないか。こいつに対しこちらから会話を始めるつてのは少し気が進まない所もあるが。

「どうしてあんなつまらん事でわざわざこんな事になんだろうな。

……一般的な一学生が体験すべき事じやないだろ。常識的に考えて。……ああ、あと昨日は帰つてきたそばから一体どうしたなんて親に訊かれたぞ。き説明も面倒だつたし、どうせこんなスチャラ力な説明しても狼少年みたく冗談と取られて流されるだろ? からもう何もないと言つといたが」

「…………

話の相手はそれに対し、無言でこちらを見ている。

ちなみに誤解されそうだが、母親が私みたいな中性顔だつたりすることはない。かといつて私は父親似でもないのだけれど。そして兄に似ていふとも言い難い。遺伝子学の奇跡だな。迷惑な奇跡だ。

いや、話を戻そう。声を掛けてきた理由としては、私の顔色が相当悪かつたのかいつもより溜め息が深かつたのか。多分その二沢。お母様、貴女の勘は鋭いですね。今の私はややこしくて頭皮を搔きむしゃりたくなっていますよ。

とりあえず悩みの種があり、おかげで今時の若者らしく心が健やかでない。死にはしないだろうが、禿げるのは避けたい。私女だし。「本当にくだらん理由だよ。人間つてそこまで根に持てるのかね。しかし嘉光も、あんだけ人をネタにするつてのはどうなんだか」

「…………」

それでも話し相手は無言を貫いている。……今唯一頼りにできる奴がこれだもんな。ストレスも相乗効果で溜まつていく。不快指数も高まつていく。

「とりあえずだな、邦崎すらどつか行つてしまい使い物にならないんだ。これはお前にしか頼れないって事だ。」

「…………」「……だから喋れ、杭瀬」

話し相手、杭瀬弥葉琉みはるはそれでも喋らない。喋つた所でまともな事を言うかは分からんから、これでいいのかもしないけどな。それでも私が一人で喋つている痛い人に見えると言つテメリットは余りある。

さて、読者諸君にそろそろ事情を説明しておくべきかもしない。実は、内藤嘉光ないとうよしあきと私と文芸部と、その繋がりが断ち切られてしまった。

「ああくそ、内藤はいてもいなくても迷惑だ本当に」

「…………ツンデレ」

「ちょっと黙つていようかそここの杭瀬さん」

やつぱりこいつは黙つていてよかつたかもしれない。だれがツンデレだ。私はそんなキャラを確立した覚えなど一切ない。

「…………しかし、嫌な事件だったな」

私はあの時の事を思い出す。嘘のように短かつた、あの「ゴールデンウイークが明けた日の事を。

第二十一話 夕田はいさなこも駆しかつた（前書き）

更新遅れました！ すんません！

第三十一話 夕田はこんなにも脳しかつた

何がゴールデンウイークだ、などと思つ事が人々ある。

私は眠りこけている生徒達を眺めながら授業を終え、今から部室に向かう所だつた。

長期休暇とは言え所詮数日、皆何の変わりも無かつた。変わつている物があつたとすれば、それは最初からおかしいと言つ意味で変わつている物だらう。文芸部とか。いわば「昆虫の不完全変態」の「変態」と「きやあ、こんの変態！」脳漿^{のうじょう}ぶちまけて死にさりせりや！の「変態」のような違ひだ。

さて、それはそつと、何がゴールデンウイークだ、といつ話だつたな。

実際はその長期休暇に便乗して家族旅行などに赴く人々も少なからずいるが、プライベートでは所詮そんな充実した生活を送つていない（ただし部活では充実とかのレベルじゃない）私は文芸部・新聞部による強制^{よし}データで嘉光とのいらんフラグを立て、そして邦崎にあらぬ誤解を受けたまま残りの休みを過ごした。

ああ、分かつてゐるさ。悪いのはゴールデンウイークじゃないことぐらいは。

本当に悪いのは私と、私を取り巻く環境だつた。くそつたれめ。まあ誰が悪いのかはさておき、私のゴールデンウイークは非常に退屈なものだつた。平凡な日常にこそ価値があるなんて嘘だな。ちなみにだからといってこの混沌とした学園生活の方がましとは言がたい。寧ろこつちには負の価値があるよう思えてならない。

ちなみに今年は秋にシルバーウィークなんでもあるらしい。ああ、退屈だ。死ね。氏ねじやなくて死ね。

私達が今いるのは過去でも未来でもなく今？ うん、それは正論だ。私も賛同する。

というわけで、これからまたじっくりと時間を掛けて邦崎の誤解

を解いていかなければならないわけだ。

まあ持久戦だな。好きではないが苦手でもない。つまり得意だけ嫌い。私にばかり役目が回ってきて、もつノイローゼに近い感じだ。もうリア充つてレベルじゃないだろ。

そんな精密機械ばりに複雑な人間関係に僅かにがらの不安を覚えつつ、私は部室のドアを開けた。

「晴希、なんだか浮かない顔だな」

するとなんの不自然さも無く中にいた嘉光が当然というように話しつけてきた。

「なんでお前は当然の流れといったようにいきなりそんな発言をするんだ」

まるでそれまでもこいつはそこにいたかのような感じだ。

「いや、直感だな。せめてもの理由を付け加えるとしたら『愛』の一文字だ」

なんてこつた。直江兼次もびっくりのスキルだな。いやどっちかと言つと富間夕菜とかが持つてるアレに近いか。

「……ま、正直お前と話すのは疲れる。今日は勘弁な」

そう言つてスルーを決め込む。この休暇で疲れはかなり取れた。しかしだからといって連休明けで調子よく文芸部でやつて行けるとは限らない。前述の通り持久戦など大ッ嫌いだが、それでも私は持久型なのだ。短期決戦に持ち込まれ無駄に体力を浪費するのはよくない。

準備体操無しで水泳をすると足が攣つたりするだろ？ あれと同じような事だ。といつても私自身は攣つた事なんてないけどな。だつて元々泳げないし。

「じゃあさ」

嘉光はそれでも引き下がらないようだつた。しつこい男は嫌われるぞ？

「今日は疲れないトークをしよう」

「なんだそのふわっとしたコントみたいなネタは」

私がそう言うと嘉光は「例えればなあ……」と考え始めた。その間に一人の小柄な後輩が話し掛けてくる。

「先輩、晴希先輩……」

「ああ、朱鷺羽か」

朱鷺羽みのり。私を慕い、あろうことか女同士でありながら私は恋愛感情を抱いている変わった人間だが、根はまともで気配りもできる。逆に言えばレズなのが珠に瑕の、大変残念な後輩だ。

「どうした、残念な後輩」

「いえ、その冠詞は必要ないと 思います……」

「すまん」

失言を詫びておく。

「そういえばあれだな朱鷺羽、『残念な』とつけるだけでも大分イメージが変わるな。例えば『残念なときめき』とかな」

「ですね。『残念な凄まじき』とか」

朱鷺羽が適当に相槌を打つてくれる。この辺りが他の文芸部員と違う所だ。まったくあいつらときたら勝手に話を進めるわ、私を変なキャラに仕立て上げるわ（特に杭瀬だな）。相手をリストペクトする事がコミュニケーションの第一歩だとあいつらは習わなかつたのだろうか。はあ、けしからんぞまったく。まさにこれが残念な部活だ。

更に私達は例を挙げていく。

「『残念な希望』『残念な新学期』『残念な春』……」

「『残念な最強』『残念な伝説』『残念な魔王』……」

ふむふむ……なるほど、確かに残念さが滲み出ている。ならばと私も更に例を挙げてみる事にした。

「後は……『残念なゴールデンウイーク』『残念なテート』『残念な映画鑑賞』とかな」

「他には『残念な尾行』『残念な試着室』『残念な二輪車』とかですかね？」

「ああなるほど、とりあえずお前があの日何をやっていたのかは大

方理解した」

その私の言葉に、朱鷺羽ははつとした表情。

「晴希先輩……誘導尋問は卑怯です……」

それは世間一般では誘導尋問とは言わなんじやなかろうか？ まあそこまできつく言ひ氣はないが。嘉光じやないし。

「でも今日は珍しいですね。晴希先輩の方から話を切り出してくれるなんて」

「いつもお前の方から話していくからな。まあなんだ、気が向いただけだ」

だからあまり調子に乗るなよ、と付け加えておいたが、言った後で後悔。まずつたな、これは反作用でまた変に好感度が上がってしまった。

本当、朱鷺羽はいい奴なんだがそれゆえ苦手もある。一回きつくな言つておいた方がいいんだろうか。レズの彼女持ちの高校生なんて、どう考へても嫌だぞ私は。

「おし晴希、待たせたな！」

と、嘉光がようやく話しつけてきた。えらく時間をかけたな。どうしたんだ一体。

「『疲れない話』のテーマで脳内Google検索していたんだが」「お前の脳内には検索用ソフトがインプットされてるのか」「言葉のあやだ言葉のあや。まあとりあえず、それらを箇条書きにしてみた」

そう言つてルーズリーフを差し出してくる嘉光。えらく献身的かつ無駄なことをしでかすなこいつは。おもてめん表面真っ黒だし。その割に字綺麗だし。

内容はと言えば、『リュウとケンだとどっちが強いのか』とか『襟袖えりそでの染み付きを取る有効的な方法』とか、やけにピンポイントな話題が並んでいた。全く、そんなの語れんぞ……リュウケンは語れるが。

「今日はこの話題を ミックスして話そうと思つんだ！」

「最悪な選択肢だろそれは！」

「なんて事だ。それは一番ないだろ。」

「いや違う！……いや、違わないか。確かに美味しい食材を混ぜれば美味い料理になるわけじゃないもんな……」

嘉光の言つ通りだ。ただ一つ決定的に違うのは、食材すらも駄目だと言う事だが。

「くそ……女一人満足させるテクニツクすらないのか俺は……」

「おいなんだその誤解を生みそうな言い方は」

「私も晴希先輩を満足させるテクニツクを学ぼうと思います」

「折角の真摯な態度に水を差すようで悪いが、学ばなくていいと思つぞ……」

嘉光と朱鷺羽の発言に、私はそれぞれげんなりしながらもそう諭す。

「大体難しいよな。『面白い話をしろ』なんて無茶振りされても無理だつて普通」

「内藤先輩の言つ通りですね。芸人でもないんだし、私たちにできるのは『くありふれた会話だけですから』

……いや、通常お前らや杭瀬の会話は私を疲弊させるのに特化していると思うんだが。

「ヒンターテイメントだな。要是刺激だ。『口二口動画とかYouTubeとかにおける』『で人類滅亡』を見れば分かる通り」

仕方なく話の流れに乗つてやり、私はそんな事を言つ。聞き慣れないと単語があつたのか朱鷺羽は首を傾げていたが、まあいいだろう。

嘉光の「いや、その発言はアウトじゃ……」と言つ発言も同上。

「まあ要約するとだ、『内藤が死ぬ』だとか『内藤が核爆発に巻きこまれる』とか『内藤が風船で偏西風に乗つてアメリカを目指す最中に太平洋に沈む』だとか、そういう事だな」

「流石は晴希先輩」

朱鷺羽もなんとなく理解できたようで何よりだ。

「いやいやいやいや！」

ただ一人、嘉光は不満そうだった。お前はいつだってイレギュラ

ーだな本当に。主人公にでもなりたいのか？

「どうして全部俺が巻きこまれてんのー？」

「馬鹿言つな。他の人だと訴訟問題になるぞ」

お前は私にとつて特別な存在なんだよ。呆れるほど鈍感じんかんだな。

「俺の人権！」

「はつはつは、何を言い出すんだお前は」

「なんなんだそのわざとらしい笑いは……」

「内藤はマゾだから大丈夫」

「俺が決める事だよそれは！」

嘉光の必死の抗議。何だよ、我儘わがままな奴だな。

私はそれまで座っていた席から立ち上がり、そして内藤に向き合つ事にする。

「内藤、私はな……そういう日に遭つてるお前が見たいんだよ」

「晴希、病院に行くか？」

そんな嘉光の心遣いをも心を鬼にして跳ね除け、こう言ってやる。「よく聞け内藤、これはお前にしか出来ないことだ。そして、これは単に私のためだけじゃない。お前のためでもある」

「晴希……わかった！」

「その心意気だ内藤……え？」

……やるのか？

「今から川に行こう。簍巻すまきにして川に叩き込んでくれ！」

「内藤！ お前って奴は！」

「内藤先輩……あなたはそこまで……」

なんて無駄に輝いているんだ、あいつは……。

「ア ッ！」

こうして、私達は一年達の力を借りながらも、嘉光を川に突き落とした。とりあえず携帯で撮っている奴もいたが、私はその目に焼き付けておくだけにした。それが無力な私があいつにできる、ただ一つの弔いなのだから。

「朱鷺羽、私はあいつを止めるべきだったのだろうか……」

「いえ、そんな事は内藤先輩も望んでいないと思います……」

「……優しい奴だな。分かった。私は、あいつの事を絶対に忘れない……」

「ええ……」

その日の夕日は、とても眩まぶしかつた。

第三十三話 暫く一人で独り言

翌日、怪我病氣と無縁のはずの嘉光は、学校を休んだ。
まさか本当に死んだんじゃないだろうな、なんて馬鹿げた事を思
いながら、土曜日曜が過ぎていった。

「そして昨日の朝学校に来てみれば、これだよ……」

「…………」

溜息。杭瀬は相変わらず沈黙。

それからさりげなく生徒が私服警察のように距離をおきながらも
私のことを監視していたのを知ったし、それまで会話した事すらな
い同級生に無理矢理どこかへ遊びに連れていかれたおかげで文芸部
室に行けなかつたり。挙句の果てには、少し前まで携帯の三本立つ
てた電波が妨害によりいつの間にか圈外になつていたりした。正直
言つて、困る。電波が悪いと電池の切れも早い。

簡単に言えば、文芸部室に行けない。嘉光にも会えない。
ちなみに私だけではなく嘉光の方も文芸部室に来ていらないらしい。

杭瀬によると。

差し込む光の方に視線を向けながら、そのまま私は話を続ける。
「まあ後悔というか、反省はしてるさ。痛いほどに。
やつぱり人道的に間違ってるからな。不法投棄なんて。多少遠か
らうがクリーンセンターを目指すエコロジー精神は確かに重要だつ
たのかもしねない」

「…………」

嘉光の生命？　さあね。あいつは道頓堀川にダイブしようがハイ
ジャックに巻き込まれようが爆弾を抱えて宇宙空間に飛び出そうが
主人公補正らしき何かで無事帰還してくれるさ。

私は信じてる。信用、大切。ここら辺が最近の冷たい若者どもと
私の、誠意の違いだな。覚えとけ、これ学校じや習わんから。
「でも結局問題なかつたじゃんか。誰も死なかつた。誰も傷付か

なかつた。

それで、あの後どこかの勇者の「J」とく帰つてきたらしつて噂もあるな。しかも無傷で。カービィぱりに復帰力の高い奴だ。心配して損した

「…………」

生命力はゴキブリと同等……いや、スリッパでも死なない分ゴキブリよりたちが悪いか。

まあとにかくその不法投棄が引き金で戦いが勃発したとか、そんなてんやわんやな状況なわけだな。確かに不法投棄は社会問題だが、些か事が広がりすぎじゃなかろうかね。

「しかも戦線が殆ど女子とか。これだから女つてのは」

「…………」

……ああ、そう言えば私も女じやないか。

人道に反する感触つてのはこういうものなのだろうか？ 悪に染まつた気なんて毛頭ないんだがな。

まあ正義とか悪とかは知らんけどさ。菓子パン男が正義でバイ菌男が悪だろ？ それくらいの知識しかないね。

「ああ、自分がこの下らん騒動の火種にいると思えば照れなくもないな。まあ端から見れば随分コミカルだけどさ。なんせ当事者二名差し置かれてるんだから。それも含め、いやまつたくもって意味の分からん騒動だ」

「…………」

聞き手であるこいつの口は断固として沈黙を守つていた。退屈そうな顔だな、おい。

「…………とりあえず杭瀬、何とか言え。愚痴がただ独り言みたくなるのは精神的に来るものがあるから」

「…………」

さつきから話を聞いている杭瀬は何も答えない。まあ確かに私の方的な愚痴に対しても特に言つこともないかも知れんが。それにもこついう時、こいつのステルスが羨ましく感じるね。

「……いつだけは絶対こんな騒動に巻き込まれる事がなさそうだ。本質はネタなのに。

「……、こいつは自分で混沌を作り出しておきながら決してそれに巻きこまれる事はないんだ。都合のいい奴だな。じんしやん

「……いや、いかんな。私、愚痴ばっかりじやないか。

さらにもう一つ戦況を言つておくと、この騒動に便乗してゐる輩もいるらしい。特に今年の一年が凄い事になつてゐるらしく、賭けをする生徒や「応仁」の乱みたいに大義名分にして私的問題で争つてる生徒もいる。言つておくが私は中世に行つてみたいなんて思つた事は一度たりともないんだよな。

学級崩壊ならぬ学校崩壊。別の意味では団結。まるで東西ドイツだな。そして何かの最終回の一話前のように。

「……あー、ここまで行くと嫌でも罪悪感を覚えるな。この心情、どう言い表すべきか。

「仕方ないな。杭瀬、頼むぞ」

何を頼むかなんて言つまでもない。

「この心情を言い表したい？」違つね。詩人じやないんだから。

「中世に逃げたい？」違つね。何度も言つがそんな希望願望は持ち合わせちゃいない。

「ステルスしたい？」違つね。出来るなら本望だが、まさか近頃の携帯ゲーム機じゃあるまいしショアリング出来る物ではないだろう。現状打破だ。私はこの通り文芸部とコントラクトが取れない状況にある。しかしこいつなら、あるいは。

すると、それまで黙っていた杭瀬が、ようやく口を開いた。そして抑揚のない口調で言葉を紡ぎ出す。抑揚はないが、それでもさつきより2%増しの活力が感じられる。

「……それじゃ、愛に殉じようとする晴希に敬意を評して「はなは甚だ不本意な第一声だな！」

「とりあえずは第一段階。こいつの口を開かせた。

……どうして騒動の中心でもないちょっとした話に苦心しなけれ

ばならないんだ私は。

第三十四話 腹打ちの音

「それで、これからどうするかだ」

勿論杭瀬や他の文芸部員にばかり任せているわけにもいかない。

私は基本的に周りが動いてくれるなら自分は動かなくていいやなどと思う無氣力人間だが、今回は事情が事情だ。

それは宿題と同じで、さつさと終わらせてしまいたい。じゃない

と精神的に死ぬ。禿げる。で、それは勿論困る。

とにかく、この事態にはもう辟易するしかないんだ。一年とかの

アホどもは楽しんでるみたいだが、アホの思考など知った事か。

「……どうするかつて、晴希の持て余してる性欲の話？」

「黙れ杭瀬、今の私はシリアルモードなんだ」

ざわざわと福本マンガみたいな幻聴が聞こえてくるくらいにな。

「杭瀬、文芸部とのコンタクトは取れるか？」

「晴希と話せて、一富先輩たちと話せないことがあるとでも？」

杭瀬はどこからか取り出した本、『図解雑学』 プールの飛び込みの腹打ち音』を読みながら答える。……まあその通りか。……読んでる本の事じゃなくて言つてる事の方な？ 分かってるだろうが。

「大体文芸部は普通に続いている。いよいよ晴希と嘉光だけ」

後晴希がないから朱鷺羽後輩も、と杭瀬は付け加える。朱鷺羽も欠席か。あいつはもうちょっと眞面目でいると思ったんだが。

しかしすっかり忘れていた。そう言えば文芸部自体は変わってなかつたな。頭が鈍ってるのかもしれない。多分これが五月病なんだな。

「じゃあさ、私は何か出来ることがあるのか？」

「……やけに積極的だけど、本当に晴希？ 偽者？」

「偽者言つな」

お前の張っているレッテルはどれだけ強固なんだ。もっと柔軟に生きる。

「状況が状況なんだ。ま、お前には分からんだろうがな」「うん、分からない」

開き直るな。

「それで、どうなんだ？」

杭瀬は一応これでいて賢い奴だ。こいつに訊いて損はないだろ？
「どうなんだつて、晴希の持て余している」

「性欲がどうじつの話を女子高生がするな淫売。^{いんばい}この状況で私が動けるかつて話だ」

「今の晴希の発言の方が女子高生とは思えないけどね」

「……微妙に正論を言つな」

非常に相手にしづら^{しづら}い。相手が言つていることを否定出来ないと言つのは辛いな。

「微妙じゃなくて正論。……それで、晴希は一応動ける、と思つ。私以外の文芸部員と接触しないなり」

「……大丈夫なのか？」

あまりにも拍子抜けした答えだったので、私は思わずそう訊き返してしまっていた。

「争いの中心の半分は晴希を想いでる。田立つことをしない限りそう滅多に手も出せないの。確定的に絶対」「なるほど」

私は秋津派だろうが内藤派だろうがこの状況だと敵と見なしてたが、そういう考え方もあったな。それで確定的に絶対って何だよ？
「それで晴希、この無口で恥じらいのある私に全てを任せることを少しほ躊躇^{ためら}わないので？」

「誰が恥じらいあるんだよ。前にあのデートのビデオ見せてもらつたら、あらゆるシーンの背景にお前が映つてたんだからな。パンダマンかお前は」

「きやつ／＼／＼／＼／＼」

「その頬染めてるみたいな記号は口に出して言つなよ。といつか何だその棒読み」

私は嘆息して言った。

まあ正直、話相手に杭瀬がいるのが嬉しいと言つのは秘密だ。言つたらあいつは調子に乗る。確定的に絶対。

するとここに、休み時間の終了、朝礼開始五分前を告げる鐘が鳴つた。私と杭瀬は教室に戻る。ただでさえ変なことで目をつけられている私なので、時間に遅れて浮いてしまうことは出来れば避けたい。

廊下に出ると、また慣れない視線に取り巻かれるのが厄介だ。しかしそれを、杭瀬はまるで別次元にいるかのようにすり抜けていく。全く、似非無口キャラはいいもんだ。

あいつには分からんだろうな、今この私の苦心なんて。

第三十五話 援軍要請之理

世の中は大まかに分けて一つ……いや、二つ + の人間に分かれ
る。

それは男と女（そして曖昧な性別）だつたり、勝ち組と負け組（そして仙人）だつたり、右利きと左利き（そして両利き）だつたり場合によつて基準は様々。だからこそよく使われる表現なわけ
で。

そしてそのうちの一例として、積極的な人間と消極的な人間（そして……ああ、これは二つでよかつたな）にも分かれる。なお当然ながら私は後者だ。そりやもう最悪でも人並みには消極的だ。

私がわざわざこんな長つたらしく説明し、言いたかつた事を一秒で説明するならば、どどのつまりその消極的な私が自ら動かんきやならんほどのプレッシャーがあるつて事だ。多分一秒超えたな。

と言う事で、私こと秋津晴希は可能性を見出だすべく動いた！

……おかげで少しあが緩いで授業が受けられなかつたが。だがそんな事は無問題、過去を省みたら人間嫌になつてしまふものだ。積極的思考と言うのは人類の進化に則つた物であり、やはり悩みすぎると禿げる。それにどうせ緩まなくともかえつて授業は受けられなかつた。妙な視線は授業中にも消えないわけだから。

そうさ、学生つてのは意外と緻密纖細なものなんだ。中には万華鏡を覗いただけで吐き気を催す生徒もいるはずだ。未だに学校では大便に決して行かない生徒もいるかもしない。ロリコン呼ばわりすることを怖れ、十分焼けていない焼肉を食つようなことは絶対にしない生徒も、もしかしたらいる。十代の若者はデリケートだからな。

そんな回想から戻つてきて、今は昼休みの時間。実に日常的な風景……というわけでもなかつた。具体的な違いは述べられないが、これは多分……いや絶対視線のせいじやなかろうか。

そんな私には目的があった。同じクラスでいて文芸部ではない、ある男子生徒の席。それにしても昼休みは長い。昼休みの存在が特別なのは最早世界の意思が決めた常識だな。この時間学校は一つのエデンとなる。……私のような場合を除いてだが。

その特別な時間 約30分程度の休暇を学生たちは様々な事に充てる。

ある者は未だに飯を食つていて、ある者は元気なことにサッカーボールを持つて人差し指の上でぐるぐると回しながら友人たちと校庭に行つてしまつていて、ある者はこれまた別の方向で元気なことに一次元の魅力について熱弁していて、ある杭瀬くわせはへんちくりんなタイトルの本を読んでいて、また誰だか知らんがある者はわざわざ私の監視に充ててくれていて。

こういうデータは文部科学省とかが持つていてもしかり。出来れば昼休みの時間を監視に充てる生徒は1%もないで欲しい。

そんな中で一人の生徒 大柄で嘉光よしあきみたく氣さくなイメージの男。映画のジャイアンみたいなのは窓際の席に座り、机の下で携帯ゲームをしていた。

おい見えてんぞと言いたくなるが、実際の所は見つかろうが無問題だから下に隠すこと自体が無駄なんだが。

何か意味があるのだろうか。シャイな奴つて訳じやないだろ。となれば宗教上の理由で晒せないとか、机の上に置くと化学反応が起こるとか。

それでもこちらから近寄ると顔を上げて応対してきた。じ丁寧にイヤホンとか装着しておきながらよく気付いたな。山勘か、はたまた霸氣はきでも感じ取ったか。いや、私が持つてるのは知らないけどな。霸氣。

「どうしたよ時の人？」

「どうしたつてな……」

「すげえ引っ張りだこじやんかよ。これでみんなのアイドルだな。かつけえよ！ 憧あこがれるぜ！」

「なんて嫌なアイドルだ。冷やかすな。」つむらは修羅場だぞ。おい何笑つてんだ。ああむかつくな、くそつ！」

と、と、と言つ事でつ、私」と秋津晴希は可能性を見出ださんと動いたつ！

……大丈夫かこれ？ 秋津さんは非常に心配だ。

「それはそうと、頼みがある」

「お？ 何だ、須らく言つてみろ」

携帯ゲームを中断した男子生徒

幡野克剣は笑いを堪えながら

面白そうに聞いてくる。当然私は笑えない。

「お前確か、新聞部だつたよな？」

新聞部

先日私を部室に拉致した因縁深い相手だ。と言つても

現在文芸部と同盟を結んではいるのだが。

新聞部員達は全員眼鏡をかけている。これは偶然とかではなく、そういうルールらしい。現に今幡野は眼鏡をかけてはいない。

また新聞部員は私の見る所、どうも頭のネジが少しばかり緩んでいるように思えて仕方ない。「馬鹿には見えない服」なんて物に出会つたら、多分あいつらは「自分たちが馬鹿だから見えない」とでも言つんじやなかろうか。下手すると嘉光以上に残念な奴らだ。

またこれはあくまで私の推測なのだが、そのあれな頭を誤魔化すために「眼鏡ルール」があるんじやなかろうかと思う。

そして部長の仁科由宇さんには、他人に水道水を勧めるという突飛極まりない交渉術がある。一体それでどれだけ交渉を成立させてきたんだろうか。まつたくもつて不明だ。

……ま、前回それに救われたと言うのは否めない。眞に残念ながら。誠死ね。

「馬鹿言え、俺は新聞部じゃない」

「いや見たからな？ あの時お前が新聞部室にいたの」

あの時とは前述した、私が拉致された時の事。新聞部との接觸は

他には「ホールデンウイークの時の、思い出したくもない嘉光とのトークくらいだ。なんだ、いい思い出が全くないじゃないか。まあそんなわけでギブ＆テイク。どちらにしろ同盟なるものがあるんだ。手助けくらいしてくれるよな？」にもかかわらず。

「……やなこつた

目元に微かすかな笑みを浮かべた幡野の答こたへはいつだった。

はあ？

第三十六話 ハーバーとオストワルト

いや全く、呆然啞然とするしかなかつた。

文芸部員である私が困つているのだから、新聞部が手を貸してくれるくらいはいい。いや、是非とも手を貸すべきである筈だ。それなのに、新聞部員に過ぎないこいつから出てきた言葉は「やなこつた」の一蹴だ。こんなのは誰が納得できるだらうか、いや、誰も納得出来やしない。

「いや待て、『駄目だ』ならまだ考へる余地があつたが、『嫌だ』つて何だよ！」

我を取り戻し、慌てて私は反論する。

幡野は半分シリアス、半分笑みの器用な表情で答えた。

「そりやお前、こんな面白こ……大変な事、俺らが手出せむもんか」「おい今面白い言つたよな？ 訂正の余地が無いほどまつ毛り言つたよな？」

「そんな状況をどうにかするなんて俺らにはめんどくせこ……荷が重過ぎるつての」

「おじ今度はめんどくせこ言つたよな？ これまた訂正の余地が無いほどのつきり言つたよな？」

やはりただの情性と好奇心だった。……お前はそれでいいかもしれんが、私はそれじゃ良くないんだよ。

「いい加減にしろ」

軽く、それでいて私が出せるだけの殺意を込めて言葉を放つた。「私は嫌でもやれと言つてるんだ。これはお前の好き嫌いじゃない。単純に義務の話だ」

「すまん……俺、他に付き合つてる子がいるんだ」

「……この期に及んでその口は何のジョークをばざくんだ？」

やう言つてやると、この野郎も流石に反省し

「あーはつはつはつはー」

なかつたようだ。くそ、その笑顔が憎たらしい。そして「うざつたいぞ。

「やれやれ、どにでもいそなある新聞部の一員こそが天下一純粹であるといつぐく単純な摂理さえも人は覚えちゃいないのか。狂つた世界だ」

確かにとち狂つてゐるな。多面的な意味で。

「百歩譲つてそれを認めたとしても、純粹さが時に悪となるというのも覚えておいた方がいいぞ。道徳の授業でもあまり觸わんだらうがな」

「す」く反省してゐるのに（笑）」「

「ここまで誠意の無い反省は稀に見る」

「というか、反省じやない。

「日進月歩、切磋琢磨^{ちくさそりゅう}、血の滲むような努力の結果として人間いじりに特化した厨性^{ちゅうせい}能^{のう}力を手にいれたんだよ（笑）」

「なんて迷惑千万なコンセプトの新人類だ。しかも誇らしげに」「そうだ、この力を持つてすれば非現実が現実になる（笑）」「

「勝手に意味も無くダークサイドに落ちるな」

両の拳をグツと握り締める幡野。お前は涼宮ハルヒの如く世界を引っ搔き回したいのか。モブキャラの分際で。

「これからは『チートのハタノ』とでも呼んでくれ（笑）」

「天地が崩壊しても呼ばない。そして（笑）をやめていい加減に話を進めさせろ。シャーペン突き刺すぞ」

「それは困るな」

一転。思いつめた表情の幡野。何か事情があるのだらうか。「何が」と私は訊いてみた。

「尻にシャーペンを突き刺されるというのは困るだろ、そりゃ」そこだつたのか。しかも誰も尻とは言つてないのに。

「……まあいい、ちゃんとやれ」

実は尻じやなくて首筋で一撃必殺狙いだつたことも、まあいいだろう。

しかし尻を突く拷も処罰も良さそうだ。ただそのアーツの代償にシャーペンが消耗品になるというのが大きな問題か。

「わかつた。自重する。サーセン！」

まあ よくなないな、これは。

「いや、草も生やさないでくれ」

「はあ？ 草なめんな！」

『樂』 「草について触れる」 『怒』。どんなメカニズムだ。

新手の化学反応か？ お生憎様、私はハーバー法もオストワルト法もよく知らんのだが。

「いつも誰が馬鹿にした」

「いつもそつやつてペチャクチャと卑怯な手を！ そつやつて詭弁を吐いてばかり！」

「いつもつていつだよ！ 私がいつどいつこうプロセスをもつて何を騙だま」

「文芸部屈指の腹黒キャラが何言つてんだかな！」

言い終わらないうちに返された。腹黒つてのは嘉光が勝手に言った事なんだが、ちょっと力チンとくる。いかんいかん、冷静になれ。そうして私が思考している間に、再び幡野が喋りだす。

「秋津……思えばお前は昔からそうだったな」

「お前昔の私なんて知らないだろ」

確かに物心ついたときから私は歪ゆがんでいたが。ついでにその頃からひ弱ではあったが。

「イメージだイメージ。オーラを見れば分かる」

「オーラなんて見えないだろ。出鱈目はお前だ」

「そんなあなたに、このパワーストーン。今ならたった20万円で、

この騒動が

「收まらないから後でその小石を捨ててこい」

私の真摯な突つ込みに、幡野は

「んだと！？」

逆ギレした。

……誰れど、これが現代のキレる若者じゃつまぬ。

第三十七話 詭弁論の衝突

「とにかく騙しすぞだろ！ その腹黒とか、見た目と口調と性格で男かと思つたら實際は女とか、そちらくんの擬態する昆虫より騙してらあ！」

「おい糞新聞部員、お前はこの私をナナフシか何かだと思っているのか！」

「ナナフシに罪はねえ！」

「なんこと分かつてゐる！」

言葉と言葉のぶつかり合ひ、非常にどうでもいい戦い。こいつを下せば、新聞部の協力を得られる。

……って、なぜ私はこんなに熱くなつてゐるんだ？ 熱血漢属性など皆無だつたはずだが、何かに当たられたのかもしけない。現に幡野も登場間も無くこうやってキャラ崩壊した。

……まあ、いいんだけどさ。だつて若いんだもの。

「大体何だ、容姿云々を責められるのに慣れてはいるがそれでも傷つかんわけじやないんだぞ！？ 私は女だ！」

「はつ、笑わせる！ 言葉にしなきや伝わらねえ事もあるんだ！」

「言動をオブラーートに包まん奴は大人になれんぞ！」

「つるせえ！ 現実から田をそらすな！」

「それお前だろ！」

「……ああ言えばこいつ言つ、これだから最近の若者は……！」

「だからそれはお前だ！」

「ここで息切れ。幡野も同じく猫背に肩を上下に動かしてゐる。

ああ、どうして新聞部への要請一つでこんな一つの戦いを生み出さなくちゃならないんだ。どれもこれもこいつの身勝手のせいだろう。

不毛だ。不毛すぎる。このまま続けていたら、それが終わる頃には日が暮れているだらう。そもそもこれを収めるか。

……そういえば視線云々をすっかり忘れてたな。私は身の危険とかじやなく、それより若干の恥ずかしさを覚えた。よく分かるぞ。耳たぶが熱いと言つ事ぐらい。

でもまあ、ここまで行つたらいくら恥ずかしくてももう後戻りできやしない。出来る限り他の人からは視線を外しながらも、話を続ける事にしよう。中途半端な状態で引いたら末代までの恥になる。

阿呆は やはりまだ落ち着かんか。

「一つだ。一つ言わせる」

さつきのような大声ではない。なぜなら今の私は必死である以上に、集中している以上に、羞恥心にアラートを鳴らされているからだ。

「どうした！ 变な詭弁きべんは許さんぞ！ お前をそんな人間に育てた覚えは？」

「まず一つ。变な詭弁をほざいているのはお前一人しかいない」

「……ひょ？」

間の抜けた声を始めとして新聞部員の暴走に翳りが見え、大きな体躯も少しばかり小さく見えた。といつかこの反応、本当に無自覚だつたんだな。やつぱり新聞部は馬鹿だ。

私は容赦なく続ける事に。というより本来ただの頼み事で容赦しなければならないシーンなどこの十六年間まるで聞いた事が無い。だから幡野が泣こうが喚わめこうが頼み事を了承してもらわなければならぬと言う事になる。

「かな哀しいね。人の欠点を指摘じてきしておきながら実はそれが自分だったなんて」

「い、いや……これは、言つ事とやる事の矛盾によるコントラストむじゅん」

「を」

「はい詭弁きべん一つ」

「一つ……」

辛そうだが、結局は自業自得だ。それに先ほども言つたが、本題は頼み事。頼み事をするのに容赦はいらない。言葉のキヤツチボー

ル？　なにそれおいしいの？

「し……しかし、それはちょっととした冗談であつて」

「言葉にしなきや「伝わらぬ」ともある」

「……！」

幡野の顔色、青く変色（PH10）。

「現実から目をそらすな」

「…………！」

幡野の顔色、さらに青く変色（PH13）。

「人は駄目でも自分はいいのか。なんて卑怯卑屈なやつなんだろうな」

これが決定打になつたのか、幡野は頭をストンと落として机に打ちつけた。

「くつ…………話は…………終わりか…………？」

暫く経つと幡野は、片腕で重い体を持ち上げ、そう訊いてきた。

「『二一つ』あると言つたろう。そんな鼻血を出しながら言われても話は終わらんぞ」

どうやら今の机打ちつけで出血したらしい。少し 2・33%

ほど心配だ。

「今ので二一つか……？」

当然だろ。今の机で右脳が左脳でも損傷したか。

「二一つ目が重要なんだよ。残念ながら今の私には残り時間で有意義にお前をいたぶつて過ごす事は出来ない」

「残念じゃない。というかこんな状況じゃなかつたらもつと言つたのか」

それはどうだうね。あえて答えないでおこう。いらん事を言つて他人を怯えさせるほど私はサディストじゃない。ちなみに何も言わずに怯えさせるくらいはする。

「なあ本当、勘弁してくれよ」

さつきからまだ幡野的な何かが喚いてくる。いちいちうるさいな。

それが人に物を頼まれる態度か。

「酷いつて。あんだけ言つておきながらまだ終わってないなんて」

「腹黒だからな」

「それを理由に出すか」

「腹黒だからな」

アンケートでも何も考えず全部「普通」で答えるくらいのものぐさだしな。返答は簡潔かつ的確が望ましい。そしてこれは、いかなる日常会話に關しても搖るがない。え？ これって口論じゃなくて私が一方的に甚振つてるわけでもなくで、いく普通の恥ずかしい田常会話ですよね？

「まあそんなことはない。二つ田がそう時間の無駄だと話しつけただつたんだ」

実を言つと先につけられた言つておけばよかつたといつ後悔もあるが、それは悔しいので言わない。

それにしてやはり視線を忘れていた。「うわ、監ひつち見てるな。どうせ杭瀬も……いないのか。どうせ図書室だらうな。きっと『プロジェクトMAX』うぐいすパンに青酸カリの中和性質を見出した男』とかの意味不明の過ぎる本を借りているんだろう。

「……ごめんなさい」

「いや、そんな下座で謝られてもだな……」

さつきの勢いが嘘のように萎れている幡野。青菜に塩つけてつづく事なんだな。お前は青すぎた。

「もうどうすればいいんだかさっぱり」

「開き直つて普通にやれよ」

「ありがとう」

わざわざお礼する幡野。そして気付くと周りからなぜか巻き起ころ拍手。あの重い空氣はどうに行つてしまつたのやら。妙な視線もなんだか和やかモードになつてゐる。

ああ、馬鹿馬鹿しいが疲れた。この詭弁論、もう日本の国技に指定していいだろ。

「んで、本題は？」

「ああ、それなら

」

第三十七話 詭弁論の衝突（後書き）

ちなみに、うぐいすパンのエピソードは、閣下の母が大学の頃の、教授のエピソードだったそうで。

第三十八話 白米的理論

その昼休み、ほぼ同じ時刻。場所は変わり、ここは一年教室。

今年の新入生というは何故だか不明だが曲者が多い。単なる「奇人変人」なら三年や一年にもいるが、一年はそれだけに留まらず、言うなれば「悪質」な生徒もいたりする。

この学校分裂という状況を生み出している理由の大きなもので、当然のことこの状況に便乗していた。

具体的にはこの状況を大義名分にしての個人的闘争　いわゆる喧嘩。そしてお互いの状況がわからないという閉鎖的状況を利用して博打などで、拳句の果てには全く関係のない債権を売りつけようとする者までいた。もしかすると、これが社会の縮図なのかもしない。

そして何より凄いのは、そんな混乱が一切教員に知られていないと言つこと。

勿論文芸部を火種に何かが起こったというのは既に知られていて、それについて教師は渋々（しぶしぶ）見て見ぬ振りをしている。これについては教員に金が流れているという説もあるのだが。

だがしかし、二次的な事態についてはさっぱり知られていない。

情報が厳重に隠蔽されている上に、たとえ知られても「少しばかりおかしな生徒たちだが、さすがにそれは無いだろう」という考えに帰結する。当然ここでの間違いは「少しばかり」という点だ。

まったくもつて世も末と言つた所である。

そんな第一学年の一年B組教室にて、一人の女生徒が溜息をついていた。ポニー・テール、スレンダーな体つき、強い眼光、他人を近づけないようなオーラ。

「椎ちゃん、元気ないけどどうしたの？　そんな晴希先輩みたいに溜息ついて」

同じクラスである朱鷺羽みのりが溜息をついていた少女 椎乃に訊いた。

晴希先輩、という言葉にクラスメイトたちの視線が向けられ、守坂は朱鷺羽に視線を飛ばす。それを朱鷺羽が感じ取ってくれた所で、守坂は口を開いた。

「いや、母さんと喧嘩して」

そつけなく守坂は答える。一応これでも彼女なりに親しみを込めてはいるのだが、それを感じ取ってくれる人間は身内も含め数えるほどしかいない。当然ながら朱鷺羽はそのうちの一人だ。

「ふーん、珍しいね。椎ちゃんあんまり喧嘩とかしなさそうなのに」「いや別に、それでもないんだけど……」

そう言つてまた溜息。

「嘘だあ。椎ちゃん大人しいじやん」

本当に意外、といった感じで朱鷺羽が口を開ける。

その後、朱鷺羽は「あつ」と何かに気付いたように再び口を開ける。

「……そういうえば椎ちゃんの家つて厳しいんだつけ……」

「そう。だから卵焼きが和食か洋食かで口論になつて……」

「いやそれは……まあいいや」

その答えに、朱鷺羽はかなり驚いた。なぜなら、喧嘩の内容が思いのほかどうでも良かつたからだ。

ただ、あくまでそれは自分の基準での話だ。この世界に常識などあつたようでもないもの。

守坂にとつてはそれでも大変大きい話なんだろうなだと思い、朱鷺羽は口をつぐんだ。

「まあいいや。早くお昼飯を食べよつよ

「ああ……」

テンションの上がりないまま守坂は答える。そういうえば今は昼休みの時間だった。

朱鷺羽は鞄から弁当を出し、守坂はビニール袋に包装された惣菜

パンを出す。朱鷺羽はその事に僅かながら疑問を覚えた。それは。

「あれ？ 椎ちゃん今日はお弁当じゃないの？ 椎ちゃん『ご飯好きだつたよね？』

朱鷺羽の言う通り、守坂は相当な米至上主義の人間でありながら今日は豊富な米を湛えた弁当ではなかつたからだ。

「言つたでしょ？ 母さんと喧嘩したつて」

「へえ」

実を言つと、先ほど朱鷺羽が守坂の事を「元気がない」と察した真の原因は母親との喧嘩自体にはなかつた。

詰まる所はただ単純。米が口に入らないと言つこと。

守坂椎乃と言う人間にとつて決してそれは「ご飯がないならパンを食べればいいじゃない」などというわけにはいかず、仮にそんなことを言う不届き物がいたら一秒钟に数十発蹴つてゐる所だつた。その辺り容赦はしない。

「それはそうと、秋津先輩の事だけど」

声を出来るだけ殺して守坂は話を告げる。流石におおっぴらにこのクラスメイト達に聞かれるのは敵わなかつた。

「晴希先輩……大丈夫なのかな……？」

文芸部一年、秋津晴希は朱鷺羽みのりが想いを寄せている相手だつた。

晴希の顔を、あの日以来朱鷺羽は目にしてはいなかつた。

というのも当然の事。晴希はこの騒動の中心人物であり、その身は本人の望まない取り巻きによつて守られていたから。

朱鷺羽も事件の主犯格ではあるものの今こうして「秋津晴希と同じ文芸部にいたただの一生徒」として存在していられるのは確実に文芸部の働きのおかげだろうと守坂は推測し、それは間違つてはいなかつた。ひとえに文芸部参謀・一宮敦次の力である。

「文芸部とのコンタクトは出来る？」

「え？」

「だから文芸部とのコンタクトを出来るかと」

聞き逃していた朱鷺羽に、守坂は声を殺してもう一度繰り返す。

「！」の事態をどうにかするための力になりたい。だから……」「

親友の顔を見据える。朱鷺羽は「な、なに……！？」と動搖していた。確かに彼女は同性愛者という立場ではあるものの、その対象は今のところ晴希一人なのだ。親友との間にフラグなど不意討ちにも程があった。

「！」飯、分けて……ください……」

「え！？ そつち！？」

目の前にいる朱鷺羽にすら語尾がほとんど聞こえないよつな小声で、守坂は頼んだ。

守坂椎乃から米を奪うのは、地球から酸素を奪うのに等しい鬼の所業だった。

守坂は、朱鷺羽の弁当の米をよく噛み締め、十分かけてゆっくりと平らげた。

朱鷺羽によると、その時ほど嬉しそうな守坂を見たことは今までなかつたといつ。

第三十九話 男の聖典

帰宅して、今は部屋の中。机の上には面倒くさい問題集とノート。ノートの端っこには福本マンガみたいな顎あごが尖つて汗じみ垂らしてる顔の落書きが描きこんである。こんなのが誰が描いたんだ。私が学生と言つ立場上、たとえ学校で不必要なプレッシャーに苛まれている私といえども最低限の勉強をしなければならない。だるいな、ゆとり教育さすがつて「冗談わざわざ」だろ。

流石に例の視線を学校の外にまで感じる事はないから、ある程度気が楽な所はある。ああ、勿論もちろんの事、考えうる最悪の情況と比較しての話だぞ？

まあいすれにせよ四六時中あぐりようという訳ではないのだから、嘉光のような迷惑な悪靈あくりょうが何かに憑かれたりしているわけではないだろ。非常に『疲れて』よつぱはんじはいるが、そんな事は言つまでもない最早日常茶飯事たわむだ。男女でキヤツキヤウフフと戯たわむれていのリア充もはやにちじどもとは住んでいる世界観の構築からして違つていて。こちとら毎日が現在進行形でエックスエックスファイルだ。アハハ。

それはそうと。

杭瀬くせに文芸部のことは頼んだし、幡野はたのには新聞部のことを頼んだ。ああ、そうだ。幡野との話のあの後の事を少しばかり説明させてもらおう。

「んで、本題は？」

「ああ、それなら……いや、さつき言つたよな？」

幡野は本当に知らないといった感じで首を傾げている。そうか、そんなに詭弁論きべんろんに夢中むちゅうだったか。……いい加減にしろよ。

「お前ら頭のいかれている新聞部の拳兵けんぎょうだ」

で、私はこんな感じで説明。周りに聞こえないように声量も抑えたし、人に物を頼む態度としては我ながら合格だと思う。花丸つけていいだろもう。

にもかかわらず。

「ああ？ いかれてんのは新聞部じゃなくて新聞部員だぜ？」

思いもしない反論を食らった。反論になつてるのは甚だ疑問だが。

「……いかれてるつてのは否定しないのか」

ついでに、まだ鼻血が垂れてるぞ。ティッシュを使えティッシュを。持つてきてないならせめて指で抑えててくれ。分かつてるとは思うが穴を塞ぐんじやなくて上のほうを摘む感じで抑えるんだぞ。

「とりあえずそう言つ事だ。是非ともいかれているお前らの協力を期待している」

「まだだ」

「……お前はいちいち従わないな」

「抗い^{あいが}たくなる年頃なんだ。文芸部だつて社会の束縛^{そくばく}と戦つてゐるだろ？」

誰が社会の束縛なんかと、と反論しようと思つたが、あながち間違つていなかもしれない。……現状は非常に残念な事になつてゐがな。

「で、どうしようと？」

「はつ、そんなの決まつてんだろ！」

面倒臭すぎる^{づきつ}ついたいテンションの幡野が一拍置いて、そうして続ける。

「対価だ対価！」

「……？ 対価？」

「人は対価を支払わないと何かを得られないんだよー！」

「……どこの鍊金術師^{れんきんじゅし}だよお前は。

それにだな、さつき私が同じような話をしただろ？ ギブアンドテイクと。あれか？ お前は英語が分からんのか？」

「秋津^{あきつ}、お前は本当に浅はかだな」

幡野が意味もなく侮蔑の視線を向けてくる。その言葉、お前にだけは言われたくなかったよ。後その田も。

「これは新聞部への依頼もあるが、同時に俺への依頼だつたりもするんだぜ？」

「チップをやれと？ 残念ながらこれは日本だぞ」

「なに、金じゃなくてもいいんだだ？ さあどうする？」

本当、どうするんだよ。ここまつ全く私の話を聞いてない。

……折れる、か。

「仕方ない、だつたらあるべや」

「おうなんだ、言ってみろ」

それは、確か私が中学を卒業した時に友人から貰つたものだつた。絶対に出していくことがないだろうと思つたあれを、まさか今出してくることになるとは。

「おどりせじてん
エロ本だ」

言つた瞬間、周りがざわついた。

……いや、私も捨てようか迷つてたんだよなあれ。よかつたよかつた。

ちなみに幡野はと言つと。

「ヒヤツホオオオオオオイ！」

非常にじ満悦まんえつの様子だった。

「おう、それなら了解だぜ！」

「ああ、後払いだからな。欲しかつたらわつせといかれてるお前の頭で最善をつくして私に貢献こうけんしてくれ」

「よつしゃ、早速今日から動くぜー！」

「ああ、頑張れよ」

と、こんな感じで幡野の協力を得た。モブキャラなんてチョロいもんだな。

というわけで、これで暫く私のすべき仕事はないわけだ。

言い換えれば、私は現状にて勉強以外ですべき事を全て終えてしまつた事になる。……まあ、それでここまで達成感を感じられないのは珍しいが。

なんて私は思っていたのだが、ここで私の携帯電話が振動する。どうやらメールが来たようだ。

一体誰からなんだ。こっちが誰かも知らない、体を持て余しているらしい人妻さんからのメールならしくたまに来るのだが……。

第四十話 第一期の事

『どうも、秋津晴希さん。

あなたの境遇はすでにこちらで聞き及んでおります。

さて、早速ですが、今から学校に来て下さい。

来て頂けない場合は、かつてあなたの孕ませた女性の事を公表するなどの強行的措置を取らせて頂きます』

メールの内容はこうだった。ちなみに送り主は不明。でありながら私の本名が記されている。

いやまさか、これは……。

「……なんだ一富さんか」文面から一瞬で理解した。

一見ただの脅迫状のようにしか思えないような内容にもかかわらず私がこういう反応で済ませてしまるのは、その強き信頼ゆえだろうか？ それとも単に私の感覚が致命的に麻痺しているからだろうか？ ……どちらかと言つと後者かもな。

そもそも私は生物学上XXの女性であつて女を孕ませるなどありえないのだが、それでもきっとあの一富さんの事だ。根も葉もない噂を立てるなど赤子の手をひねるようなものだろう。

……現に自分で教えたこともない私のメールアドレスを握つていたくらいだしな。先輩ながら才能の無駄遣いも甚だしい。

「……これは酷い。行くしかないのか」

しかし脅迫されでは敵わない。私は制服に着替え、外へ出る準備を整えた。

いや、結果的に早く終わるそつないいんだけどさ。今からの用事じゃなくてこの騒動が。それならちょっととした犠牲も仕方ない。

ちなみに私が女を云々と言うのはちょっとしていないので無視は出来ない。世の中には何よりも大切なものと言つのが存在するんだ。

「ほんにちは、秋津さん」

ところで、私が夜道を歩いていた時、そうやつて微笑を浮かべて話しかけてきた奴がいた。纏っている雰囲気はなんというか……微妙。一体誰だ？ 変質者か？ このいたいけな少女に何をすると？

まあ不思議と悪い奴には見えないのだが。ちなみにやばい奴には若干見える。その辺りの勘において私は絶対的な自信があり、そして避けた方がいいと読めていながら避けられなかつたりする。

私がその悪役的なオーラの感じられない笑顔を見ながら頭に疑問符を浮かべていると、「僕ですよ、僕」と相変わらず笑いかけながら言つ。ああ、嘉光や幡野のおかげで気付かなかつたが、本来笑顔つて向けられてもむかつかないもんなのな。

あー……ところでこいつ、確かに見た事ある気がするぞ。確かにこいつは……。

「……一期の第五話に出てきたアニメオリジナルの……」

「誰の事ですか。それに第一期つてなんのアニメですか？」

ああ、勘で言つてみたら間違つてたし。それに怒られたし。いい

加減にしろよおい。誰がそんな事を吹き込んだんだ。私か。

「菅原ですよ。菅原ト全」

「……………ああ、菅原な。覚えてる覚えてる」

どうやらそいつは微妙さにおいて他の追随を許さない文芸部の後輩、菅原ト全だったようだ。

なぜか文芸部室内で調理実習でもないのに蝉の羽とかそう言つたものが入つたゲテモノ料理の作成に勤しみ、当然の如くそれは私たちに振舞われる（本来凄く気持ち悪いはずなのに、味に別状はない。逆に怖いな）。にもかかわらず仕方なく試食してやつているのはその強き信頼ゆえだろうか？ それとも……もつどうでもいいよな。まあ蝉云々については杞憂としておこう。仮に問題があつたら一

富さんが既に気付いてくれてるはずだし。……さて。

「いつとあまり話をしたりはしないのだが、その微妙さのせいで確かに記憶に残つてはいた。最も本人からしてみれば実に嫌な記憶の残り方だろうが、人と人との馴れ合いなんて須らくそんなものだ。

「……秋津さん、絶対忘れてましたよね」

「何を言う。そんなわけがないだろう」

秋津先輩は後輩には優しく、嘉光には厳しいんだよ。その辺り重要な？

「まあいいですかね」

「そうだ、お前が誰だつたかなんて過去の話、思い出しても哀しいだけだ……あきわら萩原」

「菅原です。前にも他の人にそんな間違いを受けましたが」

哀しいですね、と菅原。それは失礼した。私は適当に言つてみただけだが、まさかそんな間違いをする奴が他にいるとは思わなかつた。一体どういう流れで間違えたんだろうか。もしかしてそいつは相当なアホの子だつたのか？

「それで菅原、お前はどうしてこんな所にいる？ 夜のお仕事か？」

「そんなわけ……ああ、その通りでした。すいません」

その通りだつたのかよ。自分の勘の鋭するどさに私もびっくりだ。

「まあ、あまり大きな声では言えない仕事ですけどね。だから内緒にしておいてください。頼みますよ、秋津さん」

菅原は声量を抑えながら言つた。どうやら真つ赤な嘘という訳ではないらしい。

「分かつたよ。けど気をつけろよ？ 女を孕ませたとかそういう噂が立つ可能性がなきしにも非ずだ」

「……どうしてそういう誤解に至るんですか」

菅原が小声でよく分からぬ事を言つていたが、まあいい。秋津

先輩は後輩には優しいんだ。

「しかし大丈夫なのか？ 法律的に」

「いえ、それはもういいですから」

「いや、よくない。作者の手が後ろに回つたらどうするつもりだ」「言つている事がまるで杭瀬さんですね。ここ数日で何かありますか」

杭瀬みたいとかは余計だが、何もかもありまくりだ。こつちはようやく嘉光から解放されたはずなのに全然そう思えない。寧ろ下手に心配誘つてるようで自由なんてありやしない。くそつたれめ。

「嘉光がいなくても、私は文芸部なんだよな……」

「当然です」

私の呟きに、菅原は変わらない笑顔できつぱりと言つた。分かつてるよ。大体私が嘉光のことしか考えてないなんてわけがない。あんなの私に被害がなければどうでもいいんだよ。一応信頼といつたものはあるのかもしねえが。

学校が見えてきた。夜であるつといつも通つている道なので、もはや私達が迷うはずもなかつたな。

「ん？ 私……達……？」

「……菅原、お前夜の仕事に行くんじゃなかつたか？」

「ですから学校に行くんです」

「さつぱり分からん」

「お互い様です」

どうでもいい話をしながら、私達は何故か……おそらくは一富さんによつて夜にもかかわらず開かれている校門を潜つた。

分からるのはお互い様……そうだよな。お互い分からぬ事ばかりだ。嘉光の事も、杭瀬の事も、他の文芸部員の事も……そいつらの境遇も考えも、私には分からぬ。逆もまた然りだ。

それでも そんな曖昧な人間関係でも、今みたいな閉塞的な状況よりは幾分かマシだ。

だからこそ、こんな馬鹿げた騒動はさつさと終わつてほしいと願う。強く願うよ、私は。

第四十一話 偽りのスパイ럴

校門を潜り抜け、暗い道を更に進む。

「夜のお仕事をしにいく」などともし警察に聞かれたら補導ほじゅつされてしまいそうな発言をしていた菅原すがわらだったが、しかし今も私についてきている。やはりたとえ如何いかがわしい響きの用件でも、目的地は一見縁えんが全くなさそうに思える学校に違いないらしい。社会には色々な仕事があるんだな。

こいつの言つていたそれが果たしてどういう意味だったのか、いずれ五世紀くらい後に私も知る時が来るかもしない。問題としてあげられるのは、おそらくその頃にはもう冬眠技術でも用いない限り、私が生きているはずがないという事だ。生まれるのが早すぎたな。

まあいいだろ？ こいつのキャラがつかめないのは今に始まつた事じゃないんだ。ええと……菅原。

それで、更に進む。どうでもいいが学校のどこに来いとか細かい場所聞いてないぞ。

「菅原」斜め後ろに顔を向けて言ひ。

「なんですか？」

「なんだつたらお前の仕事とやらを……いや、やつぱりいい

「だからなんですか？」

私は急いで言おうとした言葉を止めた。危ない危ない。菅原の仕事……夜の仕事というからにはおそらく良くて夜王やおう、悪くて遊び人といったところだろう。

ちなみに偶然か必然か、実際の遊び人は某RPGとは正反対に賢者にはならないという仕組みになつていて。何が言いたいのかと言ふと、要するに遊び人とか思えない嘉光君よしあきは死になさいという事。こういった結論に至つた時つて、何だか数学的な美しさを感じるよな。

「よく来たじやんか晴。それに蝉屋もいやがる」

『大曾根さん！』

一人して声のした方 なぜか下駄箱の田の前にあることで有名な禿頭の銅像の方を向き、その人の名前を呼ぶ。『丁寧にも真っ黒な学ランをホックまで締め、同じように真っ黒な短髪に縁の薄い眼鏡という一見面目な学生 でりながらその本質は誰よりも混沌を尊ぶ先輩、大曾根誠文さんが八重歯を見せながらこちらにグッと親指を立てていた。ちなみにその行動のモットーは「混沌のない人生なんて尻尾のないエビフライみてえなものだ」だとさ。私はそんなもの食べた事はないのだが、どうやら大曾根さんは名古屋人志向だつたらしい。

大曾根さんがいるならとその辺りを見回すと、当然のようにある人もいた。

「一宮さんも……勿論りますよね」

きつそうな目つきに一部が淡く染まつた黒髪、大曾根さんと並び文芸部を統率している立場で近頃「參謀」の名で呼ばれるようになつた一宮敦次さんだ。ちなみに読心術と言う特技があり、そのチートじみた読み性能にも定評がある。別に場所が学校と言つだけだからと考えたのか学生服ではなく私服姿で来たようで、私達の姿を一瞥するとそのまま携帯電話に視線を落とした。といふか今更な話だが、どうして私含め制服なんだろうな。まあ学生服は学生の特権だからと結論付けておくか。うんそうしよう。

そして、その二人だけだと思ったら、

「晴希」すぐ横から声がした。「ああ」と返事をしておく。

声の主は杭瀬だ。私たちと同じように制服を着てきていた。キャラ的には正解だな。

一見こいつの存在感は全くといいほどない。一見と言う言葉の用い方がおかしい氣もするが、おかしくならないのが杭瀬なんだよな。ちなみに大曾根さんにも「似非無口」と呼ばれていたりする。

それにして三年生一人とこいつの組み合わせは珍しい。じゃあ

誰といるのが自然かと問えば、これが私になつてしまつてしうおかしさだ。

「あー……」菅原が恐る恐る口を開ける。「よくわかりませんが、僕はこれからバイトがあるので」

「おい待て蝉屋」

呼び止めたのは当然大曾根さん。気持ちは痛いほど分かる。制服で学校まで来て「バイトです」なんていう奴は何だかなあ……。

「それなら承知してやるぜ。呼んだのは俺だしな」眼鏡を上げながら菅原に説明をする。

……あれ？ 何ですかその反応？ 置き去りなのは私だけですか？ 大曾根さんと菅原がよく分からぬ会話をしていく丁度よく私が置き去りにされていた所に、

「晴希先輩！」

またもや別方向から聞き慣れた声が聞こえた。ああ分かっている。朱鷺羽ときわだ。どうやらこいつは私服みたいだ。どうでもいいがこんな感じの私服 というかスカートを見ると羨ましく思える。自慢じやないが下の私服なんてズボンしか持つていらないもん。

「晴希先輩！」また朱鷺羽が呼びかけてくる。「はいはい」と私は適当に相槌あいづちを打つておいた。

「晴希先輩がいなくて私辛かつたんですよ！ だから会えると聞いてここに……」

「ああ、悪いな朱鷺羽」

そうだったなど納得し、その後輩の頭を撫なでてやる。本来こういった行為はあらぬ誤解を招きそうで嫌だが（とか向こうは最初からそのつもりだが）、まあ朱鷺羽なので許そう。同じ文芸部でありながら本来会えるはずの相手に数日とは言え全く会えないんだからそりや辛くもなる。

……だったら嘉光はどうなんだ？ とも疑問。あいつは辛いと思つていてるのか、それとも……思っちゃいないのか。いつか言ってた

「お前が違う世界に行つてしまつても、俺は絶対にお前を見つけ出

してみせる」なんて戯言戯言は、本当にただの戯言戯言だったのか。

もしそうだつたら、甚だ呆れざるを得ないだつ。

「それよりお前は無事だつたのか？　お前も内藤を（川に）落とした中心だつたんだろ？」

「あ、それなら参謀先輩がどうにかしてくれたんだと思ひます」

朱鷺羽の発言後に向こうの方から「誰が参謀先輩だ」という一富さんの声が聞こえてくる。なるほど納得だ。被害を私と嘉光だけに抑えられたのは、どうやら一富さんのおかげだつたらし。結果的に私は被害をこいつむつたわけだが、それでも流石まさかと言わざるを得ない。

「本当に仲がいいわね！」

更にそんな声が後ろから。そちらへ振り向くと、すらりと背が高く唇のきゅつと引き締まつた制服姿の先輩がいた。

「……ああ、こんばんは、天森さん」

「どうしたの？　テンションが低いわよ！」

「こんな状況でテンションなんて上がりませんよ」

天森小枝さん。見た目はまともなのに言動がやりたい放題という、若干大曾根さんに共通しているような所のある先輩だ。しかし何故かその大曾根さんの相方である一富さんにはあまりよく思われておらず、今も一富さんはこちらを見たや否や「ちつ」と小さな舌打ちをしていた。……ん？　一富さんが呼んだんじゃないのか？

「……まあいい、集まれ！」

一富さんが携帯をポケットにしまい、この場の全員　私と杭瀬、朱鷺羽と菅原、大曾根さんと天森さんに呼びかける。この場に嘉光がいれば、まさしく文芸部の中心メンバーが完成する事だろう。いやいなくていいけど。

「これから、一気に現状を打ち破りに行くぞ」

そういうと一富さんは、すぐさま全員に、的確に指示を出した。それぞれの状況などはどうなんだとも思ったが、それはもうとつぐに全員に訊いていたのかもしれない。ちなみにその指示、私はとい

えは……。

「秋津は新聞部に頼つていけばいいだろう。下手に動くな」との事。^{立場}が強いと色々大変なんだな。いやあ照れる……わかるか。^{窮屈}としか思えないね、例によつて。しかもあれだろ? 新聞部つてあの残念なのはつかりの……まあ文芸部が言えた事じゃないか。……まあかつて嘉光が死滅^{しおつ}させようとした新聞部に頼ることになると考えれば、「ぞまあみる」なんて思えてくるからいいけど。

そしてこの後、九時四十五分^{ごじゆん}ごとに帰宅。ちなみに家を出たのが

丁度その一時間くらい前だつたな。ああ眠い眠い。

その夜は酷^{ひど}い寝つきだった。毎晩私を苦しめていた気持ち悪い嘉光の幻影が見えなくなつて、それでかえつて眠れなくて。嫌なスパイナルだ、全く。

第四十一話 葛原水月の憤慨

……文芸部つて本当、なんなかしら？

つて、最近切実に思うの。

いやほんとに、外野のわたし、葛原水月からしてみれば、どうもただの変な人たちの集まりには思えないよね。

あんまりよく覚えてないけどちょっと前にお世話になつた一年の子がいて、確か…………萩原くんだったかしら？ いや、萩原くん？ うーん……顔は思い出せるんだけど名前がちょっと思い出せない……。まあいいわ。どうせ萩原くん（仮）で。

……あれ？（仮）ってなんかいたような氣もするわね。じゃあ（株）で。意味はよく知らないけどさうと同じような意味でしょ。うん。

さて、じゃあ話を戻して。その萩原くん（株）を見て、それからわたしの彼らに対する認識は変わつてしまつたの。そう、あの部は列じゃ決まらないつて分かつてるでしょ？

「だからなんなんだアホ。またあれか？ 電波でも受け取つたか？」

「またつて何よまたつて！」

結局その眼鏡をかけた一見真面目そうな男子生徒 大曾根誠文
（おおぞねまさふみ　おおぞねまさふみ）
に、わたしは少しヒステリックながら叫んでしまつた。周りの視線
がもう「相変わらずだな」って言つてるようを感じるのは気にした

くないけど。

アホじやなくて葛原、とも言いたかつたが諦めた。一度ある」とは三度あるといふか、彼にはその呼び名を修正する『がさうがさう』みたいだし。

「つていうか電波つて何！？」

「あれだ、おめーが今この時にも『組織』から送られてきているそれで」

「そんな設定初めて聞いたわよ！」

「俺も最近知ったことだ。けど認めたくなくても認めなきや行けないことってあんだよな……」

「た、確かに……わたしもそんな気が

「まあ嘘だけどな」

「嘘あつ！？」

いや、なんかもつす『ぐびぐべりしたじゃない』このわたしをこけにするなんて……！　ああもうつ！

わたしの横の席でいちいちちょっかいをかけてくる大曾根は今日も元気だった。もちろん悪い意味で。

わたしから見た文芸部つて、彼のイメージばっかりなのよね。あとは同じクラスで大曾根の友達の一宮敦^{いちのみやあつし}次つてきつそつな男子くらいい。いずれにしろ普通じゃない。

「ああもう、学生生活やり直せないかしら」

「留年しろつての。お前なら出来る」

なにその言い方。まるでわたしが馬鹿みたい！」

「……わたしはただ、テストで毎回赤点取つてるだけなのに」

「よく三年までこれたな」

偉そうに言う大曾根。きっと彼は三年間ずっとわたしのことを馬鹿だと勘違いしてるみたいだけど。

「それであんたは人のことをどういひふと言えるの！？」

「うんそりやあもう」

即答。同時に机の上に広げられる実力テストの結果表。わたしは

もうカツと目を見開いた。といふか瞳孔を見開いた！

「学年……四位……！？」

恐ろしい点数だった。偶然でもこんな点を取るなんて……。

「インテリ少年なめんなよ。インテルも入ってるんだぜ」「認めないわ！」

けどわたしは断固反対する。確かに大曾根は見た目はインテリっぽいけど言動があれだから、まるでキャラに合わないじゃない！

「こんなのは偽装よ！ 耐震偽装！」

「諦めるアホ。つと、おう敦次」

散々わたしを馬鹿にした大曾根はわたしとの会話を中断し、教室の後方入り口に歩いていった。

わたしもそちらに目を向けてみると、そこにいたのは大曾根の言つたとおり一宮敦次。大曾根はそのまま「それじゃな、アホ」と言つて一宮と話し始めた。

……まあいいわ、昨夜はテレビ見てて寝られなかつたし、寝ようかしら。はあ、でも……

ほんとに大曾根はうざい。彼と知り合つたシチュエーションは今思い出してムカついてくる。

一年の頃、運悪くわたしは学年ビリを取つてしまつたわけ。仕方ないの。あんまりにも物理の参考書の寝心地ねじむぢが良かつたからついつい……ごめんなさい。ただ自分の運のなさに呆れてね。小学校の頃から今までの十一年間ずっとといい点を取つてないつてどういう運の悪さかしら。まあ過ぎたことをだらだらこうのもなんだから続けるわね？

それでその頃は夏で、ヒアロンの風がわたしの席に届かないで、すごい暑かったの。

でもわたしは小学校の頃によく見た、男子が下敷きでパタパタしてたのを思い出して、「これだつ！」って思ったわ。

これこそまさに運命 と思つたけど運命の神様は残酷にもわたしに下敷きを与えたかった。でもそこで気付いてしまつたの。

だつたらプリントか何かでパタパタすればいいじゃないつ！ つてね。

思わず脳に電撃が走ったわ。それにアドレナリンも分泌されたわ。思えばそれは、わたしの発想の素晴らしさに我ながら打ち婢れていたのかもね。まさにライティング。……ところでライティングつてなんなかしら？ きっと英語のライティングみたいなものかもね。

……まあいいわ。それでわたしは颶爽^{さうそう}と机の中からプリントを出したわ。今のわたしは風とばかりに。

そしたら一人の男子が好奇の眼差しでこっちを見てたの。ああこの人はなんてミラクルをやつてのけるんだろうって言わんばかりに。

……そこまではよかつたわ。けどまさか

そのプリントが運悪く成績のすごく悪い成績表だったなんてね。あ、当然数値の上での成績なんだけどね？ 人の本当の良さって数とかじや表せないものだから。

だけど彼はそのわたしの成績を見て大爆笑^{だせい}。それ以降すごく話しあげてくるようになっちゃって、わたしも惰性^{だせい}でここまで来て。

それは今思い出しても最悪の出会いだつたわけで。

そういうわけだから別に彼とは男女の関係にあるわけじゃない。

いわば彼からすれば遊び道具みたいなもので、本当に不快。

二年内藤嘉光^{なこうよしむき}くんに愛される秋津晴希^{あきつはるき}さんなんかは羨ましくてたまらないわよ。……まあ、今はちょっとトラブルが起きてるみたいだけど。

机の上に教科書を出す。当然用途は枕。

一富の「大曾根、あれは失敗したものと考えてくれ」という言葉が聞こえたけど、その時わたしは何のことだかさっぱりわからず、そのまま眠りについた。

第四十二話 そして死んだ

正直言つて、おかしいんじゃないかと私は思つんだ。

翌朝の教室にて、私はそんな風に考えた。

おかしいというのは嘉光の事じやない。いや、確かにあいつのおかしさは屈指だが、もはやあいつにまともさ等というものは残されていないうちにも見受けられるが、御自ら簫巻きになつたまま川に飛びこむほどのマゾだが、今私がしているのは嘉光の話じやない。

しかしボロクソだな、嘉光。

嘉光の話でないとすればつまり私がおかしいと言つているものは自ずと絞られるわけで、文芸部諸君でもなく、新聞部諸君でもなく……すまん、人數的には全然絞れてなかつたな。

とにかくおかしいのはこの騒動、その起因だ。

簡単に言つてしまえば今こんな状況になつたのは、マゾの嘉光が阿呆みたいに体を拘束された状態で川に落ちていつたのが第三者のあらぬ誤解により発展していつた。こんな一連の流れが原因だそうだ。突つ込み所は色々あるだろうが、まあ私のいる環境は「テフオルト」でそんな感じなので承知してほしい。

だがそれらを差し引いても、普通それだけでこんな事態になるなんてのはありえない。たとえあんな文芸部であつてもだ。

そういうえば一年がどうこうと言つていたな。昨日の夜に朱鷺羽が言つていたが、一年がこの騒動を加速させていたらしいとか。実際の中心は一年だと同じような事を「いちのみや」宮さんも言つていた気がする。けど、それだけじゃないと私は思う。

さてここで突然話が変わるが、諸君は物質の燃焼において必要な三つを「存知」だろうか？ 酸素と燃料と、そして一定の熱だ。一度点火してしまえば後は燃焼熱で賄えるが、少なくとも火が点くまではそういうたった一定の熱が必要になる。確かにこの騒動という名の火を大きくしたのは一年が中心だろうが、火種は一体どこから来た？

嘉光か？

「……まあいいか。そんものは後から考えれば」

一つ溜息をつき、自分を諭すようにそう言った。とにかく私はこのままが嫌だからどうにかしようと考える。そこには一分の葛藤も必要ない。頭で考えるより先に体を動かせ。

「……ってか私のやる事つて」

つまりは全てあの仁科さん^{にしな}のいる新聞部に任せることじやないか。まあいや、それで何とかなるんだつたら。焦つたら黙田というなら私はそれに従うさ。

あとあれだな。邦崎^{くにざき}。そういうえばあいつの姿をここ数日見ていいないんだ。まあきっと大丈夫だとは思うが。あいつは私と違つてそういうのには巻き込まれない人間だからな。文芸部とかと関係ないし。強いて言えば私のクラスメイトであり、好意を持つている相手が嘉光つてとこぐらいか。もしかしたら平行世界にでも行つてしまつたのかもしない。なんてね、そんなのに騙されるのは新聞部ぐらいで十分だ。

ん？ 親友が心配じやないのかつて？ いや、あいつは腐れ縁ではあるが別に親友じやない。だつてあいつの方が私の事信じてないもん。

ふと杭瀬^{くせ}と目が合つた。ああ、なんか私は色々と疲れたから話さないようにしよう、と思って田をそらそうとした 所だつたが向こうから田をそらしたようだ。……ん、いつもの似非無口キヤラの杭瀬ならうぞつたいほど積極的に関わつて来るんだが。ひょっとして先輩方の意思か？

……しかしあれだ、こつ見ると何もかもが信じられなくなつてくれる。出来れば人間不信に陥る前に終わつて欲しい所である。

と、いつの間にか我らが担任が来ていた。考え方だけで時間が潰れてしまつ私つて主人公っぽくて案外かつこいいんじやないかと思うんだ。冗談に決まつてるけどな。

かつこいいと言えばどうやら私のファンとかほざく奴らが全校生

徒の36%（うち男子31%、女子5%）いるそうで、その主な理由が「かつこいい。ゾクゾクする」「ツンデレっぽい。というかまさしくツンデレ」等らしい。それって単に物事を斜めから見てるとかそれだけの意味なんじゃないかと私は思うんだがどうなんだろう。自分で言つのもなんだが。

「秋津……おい秋津」

「……はい」

担任に名前を呼ばれ、慌てて返事をした。どうして出欠を取る時に男子から名前を呼ぶんだろう。私とかは出席番号が若いから女子からだと本当に真っ先に回ってくるのにな。男女差別だ。

しかしもうあれだな。視線は依然として私を取り巻きつづけているわけだが、この視線に対しても私はある程度の耐性が出来てしまつた。喜ぶべきか悲しむべきか。どっちにしろ今はそんなゆとりなんてないだろうな。

「……邦崎は今日も休みか」

「平行世界に行つてしまつたそうです」

「そうか」

そんな担任とクラスメイトのやりとりが耳に入る。おいおい、初耳だ。というか何故そんな所で私と発想が被るんだよ。

やがて出欠を取つた担任が出て行つて、私の前に現れたのは、

「……なんだ、モブキャラか」

「俺だよ！
幡野！」

私称モブキャララこと幡野だった。誰だつけこいつ。

「何の用だ。私は今忙……」

立つている幡野の顔を見上げた。どんな時でも相手の顔を見て話すのが礼儀だからな。

「……どうして鼻にティッシュが詰まつてるんだ。鼻炎）か？」

「鼻血だ。昨日秋津のせいだな！」

幡野は大層憤慨した。そういえば昨日……ああ、私があんな本をくれると聞いてこいつは……。

「……気持ち悪い奴だな。この妄想族め

「どうして俺が責められるんだよ！」

「黙れ。私はさつきまで男女差別を憂いていた所なんだ。警察呼ぶぞ」

「呼んでも来るもんか。今これだぞ」

「……それもそうだな。これから公務員は」

幡野の見解に、私は吐き捨てた。今実際はこんな混沌とした状況にもかかわらず教員の一人すら気付いてないんだ。こんな調子で警察なんて来る訳ないよな。

「それでどうした。詭弁論はお断りだが」

「いや、今は鼻血がやばいしそんな力はない」

ああなるほど、だからあのうざつたい笑いもなかつたわけか。それにしてもどうして一日経つてもたかが鼻血ごときが止まらないんだろうか。普通なら三分間あれば止まると思うんだが。

そんな私の疑問など意に介せず、幡野は続ける。

「そうじゃなくて、部長からの伝言だ」

「仁科さんからの？ 私がどうすればいいとかか？」

「おう。『もういつその事新聞部へ来ませんか』だとぞ」

「まだ諦めてなかつたのかよ、あの人……」

本気かどうかは知らないが、いずれにせよ今の私に出来るのは呆れるしかなかつた。本気でやつたら文芸部に消されるぞ。

「断るのでよろしくな」

「即答だな。ま、あれをくれるつてんなら別にいいけど」

幡野もまた呆れたようにそう言いながら自分の席に戻つていった。

「あ、後な！」

幡野の背中に声を掛ける。幡野は「なんだよ」と振り向いた。

「鼻血が止まつたら、私に言えよ！」

「お前また俺に鼻血を出させる気だろー？」
よく分かつたな。くそ、鋭い奴め。

私は死んでいた。

当然比喩的な意味でだが。的確に言えば死んだように眠っていた。
おお晴希よ、死んでしまつとは情けない。情けない？ 全然情けなくなんかない。

自慢できる事ではないが、近頃私の背負つてゐるリアルプレッシヤーは尋常じやない。たとえほんの少し慣れたと言つてもだ。

というわけで真面目な事に毎時間起きて授業を受けていた私も流石に寝る事にしたというわけだ。成績、下がるかもな。ここ最近起きてたといつても全然集中できてなかつたし。

寝てたのは大体一時間目から三時間目まで。先生方は起こそうと思つたがクラスメイトたちの視線に気圧されスルーするしかなかつたらしい。そんな気配りが出来るなら最初から私にこんなプレッシヤーなどかけないで欲しかつたが、まあ言つても無駄だろうな。

それで授業中、寝ぼけ眼で机から起き上がつた。右手が痺れる。あと少し額が痛い。鏡で見たら真っ赤になつてゐるだらうな、なんて考えていた所で

遠くで爆音が響いた。

なんだなんだ、ついにテロでも始まつたのか。

第四十四話 大脱走、ヴァルハラ、邂逅

その窓から聞こえてきた爆音によって私の意識はかの日薬のコマーシャルのようにまどろみの世界から一気に引き戻された。……ごめんやっぱまだ若干眠い。

校内で私をずっと見張っていたであろうクラスメイト達も、今は皆戸惑いの表情を浮かべている。まあ当然だろう。普段授業中どころか、学校で聞こえる音じゃないもんな。結構遠くから聞こえてきたようだが、どうせ近くでも遠くでも同じようなものだ。いや寧ろ見えない方が怖い事もある。一種のホラーみたいなもの。

しかしこんな反応をするなんて、こここのクラスメイトどもも案外普通の人間なんだな。やっぱり思い込みは良くない。

黒板に「BURNING！」だの「PASSION！」だと偏つた方面的の英単語ばかりを僅かながら、しかし確実に右上がりに羅列させている英語教師が「お前ら迷うな！ もつと自分の思いを俺にぶつけて來い！」だと怒鳴るが、そんな事を言わると余計戸惑うだろう。現にそんな英語教師の話を聞いている奴は一人たりともいなかつた。

杭瀬くせはといえば、いつの間にかどこかに行ってしまっていた。また例の特殊能力でどこかへ抜け出したんだろう。**最強**だなある意味。たとえ電撃文庫的な世界観でも何の問題もなく闊歩していけそうな奴だ。

……あと約一名、鼻にティッシュを詰めたでかい馬鹿がブンブンと手を振り回していたようだが、私はあんな奴知らない。知らないつたら知らない。

さてと、おかげで授業は滅茶苦茶だ。担当が担当なので元々滅茶苦茶なのだが、世の中には突っ込んだら負けと言うものがある。嘉光よしのクラスとかもまさにそんな感じらしい。

そう言えば嘉光はこれをどう思つているんだろうか。いや今そん

な事考へても仕方ないよな。

さて、おそらくこれは大曾根さんの仕業だ。他にこんな事をやつてのける人間なんて考えられない。一富さんもやる可能性はあるが、まあ一緒にだな。というか

「早すぎるだろ？、常識的に考へて……」

「何かやるぞ」的な流れを見せたのが昨日の夜だった。それから半日少ししか経つてないわけだ。……いや、どうせ仕掛け自体は昨日の内にとっくに用意していたんだろうけどな。

というか、本当に警察は何をやつているんだろうか？ 爆弾つて持つてるだけで犯罪じゃないのか？ 非核三原則と同じで。それとも大曾根さんは軍の関係者か何かか？ ひょっとして背後に秘密組織もあるんじゃなかろ？ ファンタジーだな。

まあいい。の人たちが何者かなんて今はいい。それこそ突っ込んだら負けと言う奴だ。とにかく状況が混沌としてきたので

「……トイレに行つてきます」

逃げなきや駄目だ逃げなきや駄目だ。お暇させていただきますと言つたように私は教室を抜け出した。文芸部に行けなくなつてから余計に私の頭がアレな方面に行つてしまつた気がするのは、あくまで氣がするだけであつてほしい。別に私の頭の中に妙な世界が出来上がつていたわけじゃない。

と、私は信じたい。

さてどうするか。「新聞部に任せていろ」なんて一富さんは言つていたが、肝心の新聞部員はあの様子である。とりあえず階段の方にでも行くか。多分あいつがいるかもしれない。あくまで「かもしない」であつて、根拠なんでものはないが。

そしてやはりというか、杭瀬はいた。階段の付近に来ると声が聞こえ、そちらに行ってみるといたのは案の定そいつだったという訳だ。幽霊なんかいない。どこからか声が聞こえてきたらそいつは多分似非無口キヤラなんだ。

もしかすると私を待っていたのかもしれない……なんてな。きっと他の理由だ。

ちなみに爆音はさつきの一発に留まらず、まるで隅田川花火大会の如く続けざまに鳴り響いていた。音がするのは体育館の方、こことは位置的に正反対の場所らしい。

例の視線はと言えば、これが実は何故かは知らないが今現在剥がれている。罠というのも考えられるが、悩むよりはさっさと前に進んだ方がいい。……何だか私のキャラに合わないよなこれ。なんだなんだ、新手の洗脳方法なのかこれ？ そんなに私の人格は駄目なのか？

「待つてた」
「冗談だろ」

平然とした顔であるで私の心を読んだかのような発言をする杭瀬に、私はとりあえずいつものように返しておいた。杭瀬はやれやれと溜息をつくが、溜息をつきたくなるのはこちらの方だ。まあいつもついてるんだが。

「お前から話しがけてくるなんて珍しいな。何か用でもあったか？」
わざわざこんな時に。まあ同じように教室から飛び出した私が言える立場じゃないか。と、杭瀬は私から目を逸らし、「晴希と話さないと、私は死ぬから」
「嘘つけ。お前がそんな内藤みたいな奴だつたとは初耳だ」
私は弄るような事ばっかり言いやがって。朱鷺羽でもそんな事は言わないぞ。それにしても爆音が五月蠅いんだがどうにかならないのか。

「私と話さないと、晴希は死ぬから」
「そこで私に責任転嫁かよ！」寧ろこいつと話した方が寿命が削られそうだと思えてくるんだが。
「そう。この世界の森羅万象、実は全部晴希のせいなの」
「違う！ 全部内藤のせいだ！」
「その返し方もどうなの」

杭瀬はまた溜息をついた。だから溜息つきたいのはいつちだつての。

「それで、その晴希と話さないと死ぬ嘉光はどうしてゐるの？」

「そうだよ。だから嘉光はどうしたんだ？ 新聞部騒動の時にあそこまで暴れてたから、考えられるのは」

「魂が抜けてるか、死んでるか、あるいは仙人になつたかだらう」

そう言いながら私は、外の方に目をやつた。空は広いが地は狭い。いつその事鳥になつてしまいたい。……ごめん、やつぱり人間様の方がいいや。未練を持つて何が悪い。

「どつちにしろ晴希は寂しいと」

杭瀬はそんな結論を下す。ちょっと待て。寂しいんじゃなくて寧ろ凄い窮屈なんだが

「ま、お前には分からんか」

いつの間にか五月蠅い爆音もやんでいたので、そう聞いて私は話を切り上げた。本当、何も得たものがなかつたな。だがもしかすると誰かが何かをやつていた可能性は十分ある、というか多分そのうでので期待しておくか。

と、教室に戻ろうとした所で

「やばい、トイレ行かなきやな。トイレのトローチの……」

私は訳の分からない事を言いながらトイレに行く一人の生徒とぶつかった。身長の差があるせいと、そいつにとつては肩がぶつかつただけでも私にとつては顔面の位置だつたりする。顔を抑え、そいつの顔を見て、やつと私は気付いた。

そいつには、ようやく会えた、といつべき所だらうか。

しかしさかこんな呆氣ない出会い方をするとは思つても見ず、私はそいつへの反応に暫くの時間を要したが。

「……お前」

よつやく口から出た言葉は、そんなありきたりな台詞だった。

内藤嘉光は、まるで済まないといったような顔をじりじりに向けてきていた。

第四十五話 いつそ溺れてしまふなら

秋津晴希が死んでいたその頃、一年の守坂椎乃もまた死んでいた。当然ながら両方とも比喩表現だ。

その授業の間、どう米無しで生きていくかという深い悩みの中に守坂は浸かっていた。この状態が長引くといずれは溺^{おぼ}れてしまうだろう。どうせ溺れるなら米の中で溺れた方が百倍いい。米を食べられない人生など死んでいるのと同じだ。

ならばどうするか。またみのりに分けてもらうしかないのかもしないが、それは少し気が引ける。前にも分けてもらつた上、それに対し自分は何もしてやれていない。これでは面白ない。

だが焦りは禁物だ。まだ自分が動くべき時じやない。ここで焦つて動いたら、今までの文芸部達の努力も水泡と帰す。

だから待つ。自分の動くべき時が来るまで。

自分は別に秋津晴希が、内藤嘉光^{ないとうよしあき}が、文芸部がどうなろうが興味はない。大切なのはただ米と、親友だけだ。自分にはそれだけしかない。そしてそれだけでいい。

しかし、米が欲しい。米が無いと何を食べても……正直言つて断食^{だんじき}に等しい。

こちらが何度も謝ろうと、母親は決して許してくれなかつた。そこまで玉子和食説^{りつ}に拘るのか？ 否、母の事だからこのような事態にどう自分を律するか試しているのかもしれない。そういう親なのだ。この騒動が終わる頃には何とかなると、守坂椎乃は何となくだがそう予測していた。

今黒板に数式を綴^{つづ}っている一年目の若い教師の声など聞こえないまま、何気なくノートに鉛筆を転がしながら考える。ちなみに守坂家ではシャープペンシルなど使わず、当然の如く彫刻刀^{ちようこくと}で鉛筆を削つている。

「いつまで待てば……」思わず考えた事が口から漏れる。誰かに聞

かれたかもしぬないが、今更どうでもいいだろ？」「どこかで爆発でも起きれば……」

その時、爆音が聞こえた。

いきなりの爆音に生徒達は 平然としていた。強いて言えば朱鷺羽だけはあるおろとしていたし、普段こんな事で驚かない守坂も自分が何気なく放つた一言が本当に起きてしまった事に内心驚いていた。

誰の仕業か、と聞かれればクラスの大半は答えられるずだ。いや、逆に知つてもしらばっくれるかもしぬないが、いずれにせよあの文芸部のおかしさは誰もが知つてゐる事である。現在の一年生も違つた意味でおかしいが。

が、平然としてると そう思つたのもつかの間、生徒達は顔を見合わせ、一斉に机から筆箱を落とす。そして教師が驚いている隙に全員教室から出て行つた。授業をしていた教師が何か言おうとするとき「今から抜き打ちの避難訓練なんですよね！」早く外に出なきゃ！」と言い残していくが、勿論避難訓練などではない。

同じ一年の別クラスも同じ考え方だつたようで、多くの生徒達が騒がしく廊下を走つていた。避難訓練といいながら押さない・走らない・喋らないの三つは悉く無視。

そうして教室に残されたのは頭を抱えながら唸る教師と呆然とした朱鷺羽、そして米を断たれた守坂の三人だけだった。

そんな教師を尻目に、守坂の方へ朱鷺羽は向かう。その朱鷺羽に守坂は口を開いた。

「それで」

「うん？」

「何かあつたの？あの文芸部が何か言つてた？」

「あ！ すっかり忘れてたんだけど」

朱鷺羽は昨夜の事をやつと思いつ出し、それを守坂に話した。本当

は学校に来たらすぐ話そうと思っていたのだが、久しぶりに晴希に会つたという事もあり、記憶から抜け落ちていたのだ。

「それでも早い……」これが文芸部……話を聞いた守坂は感心しきつてしまつた。

「そうだ椎ちゃん！」

もうそこに教師などいかのように朱鷺羽は叫ぶ。

「私たちも早くしないと……」

だがそこで「何もなかつたので落ち着いてください。決して教室から出ないで下さい」といった内容の放送が聞こえてくる。これではもう自分たちは出れないだろう。どうせ他のクラスメイトは鞄を取りに来るまで帰つては来ないだろうが。

「……先輩たち、大丈夫かな」

「さあ、今は分からない」

朱鷺羽の問いに、守坂は答えた。

「……確かに、放課後になつて先輩たちに訊かないと……そうだ！」

「今度は何？」

「椎ちゃん、放課後にうちの部室に来てよ！」

親友の言葉に、守坂は頷いた。今日は予定もないし、文芸部と接触してそれがいいほうに働くなら、断る理由など何もなかつた。

ちなみに、授業をしていた教師はその精神的ダメージにより学校に休養を申請したが、聞き入れて貰えなかつた。

第四十六話 最近よく見る夢のJAN (漫畫)

やつと彼の登場ですね、ええ。

第四十六話 最近よく見る夢の「」と

やけにあつけなく、トイレだの何だのとくつちやべつていた嘉光よしあきに出会ってしまった。

「つと、ごめんな！ ごめん！ 僕が悪かった！」

その嘉光はと言えば、嘉光の分際で私にぶつかつておいたことを多少なりとも申し訳なく思つていろいろと、こうやつて私に申し訳なさそうな顔を見せていた。

ま、私は分かつてゐるけどな。ああいつ外面しても内心では気持ち悪いくらい喜んでるって。全くこれだから嘉光は。気持ち悪い。ちなみに杭瀬くわせは空氣を読んだつもりなのか階段の奥に潜んで姿を見せない。おいこら、お前空氣読むな。そこで出てくるのがお前じやなかつたのか。

私が何か言う前に、嘉光は話を続ける。

「怪我けがはないか？ ないみたいだな、うん」

「…………？」ああ、この沈黙はかの似非無口キャラのものではなく、私のものだ。

嘉光の台詞に違和感を感じ、私はそれを流せずに入られなかつた。どうも胸に突っかかる。正直言つて、内藤嘉光ないとうと名の一人の変態が久し振りに会つて言う発言ではない気がするのだ。

そんな私の疑念も気にかけず、

「んじゃ大丈夫みたいなんで。あートイレ行かなきゃなトイレ！」

そういうつて嘉光は颯爽さつそうと走り出していつた。

「…………」

私は何も言つことが出来なかつたが、どうも明らかにおかしいらしい。ノロウイルスにでも感染したのかもな。うわ、じゃあ死ななきや直るのか。いやでも、恋は精神病の一種だつて言つてた人もいた氣がするぞ。じゃあそつちも消えないかな。無理か。したら死ぬかな。

そんな複雑な思考を私はしていたわけだが、

「んじゃ、綾女も待つてるとかもしれないんでな！」

「…………ああ！？」

走り去っていく嘉光の言葉に私は、どうも不意を突かれたような気分を覚えた。綾女……あのクラスから消えた私の腐れ縁、邦崎綾女の事か？

何か訊こうと思ったが、気がつくと既に嘉光はトイレの方に消えていつてしまっていた。

「…………どういう事だ？」

「いつたい何なんだ？　どうしてこうなった？」

秋津晴希十六歳、一気に話が分からなくなりました。

「と言うわけで早速説明をしてくれ、杭瀬」

「…………そこで丸投げ？」

私があまりにも考えるのを放棄していたおかげで、杭瀬に呆られてしまった。どうかと思うかもしれないが、私は四六時中こいつに呆れ返っているのでお相子と言う事でいいだろう。

「…………まあいいけど。まず嘉光の話から」

杭瀬は仕方ないとばかりに話を始めた。最近なんだかこういった杭瀬の演技力が上がっている気がする。前はもっと無表情な感じだったと思うが、大方私を馬鹿にするために鍛えたのだろう。誰だ教えた奴は。

…………そういえばさつき階段を昇降していた生徒がいたような気がするが、大丈夫だったのだろうか？……きっと大丈夫だろうな。杭瀬の事だし見つかりはしなかつただろ。

最初に言つておくと、これは夢だ。最近よく見る、夢の話。

何故か俺は、高い橋の上……それも、手摺りの外に立つていた。

しかも何故か体を拘束されたせいで、もう俺は身動きなんか取れやしない。一体誰が結んだんだろうなんて疑問も湧いてくるが、まあ夢に理屈なんていらないよな。もしかしたら最近見た映画の影響で、危ない組織に捕まつたスパイって設定の夢なのかも知れない。それで、ふわっと言つた感覚。それも一瞬で、直後に重力を受け加速していった。言つてみればバンジージャンプみたいな感じだな。当然紐なんてないけどさ。

で、目に映るのは真下の川。それがどんどんどんどん近づいて

て
ばっせーん！

となつてしまい、それも一瞬の事

ゴンツ！

と鈍い音。どりやーら川底に頭をぶつけてしまつたらしい。そして夢とは思えないようなリアルな痛み。あれに比べれば小学校のころにやつてたプロレス、じつこなんて児戯だ。

そんで朦朧とする意識の中、また浮かび上がってきて

そこで田が、覚めるんだ。毎回毎回。そんな俺が頻繁に見る、夢のない夢物語だ。気持ち悪いと言つか何と言つか……まあ、小説とかならこれが複線になつたりするんだろうけどな。

さて回想はここまでにしておこう。トイレにも行つて気分転換もしてきた所だし。

「えつと……な、伊藤君つ！」

「おうどつした綾女」

ヘアピンの女生徒、邦崎綾女がいつもガツチガチに緊張した面で話しかけてきた。ちなみに俺は伊藤ではなく内藤だ。

どうも俺と話すときだけはいつもこんな様子で、俺の事が苦手なのかもしれない。多分何かの罰ゲームか何かかな。ただ俺はこいつといるのは嫌じゃないんだよな。むしろ好きつて言つた方がいいくらい。だからちょっと残念ではある。だからこつちからの歩み寄り

もしてたりするんだが、こっちから行くと向こうは頻繁に逃げる。
かくして二人は、微妙な間合いを保っていると言つてもいい関係なのだ。

……とにかくこいつ、確か元々このクラスじゃなかつた気がする
んだけどな。ま、来る者は拒まないけどさ。賑やかになるし、俺に
とつては嬉しい事だしな。

「な、伊藤君はっ！……最近部かつ……部活とか、行かない……？」

「部活か……」

「うん……」

何だからもうカミカミでどうしようもない綾女の質問に対する答え
をどうなんだと思いながらも考える。

「何でなんだろうな……」

結局出たのはこんな答えだった。釈然としない。俺も綾女も。
実は俺の入っている文芸部の件は自分でも気になってる事で、前
は毎日行ってたのに何故だか最近は全然行ってなかつたりする。第
一として前までは毎日活動したりしてたんだろうか。

何が引つかかる。いつも「死ね」とか「地獄に落ちろ」とか俺
に喝采かっさいしてくれるクラスメイト達も何だかよそよそしい気がする
し。

もしかしたら俺は、何か忘れてしまっているのかもしれないな……

……。

第四十七話 友情と意地と時々疑惑

「内藤はおそらく記憶喪失だ。そして内藤派のリーダーは……邦崎綾女だら」

すごく騒がしかったその日の放課後、約束したとおりに椎ちゃんを連れて行つて文芸部室に入つてみると、参謀こと一宮敦次先輩が不意に話を切り出し始めた。

「ええと……」

あまりの話の唐突さにわたしは、その言葉がわたしたちに向けられたものだとはつきりと気付くまで開いた扉の前で立ち竦ぐしかなかつた。

「いいから入れ。朱鷺羽、そして守坂椎乃」

参謀先輩はまるで椎ちゃんの存在までも当然のように捉えていた。参謀先輩ならありえると思つたけどそれでもさすがに、参謀先輩のこの落ち着きようと対称的にわたしは驚きを隠せなかつた。

「あと、その呼び名はなしだ」

「は、はい……」

驚くべきことに、参謀先輩はどうやらわたしの心の中まで見通していたらしい。晴希先輩がたまに「読まれたか」なんて呴いていたけど、それはこのことだったのかもしれない。晴希先輩への感心と同時に、わたしは参謀先輩に感心した。すごいです、参謀先輩……。「だからなしだと言つてはいるのに……」

参謀先輩が半ば何かをあきらめた様子で、しかし静かにしゃべり始めた。

「さて守坂椎乃、お前は友人である朱鷺羽のためこの騒動を片付けんとするためここに来た」

椎ちゃんのことなのにアシ承もといひず、まるで相手に教えるみたいに説明をする。

「そして今日誠文の起こした騒ぎ。そこで一年の他の生徒が勝手に

出て行つてしまつた時、朱鷺羽がお前を文芸部に行くよつ誘つた

あれ、やつぱり大曾根先輩だつたんだ……。

不意にパソコンを見ている大曾根先輩と目が合い、こつちに向けて親指を立ててくれた。大曾根先輩、もしかしたら前の新聞部とのいがらみに入り込めなかつたせいで鬱憤うつぶんがたまつてたのかな……。

「お前は基本的に必要に他人と接触しない人間だからな。数少ない理解者であり親友である朱鷺羽の力になつてやろうと考へ、最善の手を選んだ」

という事だ、と参謀先輩がこつちを見る。見事なまでに完璧な説明だつた。クラスでは「一宮敦次は現状でこの学校の頂点にいる」とか言われてたし晴希先輩もそんなことを言つてたけど、その話は何の誇張も偽りも含まれてない、純粹な情報だつたみたい。……問題は、誰に説明してゐのかつて事だけど

だけど

「違います」

なぜか椎ちゃんは否定した。

「自分とみのりが　朱鷺羽が親友であることには肯定ですが、自分はこの騒動に興味など全く抱いていません」

「それで、ただ単に朱鷺羽が誘つてきたから來たと」「はい」

椎ちゃんはわたしのために……違う、わたしのせいでここに来る事になつたつてこと?　だとしたら……。

けどそこで、わたしが一人勝手に悩んでいたところで、

「なら守坂」参謀先輩は相変わらず落ち着いた様子で一息ついて、また椎ちゃんに呼びかけた。「頼む。手伝ってくれ

「……なぜ?」

そして椎ちゃんは相変わらず参謀先輩の言つことに対する反発していた。

やつぱりそなのかな?　意地張つてるのかな……?

「蹴りますよ?」

そしてなにやら椎ちゃんが、席を立つて近づいてきてる参謀先輩を神経質に威嚇した。けど参謀先輩は怯まずに、逆に「何を言つた？」なんて聞いてきてる。椎ちゃんって意外とけんかつ早いんだよね……。

そうして椎ちゃんが足を振りかぶったときに、

(米が欲しいか)

参謀先輩はわたしに聞き取れなかつたくらい小さな声で話した。椎ちゃんの左足が止まつて、ちょっとだけ首を縦に振るのがわかつた。

(だつたら手伝ってくれ。お前の力が必要だ)

「……仕方ないです。どうしてもというなら手伝いましょう」

そういうて椎ちゃんも足を戻した。何の話をしてたのかは分からなかつたけど、一応椎ちゃんも文芸部とつながつたみたいでわたしは安心した。

「ところで邦崎つて人は誰なんですか？ その……敵のリーダーっていつ……」「

「秋津の親友だ」

晴希先輩の？ これは敵がまた一人……。

「お前は本当にずれてるな」

参謀先輩は理由も分からず呆れていた。

ちなみに今日のあの爆音について聞こうと、菅原くんの出した蝉料理を当然のように放置していた大曾根先輩のほうに行くと、

「大曾根先輩、それは……？」

「ああ、知つてつかこれ？」

「これは……」「

なんだかパンツ一丁の男の人たちがレスリングをしている、左から右に文字が流れてる動画を見てた。……一度見たら頭から離れないような映像だった。

「つと、別に俺はこんな興味ねえけどな」

なんて言われたって、わたしのその大曾根先輩への疑惑が晴れる
までは結構時間がかかつたわけだけど、それはまた別の話。

第四十八話 クロスワードを埋められれば

「内藤はきっと記憶喪失。それで内藤派のリーダーは……邦崎綾女だと思うの」

あの嘉光との接触後、依然として場所は階段。私が説明を丸投げした。否、自然の摂理によつて説明をせざるを得なかつた杭瀬曰く、状況を簡潔に説明するとそいつた感じだそうだ。まあご存知というか我ながら性格がアレな私の反応といったらまあ当然の如く、「はあ？」

こんな感じ。多分これまで私の言つた「はあ？」の中でも屈指のものだつたんじゃないかと思う。相当の呆れ力（反応に関わる数値。これが高いほどその反応が呆れている事になる）を持つていたんじやなかろうか。今の杭瀬の話は少々、というか普通に奇抜すぎた。大体まずだ。記憶喪失つて都市伝説だろ？ 加藤鳴海は左腕を失つて瀕死になつた際に記憶を失つたが、あの嘉光が五体不満足になるなんて図は考えられやしない。腕が落ちても接着剤でくつつくんじやないか？ たとえそれで駄目でも糸で波縫なみぬいでもすれば何とかなるさ。返し縫いは面倒だが波縫いならきつと早く終わるだろう。当然、疑問点はそれだけじゃない。というかもう一つの方がおかしいのだ。記憶喪失の件は嘉光なら いや逆に嘉光だからこそなるつて展開も考えうる。いい音立てて川に落ちたもんなあれ。や、そうじゃなくてだな

「どうしてそこで邦崎が出てくるんだ？」

邦崎は確かに親友かというと怪しい。中学の頃からの腐れ縁で私の事をよくよく知つているにも拘わらず、いつもいつも変な疑問を抱いてその度に呼び名は「晴希」から「秋津さん」に変わる。それに勝手に嘉光に惚れ、勝手に私をライバル視しあげたりした。

が、つまらない誤解をすることはあれど、あいつは絶対に私を欺くような事はしないし、そんなつまらないことを考え付く筈はずも

無い。

「もしあいつがこんな事態を招くような奴だったら、それこそ異世界だろ」

異世界。召喚。転生。どこかの主人公ならきっと「私は変わったんだ」なんて言つかもしれない。あるいはダークサイドに墮ちた哀れな人間か。どっちにしろ厨二病あがつて括りだな。

……ありえん。どれだけ足搔あがこうが逆立ちしようが、変えられないものはあるんだ。そんな楽に変われるなら今頃私はこんな生き方してるかよ。人の性格なんて育ってきた環境で大体は決まるんだ。つまり、だ。私達は何だから言つて植物と同じなんだ。どこかに根を張つてしまつていてそこから足を踏み出せやしない。できるのはただ腕を伸ばす事だけで。

……なんてね。ついよく分からん相田みつあいだをみたいな事を徒然と呟いてしまつた。なんて気持ち悪いんだ。人生にも役割つてものがあるんだ、気持ち悪い役割は嘉光だけでいいのに。まあとりあえず、邦崎はそんな奴じやないつて事。あんなのが変われるわけが無いだろ。

「……ま、お前の戯言ぎごんは冗談半分に受け止めとく。さつさと教室に戻るぞ」

そう言つて教室の方へ歩き出した。杭瀬は何か言おうとしていたが正直こいつと会話するのは疲れる。だからさつさと背を向けて闇から抜け出し、教室の方へさよなら。私はホームに戻る。だが杭瀬は、

「おいどうした杭瀬。行かないのか？」

「晴希は先に行つてて。放つてくれていいかから」

なんて、動こうとはしなかつた。流石、ジョークが通じなかつたのがそんなに嫌だつたか。まあこいつだつたらサボつたところで気付かれなさそうだもんな。私は多分欠席ついてるけど。あー、欠席か……。

「……お前はいいよな」

そんな下らない事に半ば羨望せんぱう半ば呆然、そうした微妙な心境で私はその場を去つた。

そうして私は拉致されていた。右には眼鏡左には眼鏡。眼鏡めがねメガネ。放課後ふらりと歩いていたら突如鮮やかに連れて行かれましたで「ござるの巻。連れて行かれるときに嘉光のように簾巻きにされてしまったのはどういう因果だろ？。

ところで私は、こんな状況に非常に見覚えがある。といつか眞面目に言うと、それは近頃私の方から歩み寄つた方々であり、また文芸部とも因縁のある相手であり。

「では話をしましようか、秋津さん」

そして当然の如く三年の仁科由宇にしなやう新聞部の部長さんが、テレビの向かい側からそう声をかけてくるのだ。ちなみに左右の新聞部員達を見回してみると、やはりというか鼻にティッシュを詰めたでかい奴がいた。相手にしどと面倒だからスルーしておぐが。

というか本心から言わせてもらえば仁科さんとの話だつてものすごく疲れる。それはもう杭瀬とかと同レベルに。……けど、やらなきゃいけないんだよなあ。とにかくここで新聞部としつかり呼吸を合わせて事態を解決に導いていく事が私のすべき事なのだから。世の中つてのは決してクロスワードみたいにピタリと埋まるようには出来ていないわけで、そこには絶対に「やりたくないでもやらなきやならない事」つてのが生まれてくる。はて、そいつはどうしてだらうか？ 私は受験生でもないんだがな。世の中理不尽すぎるだろ。

「はい、仁科さん」

葛藤かとうしている余裕も無い。いいや、要是早く終わらせればいいんだろ？

「文芸部の動きについて、何か知っていますかね？」

そう訊いたのは私の方。今この状況、文芸部に近いのは私より新聞部の方だろう。昨夜は朱鷺羽達と久しぶりに会つたが、所詮は所詮会つただけ。仲良くお互ひの立場を伝え合つなんて事も残念ながらなかつた。

「聞いていませんね」

だがあつさりと否定されてしまつた。「そうですか」ととりあえず返しておく。大体予想は出来ていたのでそこまで辛い事でもなかつた。寧ろ辛いといつたら嘉光と出会つてしまつた事自体が辛い。ああそうだ、嘉光と言えばだ。

「知つてますかね？ 内藤の事」

「彼がどうかしましたか？ 未だに彼の情報は掴めていませんが」

「それが今日、会いました」

私がその事を告げると、部室内が沈黙したと思つといきなり騒がしくなり

「な、なんだつてえー！」「な、内藤が……!?」「どうこう事だ！？ 平行世界にいたんじやなかつたのか！？」「まさかとは思うが……あの羅生門を抜けてきたのか……！？」「畜生！ この世に神はいねえってのかよ！」「……ああ、無事にこの戦いが終わつたら付き合つてくれないか？」「つん……」「おい待てそいつは俺の嫁だ」「違う俺の嫁だ」

……そういえばこんな奴らだつたな。やっぱり帰りたいかもしない。

「それで、詳しく述べてもられないでしょつか？」

こう普通に訊いてくれる「科さんがまともに思えるのはどうしてだわつ。

……と思つたら「科さんは知らないうちに私の田の前にコップに水道水を入れて勧めてきていた。安定の前言撤回。

「別に何もありませんでしたよ。……いや、何も無かつたというの

が異常ですが

「といつと？」

仁科さん、コップから一瞬でもいいですから視線を外してください。そんな凝視されるとまるで水を飲まないこちらが悪いみたいじゃないですか。

仕方ないので水を飲んで一拍。

「内藤は、もう私の知っている内藤じゃありませんでした」

「ほりそりだ！ やつぱりそりだ！ 羅生門^{ヘルズ・ゲート}の闇の力に捕われたんだ！」 「何やつてんだ神様仕事しろ！」 「やつぱり戦いは避けられないかも……」 「そつ……」 「おいだからお前何俺の嫁口説いてんだ！」 「よろしい、ならば戦争だ！」 「嘉光さん×闇嘉光さん……」 意外といけそうですねこれ！ むはーー！」

「つるさーお前らちよつと死ね。

とにかくだ。さつき人は変われないといったが、しかし内藤嘉光は変わってしまった。これだけは真実なのだ。あんな好青年みたいなキャラに成り果てて……嘉光のくせに生意氣だ。さつさと死ねばいいのに。

「ふふつ」

そんな私の苛立ちを知つてか知らずしてか、突然仁科さんは笑い始めた。ワライダケというのは横隔膜の痙攣を引き起こすものらしいが、それと同じような病気に仁科さんも感染しているのかもしれません。大変だな。

「それでも内藤さんが嫌なんですね。秋津さんとの接点が消えてもなるほど理解した。どうやら仁科さんは、私が実は嘉光の事を大好きなんぢやないかと、そう言いたいらしい。……は？

「いや誤解しないでください。私はただ単にあいつの幸福が腹立たしいだけで」

「はいはい。とつあえずこちらで善処ぜんしょしておきますからね」
笑顔のまま仁科さんは話を切った。くそ、これだから年上は困る。
何でも見通した気になってるんだ。

結局、新聞部は出来るだけフォローするから私は最善だと思ひ動きを取る、という事になった。

実際に尻拭いをしてくれるかは知らないが、悔しくも新聞部が心の助けになるのは確かだった。

第四十九話 セセセやかな作戦会議

そして翌日に移る。

はつきり言つて、ただでさえ自販機に売つている飲み物の缶程度しか容量の無い私のスタミナは、最早底をつきかけていた。今の私はなんと言つたあれば、まるでチューブから残り少なくなつた歯磨き粉を搾り出しているようなものだな。まあ私は歯磨き粉なんて滅多に使わないが。

血E再生能力が欲しいと思う今日この頃。なければE缶（エアー・マンとの戦いに最後まで取つておくといいらしいアレ）でもいいな。しかしあま私がそんな現実逃避をしてしまうレベルまで疲労しているというのに嘉光はといえばおめでたい事に毎日をエンジョイしているわけだ。あいつ死ねばいいのに、もう一回くらいな。

全くこれだから。恋なんてしなくて正解だったな。私は何も間違つちゃいなかつた。いくらどこかの詩人のように愛を歌おうが、質量も無いそれは気付かないうちになくなつてしまふものなんだ。最初から期待しなければ失望も糞も無い、まるで理想の形だ。無欲、仙人、賢者モードつて所か。

いざれにせよ人は分かりあえやしないものなんだよ、本質的に。そんな事無いなんて反論したくなる事など……無いわけでもないが。女の子だし。 けどやっぱり、それは所詮綺麗事じよせんきれいごとだろ。夢物語は実際に起こりえないから夢物語なんだ。

要するに、私の苦労なんて私しか分からぬって事。他の奴に分かつてたまるか。同情するなら金をくれ。上限はない。

「おい杭瀬くせ」

「…………」

……少なくとも、こんな風に『宇宙人に拉致されないコツ』なる本を読んでいる自称無口キャラには分かるはずがないわけで。もし分かつたら世界の終焉しゆうえんだ。ちなみにだが私にもこいつが何を考えて

るかなんて知つた事じゃないね。

「そんな本はいい。五世紀後くらいに必要になりそうな知識を今身に付けて何になる」

私がそう諭してやるも、「近未来は、

「近未来小説の参考として」

なんて答える。ふてぶてしい奴だ。そんな弁解で安定した位置を築く氣でいやがる。

「少なくとも『近』未来にはなりそうも無いからな。ほい行くぞ」奴の腕をパンと叩き、立ち上がりを催促。

かくして私は杭瀬を例の場所 つまり階段の所に連れて行つた。

「……そんなに私と逢引がしたいの？」

「……いきなり何出鱈目を言い出すんだお前は」

当然ながら逢引などではない。話をするのに場所を移した方が気が楽だからだ。教室は治安維持法的な空気を感じるんだよ。というかぶつちゃけて言えば人の多い場所でこんな話したくないからな。あー、話というのは……なんだつたか忘れたよ馬鹿野郎。これも精神力を擦り減らされたおかげなんだろうな、全く。

「人の多い場所では出来ない話……」

「何故そこで顔を赤らめる！？」

杭瀬は一人で変な妄想をしていた……といつ振りをしていた。この頃こいつの私を弄るスキルが上昇している気がしなくもない。実際にするのにおそらく邦崎くらいだ。……ああ。

「そうだそうだ邦崎だ」私はやつとここに呼んだ目的を思い出した。

「言つておくが私はお前と妙ちくりんなコントを繰り広げるためにここに来たんじゃない」

「それはそうとこのやつとりにもそろそろ専用BGMが出てきてい
い頃だと思うの」

「知るかそんなメタな話」

まあ確かにアニメとかなら確實にありそだがな。前に変な事言つてたつけ。自分は作者のお気に入りだからメインヒロインなんだ

みたいな事。いや本当に。どうでもいいけど。

「じゃなくてだな、私は」

「見て晴希。階段がある」

「だから知・る・か！」

しかもそれどいつも話の逸らし方だよ。階段なんて最初からあつただろ、ルイージマンションじゃあるまいし。

それに何だか杭瀬が「最近の晴希はつまらない話ばかり……」だとまるで最近の若者がどいつもと嘆いている酔っ払いの如くほざいていらっしゃるので、「要望どおりおつたりつまらない話を進めてやる事にする。

「結局邦崎は何なんだ？ 何か分かつた事は？」

あの時杭瀬の言った『邦崎黒幕説』はあくまで私がその場で適当に杭瀬に考えさせたものだつた。つまりそれは、根拠の裏づけもない単なる憶測だつたといつ事だ。

だがあれから丸一日経つた。それだけあればバラバラだつた考えも纏まるだらうし、私と違い放課後は部活で先輩方の見解 おそらくは一宮さんの一方的な説明だつたのだろう でも聞いているはずだ。私？ 私は自慢じやないが何も考えてないね。そんな事より飯を食つ方がよっぽど大切だ。
であるからして、杭瀬は須らく

「わかんない」

「うんうん、わろすわろす……え？」

「杭瀬……お前、正気か？」

「……酷い言い方」杭瀬は肩をすくめた。まあ気持ちちは分からぬでもない。

「ならお前……偽者か？」

「……す「ぐ」く酷い言い方」……まあ分からぬでもない。とは言つても元々お前が言つてた事だがな。

少し失言をしてしまった気がする。杭瀬には同情しよう。スプレー一杯分くらい。ちなみに金なんかやらんぞ。

「にしても分からんつて何だ？」一富さんとかには言つたのか？」

杭瀬は表情を変えないまま、首を縦に振つた。

「けど、参謀先輩もよく掘めてないつて」

一富さんにもこの混沌とした現状は把握しづらいのか。新聞部とかの特定の団体の仕業じやないからなんだろうが、意外と難しいんだな。あと杭瀬、お前も参謀先輩言うか。

「けどそれでも、邦崎の潔白は証明できないと？」

その問いかにも杭瀬は肯定した。対して私は内心呆れてしまつている。

「……あのな、潔白の証拠なんて『私が信用しているから』で十分だろ。仮にもあいつとは五年目の付き合いだぞ？」

「じゃあ晴希は、私を信じてる？」

どうしてそうなるんだよ。さつぱり意味が分からん。とりあえずその思わせ振りっぽいお前の言動がなんか腹立んだよ。何が欲しい。「ああ信じてる信じてる」他に適当な答えも見つからないまま、私はそう答えておいた。「もういいだろ、戻るか」

そうしてささやかな作戦会議は終了。さつさと教室に戻る事にする。

疑問に思つ。判断材料に勘が含まれてて何が悪いんだ、と。頭が固いと言われば、そのなのかもしれないが。

私が杭瀬を感じてるかだつて？　あいつほど信じられない奴がいるかよ。……ああ、一人いたか。大嘘ついて私の前から消えた男が。全くどいつもこいつも。

「チツ……」

今更こんな事を嘆くものでもないなと思いながら、授業に遅れないよう私は歩き出した。杭瀬の舌打ちなんて聞こえない。

第五十話 素人と玄人の明確なる格差（前書き）

ええ、このキチ小説もついに五十話突破ですとも！

第五十話 素人と玄人の明確なる格差

その日私は、初めてサボタージュというものを体験した。サボタージュと聞いてコーンポタージュを連想する素人しるいひとどもがもしかするといふかもしないので説明しておくと、要するに「サボる」という事だ。

ああ、ちなみに昨日のあれはノーカンな？　あれはただトイレに行つてただけなんだから。結局行かなかつたが、まあ約束たがが違たがえるなど往々おうおうにしてある事だろう。それが大人のルールだ。と言つても屋上たばで煙草たばこを吸つていたり、学校の外に出て買い食いをするような事はなかつた。大体そんな度胸すねわがないし体力もない即ち意味がない。

とりあえず通常の授業なら寝ていれば多少不眞面目ふしんめぐめだがどうにかなる。不眠症でもないし夜更かしもしていないので、どうも悪い癖くせになつてしまつたらしい。勉強不足は後で必死に補ほうさ。苦肉の策さくだがな。

よつて辛うじてだが体力は残つているのだが　ここで鬼門きもんだ。
何かと言つと、英語で言つところのP・E・である。

体育の授業とかふざけるな。そんなに私を殺したいのかこのフレディめ。

というわけで私は出席時間数を犠牲ぎせいにして体育の授業をサボタージュするという非常にアクロバティックな結論に至つたわけだ。なに大丈夫、それを持つたら邦崎くにさきなんかここ数日大変なんじゃないのか？　理由は知らんが異世界的な場所に行つてしまつたわけだし。

要するにまあ、今日の五時間目の体育などという鬼畜授業を保健室のベッドでのうのうと過ごしたわけだ。え？　お前ら体育が一番好きなのか？……なんなんだこのリア充め。

そして無事に保健室より凱旋がいせんしてきた所で、杭瀬くせに会つた。また色々とアレな本を抱えていたのでスルーしようとした所で「晴希はるき」

と呼び止められた。おいおい後でいいぞ後で。出来れば百年ほど後でな。だつてお前そんなの持つてて大変じゃないのか？

「手短に話せ。もしかしたら私は死ぬかもしれない」と私。最近の学生生活は本当に命の大切さを教えてくれる。ある意味泣き小説だな。

「死なないって。あんまり自分を卑下しないで？」

「死ぬかもしないだろ。絶対死なないとは限らない。お前考えてみろ、関羽かんうも張飛ちょうひも桃園とうえんの誓ちかいなんて立てながら先にあつさりと逝はつたじゃないか」

手刀で首を刎ねる動作をしながら説得を試みる。九九・九九九%で表つて事は、同時に〇〇・〇〇一%で裏つて事もある。物事は常に慎重に行くべきだ。まあ何が言いたいかというと、要するにこいつとの会話がだるいって事。

「晴希は死はないわ」

「お前が守るから、とか言つくなよ」

「…………」

……沈黙。図星かよ。まあそりや読めてたけど。言つてた時に自分でも思い浮かんだんだから。どうでもいいが元ネタ見た事ないんだよなあれ。あれで見た事ある奴のといつたら……ああ、『ムスカ、来日』なら見させてもらつたな。

「…………晴希は死ぬわ」

そして不吉な開き直りをするな。

「ああ、だから休ませてくれというんだ。達者でな」

とりあえずそう言ってやり杭瀬の脇を抜けようと試みる。

確かに私と杭瀬では素の運動能力に違いがあるが、しかし相手は何冊も本を抱えている。それも文庫本サイズではなくハードカバーの大きいものを三、四冊だ。ならばその隙を突く事など造作はない。

「待つて」

……そう思つていた時期が、確か私にもあつたと記憶している。サッカーにおいてドリブルでディフェンスを突破する、もしくは

ボールを持ったフォワードに突破されないようにしたいたい時、諸君は何が大切だと感じるだろうか？

引き離す、もしくは追いつくための純粋な速さ？ 崩れないため

のフィジカル？ 確かにそれも大事だろう。

だがそれだけではない。やはり私としては、大切なのは勘……と

いうか、筋だと思うんだ。

邪魔でないとは言い切れない荷物を抱えていながらも、杭瀬の動きは見事なものだった。私がうまくすり抜けたと思いきや、たつた三歩で真正面に回りこみ、更に私が横を抜けようとすると同じ動きをし……そうやって、気付けば壁際に追い詰められていたというお話だ。

「今日は大切な話なの」

「私の命よりか？」

「うん」

……こいつ、はつきりと言いやがつた。今まさに鮮やかな動きで私を追い詰めた杭瀬曰くそういう事らしい。なんでだよ人の命は青い地球よりも重いんだぞふざけんな、などと力強く言ってやりたい所だが多分そんな主張をすれば心臓発作で死んでしまいそうなので仕方なく話を聞いてやる事にする。要するに反抗する方が面倒臭そうだから。

というわけでまたまた階段付近。多少ながら少なくなるとはいえるやはり例の視線は止まなかつたりする。大丈夫だ、もうそれを零と同じようなものとして捉えられるだけのふてぶてしさは手に入ってしまった。これも大人になるつて事なのかな。かな哀しいもんだ。

「昼に図書館で、参謀先輩と会つたんだけど」と無表情で杭瀬。

「今日また仕掛けるつて」

「またかよ……」

先輩方については懲りないというか、とにかく信じられないとう思いがある。一日連続でよくやるものだ。

「で、それだけか？」

私がそう訊くと、杭瀬は首を横に振った。

「晴希にも動いてもらつ。失敗しないように『

えー、正直面倒だな。素人なんだから少しは優しくしろよ。』

「……何の？』

「……何が訊きたい』おかしなことを聞く奴だ。

「何の素人？』

「気にするな。そしていつお前にまでモノローグを読むという特技が身についた』

驚きだ。一富さんの技でもトレースしたのか？ お前も「コピーなんて厨二病つぽいスキルを持つてるんだな。

「私は作者の』

「お気に入りだからとかいうなよ』

「……』

……また黙つたよ。なんて残念な生き物なんだこいつ。

「それでどうなんだ？ 作者により力を付与されたとでも？ やめろよそんなメタな発言』

「だつて晴希が口に出してたから。『素人だから優しくしろ』って

……』

「げつ……』あれ口に出してたのか。私の疲労もここまで来たんだな。仕方ない。自分がサボタージュという言葉からコーンポタージュを連想するようなのと同レベルの素人だつたとは認めたくないが……。

「よし 寝よう』言つて私は歩き出そうとしたが、

「待つて」と、睡眠学習に勤しもうとした私をわざわざ杭瀬は止めてくれた。全く迷惑な事に。

ハードカバーの本を振り上げながら。

「……おい杭瀬、その高く振り上げた腕はなんなんだ』

「……永琳を呼ぶために』

えらいごまかし方だな。でもここ幻想郷じゃないからな？ ちょっと意識が異世界に飛んでる人はいるが所詮はそれだけの事で。

「……あ、手が滑つて」

「話を聞こうじゃないか。出来る事なら協力しよう」

だからその手に持った本を私の脳天めがけて振り下ろさないでくれ。もしゃつたらこの小説『残酷描写あり』とか設定される目に遭あうから。

第五十一話 頭で理解しても出来やしない

『人は、自ら動かなきやならない時がある』。確かにそんな事を、私は言つたはずだ。人という字は人と人が支えあうようにして出来て、いるみたいな金八先生理論もまああなたがち間違つてはいないと思う。さてそこで、私からはこういった経験を通してもう一つ言わせてもらいたい事がある。

それは何かというと、『分かつてもかつたる』という事だ。理不尽に降り注ぐタ立を自然だから仕方ないといって受け入れられるほど私は利口な人間じやない。

まあ考える事をしなくていいと思えばこの役回りも軽い方なのかもしれないが、そんな事知つた事じやないよな。

まあそんなこんなで、考える間もなく杭瀬に連行されたわけだ。きやあ助けて。

「……それにしても、まさかこの私が一限連続で授業をサボる事になるとはな」

前の時間は体育だつたから休んだというのに。全くもつて自称品行方正（笑）の私らしくないじやないか。少しは寝かせてくれ。しかも場所が屋上と来た。屋上つてあれだぞ？ 学校における立ち入り禁止区域の代表格だぞ？ たまに屋上開放されてて仲良くそこで昼飯を食べるつてリア充的展開もありうるがな。そんな所にいたら私は自殺志願者があるいは「顔はやめな。ボディーにしな」とか言うような不良生徒じやないかと思われてしまふじやないか。それは駄目だ。私はそんな事、嘉光くらいにしかしない。あと風邪を引いたらどうするんだ。花粉症は厄介なんだぞ。ああ、あと先に言つた通りタ立とか降つてきたらどうするんだ。風邪ルートに直行する上体拭くタオルとかも持つてないから服が濡れてサービスシーンにもならないサービスシーンをお見舞いする事になる。明らかに駄目だろう、不憫な事になる。主に私が。ついでに屋上つて事は雨だけじ

やなくてカエルが降ろうがオケラが降ろうがアメンボが降ろうが無防備なわけだしな。あと原爆でも落ちてきたりどうするんだ。お前原爆舐めるなよ、学校の図書館ではだしのゲン読めば分かるから。
元は軽症だったとは言つてもそれでも禿げたからな？ 嫌だよ私は。
所詮禿レベルでも嫌だ。そういうえばメタルギアでファットマンとかいう自分の体の下に爆弾隠してた爆弾魔がいたがあれば原爆の名前から来てるらしい。ちなみに長崎の方だけどな。まあなんだ、本気で嘉光ここに来るの？ 来させるの？ 分かつたよ分かつた。だつたら任せたから。

……とまあそんな愚痴を私はこぼしていたわけで。いやお恥ずかしいなわけあるか。

それにしてもさつきの脅迫、珍しく似非無口キャラの嫌な本気を見た気がする。普段穏やかな奴つて怒った時が怖いんだよ。たとえそれが似非でも。

まああれは怒ったのかすら分からなかつたが そこがまたかえつて怖かつたりして。腕振り上げたときも気配見せなかつたし、あれは完全に暗殺者かアサシンか必殺仕事人だろ。全部同じような意味だけどな。

「違う、私は私」

「……いたのかよ」

いつのまにかその杭瀬がいた。さつき私を屋上に送つて「じゃあ」なんて言つてたんだが。その神出鬼没に特別私が驚かなかつたのはひとえにこの緊急事態によつて作動したスルースキル（スルーレベル：高）によるものであり、多分そんな感じに近頃の私の精神力はガリガリと日に見えるように削られているんだろう。でなければ思つた事を無意識に呟いてしまつているなんて末期症状は起こりえない。

……などと自分が軽い精神病に侵されているなんて本来考えたくないし認めたくはないのだが、事実なのだから仕方ない。

「……チツ」

「こんな風につっこむ打ちをしてしまつ域まで達してしまつてこのは、どうにかせねばなるまい。

「何だその田は……とつあえず私はここで待つていればいいんだな？」

何か残念なものを見るような微妙な表情を見せた杭瀬に、私は確認を取つた。

「そう、それで嘉光をここに呼ぶから、来たらアイラブユーって抱きついて嘉光の髪に頬を擦り付けてその匂いを存分に味わい」

「仕方ない、教室に戻ろう」

やつぱりお前に他人を否定する権利はないんじゃないかとしみじみ思いつつ、品行方正（笑）な私が踵を返そうとしたその時、「待つて」

と杭瀬の声がし、私の首筋に何かが突きつけられた。

「おいそっちが待つてくれ。その逆手に持つたシャープペンシルは何のつもりだ？」

「…………最近NARUTOをよく読んでて」

「…………そうか、せいぜい架空と現実を混同しなこうじていろよ。別に私は忍じやないからな」

お前は本気で忍っぽいけどな。冷や汗を垂らしながらも何か義務感のようなものが芽生えた私は警告をしておいた。もう確定だ。最近こいつ怖い。いや怖いというか恐ろしい。

やつぱり私も杭瀬も、この騒動で変わってしまったのだろうか。戦争は人を変えるんだな。まさしくはだしのゲンのようだ。

「まあちゃんと待つがな」

仕方なく話に乗る事にする。当然アイラブユーとかもふもふとかする気はないが。

「その嘉光はお前曰く記憶が飛んでるんだろ？ 一体どうするんだ？」

そんな問いに杭瀬は、

「そこが晴希の仕事。頑張つて？」

などと冷たい口調で言い放つた。なんだ、ずいぶんと重い仕事じゃないか。

「あのな、考えてみる。私は昨日一回はあいつと直面しておきながらそれがスルーされたんだぞ？ そんな全てが終わつたような状態が今日や明日で変化するもんか」

「だからそれが晴希の仕事」

と、また杭瀬は冷たく言つた。言つてゐる事は根性論そのものだが。根性論なんて、私が最も苦手とする物の一つじゃないか。

「だから、『やらなきやならない』の心構えだけでどうこうできるもんじゃない。一つ言つとくが、私は正直何も出来ないんだぞ？ お前らとは違つてな」

「……任せたから」

……あいつ、人の話ちゃんと聞いてたのかよ。なあ、呆れていいか？ なんて言つてやううと思つたが、もうそこには奴はいなかつた。

そして、計つたようなタイミングで六限目の始まりを告げる鐘が鳴つた。

……全く、私にどうしきと聞つんだ。あいつの言いたい事がさつぱり分からん。

第五十一話 完膚なきまでに私は

屋上への扉を閉め、階段を下る。そつして肩の力を抜き、ゆづくりと深呼吸した。

本当はこう見えても大変だった。「お前は楽でいいな」なんて晴_は希_{るき}は言_いうけ_だじ、でもそんなことはない。確かに晴希も大変そうだけ_ど、私も樂つてわけじゃなし。むしろ私の方が……いや、そんなことは言_いつちや駄目かな。

「……あらま、疲れてるみたい」

降りる際にそんな気の抜けたような女子生徒の声が聞こえた。

……関わりたくない。

そう思つてすぐさま横を通り_つとすると、私がさつき晴希にした時のように遮られた。後輩相手だつたし私ならこんな通り抜けられるはずだつたけど、でも出来なかつたのはなんでなんだろう。だから私は、せめてもの反抗として沈黙を保つた。

「……む、やっぱり何も言わないんだ」

肩をすくめ口をへの字にしながら言つ。

「さつきまではすつ_{じよ}とい饒舌_{じよしゃ}に喋つてたのにね先輩。こう本持つてバーンつて振り上げてさ」

あはは、と奪つた本を振り回す。それを取り上げると「あはは、先輩怖いよ」なんて笑つていたけど、やっぱり私は黙つてことにしてた。

「先輩のおかげで文芸部のやるいともみんな台無し。ほんと、残念もいいところだよ」

飽きてしまわなかと思_いづくら_い彼女は笑つてゐる、そんな振りをしている。それはまるでさつきの私と晴希のようだつた。

「ねえ先輩、先輩のやつたことはすごいよ。頼つてくる人が氣に入らないからつて騙_{だま}してさ」

……いや、違う。私と晴希はそうじやない。決して今この瞬間み

たいな関係じやない。

晴希は言った。「お前には分からんだろうな」なんて。「お前は

樂でいいよな」なんて。

だからそう、これは私一人の反抗なんだ。

「ありがとうね先輩」

「……違う」

「ん?」「私は

「私は

私は、あんたなんかにお礼を言われる筋合いなんてないつ！

話を持ちかけられたのは昨日あの時、階段のことだつた。晴希が先に戻つていくといつて階段から廊下に出て、記憶喪失になつてしまつたであろう嘉光とぶつかつたときのことだ。

「つと、ごめんな！ ごめん！ 僕が悪かつた！」

廊下の方からそんな声が聞こえてきて、私はそこで何が起こつているのかを把握した。見てみると、やっぱり嘉光。

でもおかしい、ずっと（少なくとも本人の感覚では）逢えなかつた晴希と再開したのに、まるで嘉光の反応じやない。

と、そう思った。何も言わないがきっと晴希も同じ考えだと思う。と、

「あら、遭つちゃつたか」

階段の下 というか奥の方からそんな、どこか気の抜けたような声が聞こえた。それほど興味のなさそうな口調だったし軽い野次馬のようなものなのかな という考え方、私は思い浮かべですぐさま振り払つた。

今の言葉は、私に向かっていたんだから。

晴希もいつも言つてゐると思うけど、私は晴希とか以外には無口で地味な人間で、他人に認識されること自体がない。晴希も密かに私

にこんな状況下でも文芸部との梯子を頼んでいたから、その辺りでどんものかは分かつてるとと思うけど。

だけど、この娘は普通に私を見て、普通に私に話しかけてきた。今にして思えばそう、多分調子が悪かったんじゃないかと思つ。典型的な言い訳かもしれないけど、今の私にはそれくらいしか考え方がない。もちろん他に何かあつたのかも知れないけど。他人事みたいな言い方で「めん。

「どうして」

「む？」

「どうして、ここにいるの？」

私はそう聞いてみた。まず彼女がなんのかも気になるけど、結局はこれが一番の疑問だった。

「トイレだよ、トイレ」

「本当のことを言つて」

「あれひどいなあ。後輩を信じてくれないの？」

信じるわけがない、そう心の中で毒づいた。トイレに行くために階段移動、そんなことするはずがないし、野次馬だったとしてもごく普通に私に関わつてくる時点でそれは普通じやない。特別なんだ。私も彼女も。

「わかつたわかつた。ちゃんと話すから」

やつのこと、そう言つてくれた。と

「んじゃ、綾女あやめも待つてるかもしないんでな！」

「…………ああ！？」

晴希と嘉光の、そんなやり取りの終わりが来たらしい。

「それじゃあ、細かいことは後で話すから」

だから待つててね、という言葉を残して階段の方に消えていった。

「と言つわけで早速説明をしてくれ、杭瀬くせ」

「……そこで丸投げ？」

無理もないだろうけれど、晴希がいきなり困惑した顔で私に説明を丸投げしてきたときはさすがに呆れてしまつたのだけれど……。

とりあえずやつさきの嘉光の様子とか『綾女』についての発言とかを鑑みてみると……。

とそこで、階段の方にまだ気配が残っているのに気がついた。

「…………どうした杭瀬」

「…………なんでも」

「…………そうか、ならいいが」

晴希はこの気配に気付いてなかつたみたいだつた。多分彼女が、私にだけ気付かせたのかもしれない。

「…………とりあえず、お前の考えた理論を適當でもいいから纏める。私が突っ込んで叩いて出来れば原形をどじめず完膚かんぶなきままに潰してやるから

晴希はそんな優しくないことを言い放ち、私がさつと説明をするのを待つた。

さつさと晴希との話を終わらせて、あの後輩の話を聞こいつ。「待つててね」と言っていたから、向こうもさう催促しているみたいだし。

第五十二話　「おせつだめあつためしるんだ（前書き）

すいません、更新が非常に遅れました！

第五十二話　「おめでたさうためてあるんだ

「あれ、いつもの一ヒガリ勉臭い眼鏡はぢりしたの？」

午後に入るなり、俺こと大曾根誠文（超真面目草食系男子）の顔を見て奴ことアホ（葛原水月阿呆系女子）が変なことを言い始めた。なんてい、俺の眼鏡がどうした。

「……何なのよその『何だこのアホ』的な目は！」

「……おめー、人の心でも読めんのか？」

「場の空氣くらいは読めるわよ！ つていうかやっぱりそつだつたの！？」

二十四時間三百六十五日、睡眠時とテスト時を除き常時休むことなく騒がしいアホは今現在も例に漏れずそんな反論をしてきた。ああ、アホも空氣くらいは読めたのか。つまんねえ。俺は幸せとともに深くため息を吐き出した。これは後輩の晴がよくやつてる事だが、やつぱいたずらにも心地よくはない。当然か。

「言つとくがな」

アホに空氣が読めた事に落胆を覚えつつも、俺は右の人差し指をピンと突き立てながら言つた。

「俺が一度でも葛原水月をアホとして……間違えた、アホを葛原水月として見なかつた時があるか？」

くそ、肝心な所で口が滑つたぜ。

「そこはせめて間違えてて！」

「生真面目な俺にそんないい加減な事が出来るか」

「あなたは基本いい加減よ！」アホはそんなことを言つ。

「なんてこつた……こいつ、歪んでやがる」

俺は憎憎しげに呻いた。まだこんな歪んだ奴もいるんだなあ。

「どつちの話よ！」

喚き続けるアホ。いやあ、どつちつてそりゃあ……

「アホと葛原、両方だ」

「どうちもわたしじゃない！」

「よし認めたな」

「あ……」

「どうやらアホは己の失態に気付いたらしい。素直じやねえな。晴と同じくらい素直じやねえ。

「あ、あのねえ、わたしはアホなんかじやないわよ！……ってなんなのよみんなその反応はっ！」

アホの血DCPRの叫びに教室中がざわめき、それに対してアホがわめ喚いた。

「なあアホ」

「うん？ 誰の事？」

目の前の奴に決まつてんだろうが。

「おめーはどうしてそんなにアホなんだぜ？」

「そんなきぞつたれた言い方しても知らないわよ！ わたしアホじゃないし！」

「なあアホという名の葛原」

「だからさつきから私の呼ばれ方ひどくない！？」

「氣のせいだつての。人間な、自分が蚊帳かやの外だつて誤解すんのもよくあるんだぜ？」

つーか名前がアホであだ名が葛原じやねえのか？ インパクトつて結構大事だぜ？

「そんな呼ばれ方するくらいなら蚊帳の外の方がいいわよ！」

「……ああ分かつたよ、アホさん」

「呼び捨てとかの問題じやないつ！」

「大丈夫だつての。それでなあアホさん、悔しくねえのか？」

「今この瞬間が一番悔しいわよ！」

「そつか……まあいいや」

俺は雲一つない、青々（あおあお）と晴れ上がった空に目を向けながら、淡々と話しを始めた。

「今部の後輩がさ、色々と大変なんだ」

「いきなり話が飛んだわね……何だっけ?……一年の一人がケンカしてつて話?」

「ああ、それな。けども実際あの一人はケンカなんとしてねえし、それどころか今は会話すらできちやいねえんだ。もし仮にケンカしてたとしてもだ。それならそれで謝らなきやならねえだろ?」

けどまるで、周りの奴らはそう思つちゃいねえときた。爆発が怖いからつてあいつらは、地雷の回収すらしようとしねえのさ。多分そんなもんは自然となくなつちまうもんだと思つてる。

いいか? 人間歩み寄らなきや分かり合えねえんだよ。理解しようとしなきやならねえ」

だつてな、人間、前にも後ろにも進む事しか出来ないんだぜ? 完全に戻るなんて、所詮無理な話なんだよ。

「むう……かなり考へてるんだ、バカのくせに」

「いや、別に俺は全然考へちゃいねえよ。単に難しく聞こえるだけだ。分かろうと思えば分かれる」

「……そうかもね」

「だから俺は人と分かり合つたためにこいつやつてうゼーべらーに関わるし、おめーの事をアホとも呼ぶ」

「いや待つて! それはおかしいと思つけどー?」

「多少の犠牲^{きせい}はしゃあねえよ」

「……後輩達の犠牲は仕方ないの?」

また感情に乗せて突つぱねてくるかと思いきや、アホはアホのくせに開き直つて生意気な事を言つてきた。それを今から取り戻すんだろうが、と言い返そうと思つたがまあそれもそれで言いにくい。けど少しほとぎつてやらないと葛原であるアホは当然、調子に乗る。要するにうざつたいたいパラドックス……でもないんだなこれが。やれやれ、この手を残しておいてよかつたぜ……。

「おいアホ」

「な、なによ……」

「『似非』は一ヒジヤなくてエセつて読むんだぜ?」

「……」

当方、制圧完了^{いじ}。アホを苛めるのは楽しいなあ。
さて暇^{ひま}も潰れたし、俺もそろそろ行くかね。敦次^{あつし}のやつはもつと
つくに行つちまつてるみたいだし。

しゃれて伊達眼鏡^{だて}なんて掛けず、今日の俺は全力で飛ばしてやる。
「待つて！」

しかし教室を出たところで、そんなさつきのアホのよつこ騒がし
い声にまた呼び止められた。しかしみアホではなく、

「……おうコエダ」

「コエダじゃないけどね！　コノヒー！」

天森小枝^{あまもりこ}ことコエダがそこにいた。しかしまあ口調^{こじょう}にそいつも通
りだつたがその表情^{じゆうじょう}が本気と書いてマジだつたもんと、とりあえず
は話を聞いてみる事にした。俺は人の調子を見る事にかけても天才
なんだ。

「どうした？　話があんなら敦次に」

「私が彼に言つて、そしたらどうなる？」

「……なるほどなあ」

敦次とコエダの関係はぶつちやけて言つてしまえば、あまりよく
ない。なんというか、敦次の方がコエダを信用してないらしい。俺
がいなかつた時の新聞部の件での失敗、あれで信用も地に落ちてる
つてどこか。

「それで何が言いてえんだ？　もしかして何もすんなとか？」

「そのまさかよ？」

「……マジかよ」

「冗談のつもりで言つたんだけどな。

まあしかしこいつが関わつて以上、敦次の判断は決まつていてる。
ビジョンが目にありありと見えるぜ。結局ちゃんと見極めてやるべ
きは俺だけつてか。めんどい役回りだぜ本当に。

けど、

「お前、俺がどんな奴かちゃんと分かつてんだろうな？」

「……さあ？」

「……とほけんな。大曾根誠文は何よりも波乱と混沌と堪壘を愛する男なんだよ」

予定は六時間の途中、俺がああしてじりじりしてやればたちまち、バーンだ。学校をメチャクチャにしてやる。そういうのって心地いいだろ？ やめられねえ、とまらねえってな。

「ここ」であえて何もしないのも、それはそれで波乱だと思つけど? 「んなもんシユールなだけだ」

「残念ね、気が合うかもと思つたんだけど…」

「それにあれこれ考へんのもめんどいだろ」

ま、実質後者が主だが。変なプレッシャーなんぞを背負つてたまるもんか。

「とつとう本音を出したわね！」

……はあ、どうしてじりじり俺の周囲には妙に鋭い奴がいるんだろうか。

けど、はいそうです実は面倒くさかったからですと引くわけにも行かない。さつきアホに言つたとおり、人間歩み寄らなきゃならない。

だつたらそりだ、こうしてやろうじやないか。

「お前の言つ事なんてこの俺が聞くわけねえだろ。敦次より説得しやすいだ？ なめんなよ」

俺は今更引かない。だからそつ

「止めたいんならてめえで止めろよ」

いつもやつてこいつに、敦次の代理の宣戦布告を仕掛けてやるしかないじゃんか。

「んじや、俺は文芸部室に行くぜ。お前はどうする?」

そう聞いてコエダは一瞬沈黙。だが、

「……手助けなんてするわけないじゃない!」

と叫んだ。

「はいはい、それがおめーの本性か?」

「……ええ、これが本当の私よー。」

「そうかい、分かつたよ」

思わず苦笑した。俺のいないときに暴れておいて、こんな所で本性を晒す。こいつはほんだけ三流悪役なんだよと。

そうして俺は教室を出た。その時に、

「んじゃ、待ってるぜ」

なんて言つとくのも当然、俺は忘れやしなかつた。カオスでも何でもどんときやがれ。楽しきりやいいんだ俺は。何よりさつさつ言つたら? 人間歩み寄らなきやならねえつて。

だから、止めるんなら素直じやねえ態度じやなくて真つ向から歩み寄つてきやがれ、コエダ。

第五十四話 力タチを持たない暗い何か（前書き）

最近更新が少なく、申し訳なく思いますつ。

第五十四話 カタチを持たない暗い何か

「それじゃあ、また後でね」

「分かつた」

椎ちゃんとひとまずの別れを言つておいて、私はある場所を目指し教室を出た。そう遠いわけでもないし、あんまり焦らなくていいのかな。まあそんな意識しなくて、焦る事はなかつた。というか、なぜだか焦る事が出来なかつた。

昨日授業中に爆発が起きて、その放課後に椎ちゃんを文芸部に連れて行つたらなぜだか分からぬけど椎ちゃんが正式に協力してくれることになつた。……うん、今までも「私を手伝つ」とは言つてたけど。

……で、その椎ちゃんは今さつときい飯を満足そうに食べていた。とはいっても椎ちゃんのお母さんに許してもらえたつてわけじゃないらしいけど。じゃああれつてどこから手に入れたんだろう。まあいいけど。

一方参謀先輩によると、どうやら今日で一気に流れを作つて終わらせるつもりでこるらしく。昨日今日の一日前連続で仕掛けて意表をついていくやうだ。戦略がどうとかよりそんなことを実際に出来るのがすごいことと思つ。例えれば、絵に描いた餅を実際に焼いてみせた、みたいな感じ。

嬉しいか悲しいかでいうと、すくなく嬉しい。晴希先輩も今の様子だと相当困つてるみたいだし、しばらぐのライバルだとまでも内藤先輩だって心配だし。

……ライバルだからこそ、こんな形で忘れてしまつてほしくないし。

それで私は焦ることができないとは言つたけれど、それは決して心配していなかつたわけじゃなかつた。むしろ逆で、これが成功す

るはずがないって、そう思えてしまつ。自分で勝手に決め付けて勝手に諦めるなんて真似はしちゃいけない、そんなことは最初からわかつてゐるはずなのに。なんだか

「なんだかおかしい……そんな気がしますね」「……つー?」

「おや、どうかしましたか?」

そんなことをいしながら二つの間にか隣にいて私を驚かせたのは菅原君すがわらだつた。そういうえば菅原君にはこつやつて同級生にも敬語で話す癖があるけど、部のみんなは理由を聞くことなく納得している。一体なんでなんだろう?

それはともかく、いつも彼にある余裕というか、何を考えているのかよくわからない雰囲気が感じられず、今はまるで顔に不安と書いてある、そんな表現がぴつたりのよつだつた。

「いや、予期せぬ登場に驚いただけで……それで、そつちはどうしたの?」

言い訳をしながら二つからも聞き返してみる。二つひとしては菅原君の方もやつぱり気になつた。菅原君はそれを聞くと、

「……いや、これから起ることが何だか不安でしてね」

と、その言葉とは反対に微笑を湛たたえて言つた。どうして無理に笑おうとするんだろう? 気になるけどやつぱり部のみんなに聞いたら沈黙されそうだな。

「はて? やつきから様子がおかしいですよ?」

それはそつちの方だ、なんてこと私には言えるわけもなく、

「そ、それより不安つて何かな? 参謀先輩なら大丈夫だと思つんだけど!」

話を変えて「まかすしかなかつた。そつだよ、参謀先輩がいるなら大丈夫だよ! なんたつて人の心読むんだもん!

「どうでしょうか?」

しかし菅原君は退かず、

「まあ、話は後にしましよう。いふなこと、廊下ろうかで話すことではあ

りませんからね」

と黙つて、部室に向けて歩き始めた。

「では、話を続けましょう」

部室に着いてすぐ、菅原君は適当な椅子を探して座り、止めていた話をまた続けた。ちなみに部室にいたのは参謀先輩、それによく知らない三年の女子の先輩だった。なんだっけ？なんか覚えてはいるんだけど……。

「さて、肝心の『おかしな点』についてですが、これが正直な話、うまく言葉に表せないんですね」

「うん……」

言葉に表せない、だけど何かおかしいのはわかる。それはほとんど直感で、証明してくれるものなんて何もないけれど。あそこにいる参謀先輩だつたらどうかな、「非科学的だ」なんて切り捨てるかもしれないし、「なら何があるのかもしれないな」なんて聞き入れてくれるかもしれない。なんだかんだ言つても私は参謀先輩のことはよく知らない。私の知つてるのはせいぜい、晴希先輩のことくらいだ。晴希先輩のことならいろいろ知つてる。

「けどそう思える理由はまったく関係ないとこにあって、実際は何にもないってこともあるんじゃないかな？」

「確かにそういう可能性もありますね。ですが」

「だけど？」

「気になるものは仕方ない」

「そうだけど……」

確かに今すぐにでも晴希先輩の所に行きたくはあるけど、それは結局不確定な不安で、証拠なんてない。結局自分一人で決められるわけじやないんだよね。証拠つて。

そういえば晴希先輩とは一昨日の夜久しぶりに会つたんだっけ。あの時晴希先輩とはあんまり話せなかつたけど、あれはいろいろ話したいことがたくさんあつたし後にしようつて我慢してたから。け

「今になつて思つと、ここからさらに大変なことになつそつな、そんな予感がして、少し後悔してる。

「あれ？ よく考えてみるとあの時晴希先輩と一緒に来てたのは菅原君だったつけ？ なんか色々話してたみたいだつたけど……。ええと、それつてつまり」

「ん？ どうして僕の方を睨み付けてくるんですか？」

「いや、何でもないよつー」慌てて「まかして、内心を悟られない

ように注意した。

それつてつまり、ダークホースの可能性も否定しきれないつてことになるんだよね。

「前途多難ですね」

「そうそう、内藤先輩だけじゃないなんて」

「応援しますよ」

「またそんなことを言つて……勘違ひしないでね、私たちは敵同士なんだから」

「そうですね」と菅原君は相槌あいづちを打ち、そうして時間にして数秒経つてから聞いてきた。

「ところでそれは、何の話なんでしょうか？」

「…………」

「…………」

声にならない叫びが、私の喉のどの奥からびっくり箱のよつに飛び出してきた。

第五十五話 反自然主義体制（前書き）

活動凍結、お許しください！

第五十五話 反自然主義体制

あの後参謀先輩や話をしている間に入ってきた他の人たちに「うるさい黙れ」なんて注意されてそれに軽くげんこつを振るわれて、私は正気を取り戻した。「え、あ、ええ……」そしてどう言いつくろうか大いに迷う。

それはそうと もうすぐ、盛大に文芸部が動き出す。こんな馬鹿げた騒動を終わらせるために。

「さて、これから話を始めるが」

私のせいで微妙な空気になつた場を、鳥のような鋭い目で見渡しながら参謀先輩が取り仕切る。……あれ？ そういえば大規模にやるつて言つてたけどそれにしては人が少ないような？

そんな疑問に答えてくれたかのように参謀先輩は話を続ける。「まずは今回の人員についてだ。今この場にいるのが少ないと 생각かもしれないがこれでいい。あまりに多いと不自然が過ぎる」

……ああ、なるほど……つていやいやいやいや！ この人数でも

十分怪しいから！ 本当、参謀先輩は何を考えているんだろう。多いでも少ないでもなく、こんな中途半端にするのにはたして意味はあるんだろうか？ それともただ単に私の感覚がおかしいだけとか？ しかしその疑問も、ちゃんと拾い上げて参謀先輩は答えてくれた。

「そして少なすぎても駄目だ」参謀先輩は言つ。少なくともこんな事態を招いた奴らには真っ向から見せ付けなければならぬと。「静寂かつ盛大、自然過ぎない程度の不自然さをな

え？ という気分。いきなり何を言い始めるんだろう？」人は。

私にはよくわからなかつた。

「不自然さ？」「普通に出来ればいいんじゃ？」他の人たちも同じ感想だつたらしく、広々とした文芸部室はざわめいている。だが想定内も想定内といつたように参謀先輩は説明する。

「言つておくが今回の作戦はそういうものだ。これは絶対に完全で

あつてはならない。必ずしも一時の勝利は全体の勝利に繋がらない

「ま、そういうこいつたな」

と、参謀先輩の隣で一人で納得していたのは……ええと、おおがね大曾根先輩か。いつも付けているトレーデマークの一種とも取れる眼鏡がなかつたから一眼見てもよく分からなかつた。いつたいどうしたんだろ。じつは伊達眼鏡でいつもは集中してるとか？

「じゃなきやこいつがこんな強行手段取るかよ」

ま、どつちにしろ俺にとつちや楽しい展開だからいいんだけどな、とも上機嫌で付け加えていた。大曾根先輩も凄いと思う。憧れすら覚える。なにしろ今の状況を楽しんで、でもそれを破壊うとするのをもつと楽しんでるんだから。

だつたら私も、やれることをがんばらなきやいけないのかも。いや、がんばらなきやいけない！

「話を続けてもいいな」

「いや、まだ少し……」「ちょっと理解出来ませんね」「結局何と戦つてるんだよそれ」参謀先輩が言つてもまだ周りはざわめいていふ。……うん、やっぱり無理がありすぎると思ひます。その理論は、「喋るな息を止めろ。この中で少しでも自分は文芸部員であるという自覚を持つ奴は黙つて俺に従え」

睨みながら呴喝すると、裏返しになつたかのようにそのざわめきはたちまち沈静化してしまつた。ああ、なんかこまかしたよね……参謀先輩……。

「今回は協力者がいる。その代表がこの」そう言いながら私たちが入つてきたときに一緒にいた女人の方に手を払つた。「新聞部部長、仁科由宇だ」

仁科先輩。私は心の中で呴いた。そう言えばそうだつた。仁科先輩。前にもネタが欲しいとかなんとか言つてここに来てたな。あのせいで内藤先輩と晴希先輩がデートすることになつたんだつた。うん……晴希先輩はあんまり気にしてなかつたからよかつたけど……うん……仁科先輩……。

「辛氣臭い顔ですね」

ふと後ろからそんな声。菅原すがわらくんだった。

「そんな顔してた?」

「ええ、当然です」

本当かな……顔には出てなかつたと思うんだけど。無理して笑おうとしたつもりもないし……。

「……って、私の顔見えてなかつたよね?」

「ええ、当然です」

「じゃあ何で分かつたの?」

「僕があなたなら、そう考えます。それに正直なので」

「正直つて、私が?」

「ええ、当然です」

「そうかな?」

「ええ、当然です」

「そうかな?」

「ええ、当然です」

「ええ、当然です」

そうかな……確かに菅原君の指摘は正しかつたんだけど、私が正直かどうかつて言われるとそれはわからないし、第一照れる。

「菅原、朱鷺羽ときわ。喋るな」

「はい」

「……はい」

「」つちを睨み文句を言つ参考先輩に菅原君が答え、それに合わせて私も答えた。

「お前らは……まあいい、たかが一人や一人いなくとも構わないが、

少なくとも他の奴の足は引っ張るなよ」

『はい』

今回は二人同時に答えた。そして反省。私も他の人の邪魔になつちゃいけないなんて思いながら。他の人たちだつて眞面目にやつてるんだから、ここで私だけが折れるわけにはいかなかつた。

「今回の目的は内藤を動かし、秋津と引き合わせる事であり、他の

事などどうでもいい。全て終わってからの話だ。一度『点火』したら迷うな。内藤の教室を目指せ」

『点火』、それは昨日起こった……いや、実際には起こしたあの爆発と全く同じ事らしい。思えばあの時実際に何もしなかったのも、参謀先輩なりの宣戦布告だつたように思う。

「邪魔が來てもこちらからは手を出すな。あくまで出されたらやり返すまで、損害と敵は可能な限り少なくしろ。後が面倒だ」

そうして参謀先輩の説明は終わった。

「五分後に『点火』する。トイレなら今の内だが、でなければ出るな」

そう付け足してはいたけど、あいにくながら私もトイレが近いわけではなく、そのまま時間を待っていた。皆は緊張半分興味半分といった様子で、私もその例外ではなかつたみたいだ。心臓がどきどきする。けど

それと同時に、得体も知れない不安が頭をよぎつてしまつ。参謀先輩も何だかいつもらしくない気がするし。少しだけだけど臆病な力技。

晴希先輩を求めてこの部にやつてきて、しばらく経つた時のことを見い出す。まっすぐに行つて、本当になんとなるのかなつて。確かあの日は新聞部の人たちがなんか書いてて、それで慌てて行動してみて。

だけどこざやつてみると私はすごい不器用で、晴希先輩も何も言えなくて。

結局晴希先輩に想いは伝えられたけど、それでも前と全然変わらないで。

だけどそれをどこかで安心してたりもして。

そんな臆病で不器用でどうしようもない私の、あつけなくて馬鹿らしくて言葉にもならない告白だった。

「振り返つてみれば、おかしな話ですよね」

「……菅原くん、今日は自己主張強いね」

「はてはて、さっぱりですね」

そんな風に肩をすくめているけど、やつぱり菅原くんはあまりにもおかしい。違いない。

「また秋津さんのことでしょう？」

でもこいつやつて鋭いから困る。

「うんそうだけどっ！」

「男子の31%、女子の5%でしたっけ？」

「そうそう！ 晴希先輩人気ありすぎるもん！ 周りにいる人だつて」

そう言いかけたやいなや、何かの爆発するような音が耳の中で反響するように聞こえてきた。

それが、火が点いたサインだった。

第五十五話 反自然主義体制（後書き）

久しぶりですね。久しぶりすぎて鼻水出ますよね、はい……。
えー、受験勉強などもあるのでこれから亀更新をも下回る更新頻度になりそうですが、是非ともご理解いただけると幸いです。白。

第五十六話 もう何もかもが狂おしい

けれど、それはすぐに終わってしまった。

「……え？」

参謀先輩の表情が微妙に歪むのが見て取れる。他の皆も困惑した様子でいるのは明らかだった。

ただ一人を除いて。

「……あー」

何か思い当たることがあるかのように大曾根さんは苦笑し、「なあ敦次、俺トイレ行つていいか？」

「……え？ そんな話？」

「……行くなら早めに行けと言つたはずだが」

「仕方ねえじやん。どうしても我慢できねえんだから」

睨み付ける参謀先輩とは対照的に笑いを絶やさない大曾根先輩。「ほんと、この人たちが仲いいのってどうしてなんだろう？」

「我慢しろ。お前に限界なんて無い、そだろ？」

と、閉鎖された状況を打ち破ろうとしている所で一人でトイレに行こうとする大曾根先輩に参謀先輩は表情も変えず言つ。まさかそんな言葉をこんなシチュエーションで聞くとは思つても見せんでした……。

しかしそんな言葉にも大曾根先輩は反応せず、

「わりいわりい、お前ら適当に頑張つてくれや」と、走りながら部屋を出て行つてしまつた。

一体どうしたんだろう？ ちょっと前までは何かがおかしいって思つてた。けど今はそうじやない。そうじやなくて、何もかもがおかしいって思えてくる。

すると、今度もまた菅原君すがわらが反応した。今のやり取りのどこがどれだけおかしかったのかは私には分からぬけれど、とにかくちょ

つと笑い声を溢しながらもそれを堪えている様子だった。宝くじでも当たったのかな？

「別に、何でもありませんよ。それより、ゆっくり大曾根さんでも待ちましょ」

と、彼は笑った。まるで私にはそりぱりわからない何かを分かっているみたいに。

「今は待つのが、僕らの役割ですよ」

急ぎのために廊下を突っ走り、早速角の一つに到着した。ここは俺が彼の美しい花火の一つを仕掛けっていた場所で、そういう場所なら脳内に全て刻み込んであるなんてことは今更言うまでも無いよな。窓の外側に目をやると、俺の爆弾が小さな爆発すらも防ぐように力づくで潰されていた。窓の隅に小さなひびが入っているのは、それだけ大きな力が余分なまでに加わったって事か。

そんな業わざをやってのける奴なら、別に俺の記憶にもいる。

「んじゃ出て来いよ！ ロエダ！」

俺はそいつの名前を呼びながら、ピンを外した手榴弾を上に放り投げた。皆のアイドル大曾根誠文様お手製の、音だけ無駄に強いブツ。

そんな酸味の利いたパイナップルが約一秒後、音を立て爆発はしなかつた。

「皆のアイドル天森小枝様、ここに推参 かしら？」

女子にしては背の高く、一見そこらにいるただのJKにしか見えないそいつの手には、巻き戻されたようにピンの刺さった手榴弾が握られていた。

「何のつもりマコト君？ 今は授業中なんだけど？」

「わりい、つい受験勉強のストレスでな。ついでに俺はそんな包丁で刺し殺されるような名前じゃねえんだぜ？」

そう言いながら俺は懐からおもむろに銃を取り出した。おっと、

一応言つとくがBB弾な？ 威力は極端に高くしてゐるが、まあ俺はちゃんと全力でやる人間だから安心しろ。

要するにそういう事なんだよ。言葉なんてのは飾りだ。少なくともゴーダがそんなものを必要としていない限りは、力づくでいつてやるまでの事で。

「んじゃ行くぜ。」いつで一氣に貫いてやるさ

「へえ？」ちひは初めてだからやせしくしてくれるとうれしいな

？」

そんな表面上はやけにノリのいい会話をしながら、俺達は廊下にてぶつかり合つた。
すじく、体が熱かつた。

第五十七話　凍えた思い溶かしたい（前書き）

「閣下さん！　出番ですよーー！」

「任せとけ！」

……この元ネタに気づく人は果たしているのか。ヒントは別の閣下さんが出てくるアニメです。そして今回のサブタイにも気づく人はいるのか。

えー、御託はともかく、久しぶりの更新ですね。いろんな意味ですいません。

第五十七話　凍えた思い溶かしたい

「ああ逝くぜ！　まず一枚目！」

「ドロー！　モンスターカード！」

上着の中から拳銃を取り出し、一瞬で照準を定めて一発撃つ。男は黙つてヘッズショット！

躊躇はしない。当たればほんのちょっと非常に激痛を受ける事はあるだろうが、死にはしない。たまに人を殺せる性能の改造工アガソツてのがあるが、こつちはその逆で、殺さない改造を施した実銃だ。専門的なことはともかく、あまり声を大きくして言えたもんじやないな。見ての通り俺は『』一般的な学生君なんだから。ただ少し変わつているのは、ちょっとぴりロマンを求めてしまつてところかナ。

それに、手加減なんぞしてやれる相手じゃない。つーかこつちが手加減してほしいくらいだ。

足を崩し身を翻し、大仰な動きでコエダは避けた。俗に言つ「見切り」ってのとは正反対の動きだが、こいつにはしつかり弾道は見えるんだどうな。そのまま回転の勢いに乗つてこちらに向かってくる。

左からもう一本拳銃を取り出し、足元を狙つて撃つ。ここに当たると思えるほど俺は浅はかじやない。これは必要な搅乱だった。一旦相手のペースに呑まれたら終わりだ。ヘッズショット？　とうに男はすたらせた。まあ、もう一人の俺は、いい奴だつたよ。

「んなっ！？」

ついつい驚愕が漏れる。こう搅乱しても構わぬ前に出てくるのかこいつは。馬鹿なのかこいつは？　少なくともこの強さは馬鹿つかバグか。

そのままコエダは踏み込んで、拳をまっすぐ打ち込んでくる。咄嗟にガードした。

だが拳は届かない。ガードを打ち破ろうともせず、そのまま後ろにステップで下がつていった。背中に目があるのかは知らないが、足元の弾も綺麗に避けながら。すげえ。

「一筋縄じゃいかないってレベルじゃねーぞこれ」

「そっちこそ、咄嗟のゼロフレームでスタンガンが出せるものなの？」

「出たもんは出たんだ。仕方ねえだろ」

「それなら仕方ないわね」

右手に持ったスタンガンを再びしまい、代わりに一個拳銃を取り出す。名前？ 忘れたね。覚えてられる数でもないし。せいぜい性能を身体が覚えている程度だ。

それでもさつきの突きは本当に冗談じゃねえぞと小一時間問い合わせたい所だ。踏み込みの時の音とか半端なかつたぞ。恐るべしコエダステップ。

「さて、更に行こうかしらね？」

来るんじゃねえ。

なんて嘆いてみても仕方なしに奴がこっちに走り出してきている事に変わりはない。仕方なしにまた迎撃体制を。

「っし！」

そんな鋭い呼吸音と共に見た目胡桃ほどの大きさの何かが直線軌道で飛んできた。これは。

「弾かよ！ しゃらくせえ！」

小枝がさつき拾つて弾き飛ばしてきた弾丸を、俺は咄嗟に銃の柄尻で叩き落とした。

その隙に、奴は突っ込んできている。想定内だったが、反応が遅れる事に変わりはなかつた。元々蟻の穴一つ見逃さないような奴なんだ。当然だよな。

膝蹴りを飛ばしてくる。小癪にも弾丸を弾き落とした銃で視界が塞がれた右下からだ。

だがそうであつたにしろ所詮想定内は想定内。今更視界を塞ごう

が、俺には関係ない。その奇襲で作れたのはたかが弾丸一個を叩き落とす動作の分だけの隙だけで、その成果なんてものは些細極まりない。

何より、その死角からの蹴りを待ち望んでいた。手と違ひ足は、一度勢いに乗ると止められない。特に高い蹴りはだ。

「甘えよ！　てめえにとつての最大の好機が

「私にとつては最大の好機！」

この野郎、人の言いたい事を先に言いやがつて。ここだけ見りやただの合体技みたいじやねえか　などと言つよりも先にコエダは身体を捻り、

空中で跳んだ。

いや、「翔んだ」って方がいいかもしない。そんな空中コエダステップ。いずれにせよこいつはそんな非科学的な動きをして、その上で鋭いローリングソバットだ。全く馬鹿げてやがるよな。

「ああ、全くだ」

だが、その会心の一撃は、俺には届かない。

剣にも槍にも銃にも、何にでも間合いつてもんがある。当然足にもな。接近戦の大技だろうが何だろうが、それが超接近戦ならどうだ。

とはいえるんなリーチだとこいつちもやうづらうが

「生憎こんなもんがあつてな」

「それは残念」

両手に取り出したスタンガンを持ちコエダに当つとする。だがそれも叩き落とされ、

「俺の勝ちだな、コエダ」

深く呼吸した後、得意げに言つてやつた。スタンガンを捨てた両手は、そいつを捨てさせた両手首を掴んでいる。

「いいぜ、敦次」

直後、つい偶然にも、爆発が起つた。

風を感じる。これが私の力か……

……なーんてね。

「はあ……」

自らを取り巻くあまりに混沌で不愉快極まりない状況に、私は人知れず嘆息した。

今私の恰好はカツターシャツにスカート、そして男子用の上着、それに靴下と上靴を履いている。

要するに今現在私は、下着を身に付けていないのである　なんてシユールな展開は勿論あり得ないから安心してほしい。何言つてんだ私。

まあ結局何が言いたいかといつと、衣替えの時期がまだ先で助かつたという事だ。

春風という単語がある。そいつは実に暖かな響きであるんだが、それでも所詮風は風というか、実際のところ外は実に寒い　今のところこうやってサボリ、貴重な授業時間を立ち入り禁止の屋上で何もせず費やしていく得られたのは結局その程度の教訓だった。これだから言葉の響きってのはあてにならないんだ。くそったれ。

そう、これは最早一種のクソゲー。嘉光の存在ばりに非効率で私の士気もだだ下がりだ。そういうと落ちるだけ落ちた気がしなくもないが、しかし残念ながらこれ以上落ちないという確信はない。やはり嘉光の存在ばりに不条理で、上るのは不快指數だけ。状況が変化するのが先か、私が折れてしまうのが先かという、これもまたクソゲーとなる。どこかでポジティブに切り替えなければ、いつまでも悩んでいられる気すらする。

杭瀬曰く今現在文芸部の方々は下で色々と頑張ってくれてるそうで、その無価値な嘉光のあんちくしょうをここに連れて来るからせいいぜい腹くくつて待つてろなどという、確かにそんな話だったはず。これ前回までのあらすじな。

んでここから出るな、ともあいつは言つてたな。そういうえばここは屋上、つまり外であるわけで、日本語つてややこしいな、などどうでもいい事をふと思つてしまつ。

そして寒い。……あ、今のジョークがじゅなくて周りの気温がな。地球温暖化とかヒートアイランド現象とかただの都市伝説だろ。フーン現象ぐらい起こつてくれないだろうか。……無理か。

まあだがこんな風に咳いでいる私にもそれなりに忍耐力というものは存在するわけで、利口にも我が生命をかけてここで待つてやつているわけだ。分かりやすく言えばツンとデレ。何か違う気もするけど。それはともかく、どうだ。不覚にも泣けてしまう話だろ？

……いやしまつたな、最初にハンカチの用意を促しておけばよかつたかもしれん。これを見る時は部屋を明るくして画面から離れ、なおかつハンカチの用意を、みたいな感じで。

ああ、あと一つ重要な報告。さつき何かが爆発したような音が聞こえたが、すぐに止まつたみたいだ。何が起つたのかはよく分からぬが、とりあえずだらしねえなと言つてやりたい。つか寒いんだから早く来い。私が死んでしまつてもいいのか。下着つけてよかつたよ。外す気なかつたけど。

「くそ、内藤……！」

ついついその名が口から出た。そうだ、この状況も全て内藤嘉光が悪いんだ。そうに違いない。そうでなければならない。自然の摂理である。

大体あの事件が起つるまでは、

『ヘイ晴希！ 僕は互いの親睦を深め合いたいんだ。だからそういう意味でも結婚しよう』

確かこうだつたはずが、再び会つた時には、

『オウ済まないネお嬢ちゃん。……ン！ そういうえばマイハニーを待たせてたじyan！ A H A H A H A H A H A !』

こんな感じになつっていた。うん、確かにこんな感じだつたね。一字一句間違ひない。だんだんと怒りが込み上げてきたぞ。怒りゲー

ジマックスだ。マックスハートだ。プリティでキュアキュアだ……うえなにそれ氣色わる……まあとにかくだ！

「……勝手に近寄ってきて勝手に忘れ去って、そんで勝手に消えて

? ふざけんな馬鹿野郎」

こんな風に私は束縛されてばかりなのに、どうしてお前はやりたい事やって、いてほしい時にいないんだよ。ヒットアンドアウェイ 気取つてんのか。ふざけんな。

……いや、少し理屈が違つたかもしれない。

ふとそこで冷静になつた。一度怒りゲージを消費してしまつたからかもしれない。とにかく少しばかり反省タイム入ります。

まず、嫌いじやないとは言つた。だが当然そんなものは逃避であり、そんな逃避で事を終わらせようとした。あいつは限りなくしつこいからな。

ああ、確かに嘉光はしつこい。それだけに留まらず「キブリ並に気持ち悪くうざつたく、そしてしつこい（繰り返させてもううが）死ねばいい」とさえ思つ。重ね重ね言つが、死ねばいい」とさえ思つ。本当に大事なことなら一度言つたつていじやない。

そしてそいつから、私は逃げたんだ。

それは人として、いや、生物として当然の行動だったのかもしない。仕方がない事だつたかもしれない。

だが、一体それは何を意味する？

私は非力な人間ではあるが、それでもあんな奴から逃げなければならない負け犬じやない。そんなの私が絶対に認めるか。こつちはゴキブリ見ただけで腰を抜かすアマビもとは違うんだ。

そうだ、結果的にはイエスかノーかの一択じやないか。馬鹿言え、そんなもん嘉光に出来て私に出来ないはずがない。

「仕方がない」なんて糞食らえだ。いつまでも逃げてるだけだと思うよ。

そつちが逃げるなら、こつちが追うまでだ。

「ふん、糞つたれめ」

そう吐き捨てる、来た扉の取っ手に手をかけ
ガタッ。

「…………」

……いや待て。ワンモアタイム。
ガタッ。

「…………」

……ああそつか、これは引く扉じゃなくて押す扉で
ガタガタッ。

「…………」

……いやいや、『ガタガタッ』じゃねーですよ。ＳＥきちんと仕事しろ。ドアの音つてのはもつと……いやいやそうじやなくてだ。どつかの誰かさんがお茶目な事に内側から鍵を掛けてしまつている、という事なんだな要するに。

「ははは、糞つたれめ…………」

……いや、落ち着け私。ひとまずは素数を数えて落ち着くんだ。
逆境の中でも思考を放棄するな。

まず状況を判断しよう。屋上は高くにあるから気圧が低くなつて、ボイル・シャルルの法則に従つて気温が非常に下がつているわけでとどのつまりこのままだと私は凍死、少なくとも凍傷で体の一器官が動かなくなつてしまふだろう。漫画のブラックジャックでヴァイオリニストの人が指切るしかなくなるつて話があつたしな。さすがにこの年で五体不満足は勘弁だ。いや死ぬまで勘弁なんだけどさ。しかも困った事に私はこの脱出ゲームといったものの経験など『さつぱり妖精』が見えてしまつほどにさつぱりである。今度こんな事があつた時のためにしつかりと予習しておこう、うんそれがいい。まあいい、それでも私なりにヒントを探そう。いつまでもたらればで引き摺つっていても仕方がない。

一見殺風景に見えるが実は一つ取り外せる石畳があるなんて展開でどうだろう。よし床を調べるぞ。

「…………」

そんな地道でシユールな脱出ゲームあつてたまるか。もしあつたとしてもそりやただのクソゲーだらう。何回クソゲーって言葉使えばいいんだ私は。気をつける。

……実際人生はクソゲーなのだが、もしそのクソゲーがここにまで及んでいるというならもうそれは私の知ったこっちゃない。勝手にしろ。

ガタガタツ W

「うるせえよ！」

ついにドアにキレてしまつた。これで普段温厚たる私も最近のキレる若者の仲間入りである。なんだかとつても嬉しくない。……いや、なんかドアが嘲笑つてるようになに聞こえたんだよ。

そうだ、まずはそのお茶目などつかの誰かさんに助けを求めるよう。堅実にそんな考えに至り、私は携帯電話を開いた。こんな私でもアドレス帳にあいつらの名前はある。もつとも気付けば設定しておいたセキュリティすら勝手に潜り抜け登録されていたという次第なんだが。

『圈外』

……ああ、そういうやそんな設定でしたね。すっかり忘れてましたよこんちくしょーーー中途半端に学校から離れると使えるようになるから悪いんだ！

「くそ、恨むぞ杭瀬！ あいつ私の事が嫌いなのか！」

激昂。そんな私の怒りに呼応するかのように、下から、足元から爆発音が響いてきた。

空氣を読んだな、流石は大曾根さん。そこに痺れる憧れる。

後はまああれだ、空氣を読んでこの寒さをどうにかしてほしい所存だ。

第五十八話 そんなものは似非だ

「わわっ！」

突然の和太鼓を打ち鳴らしたような大音響に、それまで時計を見つめていた私は驚いた。

時計の長針に目を向け、ついに授業を休んでしまったな、なんていう状況確認を何度もたかってようやく時で、要するに具体的にどうだけ悩んでたかつてのはわからないんだけど。

ともかくそれは、つい十分くらい前に止んだ爆発が、また始まりを告げた音だつたらしい。

「どうやら大曾根さんが妨害の動きを止め、そこで一富さんが起爆させたようですね。自分一人で起爆させるように見せかけて、最初から大曾根さんはそのために……」

「菅原くん……今日はなんでそんなにアグレッシブなの？　あとなんでそんなに説明口調なの？」

菅原くんは思案顔で今日に限つて何度も目からしない割り込みをしていて。気付いたら背後にいたりするからどう反応すればいいのか分からぬ。彼は一体私に何を求めているんだろう。

「ああ、いえ、これはいわゆる名譽挽回ですよ」

と思案顔を崩して言う菅原くん。

「名譽挽回？」どうも菅原くんの言つている意味がよくわからなかつたのでおうむ返しに聞いてみる。

「ええ、どうも僕が近頃この小説で空氣キャラなんじやないかと疑われているようなので」

キリッ！

なぜかそんな感じの擬音語が聞こえた気がした。これまた反応に困る。少なくとも空氣じゃないとは思うんだけど……。

「いえいえ、空氣も空氣ですよ。なにしろ登場時期があなたと同じにもかかわらずアニメオリジナルキャラ呼びわりですからね」

「まあこの辺りの話は杭瀬さん辺りが得意とするかと……」

「まあこの辺りの話は杭瀬さん辺りが得意とするかと
「杭瀬先輩、そんなのが得意だったんだ……」

「実は杭瀬先輩と話したことはあんまりなかつたりする。というか
晴希先輩と話してゐ所しか見たことがなかつた。ん……？」

「杭瀬は存在感が薄く他人にほとんど話しかけないが、ただ秋津に
対しては人が変わつたかのように舌が回る。奴が似非無口キャラと
呼ばれる所以だな」

どこからかずいぶんな説明口調が聞こえてきた。さつきの菅原く
んにも劣らない説明口調だつた。

「ああ、今のは『刹冥王』さんですね」

「せつめい……おつ……？」なんだか凄そうな名前だつて事はわか
るけど……。

「三年の先輩ですよ。その名の通り説明口調に特化し、何よりすこ
いのは今のよつこじのよつこじのような状況からでも説明口調に繋げられる点
ですね」

僕も見習つていますが、とつけ足す。

どうしよう、本当に菅原くんの言つてゐることがわかんない……。

「更には超必殺技の『最終鬼畜説明』アコースティックバージョン
♪』というのもあって、これはどういう技なのかというと

「無駄話は終わりだ。さっさと始めるぞ」

菅原くんが説明話をしようとしたところで、参謀先輩が呼びかけ
た。

「ああ、確かに急がなければなりませんね。行きましょうか」

「あ、菅原くん？ その最終鬼畜説明つて？ ねえ、何それ？！」

「静かにしろ！」

怒鳴る参謀先輩。私たちの戦いはこれからだ。

……結局、説明口調先輩が何のためにこのタイミングで出てきた
のかは分からずじまいだった。

「では、行きましょうかね」

眼鏡を上げて悠然と身を翻すのは新聞部部長の仁科先輩。新聞部員達を連れて、私達とは別方向に廊下を歩いていった。

確かに内藤先輩の所へ行くのが目標とか言つてた氣もするんだけれど……。

ちなみに私達はちゃんと内藤先輩の教室を田指している。別ルートとかそういうのかな?

「ああ、あれは……」

「うん、菅原くん説明頼む」

「いいですとも!」

私が振つてみると、菅原くんはなぜか水を得た魚のように説明を始めた。ところでどうして参謀先輩はここで注意しないんだろう?「新聞部は今頃教室にいるであろう秋津さんを例によつて攫い……もとい迎えに行き、僕ら文芸部は同時に内藤さんを確保、一緒に豚箱……もとい愛の巣にブチ込みます。新聞部は戦力が少なくて秋津さんを攫い慣れてるし、秋津さんの方も攫われ慣れてる。そこから秋津さんが適当に頑張り、場合によつては再び簍巻きにして川に放り込み、イイハナシダツタナー。」
「うん、後半はともかく、そういう事なんだ……。

でも色々と訛然としないところもあるなあとは思う。攫われ慣れてるの意味とか、そういうのとはまた別に。

「ちなみにさつきから参謀先輩に咎められないのは、参謀先輩がこれを見ている皆さんを気遣つての事で……おつと誰か来たようですね」

「いや、誰も来てないけど……」

私がそう言つても、菅原くんは口を開けいつとしなかつた。ほんと、彼は一体何が言いたいんだが。

「それはともかく、守坂さんは大丈夫ですかね」

あれ……? 菅原くんって椎ちゃんの事知つてたっけ? まい

いや。

「椎ちゃんが何を頼まれたのかは知らないけど、きっと大丈夫なんじゃないかな?」

「だつて椎ちゃんは、すつごい強いし。

「大した信頼だな」

いつの間にか横に参謀先輩がいて、会話に加わっていた。
「俺も大丈夫だとは思つてゐる。そんな事より重要な事だ」「はあ……」

自分で言うのもなんだけど、私はごく普通の女子高生だ。好きな人が女の子だと、そういうのは別に、例えば私にしか出来ないような事なんてないと思つてゐる。一体この人は私に何を求めているんだろう??

「俺は参謀じやない。一富だ」

「……ごめんなさい」

「どうもそういう事だつたらしい。何かと思つたらそれはまた」とはいえ、秋津の方も面倒な事になりそうな予感だな……

「……どういう事ですか?」

「人間は、発作的に何かをやつてのける事がある」

「え……?」

最後の一富先輩の一言に、私は全く理解が出来なかつた。

思えばそれは、発作のようなものだつたんだろう。

「ふーん……何だかよく分からないなあ

無邪気さを感じさせる快活そうな声が、今は混乱したように頭の上に?マークを作つていた。そして困つたような顔で、

「先輩の言ひ事はいちこち文学的で難しけや」とも言ひ。

実際のところ、全てわかつてゐるんだろうな。晴希も知らない知りうとも思わないような私の喜怒哀樂も何もかも。

すべてわかつていながら、それでも私の心を抉りにくる。それだけはまぎれもなく、ただ的好奇心によるものなんだろう。こう言つたらどうなるか、こういつ態度をとつたりどうなるか、そういうのをまるで化学反応を取るように見ているんだ。

だから、はつきり言つと私は田の前にいるこの少女が嫌いだ。笑顔で心を傷つけてくるこの少女には、早く消えていつてもらいたい。それでも私はこつして戦いもせず向かい合つてゐる。それは、私情より強い別の私情があるからだつた。いや、私情だけじゃなくて課せられた義務さえも払いのけたわけだから、もっと深い心の奥底で思うことがあつたのかもしれない。

どつちにしる、我ながらおかしな選択をしたとは思つ。これじやまるで、最初から晴希を裏切るために力になろうとしたみたいじゃないか。最初はまぎれもなく、晴希の力になろうとしてたはずだったのに。

晴希はどうしているんだら?。そんなの決まつてゐる。

「大丈夫、先輩?」

「…………大丈夫」

まるで本当に心配しているような素振り。けど彼女は結局。

「秋津さん、怒つてるだらうね……」

「…………怒るに決まつてゐる」

「だらうね……」

「…………」

そうしていてくれないと、私がいつたい何のためにこんな事をしたのか分からなくなる。そんな、たかが皆が不幸になるだけの反抗なんてごめんだ。

理解はしていたし何を言つてくるかもわかつてゐたはずなのに、

言われてみるとそれはそれは苦しかった。

「私は……」

「やう言いかけて、また詰まる。私は、いつたじどうなんだひつ。」

晴希の言ひとこりの『似非無口キャラ』である私は、不意に晴希を裏切つて、それで？

晴希を怒らせ、失望させ、何もかも白紙に戻して、それで？

いつたいそれで、どうするの？

一度きり。退く事も叶わないのに？

そうした無意味も無意味な問いかけをしている私に、彼女は救いの手を差し伸べた。けどそんなものは、

「ああ……」じめんね先輩。もしいいなら、晴希さんの代わりにあたしがいるからさ」「あら、

私を突き落とすための、樂にするための手に過ぎなかつた。

「私はつ！」

詰まつた言葉が、やはりまた飛び出た。ただせつせと違つのは、

「あんたなんか、大つ嫌いつ！」

と、ついにその言葉が続いた、続いてしまつたことだつた。

一度救いの手を振り切り、メーターを振り切つてしまふと、どんどん言葉の奔流が溢れ出でてくる。今日の前の彼女はどんな顔をしてるんだろう。振り切れてしまつた事への嘲笑か驚愕か、もしくは落胆かも分からないが、きっと呆れているんだろうなと思つ。

けど私は目を背ける事しか出来なかつた。一度でもそっちを窺つてしまつたら止まつてしまいそつだつたから。ここで全て吐き出しきつ

てしまわなきやならないような気がしたから。

「あんたが晴希の代わり！？ ふざけないで！

私はそんなに人に飢えちゃいない！ 確かに結果的に陥れたのは私だけ……けど人の背中を押して、なのになんて人を責めて、それで気持ち悪い仲間の輪に組み込もうとしてるのは誰だと思つてんの！？ 大体さ、元々一人だったの私は！ 孤独なんて今更辛くない！ 下手な同情よりはよっぽどましだ！

そんな些細な孤独よりはあんたの仲間の方がよっぽど嫌だ！ 虫酸が走るつたらありやしない！

腫れ物に触れるような態度されて嫌じやない人間なんているわけないだろ！ そんな自己満足の優しさとつととやめちまえ！ 触れるな！ 決るな！ 知つたふりをするな！ 痛いと思つながら何もしないのが本当の優しさだらうに！

大っ嫌いだ！ あんたも！ 何もわかつてない晴希も！ 誰も彼もわかつてくれないんだ！ ふざけんな！

そんなものは 似非だつ！

いつたい何を言つているんだらう自分は。わからないけど、まるで口のほうが勝手に動いたみたいだ。私つてこんなに情けなく、そして騒がしく叫んでしまう人間だつたのか。

ところで前が見えない。どうしてだらう？ 目を閉じているからだ。

じゃあ目を閉じているのはどうして？ 目が痛くてたまらないからだ。

それじゃどうして痛がつてるの？ 泣いているんだ、私は。

なんだそれ。本当に狂おしいじゃないか。

「もう、戻れないんじゃないかな？」

何かを暗示したような言葉に恐怖のようなものを覚えながらも覚悟を決め、顔を上げると、睨みつけるべき相手は、もうそこにはいなかつた。

そうだ、心を病んでいる場合じゃない。他人であるあれが何をし

ようが、結局は私の問題なんだから。立ち止まるな。そうだ、戻れると思つた。自分にやれる事だけを、ただやるだけだ。

そうでないと壊れてしまいそうだ。いや、もつ壊れてるのかな？どうでもいいや。

こいつのをなんて言つたつけ？……そうだ、『闇堕ちフラグ』とか言つたつけな。

そんなことを考えていると、なんだか外から『あいつ私のことが嫌いなのか！』なんて恨み節が聞こえてきて、

「…………」めんね、晴希

決して聞こえないであろう、謝罪の言葉を口にした。

直後、晴希の憤りに呼応したかのように爆発は再開された。

第五十九話　『在る』が故の束縛（前書き）

毎度のこと遅筆、お許しください！

第五十九話 「在る」が故の束縛

「いいか、積分方を使う事で整関数の次数は一増える「五時限目。数学教師がくどくどと説明していたが、聞いている奴は半分にも満たない。俺としてはこの人の話は結構面白いと思うんだが、今はちょっと懸案事項があつて聞けない。懸案事項つてのは、最近クラスメイトの俺を見る視線が変わってきたような気がしてならないってことだ。

「例えば一次関数を積分すれば二次関数になり、二次関数を積分すれば三次関数になるといった具合だ」

例えば綾女なんかはいつもおかしいんだが、近頃は更におかしくなったような気がする。授業中でもチラチラとこちらを窺い、目が合いそうになると避けるといった具合だ。綾女ほどはつきりとはしていないが、他のやつらもそんな感じ。

最初は何か俺に付いてるのかもしくは憑いてるのかと思ったが、別に内藤家に血塗られた歴史があつたわけでもない。たぶん。

「これを発展させることで、さまざまな可能性が開けるわけだ」

思い当たる節はないわけではないが、

- ・件の夢の事。
　　くだん
- ・ここ一週間より前の記憶がはつきりとしない。
- ・教室には窓があるにもかかわらず携帯の電波がなぜか圏外。
　　けんがい
- ・そもそも綾女は確かにこのクラスじゃなかつたはず。

とまあこの程度の些細な出来事で、どれどれにもつながりが見えない。

自分一人で悩んでいても仕方ないのでクラスメイトに聞いてみたが「ああ……そう」とかそんな曖昧な答えばかりで話にならなかつた。

「今このように三次元の世界にいる我々だが、七次元の世界に行く事も理論上不可能ではない」

綾女について？ そんな個人を詮索するような事聞けるか。

と、後頭部に軽い何かが当たった。

何かと思って拾つてみると、丸めたルーズリーフだった。きっと俺宛てに何か話があるんだろう。投げやすいように重りとして消しゴムが包まれていて、紙にはこう記してある。

『消しゴム貸してくれ b よ 廣前』

後ろの方に目をやると、クラスメイトの廣前と目が合つた。なるほど、得意顔だ。

俺も素早くルーズリーフを取り出し、『死ね』と書く。消しゴムに丸め、一度振り向いて場所を確認し、奴の方に全速力で投げた。

「そう、今こそ次元の壁を越え、我々は更なる進化を目指すべきではないかと思うのだ」

後ろを確認すると、果たしてそれは額直撃コースだった。ざまあみろ、とほくそ笑む。せいぜいその消しゴムを使つてろ。何が貸してくれだ。普通に持つてるじゃないか。

それで、何の話だつたか…… そうだ、自己紹介を忘れていたな。

俺は内藤嘉光。ごく普通のありふれた高校二年生だ。

……冗談だ。確かにこの状況がどうなつてゐるのかつて話だつたな。そのためのひとまずの目標は四次元世界だ。おそらく一十三世紀には一般的なものとなつてゐるだろう

四次元の世界……

次元の境界……

なるほど、一理あるな。思えば

俺のいるここは些か三次元だけに縛られすぎているのかもしれない。という事はまずこの理を崩すために……

まずは今いるこの世界で絶対的なものとされている三次元の理を崩すため、積み上げられたバベルの塔を根本から破壊する必要がある

る

そう、バベルの塔だ。あれが崩れれば万物を結び付けている言靈は消え去り、その時こそこの世界は次元の壁を突き破り、新たなる

じまとま

ものとして生まれ変わ

「いつ！？」

不意に後頭部に雷撃が走った。俺は後頭部にぶつかり上に跳ね上がりたブツを取つた。一体誰だ！ 思わず目から星が出たぞ！

『だが断る』

言うまでもなく、廣前だ。ルーズリーフは威力を増すためか、消しゴムを五個包んでいた。お前消しゴムどれだけ持つてんだよ。

それならこちらにも考えがある。

『黙つて死ね』

ノートにそう書き、ブームランのように手首にスナップを利かせ後ろに投げる。見事命中だ。

すると今度は、後ろから教科書が飛んでくる気配がした。おそらく四冊だ。

だがその行動は読めていた。懐からノートを四冊取り出し、教科書が飛んでくるのと同じ方向に投げて相殺する。こんな朝飯前だ。だが、それでもなぜか後頭部に衝撃来る。なるほど把握した。先の四冊は囮で、もう一冊をまったく同じ軌道で投げたのか。そこまでしてくるなら、やるべきことほひとつ。

「ぶつ潰す！」

体ごと反転させ、ありとあらゆる武器を揃える。シャーペン、三角定規、コンパスは当然の事、前にある黒板消しや教室の隅のプラスチックバット、偶然ポケットに入っていたカッターナイフなどもだ。廣前も教壇においてあるチョークの箱や美術室からくすねてきた彫刻刀を手に持っている。

たちまち戦争が始まった。俺と廣前の間を、『死ね』やら『地獄に落ちろ』だと書かれ言靈で威力を増した飛び道具が凄惨に飛び交う。

『授業妨害とは何事だ！ 廊下に立て！』

ふとそんな文字が目に入る。それが数学教師が俺たちに投げつけた机に書いてあつたものだと理解したときには、既に俺は飛んでき

た机に頭を強打していた。

「お前のせいだ内藤」

「死ね」

今度こそ田から星を出しながら、俺は廊下に立たされた。廣前も一緒にだ。やつたね！

「正しいから死なねえよ」

どういう理屈だそれは。

「……まあいいや。死なない代わりにひとつ質問に答えてくれ」

「その理屈はおかしいが、それでも親友だ。話べりには聞いてやる」

「いつから親友になつたかは知らんが」

「ひでえ」

何やら変な事を言つているが、俺は無視して続けた。

「最近俺の周りで、何かあつたのか？」

直後、廣前の表情が硬くなつた。そして目線をきょろきょろと動かしている。誰がどう見ても怪しい。言い逃れは流石に無理だろうな。

「あー……なんて言えばいいんだろうか」

「……言えないのか？ それとも知らないだけか？」

「知ってるぜ」

「こいつ……あつれいと言いやがつた……」

「けど言えないな」

「どうして」

「俺が言つべさ」とじやないと思つんで」

廣前は肩をすくめて言つた。その様子があまりにもムカつく上、若干事務的だったので、

「言えよ馬鹿！」

俺はキレた。きっと理不尽な怒りではないはずだ。

「いきなり胸倉掴んでキレんなよ！ わつきまで理解してそつな態度だつたくせに！」

「まあいいや」俺はつい熱くなつて掴んだ廣前の胸倉から手を離した。「使えないやつだとは思つてたからな」

あーあ、本当にがっかりだ そんな視線を向けると、廣前は全く同じ視線を俺に向け、

「馬鹿か」

と言い放った。

「何言いやがる。馬鹿って言つた方が馬鹿なんだぞ」「黙れ馬鹿。ここでは俺が言つ事で生じる弊害へいがいを理解しようとも思わんぐせに」

「弊害……？ どういう事だ」

言つていることがよく分からなかつた。お前が言わない事で宝くじでも当たるのか？ それとも俺に事実から目を逸らさせる事自体が目的でその隙に事実を捻じ曲げるつもりか？ よくわからんが許せん！

「なんなら邦崎くにさきに聞け。お前のためにわざわざうちのクラスに来たんだぞ」

「俺のため？ 「冗談よせよ。なんで綾女あやめがそんな事」

俺がそう言つと、なぜかこいつは、

「まだまともな馬鹿だと……思つてたんだけどな……」

更に非難するような視線を向けてきた。何が言いたいんだ！ 意味が分からない！

「お前は本当に馬鹿だつたんだな……」

ただ、とりあえず馬鹿にされてることだけは明白めいはくだつた。

「男には、戦わなければならぬ時がある！」

「ほつ……言つてみろ小僧」

両手を大きく広げ目の前の相手を正面に見据える俺と、学ランをマントのように翻し挑発する廣前。

「己おのれの存在を笑われた時だ！」

霸氣はきで窓ガラスにひびが入るが、そんな事どうでもよかつた。俺

はこいつをぶつ倒す！ たとえこの命に代えても！

「……何をやつてお前ら」

そして、今ぶつからんとした時、教師が俺たちの間に入り、両者の拳を止めた。

「お前らはやはり私の手の届く範囲にいなければならぬらしいな

「またお前のせいだ馬鹿」

「死ね」

とうとう俺は簾巻きで教壇の横に転がされた。今度もまだもなく廣前と一緒に転がされた。

廣前と一緒だ。やつたね！

ちなみにその張本人である教師は今第四の壁を壊せる可能性について言及しているが、誰も聞いている生徒はない。俺もこいつの状況でなければ聞けているのだが……。

こうなってみて気付いたことなんだが、どうやら俺は簎巻きこそれる事に一種の懐かしみを感じてしまう体質らしい。なんだ、ただの変態じやないか。

そういうえば廣前がさつとき言っていた、弊害だの綾女だのは一体どうこう事なんだろうか。単純に繋げると、俺が知つてしまつと綾女が何か損するつて事か？ 何が何だか意味が分からぬ。

一体どううことだよ、綾女……。

綾女の方を向き、目でそう云えようとしたが、目が合つた瞬間に俯かれた。ひょっとして俺、嫌われるのか？

と思つたのもつかの間、教室内がざわめく。

「どうどう来たか、文芸部」

すぐ側で簎巻きにされている廣前は既に状況を悟つているようだ。

「何の用だ」

教師の声だ。教室の入り口に向かつて話しかけている。

その相手が、口を開いた。

「どうも、文芸部の一宮敦次です。幽霊部員の内藤君を引き取りにきました」

第五十九話 「在る」が故の束縛（後書き）

今回のタイトル、単なる数学教師の台詞です。本当にありがとうございました。

第六十話 分かつたんだよ、全部全部な

一一世紀、太平洋戦争が終結し六十年ほど経ち、人々が多次元に憧れ始めたその時代。

俺とクラスメイトの廣前は正確的なまでの武力と暴力的なまでの知略をぶつかり合わせていたが、その鬭争は惜しくも数学教師の手によつて止められてしまつた。

結果、俺と廣前は共に簾巻きにされ、教壇の横に転がされてしまつたのだ！

そしてそこに現れたのは文芸部の実質最高顧問。カリスマ、火力、素早さ、読心術、説明口調と、どれにおいても学内トップクラスの実力者、一宮敦次……つてやべえ！ 文芸部の事なんてすっかり忘れてたから、なんともあるぜ！

「その独白はいまいちわからない。いずれにしろ幽霊部員たるお前の身柄は今から文芸部が引き取る。依存はあるか」

「経緯がいまいち分からない。だが、お前を縛つていのそれなら解いてやる」

クラスマイト達も納得できないらしく、無言の視線を一宮さんに向けているが、当の一宮さんはびくともしていない。

「経緯がいまいち分かない。だが、お前を縛つていのそれなら解いてやる」

やつた！ それなり……

「納得できないな！」

という所で制止の声が入つた。今の声は統率部の音無！ その名前とは裏腹に大きな声で第一声を張り上げる事で流れを引き寄せる事を得意とする男！

でもどうしてだ？ だつて拉致つたら男のロマンじゃね？

「そうだそうだ！」

「七次元にぶつ飛べ！」

「空氣読めよ、文芸部！」

そんな俺の思いも空しく、クラスメイトたちは矢継ぎ早に一富さんを非難していく。

「黙れ」

だが一富さんはあらうとか、その一言で一気に切り捨てた。

「この中で自分は正しいと、胸を張って言える奴が果たしてどれだけいる？ 右に倣^{なら}えの精神だけでここまで来ていると言つならそんな根性は一つの正義の前には無力極まりないな」

『…………』

一富さんがそう言うと、皆は黙り込んだ。流石にそこまで言われると、非難の目も向けられないんだろう。そりや正義なら拉致されても仕方ないもんな……え、そうだよね？

周りを見渡す。そこには毅然とした態度の一富さんがいて、突然の展開に戸惑う中一病の数学教師がいて、どう反論をするか考えあぐねているクラスメイト達がいて。

そして何とも言えない、辛さと悲しさと切なさの混じったような表情の綾女^{あやめ}がいた。

『…………』

「…………すんません、やっぱり俺は行けません」

どうやら、俺には黙つて一富さんについていくより先に、まだやるべき事があるらしい。

どんな理由であれ、こんな様子の綾女をそのまま置いていく事なんか出来るわけないじゃないか。

「…………どうか、よく分かつた」

呆れたような悟つたような表情で一富さんは俺の方に近寄り、縄を解いていった。ちなみに「おい、俺のも解いてくれていいはずだ」と訴えている廣前はガン無視である。ざまあみや。

縄を解きやつとの事で解放された俺に対して一富さんは、「ちょっとくすぐつたいぞ」

襟首を掴み、顔面を黒板に叩きつけた。

「え……」

力技か！？ まさかの力技ですか！？ それくすぐつたいつても
んじやねえよ！ ごく普通に痛えよ！

これにはクラス内も騒然となつた。皆、さすがにこれをスルーするなんて真似は出来なかつたらしい。

「内藤！ 大丈夫か！」

「いくら幽霊部員相手にもやつていい事と悪い事があるだろー。」

「ちょ！ あんた何黒板凹へこませてんですか！」

おい最後の苦情！ 何か論点違うぞそれ！

「気にするな！」

一喝。さすが文芸部部長、鶴の一聲というか何というか。

……ねえ一富さん、怒つていいですか？ 今俺、すゞく頭がくら
くらしてるんですけど。

ふと、教室のドアからまた新たに別の人間が入ってきて、こう叫
んだ。

「一富さん！ 秋津あきつが見つかりません！」

「……やつぱりか」

一富さん！ 腹いせだか何だか知らないけど俺の頭を黒板に連續
で叩きつけないで！

そう叫ぼうとしても、無情の右腕こううは止まらない。まつたく、わけ
がわからぬよ！

つてか秋津晴希はるきって誰だ！ 僕はそんな奴は……

……どうして下の名前が分かつたんだ、俺？

「新聞部どもに探すよう伝えろ！ それとこちらの一年も回せー！」

「了解！」

未だに手の動きを止める気配を見せず、一富さんは指示をしていく。よく見ると廊下には結構な人数の文芸部員がいた。もう分かつた。最早これは単なる幽霊部員への刑罰じゃない。俺一人への当て付けでこんな盛大に動く必要なんてない。

「あえて」の可能性を外してみると、俺一人ではなく、俺を含むた

くさんの人間への当て付けになるか。

それでも、発端は俺なんだよな。

俺が忘れて、綾女のためにこここつらが思い出させないで、そこに文芸部が現れた。

全ての元凶の俺は思い出さないといけないだらうが、かといって綾女をほっておくわけにもいかない。

そもそも思い出すべき事なんて……ああ、秋津晴希か。

…………晴希じゃないか！

どうやらこれでもかといつくりこの頭部への衝撃で、俺は全てを思い出してしまったらしい。

全部分かつてしまた。晴希の事も、記憶喪失の経緯も、全部全部。

綾女がここに来た理由も含めて、だ。

だつたら俺は

「とべつ！ いぢつ！」

止めて下さい、一富さん！

「あと十一回だ」

「なるほど、百八回 煩惱の数だけやる気か！」

一富さんの何気に計算された力技に、廣前が叫んだ。という事は九十六回やつたのか……つて今まで全部数えてたのかよ！？ そんな暇あつたらさつさと止めやがれ！

そんなこんなで十一回終わり……

「もうやめる！ 内藤のライフはゼロだ！」

音無！ それ最後までやり終える前に言いやがれ！ 利口にもタ

イミング計りやがつて！

「やめたげてよおー！」

「内藤の体はボロボロだ！」

お前らも便乗すんな！ そんなこと一富さんも分かつてるから！

「おい一富、内藤の顔が四次元物体のようになつているぞ」

……先生、何が言いたいかは分かりませんが、怒つていですか？

「元々だ」

「一富クウウウウウン！」

もう駄目だ！ 我慢ができねえぞおー 僕はあまねし星空の力を
集め

「内藤」

「すんません調子こいてましただから頭を^{わじびか}驚撃みにしないでくださ
い」

駄目だ……たとえそんな力を揃えたとしても、この人には勝てる
気がしない……。

「内藤」

「すいませんすいません！」

「秋津はいいのか」

「はつ！？」

そうだ、大事な事を忘れてたじやないか！

「晴希の事……？ つて事はやっぱり全部思い出して……」

「……っ！」

と、強く反応した綾女の方に目が行つた。 そうだ、いつも大事
だつたじやないか。

もう俺は綾女の本心を分かつてゐる。 だからこそ、どうにかしな
きやならない。

とはいえるのは些細な事。^{あれこれ} だがしかし躊躇う理由はない。

俺は綾女の前に歩き、安心させるために表情を和らげて言つた。

「綾女、ありがとな。 お前は俺のためにずっとここにいたんだろ？」

「それは……」

だが綾女は俯いて、視線を俺の顔から逸らしている。 「ええと、
これは？ どっちなんでしょうか一体？」

「肯定だとさ。 よかつたな^{じょせん}内藤」

と廣前は言つてゐるが、所詮廣前だからな……。

「肯定だ」

ああ、一富さんの言う事なら間違いないな。

「だから言つただろうが！ 何いっちょ前に俺を『ディスつてんだ！』

聞こえない聞こえない。

……しかし、そうか。綾女は川に落ちて記憶喪失になつた俺を心配して、ただそれだけの理由で元のクラスまではつ放り出してここに来てたのか……まったく。

馬鹿が

……なあ、富さん、物には言い方でもんがあると思うんだ。

「お前のことだ」内藤が、さすがに驚いた。

馬鹿の魔方

「うわ、おまえの手は、もう少し柔軟にならねば、この仕事はダメだよ。」

なんせ俺は自分はどこで何事か一人の事が忘れて何を知らぬままクラスメイトと楽しく消しゴムやノートを投げ合つていだからな。

「馬鹿なつー?」

卷之三

「うう、お前の訓読みがうまい。今は口ぶりなんてこりた、俺はそんなに馬鹿だったのか!?」

「は文部省じゃない」

- ! !

—富ちゃんのその言葉に、俺はほんと気がついた。

か。

綾女！
行くぞ！」

彼女の手を引っ張り、教室を飛び出した。

「……とにかく本当の馬鹿だがな。せこせいやる事をやれよ、内藤」
すれ違いやま、一宮さんはそんな嬉しいんだか悲しいんだか分からぬ事を言つてくれた。

「内藤の奴、どこに行く気なんだ？」

「案外何も考えてなかつたりしてな」

「まさかそんな事はないだろ？」「

……。

やつぱり俺は、ただの馬鹿なのかもな。

第六十一話 IJの世界は自分が全てを知つたと思つ込むとは云ふべしで適わない

「……さて、たっぷり話を聞かせてもらひや?」

再着火を無事成し遂げた俺は、小枝の手首の拘束を解いて訊ねた。
今このことはコエダじやなくていい。単なるコノエだ。

「……あのや」

と呆れた様子の小枝。そこに普段のテンションの高さはない。やっぱり猫被つてたのかね? 普段のこいつも結構好感持てたんだけどな。

「ここの私が悪役だったとして、その程度で口を開むと細いつのか?」

と聞き返された。まるで馬鹿を見るような目で。

「おい、誰が馬鹿だ誰か」

「誰も馬鹿なんて言つてないな」

そういうやうだ。まるでそう思つてゐるような気はしたけどな。それはそうと、急に口調まで変わるのが、こいつやっぱ。

「まあいや馬鹿……あのな」

未だに呆れて物も言えない様子の小枝だったが、気にせず俺は進めた。勿論、こっちも馬鹿を見るような目で。これで晴れて対等の立場だ。

「てめえが敵なわけねえだら。なんなら俺をただ止めようとしたしかしてねえ時点でめえは悪役失格だ」

それからも俺は説教を続けた。やれ普段のキャラの割にぬい、やれそういう立ち位置じやない、やれ既に証拠は立つてゐる、HTセトラHHTセトア。

自分で散々と思えるほど言い終えた後、改めて詰問する。

「んなわけで、言つてみろよ。お前の真意をよ」

「だから、どうしてこの私がそれを言わなきやならない?」

小枝は相変わらずこんな感じだ。これから世間を斜めに見てる

奴は困る。

そんな奴の相手なら、足元を見てしまえばいい。

「一人の部員としてだ。文芸部なめんな」

「いつには何らかの文芸部にいる必要があるらしい。それが何かは知らないが、利用してやるに越した事はないだろ？」

思惑通り、小枝は渋々説明してくれた。

「……弥葉琉^{みはる}が裏切って晴希^{はるき}を屋上に閉じ込め出したから、ここで急ぐとかえて状況が悪くなる、なので止めようとした、これだけだ」

似非無口が……あー、なるほどな。

急がず焦らず、まずそいつをどうにかすりや安泰だつたつてか。現に教室に晴はいなくて、状況は最悪な方向に行つてやがる。

けどな、勘違いすんな。多分お前にもお前なりに葛藤があつたんだろうが、そんなお前でも全部の全部を知つてたわけじゃないんだぜ。

「敦次はな、んなこたあ知つてたんだよ」

それが答えた。誰も信じやしないだろ？が、この風当たりの強い状況を、敦次の奴は誰よりも正しく予測していた。

「それでも行つたんだよ、ガツンとな」

俺は自分の左の掌に右の拳をガツンとぶつけながら言つた。

「……嘘だ。でなかつたらただの無謀だ」

「ちげーつての」

その両手をポケットにしまい込む。

まあ確かに今頃晴^{はる}の奴は一人屋上だ。リスクが馬鹿にならない、非情なやり方だな。まあいい、あいつには泣かずにせいぜい頑張つて貰おう。

「晴はいざつて時にや、きつちつやつてくれるんだよ。信じる力をなめんなよ」

「……は？ 信じる力と？」

「そそ」

軽く首肯し、ポケットから取り出した眼鏡をかける。

それに対し一欠片の信用もない、半分呆れ顔の半分無表情
どうもてめえはまるで信じちゃいないみたいだけどさ、実際あるん
だぜ？ そういう少年漫画的な理論つてさ。
だからさ。

「もうすぐ分かるっての」
頸あごを上げ、人差し指で晴のいる屋上を指し示した。
百聞は一見にしかず、それを今からこいつに教えてやるんだ。俺
が、晴が、誰もかもがな。

第六十一話 Is She Alive?

廊下を歩き、新聞部の後に続く。

何もせぬただ腰を据えてさえいればよかつたはずの晴希先輩は、突然消失してしまった。これは今の私たちにとって、まさに死活問題だ。あの時私の感じた嫌な予感は、見事に的中してしまつたらしい。

……そして久しぶりに見た内藤先輩は、頭を黒板に何度も叩きつけられていて、ひどく痛そうだった。最後に会つた時の、川に落ちていった姿がフラッシュバックしてくる。

「あの様子ならもう思い出してるんじゃないでしょうかね」

と言つて底の見えない笑みをたたえて割り込んでくるのは、やっぱり菅原君だつた。どうもこの騒動が始まつて以来、彼の出番が異常に多い気がする今日このごろ。

「思い出すつて……晴希先輩の事?」

逆に記憶が飛んでしまつてそうだけだ。

「そうです。ちなみにあそこから記憶が飛ぶ事はありませんよ」

「どうして?」

記憶が不安定な状態からだからむしろ危なそうなんだけど……。「ボリュームじゃなくてスイッチなんですよ。頭への衝撃でオンオフする、ね」

歩きながらそう言つて菅原君は振り返る。

「これをハロー効果といいます」

「嘘だよね」

「ええ」

「…………」

冷めた。

「安心してください。スイッチについては本当のことですよ。そしてきつと今頃は邦崎くにさきさんとのジレンマに悩まされてるんじゃないん

ですかね？」

「……まさか。それも[冗談だよね?]」

「勿論ですとも」

菅原君は当然のよつて言つたが、私には本当のところどうなんだか分からぬ。だからこそそんな冗談はできればやめてほしかつた。真に受けたらどうするんだろう。

「本当のところ、どうなの?」

「知りません」

そこだけなぜかやけに軽薄そつたにやけた顔で、菅原君は爽やかに言い切つた。

「ええ! ?」

「驚きすぎでしょ?」

まあ確かに言つてる事はそうなんだけども……なんせ菅原君は單なる一人の文芸部員でしがなく、言つている事も单なる憶測でしかないんだから。

けどそれから表情を正し、

「ただ、たとえ内藤さんが邦崎さんの想いを知つたにせよ、結果的にあの人是秋津さんを選ぶでしょうがね」

と言つて、その言葉は更に私を混乱させた。

「……どうして?」

「邦崎さんは、脇役なんですよ」

「…………」

ちょっと菅原君が信用できなくなつた。

「安心してください。半分冗談ですよ」

「半分は本気なんだ……」

脇役つて理由で弾かれるんだつたら、私的には胸が痛い話なんだけど……

「秋津さんも脇役です」

「…………」

更に菅原君が信用できなくなつた。

「わかりました。ちゃんと話をしましょ。本気と書いてガチで」
あくまで憶測ですがね、と釘をさしながら個人的な観測を述べる
菅原君。本気と書いてガチって……。

「内藤さんは、それほど周りをどうでもよくは思つてないんじゃないですか？ 秋津さんを溺愛していたのも周知の事実ですが、そこにはある種の開き直りを感じましたよ。まるで自らを軽薄にしているかのように、ね」

「ええと、それは、実際は色々悩んでいるんだけど、何にも悩んでない振りをしてるって事？」

「そうですね」

……ちょっと分からないや。

「よくある話だと思いますよ。僕だってこんなキャラ通しますけど葛藤ぐらしありますからね」

「例えば？」

「実はあなたの事が好きでした」

「つ……！」

「冗談ですよ」

「…………」

恨めしげに菅原君を睨み付けるが、彼はいつもの微笑のままだった。

まったく、菅原君は本当に……。

「ところで、秋津はどこにいるか分かるか？」

と聞いてきたのは新聞部の大柄な先輩だ。名前は分からなければ、この人たちみな眼鏡をつけているから、先輩の名前とかをほとんど覚えてない私でもわかりやすい。文芸部で眼鏡というと、大曾根先輩くらいしかいないし。

「それがわかつたら、こんなの「うと不真面目に過い」とはいませんね」

と菅原君。どうやら彼は眞面目に探してなかつたらしい。やっぱりといつか……。私なんて晴希先輩が心配でたまらないんだから、

たとえ雲をつかむような話でも眞面目にやつてほしいんだけどな。

「おかしいよな。一体どうして消えたのやら……内藤が嫌になつて

途中で逃げたか」

「それはないでしょ。ああ見えて秋津さんは内藤さんに内心メロメロですよ。モノローグで三行に一回テレる程度には」

先輩と菅原君はなおも話を続ける。けどとりあえず、菅原君は適当な事を言わないでほしい。黙つててとは言わなから。

「じゃあ誰かに連れ去られたか？」

「そうじやないですかね」

「誰がやる？……いや、誰が出来る？」

確かにそうだ。動機がある人が山ほどいても、それが可能な人は限られる。晴希先輩に近づいて、どこかに匿つてしまえる程度に親しい人なんて

「……いた」

ふと、一人の先輩の姿が思い浮かぶ。ある意味私や内藤先輩以上に晴希先輩と親しくて、しかも一步間違えればこんな事件を起こしてしまいそうだつた先輩。

あの人気がこんな背水の陣の引き金になつたとしたら、それも仕方ないかもしね。本当に残念な事だけど。

「いたよ！ 確かにいた！」

私は叫んだ。

「杭瀬先輩を探しましよう！」

その言葉に、周りの新聞部員たちは首を捻つた。どうやら誰も杭瀬先輩の事を知らなかつたみたいだ。確かに文芸部で有名な人つて限られるから、仕方ないんだろうけど。

「ああ、確かにそんな人がいましたね」

そして同じ文芸部の菅原君までが、今の今まで忘れていたような反応だった。

「確か秋津さんと同じクラスでしたっけ」

「いや」と口を開いたのは眼鏡の先輩。「同じクラスだが知らねえ

なそんなん奴。亡靈か？」

なんと失礼な。クラスメイトを亡靈扱いしますか。

「無理もないんですけどね。あの人はある意味で亡靈以上に影が薄いですから」

と菅原君も失礼な事を言つ。この人たちは一体なんなんだろう。
「よく気付きましたね。朱鷺羽さん、あなたはなぜ杭瀬さんの事を
？」

だつてはつきり言つて、先輩の名前なんて全然知らないでしょう
？ なんていうじくじく当たり前の質問に、私はごくじく当たり前に回答した。

「だつて好きな人の周りにいる人くらい、見てないわけないじゃな
いですか」

晴希先輩の周りにはたくさん人がいる。内藤先輩は今まで当然の事だつたし私もそつだつた。

けどさつきは内藤先輩は邦崎先輩と一緒にだつたし、私にも椎ちゃんつて親友がいる。

それなのに、杭瀬先輩だけは晴希先輩としかいる事がなかつた。そういう意味で、あの人は私や内藤先輩よりも晴希先輩に近い存在だつたわけで。

「私がそんな杭瀬先輩を見てないわけがないんですよ」

「なるほど、つまりあなたは隙あらば秋津さんと一緒に杭瀬さんも戴いてしまいたいと？」

「違うよ…」

「え？」

「なんでそんな意外そうな顔をしてるの！？」

菅原君はわざとに決まつてるけど、眼鏡の先輩まで！

「いやだつて、聞いたところお前レズみたいじやん」

「それは好きになつた人が女だつただけで、私は元々女好きだつたつてわけじゃないですから！」

「そういえば秋津さんつて男でしたね」

「菅原君！」

「……すみません、これも半分冗談でしたね」

「半分じゃ駄目だよそれ！」

確かに晴希先輩の中性的な所にも私は惹かれたわけだけど、少な
くともこんな時に水を差すような事は言わないでほしかつた。

「分かりました。では一緒に杭瀬さんを探し出して、攻略しましょ
うか」

「……え？ 攻略って？」

「ただ、僕も出来る限りの手伝いはしますが、あくまで杭瀬さんを
デレさせるのはあなたの仕事ですからね」

「え？ エ？」

何だかよくわからない方向へと話が進んでしまったみたいで、私は
はただただ困惑した。

対して菅原君は真正面から私の両肩を掴み、「いいですか？」と
目を見開いて諭してきた。

「誰かがやらなければいけない事なんです。そして秋津さんの動け
ない今、それが出来るのはあなた一人なんですから。いいですね！
覚悟してくださいよ！」

「つ……うん……」

菅原君の突然の妙な熱意に気圧され、私は意味も分からないまま
頷いた。キャラを作つていると云つたが、彼のキャラクターはな
んのかまったくわからない。

まあ要するに、杭瀬先輩を見つけて説得出来るのは私だけだつて
事なんだろうけど。

「……まずどこにいると思つかな？」

と訊ねた。

やうなきや駄目なら、やるしかない。バッドエンドになんてさせ
るものが。

いつもの私ならそんな考えなんてしないんだろうけど、皆頑張っ
てるからなのかな。そんな私がすぐに決心してしまえたのは。

杭瀬先輩はわりとすぐに見つかった。

四階の、屋上に続く階段の前。そこに杭瀬先輩はいた。はつきり
といた。

ちなみに菅原君達には邪魔だからと廊下で待機してもらっている。
その時に「わかりました。ではしつかり杭瀬さんを攻略してください
いね」と言わされたけど、直後に「ああ、気にしないでください」と
も言われた。余計なお世話だ。

「杭瀬先輩」

そう呼びかけても、杭瀬先輩は返事をしてくれない。

「杭瀬先輩！」

もう一度呼びかける。けど、それでも反応は変わらない。
きっと聞こえてはいるんだろう。それでも返事をしてくれないの
は、あの人が晴希先輩以外を認めていないから そうじゃない。
今のあの人は、晴希先輩さえも認められなくなってるから。だか
らこんな事をしてしまったし、私にも返事してやれないんだ。

とにかくわかったのは、晴希先輩が屋上にいる事と、杭瀬先輩を
どうにかしなければいけない事。どうにかするつていうのは突破す
るって意味じゃなくて、ちゃんと説得して、出来れば杭瀬先輩の手
で晴希先輩を解放してもらいたい それこそ菅原君の言つ「攻略」
をしなければいけない。

だから、どれだけ無視されても諦めるわけにはいかない。だつて、
今の杭瀬先輩を動かせるのは私しか

『おい、杭瀬！ ちゃんと生きてるかー』

「……いた」

ふと、一人の先輩が思い浮かぶ。屋上に閉じ込められながらも杭
瀬先輩の理解に努めようとするような、紛れもなく杭瀬先輩に最も
近いであろう先輩。

どうやら今回も私の出番はなかつたみたいだ。全部全部、何もで
きないはずの晴希先輩がやってくれた。

……でも、生きてるから呼べばいいんだから……。

第六十三話 風、爆音、屋上にて。

「……わからん」

風、爆音、屋上にて。冷たい床に腰を降ろし、今の私は悩みに悩んでいる所だった。

「……頭が痛い」

悩みというのはどうここから出るかもなれば、どうこの寒空の下生き延びるかもない。寒さについてはあるいはことか慣れてしまっていた。喉元過ぎれば熱さを忘れる……いや、寒さを忘れる、か。どうやらこんな私にも屋上というワイルドライフを生き抜く資格はあつたらしい。

それで問題というのは他でもない、杭瀬の事だ。嘉光の事はひとまず置いておく。

まず杭瀬の、私を屋上に放つという行動が果たして裏切りだったのかどうかも分からぬし、それが裏切りだったとしたら何がきっかけで何のためなのか分からぬ。裏切ってないにしても私をここに閉じ込める事に何の意味があるんだかつて話。複雑な孫子の兵法みたいなのも使ってたりするんだろうか。私にはさっぱりわからなくて、こんな作戦を考えられるなんてすごいなと思いました、まる。

で仮に裏切られたとして、私があいつに嫌われる理由があつたかといえば、これがよく分からなかつたりする。とはいっても嫌われる心当たりが全くない不意打ち的な行動だつたかといえばそうでもなく、その逆で「もしかしてこれが嫌だつたのか」というような候補も結構多かつたりするせいなのだが。

もしかして こき使われたのが嫌だつた、とか。それもなんだかな。私はあいつを信用した上で頼んでいたのに。

「でもまあ、嫌われたんだろうなあ……」

やつちまつたな、とつい溜め息をついてしまうがどうでもいい。

幸せでも何でも勝手に出て行つてしまえ。

嫌われたとしか思えない。こんな味方を閉じ込めるなんていう非情な作戦を、私は決して認めない。そんな不幸は糞食らえだ。幸せなんてどうでもいいが不幸はいらん。

なのでもうここであえての非情という可能性は断ち切り、様々な情報を基礎とし裏切られた理由をグローバルに考えてみるとしよう。「うん、自分で言って意味が分からなくなってきた。でも気にしない。

まずは客観的に見た私の印象と二つのを推測してみると。

「なんで上學ランなの？」 學ラン好き

「50メートルも走れないのか」 ロイキング以下の雑魚

「あんなに内藤嘉光に變されてて何が不満なんだ」 糞ビッチ

「秋津晴希は俺の婿」 婿

「秋津晴希は私の婿」 婿

「秋津晴希をペロペロしたい」 ペロペロさん

「秋津晴希の学ランをペロペロしたい」 ペロペロさんを神器学ランとして従える者

「ロイキングペロペロしたい」 ペロペロさんをその鱗に携える伝説の「ロイキング的な

……いかん、色々と錯乱してるみたいだ。いくら慣れたとはいえ、いつやって寒さは私たちの精神を蝕んでいくんだろうか。

まあペロペロさんとかの件はともかく、この辺りだらうか。

なるほど、我ながら酷い物だ。ペロペロを抜きにしてもすこく酷いのが酷いのになった程度だからな。まあ腹が立つので思考停止で全部嘉光のせいにしていいはずだ。きっと誰も責めないさ。だってどうでもいいからな。

しかしこれらの要素が果たして裏切るに値するものなのだろうか。はつきり言ってあまり有力な情報とは思えない。そんな馬鹿げた一般的な意見なんてここでは頭の潰れたネジ同等だ。なにしろ相手は杭瀬だ。

……一般的？

まあいいや、知らん。なので別の情報　例えば最初の頃はどうだつたのかとか、その辺りの昔話でも発掘してみるとしよう。過去は大事な物で、それゆえ振り返りたくはないのだが。いや要するに黒歴史は覚悟して振り返ろうと。

初めて会つた時のあいつは、そりゃ無口な奴だつた。存在が希薄というか、RPGでいうと村人Bですらなく単なる木の役回りって感じ。要するに今とほぼ同じなんだが、あの頃のあいつはまるで似非とは思えない、真性の無口キャラのような奴だつた。

「……そういや、いつからあいつは私を許したんだっけな……」
いや、許したつてちょっと違うか。

許したというか、獲物として認識したというか。その両者には大きな隔たりがあるだろうが、どっちにしろいつからか杭瀬は私の事を特別な存在として認識していた事は確かだ。

「……変な奴だつたからな。私もあいつも」

私は自分を常識人だとは思つていても、残念ながらどこにでもいる一般人だとは思つちゃいない。

あの時周りに沈んでしまつていたあいつの目に、あの時周りから浮いてしまつっていた私は果たしてどう映つたんだろうか？ 私のどこにあいつを惹き付ける要素があつたんだろうか？

「……どうでもいいだろ、そんなの」

あれこれ考える暇があるならさつさと動け。脱出ゲームはもう終いだ。悩んでいる振りなんてやめちまえ。

私はこんな事態に至るまでずっと甘ったれでいた自分を叱りつけた。

「そうだ、理由なんて簡単なものだつたじやないか……」

下ばかり見ていても鍵など見つからないし、そもそも屋上から出る事が最終的な目標なんかじやないし、信じていたつもりの杭瀬には皮肉を言つて、裏切られてしまう。どれもこれも間違いばかりだ。正しいと思っていた事は全て裏目に出てしまう。

全くもつて似非だ。似非だらけだ。何より似非無口キャラである所の杭瀬を全く労つてやれなかつた私が似非だ。

だが。

「それがどうした……」

私なりの決意を込め、私は立ち上がつた。

人間不可能ばかりだが、その中にだつて頑張りや出来る事はあるもんだ。

なに、たかだか似非じやないか。それくらい正せずには信頼だ。それが下らないやり取りの積み重ねで出来上がりた塵の山なら、わざわざ綺麗に鍵で開けてやる必要なんてない。真正面から、歪み無く、愚直にでもぶち壊して、吹き飛ばしてやるまでだ。

「おい、杭瀬エ！ ちゃんと生きてるか！」

足を広げ、拳を握りしめ、そして腹の底から、この程度の扉など突き破るほどの勢いで、不謹慎な爆音など物ともしないほどの勢いで、大きく声を張り上げた。

「いいか、勘違いすんなよこの似非弥葉琉！」

私はな！ お前の事ぐらいちゃんと分かつて、ちゃんと買つてやつてんだよ！

ああ、確かに前は影が薄いし周りは誰も見てくれないだらうし、それはそれで楽だと開き直るのも当然の事だわな！

だけどな、お前はそれだけじやないだらうが！

そんな立ち位置の割に私には一切遠慮しないで弄るし、実際思慮深く読んでるのは全く訳の分からん本だし、挙げ句の果てに作者のお気に入りだからなんていつぶさけた理由で調子に乗るよつな抜け目ない奴だつたろうが！

それからまだあるよな！　お前が単に希薄で独りがちな奴ならここまで私のために動く事なんてなかつただろ？が！

お前が思つてるほどお前は徹底したようなやつじゃねえんだよ！良くな悪くもお前は似非だ！　私はそれを知つてんだよ！

あんな、前に言つたよな！　お前は楽でいいよなとか、お前には分からんだろとか！　言つとぐがありや嘘だ！　真つ赤な嘘だよ！

……私はな、それくらいの事全部分かるんだよ！　お前がさつきあんな風に動いちまつたわけも、今こんな風に動けないわけもな！お前は私の事が嫌になつて、それでも私を捨てきれなくて、それで私に捨てられるのも嫌でこゝうしてるんだろ！

私もそうだ！　お前に心底うんざりして追つ払つておきながら今になつてこれだからな！　馬鹿げてるよな本当に！

……けどな、お前も知つてる通り今の私の問題はそれだけじゃねえんだよ！

だから手伝つて、さつさとこの馬鹿げた騒動を終わらせててくれ！

そんでお前は後で、全て終わつてから私が存分に叱つてやるんだ

！　絶対に逃げんなよ！

私の言いたい事は以上だ、こんの馬ツ鹿野郎！

そう長々と言い終えるなり、私はその場で仰向けに倒れこんだ。深呼吸しようとするが、どうしても咳き込んでしまう。

やはり体力不足はきつい。しかしこればかりはコイキング以下の雑魚にとつてどうしようもない事なのだ。

果たしてあいつは、どうにかなつたんだろうか。こんなグダグダな演説が、果たしてあいつを動かすに足るものだつたのだろうか。

「……つぐづく馬鹿だな、私も」

動悸の收まらない胸に片手を当て、自虐をしてみる。やばいな、

あまりにおかしくて笑えてくるじゃないか。答えなんて一寸先にあつたのにな。

人は分かりあえないみたいな事をあれだけ説教臭く言つておきながら、実際には分からうとすれば簡単に分かつてしまつた。これを大馬鹿者と呼ばばずして何と呼ぶか。

どいつもこいつも馬鹿ばかりだ。私も、嘉光も、杭瀬も、状況の変化を怖れるモブどもも。思うように動けず、いつだつて縛られてばかりだ。

ともかくにも、ここからは本当に杭瀬次第になる。

人には役割つてのがあると私は言った。なら私の役割は、あいつを労つてやる事だったんじやないのか。私にはそれができなかつた。だから次はしぐじらない。今度の私のやるべき事は、あいつを信じてやる事だ。

私らしくないと思つうか？ そつだよな。

けどな、私も似非なんだよ。

第六十四話 三人

『……私はな、全部解ってんだよ！　お前がさつきあんな風に動いてしまつたわけも、今こんな風に動けないわけもな！』

屋上からはそんな強い口調の晴の声が聞こえてきて、まあ予想通りとはいへ、不覚にも俺は笑つてしまつた。そりやいつものあいつから想像出来る事じやあねえよな。

「どうだよ、コエダ」

そして一見つまらなさそうな表情の小枝に問いかけてみる。

「これが俺達の後輩だぜ？」

「…………」

だが依然、こいつは黙つたままだ。

……ま、それでも俺の言いたい事ぐらいはちゃんと分かつてゐるだろうよ。ただ言える事がないだけさ。だって、どう見てもこいつはある奴と同類だからな……。

「これが俺達の後輩だぜ？」

だからもう一度、俺は同じ事を言つた。別に催眠療法は信じぢやいないが、まあ二回言つて悪い事なんてのもないだろひつか。

「…………」

だが、こいつは何も返してこない。随分と冷たいもんだ。まあそれでもこいつなら、確かに言いたい事は分かつぢやいるはずだ。

なんせお前に似た、裏と表の板挟みで迷い苦しんでばかりの似非無口がついに動き出したみたいだからな。

ああそうだ、お前はあの似非無口野郎と同じなんだよ。平氣そうな表情で悩んで、平氣そうな表情で苦しんで、味方なんてものはてめえ一人だけだと思つて、そのでめえ自身にまで縛られてやがる。

それだと守れる物も守れやしない。ま、俺は最初から何も守る気なんてないんだけどや。

んで、そのお前と同じあいつが吹っ切れたんだ。これでも何も出来ないか、コエダ？

そう思い、小枝の方に視線を向ける。こいつには敦次と同じく他人のモノローグを覗くという大層オドロキの特殊能力があるみたいだが、そんなもん使わなくても俺の言いたい事ぐらい分かるはずだ。物語つてのはそんな風に出来ている……なんてカツコづけてもみた
り。

「この私は、まだ答えは出さない」

すると、やつとこいつは口を開いてくれた。

「ただ言えるのは、この私に守る物なんて存在しないという事だ」「おつと、似非無口の同類かと思つたらやつぱり俺の同類でもあつたのか。こいつは失礼。

「ま、いいや」色々思う事はあつたが、「そつかい」とだけ俺は返しておいた。

そんな俺の様子に小枝は、

「……どうこう事だ？」

と疑問を呈した。どうこう事つて……ああ、そういう事な。

「んなもん俺の管轄外の話だよ。お前を止められりやそれでいい」俺は拳銃やら何やらをぶっぱなしてりや満足なんだから。その上お前を変えてやろうなんてキャラがぶれるぜ。

「コエダ」

ま、俺に言つてやれる事なんてせいぜい、これくらいが限界だろ。

「今日は楽しかったぜ。また相手してくれ」

「それはどういう……」

「おつと、電話だ」

ポケットから携帯電話を取り出し、真っ黒でシンプルなデザインの、それを開いた。さすが、電波は安定の三本、満点だ。

ちなみにここ数日は謎の妨害電波で晴辺りの雑兵の連絡手段はほとんどく断たれているが、俺や敦次の携帯となるとえらくスタイルッシュなおかげでこんな妨害電波などなんともないのだ。

「よう、敦次」

そんなわけで、電話の相手はその敦次、俺達の参謀先輩だ。

『誰が参謀だ。それにお前の先輩になつた覚えもない』

今日も絶好調じゃねえか、参謀先輩。お前の読心術は電波も飛び越えるのか。

『……様子はどうだ』

「ああ、コエダと遊んでたぜ」

『聞くまでもなかつたな』

「そつちこそどじよ？ 晴と似非無口が面白い事やつてたみてえだが

『ああ、偶然にも秋津が仕事をしたな』

「はつ」

こんな中でもいつもすぎる展開に、笑いが込み上げた。こいつの「偶然にも」ほど信頼出来る物もないだろう。

『偶然にも杭瀬を見つけた朱鷺羽は、突如階段を降り始めた杭瀬に驚いていたそうだ』

「だろうな」

『その後扉を開けてみたが、秋津は動こうとしなかつた』

「そいつはまた……」

何なんだろうな。晴なりの贖罪つて奴なのか？ やれやれ、あいつはスペランカーのくせして無理しやがつて……。

「で、他はどうよ？ 色男とか米野郎とかさ」

『……内藤は邦崎を連れて教室を飛び出た』

「ああ……？ 邦崎つて誰だつけな？」

『……それは昨日説明しただろ』

呆れたような敦次の声。だが残念ながら俺には覚えがない。もしかしてこれは俺にとつては明日説明する事だという敦次なりの天界ジヨークだったのかもしれない。つくづく知らないうちにこいつには先を行かれてるな。

『いい加減にしろ』

「『冗談だよ』と笑う。「あの似非親友だら?」

『……ああ、その秋津の似非親友だ』

そう答えて、敦次は一拍置く。

『監視による階段の下らしい。稀有だな』

なるほど。でもそれこそお前、偶然つて言えばいいのにな。

「……まあいいや、あいつにはあいつなりに頑張つてもらつか

『ああ』

「それで、米野郎はどうなんだ?」

納得した俺は、もう一人の事を聞いてみた。米野郎? そりやお

前、あの米野郎の事だらうよ。大曾根的スラングだ。

『守坂は無事一クラス分を抑え込んだ』

「なるほど、木つ端ミジンコにしたと」

と冗談を言つてみる。木つ端ミジンコ? そりやお前、木つ端ミジンコの事だらうよ。

『……まあそれでいい』

どうやら諦めたらしい。

『騒動に応じてすかさず避難と称したエスケープをしようとした生徒達を一人残らず蹴りで昏倒させた。兵糧だけで随分と変わる戦力だな』

「……全くだな」

冷静に言うが内容のものすごい敦次の台詞に、さすがの俺も冷や汗が垂れた。いや、下手すりや俺より働いてんじゃねえのそいつ? いや、天森小枝一人でも雑兵百人に匹敵するだらうからな『雑兵て。

それでもありえねーだろ。蹴りだけで一クラス全滅させるなよ。

『全滅ではない。取り込める一年は取り込んでおいた』

『そりや楽だつたろうな』

まあいいや。お前の事だ、どうせこれからもあいつを利用するんだろ?……あ。

『そんな事より敦次』

『どうした

「エーダが消えたぜ

と俺は云えた。

『…………』

そして電話の向こうの敦次の反応も消えた。

「おい敦次、生きてるか？」

『…………』

……故意だな？

敦次はそんな変な事を聞いてきた。

「ん？ 何の事だよ？」

『…………まあいいさ。お前の仕事はもう終わつたからな

「お、いいのか？」

あいつを放つとくなんて随分とお前らしくないじやんか。

『黙れ』

という声が聞こえ、二人を裂くように電話が切れた。

『…………ふう、やれやれだぜ』

普段後輩どもに見せる姿とは違つあいつの様子に、俺は肩をすくめた。

ホント、小枝が絡むと様子が変わるもんだ。

「さ、先輩達はここでおじとまするといましょ、うつか

そう呟き、俺は自分の教室に向けて歩き出した。さあ、勤勉な俺はせいぜい自習でもしてゐるか。またいい成績を取らなきゃアホをからかえないからな。

後は任せたぜ、似非ばつかの後輩ども。

第六十五話 セレナは紛れもなく戦場だつた。

「内藤の奴、どこの行く気なんだ？」

「案外何も考えてなかつたりしてな」

「まさかそんな事はないだろ？」「

綾女の手を引いて教室を出していく時、クラスメイト達は口々にそんな事を言つた。ほんとに失礼なやつらばかりだなと思つ。

……まあ、ほんとに何も考えてなかつたんだけどな！

「え、ええと内藤君、どこのまで行くの？」「

「……いや、ちょっとな！」

そんなわけで俺はけよひよとそな場所として階段の周りとうのを考えてみた。階段前……いいじやないか。なんか絵になるしおうこうと先輩は俺の横を通り過ぎ……

俺は好きだよ？

と、廊下で見知った顔と遭遇した。同じ文芸部の、三年の先輩だ。何か言われるんだろうなあ……。一体何を言われるんだろうか。

「ああ、内藤か。久しづりだな

「ああ、はい」

「……」

さうこうと先輩は俺の横を通り過ぎ……

……。

……。

……。

「え？ 終わり？」

いやなんか言えよなんか！ 逆にすこい不安になるんだからさー。

「内藤」

と思つたら先輩は振り返り、こっちを見た。一体どうしたんだろう。まさか心の中でも俺が猛烈に突っ込んでいたのがバレたか！？

「リア充は爆発しろ」

……はあ。

一体何を言われるのかと思えばそんな事ですか。いやあ驚いた。

俺はてつきりあの人も読心術とか使えるのかと……

「内藤」

「何ですか？」

俺が若干苛立ち気味にそう聞き返すと、先輩は背中を向けて向こうへと歩き出しながら、

「チャックが開いてるぞ」

と指摘してきた。直後に「きやつ！」といつ綾女の声。視線を下に向けてみると、確かにチャックが開いていた。あつほんとだ！

……いやそれを先に言つてくれよ！ 爆発云々とかもういいからやー。

「内藤先輩じゃないですか。久しぶりですね」

階段前にたどり着いたが、そこでまた新たなエンカウントをした。そう言つたのはおそらく一年の文芸部員。あいにく一年の顔まで俺は覚えてない。少人数でゆつくりやつてくみたいなのとは正反対だからなうちの部は……。全員の顔と名前を覚えてなくとも仕方ないとは思う。とまあそれはともかく。

「あー、ちょっとどどいてくれないか？」

「どうしてですか」

どうしてもなにも、他人がいる前で綾女にマンツーマンで説得なんて出来るわけないだろ！ いい加減にしろー。

「しようがないですね」

言つとそいつは、その場で右手をこちらに、手のひらを上方にして向けてきた。ときおり指を仰ぐように動かしていく。

「……どうこうつもりだ？」

「ただでどくわけにはいきませんね」

何かと思つたら賄賂要求かよ！ ズいぶんとふてぶてしいな！

お前ほどふてぶてしい奴見た事ないぞ」の野郎！

「おい、頼むから」

「頼まれた程度でどいたら男がすたります」

「そうか、男がすたるなら仕方ないな」

本当に、残念な事だ。そこは諦めるしかないだろ？。

「じゃあ……綾女」

俺は教室の時と同じように、彼女の方を向き両肩に手を添えた。
彼女は「え？　え？」と顔を真っ赤にして困惑している。ひょっとしたら風邪かも知れない。全て片付いたらお疲れさんとでも言つておくか。薬は何がいいだろ？。頭痛にノーシンかな？　あいにくそのあたりはよくわからん。

んで今はなんといづべきか……

「ありがと……ってのはせつせつ言つたな。あー……何て言おうか

……」

ちらりと、強情にもこの場面で居座るところ驚きの行動を取った後輩に目を向ける……が、華麗なるまでに無視されてしまった。おのれ使いない奴め。しかも無視してると思わせてさり気に賄賂要求してんじゃねえよ！

「…………ねえ」

「ああどう言おうか……。」んこちまでもない……おはづくでもない……さよならとか論外だ……ってか何でみんなあいさつの魔法なんだ……。

「ねえ」

「ああ、じついう時にほつきりしないから俺は、晴希にもまともに取り合つてもらえないのかかもしれないな……。じつにかしないこと……」

「おい」

「ぐふっ」

疼く後頭部を抑えながら振り向くと、弥葉琉が片手にハードな力バーの本を提げて立っていた。いつもの無表情に見えるが……何か

違つ氣もする。よくわからないけど。

「……なんだ弥葉琉か。お前が話しかけてくるなんて意外ぐふつ
頭部にセカンドインパクト（厨二病的な意味ではなく）。俺の頭
が疼くぜ。

「あなたはいつまでのんびりしてるので？」

「ああ……実に冷えた視線だ。出来れば晴希にもこんな風に……じ
やなくてだ。

「違うよ、俺は深く考へている最中でぐふつ」

「サードインパクト。ああ痛い痛い……俺の右目が疼くぜ。

「うるせー」と弥葉琉。「ここは戦場よ」

「……ああ、そうだな。でもぐふつ」

「フォースインパクト。俺の尻が疼くぜ。参ったな、こりゃノーシ
ンだけじゃなくてポラギノールも必要になるか？ なんてのはとも
かく。

「ああわかってんよ！ 俺が晴希を放つとけるわけがねえだろ？ が
！」

「またかの四連コンボを食らつた俺は叫んだ。いやインパクト云々
の話じやなくて、自分の嫁をないがしろにできる奴がどっこいいるん
だよ！」

「でもな、だからって綾女がどうでもこいってのは違うだろ！ 晴
希は俺が絶対なんとかする。だから」

「違う」

静かに言つた弥葉琉だったが、その口は本氣に満ちているようだ、
とつさの反論もする気にならなかつた。

「今うまい事を言えなかつたとしても、後でなんとかなる事はある。
決して取り返しのつかない事なんてないのよ」

「そう言つて制服の袖を引っ張られ、俺はあやうく転びそうになつ
た。……こいつ、こんななりして実はかなり力強いんじゃないのか
？ 晴希にも今度聞いてみよつ。

「私は、あなたを全力でサポートするために来たんだから」

と、全力をもって引っ張つてくる。体制が崩れるのを防ぐには、走つてついていくしかなかつた。そうしながらも俺は思う。全力でサポート……ねえ。

いや、そんなのより大事な事言つてたよな、弥葉琉は。

「後でなんとかなる……か。綾女！」

その叫びで今まで固まつていた綾女がようやく顔を上げ、離れゆく俺を見て慌てていた。見事にあたふたしていた。

「慌てるな！」

そんな様子の綾女を見て更に続ける。

「続きは全部終わつてからだから！ それまでにお前に言つ事、ちやんと考えとくよ！」

そう言い終え、綾女の顔を見た。

勝手に連れて行つて勝手に引き延ばす。そんな暴挙をしたというのに。

何故か彼女は、安堵の表情を浮かべていた。

「なあ、弥葉琉。聞きたいことがある」

走る事においてもやはり文化系と思えない速度の弥葉琉の後を追つて階段を登りながら、何も言わないこいつに対し、俺は思つた疑問を口にした。

「ただ晴希と俺を会わせたいだけだつたら、普通に晴希の方を連れていこりやよかつたんじゃないのか？」と。

どうせ待つのも向かうのも一緒だと思うんだが。こんな騒動になつたんだから教室にいるわけでもあるまいし。

「何かあつたんだな？」

「…………」

弥葉琉は黙り込んでいる。こつもの無口キャラつとのとはひょつと違つっぽいんだけどな。

「そいついえばお前、言つてたよな。決して取り返しのつかない事なんてないって。あれはもしかしてお前の…………」

「言わないで」そんな俺の言葉は不意に遮られた。「ただ、待つてつて晴希は言つてた」

「やうか……」

理由も分からぬのに、思わず笑みがこぼれる。
どうやら、間違いじゃなかつたみたいだ。

弥葉琉が、いつもよりアクティブに見えたのは。
……四発も本の角で殴られて、内一発は目に入つてゐしなー。あやうくスルーしそうになつたけども！

「……」「やうよ

呆然とする、そこにいた後輩達の横をすり抜けてある扉の前で立ち止まり、弥葉琉はそう言つた。

「屋上か

何となく予想は出来ていたが、やつぱりこじだつたか。俺にとても思い出深い場所だ。

…………寒そだなあ。

「……悪かつた、弥葉琉。これじゃ、取り返しのつかない事になる所だった」

晴希……寒さでダウンしてなきやいいが……。

「……謝らなくていい。元はと言えば私が悪かつたんだから」
そう言いながら弥葉琉は屋上へと続くドアを開け、

「ぐふつ

もう終わつたと思つていたらフィフスインパクト！　俺の背中が疼くぜ。しかしチルドレン並にインパクトが起るな。これがセライ系か。

だがまあいい。今晴希に姿を見せたくないからといつ理由で背中を蹴り飛ばしてくれた弥葉琉の事も今は許そう。

なんせ、やつとこいつとの再会を果たせたんだから。

「……おう、晴希。……久しづりだな」

「ああ、本当に久しづりだ」

晴希は不機嫌そうだったが、元気だった。取り返しのつかない事にならなくて、本当によかつた。

自分でも真摯だと思う瞳を晴希に向け、俺は今一度口を開いた。

第六十六話 幕引きは飽くまで美しく

「いいか、晴希」

真摯な瞳をこちらに向け、嘉光は口を開いた。その様子はあまりにも真摯すぎて、私が「うえ気持ち悪い……」などといつリアクションが冗談でも取りようがなかつたくらいだ。

なんだなんだ、いつたい何のつもりだ。嘉光の分際で説教か。それともキスか抱擁か。それならあの寒い中で残つた最後の力を振り絞つても抵抗してやる。もしくは訴訟も辞さない路線だ。どんな事があるうと私はこいつに全てを許す気など更々ないんだから。などと不必要に思えるほど警戒していたが、次に嘉光の取つた行動はその中のどれでもなかつたわけで、

「「めんな」

と、真つ先にこいつは謝つてきたのだ。あまりにも筋違いだと思ふ結局の所私は「何がだよ」と返した。

「言つとくがな、お前がいなくて寂しかつたなんて事は全然なかつたんだからな」

まあ、そりやあ、こいつがいないせいで色々面倒で忙しくてつてのはあつたが、それはまた別の事だ。久しぶりだらうが何だらうが、悲しい事に私はこいつの思考回路には飽き飽きなのだ。それは以心伝心つてのともまた違うよな。だつてこいつの考えが向こうにはてんで伝わつてないんだもの。

がしかし。

「いや、そうじゃない」

嘉光はそれを否定した。

となれば何の話だ……あー……。

「屋上についてもお前に謝られる筋合いはないな」

だつてこれは、私の選んだ道なんだから。

途中で朱鷺羽や幡野達も来たが、あえて私はそいつらを追い出し

てここに居座つた。ふん、屋上も慣れてしまえば楽なもんだ。
がしかし。

「いや、その事でもないんだ。……でもそれもあるか……」
それも違つたらしい。おいおい、じゃあ何の事なんだよ。

と思つたら嘉光はまたしつかりとこちらを見据えて、

「とにかく、どうも俺はお前がいないと駄目みたいなんだ」「
と、曝け出した。ついさっきまで私の事をすっかり忘れてたくせ

」。この糞野郎は。

そんな風に毒づく私に構わず、嘉光は言葉を紡いでいく。

「お前のいない生活は物足りなかつた。俺らの事はどうにもならぬ
いと思つてた他の奴らは何とかフォローしようとしてくれてたけど、
毎日文芸部に行くのが楽しかつたあの頃とは何もかもが違つたさ。
俺はそんな楽しかつた日常に戻りたい　だから、これからもお前
と一緒にいなきゃならない。「ごめんな」

これは　告白か。あるいは一方的な宣言か。いずれにせよ感じ
るのはいかんともしがたい既視感なのだが。一年前のあれと同じだ。
やつぱりこれは以心伝心なんかじゃない。私がわざわざこんな言
葉に応えてやる道理なんてない。「お前の考えなんて知らんからと
りあえずどうにかしてくれ」とでも言つておけば満足するだひつ。
それで全てうまくいく。

それでもだ。

「……ふざけんな」

私は文句を唱えずにはいられないんだ。

「お前言つたよな！　私がどこにいようが必ず助け出してみせるつ
て！　必ず傍にいるつて！　言つたよな！？」

去年だつて同じだろ！？　そんな告白まがいの事で全て上手くい
くと思つてやがる！　その結果がこのループだ！」

あの時、嘉光は嫌だといつてもずっと私の傍にいるんだろうと思
つていた。それは、言うなれば奇妙な安心感だ。安易に受け入れら
れないとはいへ、決して不愉快なものではなかつた。

「運命だの何だのをほざいておきながら、今になつてこれだ。こんな奴にはどうしてくれよ？か。ああ、こうしてくれよ。

あと一度だ！ あと一度、お前のその独善的な宣言を私は信じてやる！ 分かつたな！？」

これが私の答えた。どうしようもないとか言われそうだが、これが私の選択なのだ。

その選択に嘉光は果たして、

「おう！ 言われなくてもそのつもりだ！

なんせ、決してやり直せない事なんてないからな！」

と、勢い良く返事した。

……全く、困ったもんだ。これだけ断言されると受け入れざるを得ないじゃなか。

言つておくが、私は決して嘉光に甘い人間になつた覚えはない。その時はその時、こいつにもきちんとけじめくらい付けさせてやるさ。その時が本当に、『取り返しのつかない事態』になるだろうよ。空が青い、風が寒い……まあ、そんな事はどうでもいいが。人が死のうが晴れる時は晴れるし、どんな幸福が訪れようが土砂降りの雨には見舞われる。私達の小さな闘争は私たちの中でしか完結しないのだから。

「いい話だつたな」

と、その傍で頭を微妙に傾け、腕を組みながら感想を述べたのは一富さんだ。いつの間に現れたんだろうかと思うが、今の会話の合間にだらう。

「そうだ、最初からいた」

「なん……だと……！？」

私の頬を冷や汗が伝う。んでもつてきつと額には縦線はせかだ。まさか、あの恥ずかしいとまではいかないまでも口にするのを憚られるあの会話を最初から聞かれていたと？

だが更に、一富さんは指を鳴らした。まるで何かの合図のようだ。

そして校内放送として流れれるザザザザッとこつ空氣の擦れるよつな音。

おい……まさか……！？

『いいか、晴希』

「やめろおおおおおおおお！」

獸の『』とく、私は叫んでいた。当たり前だ。一回さんに聞かれていただけならまだしも、まさか録音されて全校に流されるなどたまつたものではない。

「秋津。これこそが戦略だ」

「嫌です！ そんなの！」

「男なら諦める」

「無理ですし、まず私は女です！」

くそ、こんな残酷な戦略認められるか！ 私は、出来れば何一つ失わずに問題を解決していきたいんだ！ 何も捨てない覚悟はあるが、何かを捨てる覚悟なんてあるわけがないだらうー。じんちくしょー！

『いいや、違うんだ』

放送もそんな事を言つてくる。全然違わねえよ、この馬鹿！

「晴希」

「黙れ、内藤！ お前に私を救えるのか！」

「ああ、救え 」

「黙れ内藤！」

嘉光はまあまともな事をまず言わないであろうから、じつして封殺しておいた。

『お前言つたよな！ 私がどこに『』が必ず助け出してみせるつて！ 必ず傍にいるつて！ 言つたよな！？』

『さうか！ そういう事なら大丈夫だ！ 僕は地獄に行く覚悟すらも出来る！』

『がああああああああつー！』

『晴希！ 晴希！……くそ、一富さん！ 晴希が魔女化した！』

『落ち着け。秋津には頻繁にある事だ』

じつして、私は人として大事な何かを失いつつも、嘉光含む文芸部全般との関係を取り戻したのだった。

まあ、いいか。

確かに嘉光はそこにいた。そんなところで、今日のお話は……

……。

ああ、そういうえば。

杭瀬、嘉光と辿ってきて、あと一人この件に深く関わってきた奴がいたんだつたな。

「邦崎」

良かつた。そいつは存外早く見つかった。時間が経つと変に距離を取つてきそうだからなこいつの場合。こいつはそういう奴だ。

「晴……秋津さん……」

ほらな。今でもこれだもんな。というか今回私は何やつてたよ？ いくら恥ずかしいとはいえる前にそんな反応される筋合いは無いから。

まあいいや。そんな事より、こいつに言つておくべき事はあるんだ。

「お疲れ」

おそらく記憶喪失の嘉光のクラスに行つていた事から考えて、必然的にこいつにも何かあつたんだろう。私は精神的に疲労しているであろう邦崎を労つてやつた。

「いや、まだ終わつてないよ」

ところが意外にも、邦崎の返答はそんなものだつた。

おかしいな、いつもの邦崎じゃない……嘉光、お前は一体何を言つたんだ？ 後で拷問して吐かせてやろうか……ま、いいか。私に

は関係ないや。

「それにしておいつもの晴希じゃない……やっぱり別の秋津さんだ

……」

「まあ、似非だからな

そして何気なく失礼とかそういうのを通り越した事を言つ似非親友を見て、必要もなく私はそう呟いた。

後は……またあの似非無口キャラ、杭瀬か。さ、行こうかな。

よつやへ、よつやへ終わつたあああああああー！

第六十七話 Yes, she is helped.

『おい、杭瀬エ！ ちゃんと生きてるか！』

私、杭瀬弥葉琉が精神的に参っていた時に、晴希はいきなりこう叫んだ。言い得て妙だ。確かにその時、私はある意味で死んでいたと言つてもよかつたのだから。

しかしそれは考えるまでもなく変な話だ。その前に言つていた事は「私の事が嫌いなのか！」なんていう恨み節だったのに。そしてそんな疑問の投げ掛けに対し、本人に聞こえなかつたとはいえ、確かに「嫌いだ」と言つたはずなのに。

一体どういう事なのか。

そんなの、ちゃんと考へてみれば分かる話だ。

いつも私を苦手として遠ざけているふうの晴希が、わか私と解り合おうとしたから。

『お前には解らんだろうな』

『お前は楽でいいよな』

これまで晴希は、私と解り合おうとしてこなかつた。無理もないよね。晴希も目に見えて大変な状況だったんだから。それで同じようにも、晴希と解り合おうとはしなかつた。

それが気付けば私は、一人だつた。いや、一人ですらいられなかつた。一人の存在としていられない、文字通り半人前の、まるで幽霊のような存在。

決して解り合える事のないであろう晴希に従う事なしには自分が自分でいられなくなつてい、それがまた自分を腐らせるだろうと分かつっていた。

そんな悪循環に気付いてしまつたら、誰だつて嫌になるに決まつ

てる。全てを投げ出してしまつに決まつてゐる。
だからだう。

『あらら、遭つちやつたか』

あの何とも言い難い、ただ一つ言えるのは言つなら私の本当に大嫌いな女子生徒に、まさしく「遭つて」しまつたのは。

そう、元々私は誰にも見つからず、誰にも遭わないつもりでそこに来て、そこで仕事を進めようとした。それが確かに私の役割で、それが確かに私の存在だつて。そんな風に無理矢理思つて自分の在り方をあてはめたりして、いた。

けどその存在は歪んでしまつた。歪んで、それで結果的に彼女に遭つてしまつたんだ。

『大丈夫、先輩？』

『ごめんね先輩』

『もしいいなら、晴希さんの代わりにあたしがいるからさ』

などと、彼女は手を差し伸べた。

それは眩しかつた。強い力を持つていた。一見、私に力を与えてくれそうだつた。

けど、違つた。何かが心の奥に引っかかつたんだ。

『あんたなんか、大つ嫌いつ！』

その手を私は、振り払つた。差し出された手が私には不気味なほど眩しく、怪しく、受け入れがたく見えたから。けど

『お前が単に希薄で独りがちな奴ならここまで私のために動く事なんてなかつただろうが！』

本当はこの時にも、私の中で晴希が生きていたからかもしれない。晴希っていう^の希みを捨てていなかつたからかもしれない。

もしあの時あの手を取つていたらどうなつたんだろう。果たして晴希とやり直すことは出来たんだろうか……やめよう。そんな仮定無意味だし、なにより私がやりたくないから。

ただ、これだけは言える。

『……私はな、全部解つてんだよ！　お前がさつきあんな風に動いてしまつたわけも、今こんな風に動けないわけもな！』

……そり。

「コイキングより弱い」「ちょっとした段差で死ぬ」ってのは本人の談だけど。

晴希は強かつた。

そりや身体能力はあいかわらずどうしようもないけどそうじゃなくて、壊れかけのものを繫ぎ止めようとする強さを晴希は持つていた。誰よりも弱いのに、誰よりも強くある^{ひつ}としていた。そんな強さ。

『そんでお前は後で、全て終わつてから私が存分に叱つてやるんだ！　絶対に逃げんなよ！　私が言いたい事は以上だ馬鹿野郎！』

その上で晴希は私を待つてくれていた。逃げるなよ、と。そんな言葉の積み重ねがあつたからこそ、私は「生き延びる」とができた。

小さな塵の積み重ねで出来た私と晴希との間の壁は、大きなく一度の劇的な出来事で見事に蹴破られた。

そう、私つて存在は、死んだりなんてしてなかつた。

「ねえ晴希」

私はファンスにもたれかかりうれしそうな、だけどそれを必死で隠そつと怒りを作つているような表情の晴希に向かつて、できるだけ心を込めて言つた。

場所は屋上。朱鷺羽みのりとかに言わせれば、晴希はどうも私への罪滅ぼしだとかで頭を冷やすために、ここから動こうとしたらしい。もつとも、本人は絶対にそんなことを言おうとはしないけれど。そして、きつと言つても肯定してくれないだらうけど。

「なんだよ」

今もこんな風に、素直な態度で話とかを聞いてくれはしないけれど。

私みたいに、まだありのままの自分をさらけ出せやしない、まだ殻を半端にしか破ることができない、まるで似非みたいな存在だけだ。

それでも、わかってるよね。

私は、あなたに救われたんだよ。

「ありがとう。それとこれからもよろしく、晴希」

……などという終わり方を迎えた今回の騒動だつたけれども。私達はこの時、重要な事を見落としていたのだった。

第六十八話 彼は女神か将又悪魔か（前書き）

さて、遅れまして久しぶりの更新です。

第六十八話 彼は女神か将又悪魔か

日常といつのは怠惰なものだ。これは日常といつ言葉の定義と言つても過言ではないかもしれない。

例え私こと秋津晴希が拉致されようが果てしないキチガイこと内藤嘉光が記憶喪失になり大規模な冷戦が起きようが終わってしまえば再び怠惰な日々に逆戻りであり、私は普通に学生の本分である勉強をし、そして授業の後れを取り戻せずに中間テストでは大層酷い点を取つていった。なお似非親友の邦崎も同様である。

それはそうと、怠惰な日常パートがきちんと存在していたからこそここまでやつてこれたつて部分もあつたりするのだ。

杭瀬と他愛ない会話をしたり、一応幡野にも約束した通りの報酬をくれてやつたり、まあ色々とあつたんだが基本的にここ一ヶ月ほどは平凡な日常を過ごしていただと言つていい。

しかし神様といつのはどうやら質の悪いレベルの悪戯好きらしく、事件は再び訪れた。決して大きくななくそれでいて決して小さくもない、そんな事件。

本来なら嘉光でも生贊にして神様に祈つてやりたい気分だが、あいつ如きの犠牲で私の対人運が治るとも思えない。また記憶喪失で戻つてこられても困るしな。かと言つて神様に反逆を試みる程私は愚かでもない。

……まあいいんだけどさ。ショッちゅう殺人事件に出くわす少年探偵とかに比べてみれば私は十分恵まれている方なんだろうし。バトルもないし、そう考えれば樂つちゃ楽だ。

なんていう空しい現実逃避はともかく。

簡潔に結果だけを述べてしまえば、要するにまた私が頭を悩ませる必要が出てきたつて訳だ。

全く、うだうだ言つ氣にもならないくらい毎度毎度面倒臭い話だ。

「おい星ヶ丘ー。」

急いで帰ろうとする星ヶ丘柊ほしがおかひいらに何とか追い着いたのは校門の前だ

つた。

おそらく膝の裏に届くくらいにはあるであろう眩しい銀髪たなびを靡かせ、背は高くスタイルは後姿からでもそうと分かるくらい抜群、当然のように顔もその銀髪に似合わないなどとは言えるはずもないといふ正しく完璧な容姿。一旦視野に入れればおそらく田を離すことができなくなるであろうその姿を見つけるのにさほど時間はかからなかつた。

そう 追いつくのが大変だつだけなんだ。こいつ歩くのすら早いし、追いついたといつても声を上げて引き止め、ただ待つてくれていただけの事。

どうして私なんぞにこの役を任せたのかとつくづく思う。先輩方は、「多分お前も関わってるんだからお前がやれ」などと私を無理矢理行かせた。意味が分からぬし、それを言つたら嘉光は設定上全ての罪を背負つているわけで嘉光が行けばいいだろう、そう抗議したが、「今はあいつが行つても逆効果になるだけだ」なんて反撃を食らつた。一体どつちなんだよ。嘉光は嘉光で行きたがらない。

その上大曾根さんは「いいから行つてやれ、追つかんのは男の仕事だ」とか意味の分からぬ事をほざくので私は男じゃない、だから嘉光の仕事でいいと抗議したが依然として譲つてはくれず、一人で行くなら許すという妥協になつてない妥協をされたので何とも言えず結果として私一人で行く事になつた次第だ。無茶苦茶だな。

ともかくにも私は疲れた。これだけは絶対に言える事だ。そんなわけで両膝に手を置いてゼエゼエハアハアと荒い息をする。ところでゼイゼイはともかくハアハアつて何か口いよね。どうにかならんのだろうか。

「一体何の用……つて、ああ」

星ヶ丘はそう訊いている最中に私の手に持つてある物を、そして自分の両手を見て納得した。

「やうだ、お前の鞄だ」

ほりよ、と言つてこいつにシックな見た目をした手提げの鞄を渡してやつた。投げて寄越すなんて真似はしない。しない以前に私の力じゃ出来ないけどな。

「にしてもその反応、気付いてなかつたのか?」

普通なら氣付いたけど戻るのが億劫、とかそんな感じだと思つんだが。いやたとえばの話で普通の人間なら氣付いた時点で戻るだろうが。

「……ああ、ありがと」

と意外にもこいつは礼を言つてきた。いや、考えてみたらそれほど意外な事でもないか。要は今あなたの言つた事はスルーしましたつて意思表示なんだわ。こういう反応は

「どうも」なのでとりあえず返事をしておぐ。「それじゃ私は戻る。また会おう」

そう言つて部屋に戻らうと身を翻すと、

「待つてよ。待ちなさい」

星ヶ丘にそう声を掛けられ、私は立ち止まつた。そもそも逃げる理由もないし、逃げられもしないし。

「何だ」

「なんであんたは、そんなに強いの?」

「……は?」

これはまた奇異怪々な事を。買ひ被りでもお世辞でもやつすぎだろ。私はコイキングより弱い設定だといつのに。現にお前に追いつくのにだつて息を切らしてしまつてゐるくらいだし。

「一つ言つておぐ。意味が分からん」

虚偽に答えてやる道理なんてない。よつて背を向けて私が部室へと歩き出やうとした時だ。

「だと思つてた」

なんていう声と共に側頭部に衝撃が走り、視界がぶれ、更にまだ夕方にもなつてないというのにお星様まで見えた。しかし何でよりもよつて六芒星なんだ。私の趣味か。かつこつけやがつて。

バランスを崩しそうになつた体を何とか支え、後ろを見る。そこにいたのは他の誰でもなく、敵意を持った目で私の方を睨んでくる転校生、かつ転校してきた日の一時限目が終わる頃には『我等が董城の女神様』なんていう風に校内にファンクラブが出来上がりつてしまつたというほどの完璧美少女、ザ・星ヶ丘柊。

「あんたには一生分からないわよ」

そんな言葉 以前私が杭瀬に言つていたのと全く同じ言葉を撒き散らし、さつき私の渡してやつた手提げ鞄を振りかぶる。

さて、重ね重ね言うが、私の運動能力の無さと来たらそれは大したものなのだ。例えればちょっとした段差で死んでしまうくらいの。

まあそんな私が頭部に鞄スマッシュを一度叩き込まれたのである。まともに立つてなんかいられるわけがないじゃないか。

薄れゆく意識の中、そんな私の様子に気づかずただ一気に騒々しくなつたその場から逃げるようにな門を走つて出ていく銀髪の悪魔の姿を見た。星ヶ丘の考へてる事はさっぱり分からぬし、その上嘉光までもいつもの三割増しで意味が分からぬ。今度は一体何なんだよ？ お前一体どうしたいんだよ？

ああくそ……やっぱあの時逃げとくのが正解だつたのか……？

第六十九話 復活

目が覚めると、まず二〇かの天井が目に映つた。そこで私が今文芸部室で横たわっていると気付いた。どうして文芸部室だと分かつたかというと、それはこの独特的の空氣感に他ならない。いわばそれは一種の瘴氣しょうきであり、なおかつ闇の氣配もある。そしてやがて、「ところで大曾根さん、晴希は治るのか？」

などという嘉光の声が聞こえてくる。

「んー、何とも言えねえな。この老いぼれが二〇まだ……」

と大曾根さんの返事。いやあんたは老いぼれじゃないだろ。ある意味私よりヤングだからな？

「しかしあんたは天才だ。彼女を治せるのはあんたしかいない」いやだからさつきから何の話だよ？ ひょっとして私が気が付いてないだけで後遺症とかでもあるのか？

「……今まで言われるとやらねえわけにはいかねえみたいだな。二〇までやれるかわからねえが、まあやってみつか」

……何を？

「頼む。俺は一度に大切なものを一つも失いたくない…………」

「……おう！」

「なんでそんなに嬉しそうな口調なんですかっ！」

身の危険を感じて跳ね起きる。まあ無論私に跳ね起きなんて出来るわけもないのだが。おかげで体勢を崩してしまう。そして更にあら事實に気付いた。私の横たわっていた場所についてだ。

何で文芸部室にベッドがある？

床に直接敷いたとかじゃないし、かといつて机の上に敷いたとかでもなく、元々寝具としての用途を持つ柔らかな感触のそれだつた。

.....。

「まいい、そこはスルーだ。突つ込んだら負けだ。」

「大曾根さん.....」

全くもって信じられん。そんな疑りを込めた視線を一見優等生な格好の眼鏡の先輩、大曾根誠文まさふみさんに向ける。

「なんだ、生きてたのか……つまんね」

「だからなんでそんな口惜しそうな表情になるんですか！」

「いや、生きてたならいいんだぜ？　いやあ、生きてるって最高だぜ」

「いやあんたつまんねとか言つてましたよね？」

小声で言つたつもりでもちゃんと聞こえてたからね？　今更そんな主人公っぽい事言つても遅いからね！？

「いや、そりや俺からすりや晴はるの体がライブ・メタルになろうが構いやしねえんだがな。戦闘力も上がるし

「私は嫌です！　そんな戦闘力と引き換えにアーマロイド・レディ

みたいになるつもりはないですから！　なあ内藤！」

と言つて今さつき大曾根さんと会話していた内藤嘉光に呼びかける。こいつは変態だが私に好意を持つているから大層重要な問題だろ？　そう思ったのだが。

「……晴希、アーマロイド・レディになるのか！？　それしかないのかー？」

信じんなこいら。つてかその様子だとあれか？　もしかしてさつきの会話をアドリブでやらかしたのか！？　何なんだその無駄な才能は！？

「……………それしか手がないなら俺は諦めるよ。ただお前がどんな姿だろ？　俺はお前の事を

「ゲホッゲホッ！」

「……つ 晴希！ 大丈夫か！？」

思わずむせてしまった。全然大丈夫じゃないよ、お前の頭がな。
思えばこいつはこんな奴だつた。くそ、歯の浮いたような言葉を平
然とほざきやがつて……。

「晴希、大丈夫じゃないならせめてこの体でいる間に一度抱きしめ
させて かみさが」

「……守坂！」

「御意」

私はある人物の名前を呼び、そいつがその声に応じた。曰くわが
文芸部の新たな仲間であり、私にとつても重要な役割を持つ存在で
ある。

「ぐふつ」

そうして目の前の変質者は崩れ落ち、その背後に足を肩幅ほどに
広げつつ両手をまっすぐ下ろし掌を地面上に向けた体制で黒く長いボ
ニーテールを翻し、まるで一陣の風のように一人の女子が現れた。

守坂椎乃。スカートからニーソックスに包まれた長い足を伸ばし
た細身の一年で、私に大層懐いている後輩であるところの朱鷺羽み
のりの親友だ。あいつの実家が古武術の同情をやつているらしい。
守坂にとつてあのフォームが自然体なのだ。いや本当の所は知らな
いけども。

いかにして文芸部に誘い入れたのかは知らないが、私が忌々しい
例の騒動から戻ってきた時にはもうこの部室に存在していた。まあ
その騒動と関係ある事は自明の理なのだが、厳密にはまだこここの部
員ではない。一宮さんと契約を結んでいるだけだとなんとか。一
体どこの何のプロなんだよと思うが、まあかくいう私もかなり厄介
になつてしているのだが 嘉光の処刑人として。

かくして守坂の重い踵落としの一撃が弧を描きながら嘉光の後頭
部に見事なまでに叩き込まれ、忽ちダウンしてしまつたわけである。

「わざわざ悪いな」

「いえ。あなたの危機は朱鷺羽の危機であり、朱鷺羽の危機は自分

の危機である。ただそれだけの事です」

などとこのようにいかにもな堅苦しい口調だが、基本的にはいい後輩である。四月の時に見た神城かみじゆつて奴とは大違いだ。

「……それで朱鷺羽、どうしてお前まで私に抱き着い

「晴希先輩っ！」

「…………」

私の腰に抱き着いている朱鷺羽の語調と力があまりにも強く、私はそれに何も言えなかつた。忘れていたが今の今まで氣絶していたんだよな。

「本当に心配したんですから！ 死んじゃうかと思ったんですよ！？」

「あー……悪かつたよ」

私としても少し心配をかけすぎたと思つ。多少の粗相には目を瞑つてやることにした。とは言つても頭を撫でてやるような真似はないが。

「俺とみのりで頑張つて運んだんだよ。何と言つか……ちやんとしてやれなくて」「めんな

「…………守坂」

「御意」

ただし嘉光、てめえはだめだ。

そうしていつの間にか復活して背中を抱きしめてきていた嘉光を

始末させておき、私は朱鷺羽に声を掛けた。

「おい朱鷺羽、いい加減離れてくれないか？」「嫌ですか？」

即答だつた。

「いや、そつは言つてもだな、私は家に帰らなくちゃならない

「それなら私も一緒に行きます」

「大丈夫だつて」

「駄目です。一緒にいます」

「電車とかで金かかるだろ？」

「そんなの私の勝手です」

「…………」

それを言つたら一人で帰るのも私の勝手だろ。

そう言おうと思つたがやめておいた。仮に言つてしまえばこいつは「それは違います！」なんて激昂してくるに決まつてゐ。これまでの流れを見ればわかるが、こいつは大した力はないくせして（勿論私が言えた事じやないが）いい奴すぎるのだ。

「…………分かつたよ」

「ちょっと待つてくれ晴希、俺は…………」

「よし帰るか、朱鷺羽」

「晴希！？」

あの馬鹿が処刑されていいるのをずっと見物しているのもなんだしこつなつたらもう朱鷺羽の厚意に甘えさせてもらひおつか。

第七十話 目覚めるダーク・ソウル

結論から言えば朱鷺羽はしつかりと家まで付いてきた。やけに義理堅く、そしてまたそれなりに有難くもある。まあやめて欲しいけどな。

そしてその時に色々と話をした。私が文芸部にいない間に何があったのかとか、守坂がどんな奴なのかとか、そんな感じの。それでも今日の事について責めるような事はもう言つては来ず、その事を訊いてみた所この後輩は、

「よく考えてみたらあれば私も不注意でしたかい。『めんなさい』などと答えた。

「いや、よかつた。お前がいいなら私も別にいいんだ」

「そうですか。それならこれからお互に気を付けませんとね

「全くだな」

平凡とした日々に転校生、星ヶ丘柊は突如現れた。思えば私達は最初からヘマを踏みすぎたのかもしれない。その私達というのは秋津晴希であり、朱鷺羽みのりであり、内藤嘉光であり、そして星ヶ丘柊でもある。つくづくやつちまったくな、って感じだ。

だがそれでいて、私たちはまだ安全地帯と危険地帯の境界は踏み越えていいない。なにしろ文芸部員だ。頼りになる先輩方がいる果たしてその庇護される私達の中に星ヶ丘が含まれているのかはさておき。いや、あいつは強いから大丈夫か？

と、一つ思い当たる事があつたので訊いてみることにする。

「なあ朱鷺羽」

「はい」

「お前はあの星ヶ丘の事、どう思つてるんだ？」

そう、列記とした一人の乙女である所の私のじたまを鞄でぶん殴り氣絶させたのは紛れもなく奴なのだ。私の不注意やらなんやらもあつたが、当の本人であるあいつの事はどう思つて居るんだろうか

? 「どうじょうもないほど深く恨んでたりするのかね?

「えと……ちょっと複雑ですね」

「……お前もか

「……と言つと?」

という問い合わせし、私は溜め息を吐いてから喋った。なおこの溜め息は癖みたいなもので、特に意味はない。それは朱鷺羽も分かっている事らしく、気にはしなかった。

「私はてっきりお前があいつに對し敵意みたいなのはしか感じないと思ってたんだがな」

「……そうですね、確かにそれもありますけど……」

「ん

それもあるが、他にどう感じているのだろうか。もしかするとこの一つの言つ微妙ってのは私の微妙ってのと同じ事なのかも知れない。「確かに晴希先輩にあんことしたのは許しておけないですけど

……」

「うんうん……ん?」

あれ? まだその話続いてんの? 本来ならもう少しで逆説から本題に入つてるべきなんじゃないのだろうかね? 朱鷺羽さんや。「田には田を歯には歯をつて同じ事を三倍返しでしてやりたいですけど……」

「……あのー、朱鷺羽さん?」

いかん、何だか朱鷺羽が黒くなつてきたぞ。やつぱこれ絶対深く恨んでるよね。微妙な気持ちとか嘘だよね?

ちなみに田には田を歯には歯をつて言葉はハンムラビ法典が元なんだが、それはやられた以上の事を仕返しとしてやってはいけないつてのが本当の意味である。間違つても三倍返しではない。私とあいつの体力差を考慮すればまた変わるけども。

「それでも、あの人があんな事をした理由は私達にあるんですよね

「……ああ、そうだ! 全くもつてそうだ!」

「えつと……どうしてそこでやけに力強く頷くんですか?」

「いや、何でもない！」

私はただお前の話がちゃんと落ち着くべき場所に落ち着いたのが嬉しいだけだよ。頼むからお前はヤンデレにはなってくれるなよ？「別にいいですけど……あと、あんな形で終わっちゃったのは星ヶ丘先輩もきっと後悔してると思つんですよ。だからそんな敵視ばっかりするのもどうかと思つんです」

「……朱鷺羽」

「はい？」

首を傾げる朱鷺羽。

「お前に訊いて良かつたよ。いや本当に」

私がそう言つてやると、朱鷺羽は「ええと……ありがとうござります」と頭を下げた。いや、頭を下げたいのはこちらの方だがな。おかげで私は自分の考えが間違いでないと分かつたんだから。すぐ安心した。ちょっと黒い事を言い始めた時は安心とは程遠かったが、終わり良ければすべて良しだ。

「さあ、これからどうするか……」

と呟いた所で突然、左ポケットに入れていた携帯電話が振動した。Eメールだ。送り主は不明。だがこれは流れ的に……

「一宮さんだな」「参謀先輩ですね」

同時に私達はそう結論付けた。ちなみに参謀先輩とは二年の一宮敦次さんの別名である（本人は嫌がっているようだが）。要するに私達の意見は見事なまでに合致していた。……よくわかつてんじやんお前。早速受信トレイを開く。

『私は参謀ではありません』

なんてこつた。自分から正体バラしやがつた。一瞬啞然としてその場の勢いでメールを消去しかけたが、これしきの行動に気を奪われていては大事な事を見失つてしまいそうになので、気を取り直して続きを読む。

『我々文芸部から貴女へ一つ伝えたい事があります』
はいはい。

『おややく今貴女と共に道路の左端に寄つて歩きながら無意識のうちに多少黒い発言をしてしまつてゐるであらう後輩の朱鷺羽さんにも伝えておいて下さい』

「何でそこまで分かつてんだよー?」

もう読心術とかそういうレベルじゃないよな!? しかもやけに説明口調だしさ!

「晴希先輩、どうしたんですか? えっと……私が黒い事をつていののもよく分からないですしちゃん」

「いや……私達は本当に凄い人を味方につけていたんだなと改めて実感しただけの事さ。黒い云々もさしたる問題はない」

「えっと、それはどうこう……」

「気にするな。あまり考え過ぎると禿げるわ。それは良くない」

訊いてきた朱鷺羽にそう釘を刺しておく。つてかお前自分が変な方向に話進めてた自覚ないんだな……。まあいいけどわ。

「そうですか……」

誤魔化された朱鷺羽はまだ納得出来とはいひようだったが、空氣を読んだというか意図を察したといふが、それ以上の追及はしないでくれた。そして私も記憶の彼方に迫りやつておく。誰だつて禿は嫌だからな。

で、続きを読む。重ね重ね言つが一富さんの超人的読みに關してはスルーだ。それについて論理的な解を求めるがが変わつてしまいそうな気がする。いや髪だけじゃなくてな。そっちの話はもう終わりだ。

『貴女方には星ヶ丘柊をどうにかして引き入れて頂きたい所存です。彼女の転校によつてわが文芸部に多少の揺らぎが生まれてしまつた事。これはこちらとしても予想しておくべきことでした。どうもすみません』

私は驚愕した。あの一面さんが文面上とはいえ謝つてきたのだ。敬語でのメール自体は前に送られてきていたが、あの時はただ単に一富さんなりの参謀ジョークなのかとも思つたがもしかしたら元々

こういうキャラなのかもしない。普段の態度がアレなだけで……なんてな、そんなわけないか。つてか参謀ジヨークってなんだよ。『なので何とかして星ヶ丘柊との間にある蟠りを解消していただきたいのです』

「星ヶ丘先輩との……何て読むんですかこれ？」

「あいだ、だる」

訊いてくる朱鷺羽に対し私は適当にそう答えた。

「それくらい知っています！ その後のこれですよ」

言つて朱鷺羽は「蟠り」の部分を指さす。

「知らん」

「ですよね」

ちなみに後で調べてみた所、どうやら「わだかまり」と読むらしかった。なるほど納得いった。

「まあ漢字の読みはいい。次だ」

そう言つて読み進める事にする。

『このままでは星ヶ丘柊は危険なのです。貴女自身の利益の為にも任務の遂行をお願い致しております』

「なるほど」

それは妙に納得がいった。私自身の利益 確かにあるのだ。どうやらこの任務とやらで損をする人間は誰一人いないようだし……

「まあ、毎度毎度だが頑張つてやるか」と私は独り言を言つた。

「晴希先輩、まだ続いてるみたいですよ」

「……ああ、そうだな」

さつきの文章でどうやら終わりかと思つたが、数行空けて一番下に何か書いてあつた。

『追伸 何故そこまで上から田線なのですか』

「…………」

私は黙つて携帯電話を閉じた。一筋の冷や汗が垂れる。

……つぐづく何者なんだあの人の。

第七十一話 メインヒロイン

家に帰った後風呂に入り、夕飯も食べ終わって部屋に向かった後のこと。私は携帯電話を開いた。待ち受け画面に戻していなかつたらしく、先の一富さんのメールが一瞬目に入つてくる。……私はそれを見なかつた事にし、素早く電源ボタンを短く押した。

うん、だから何も見てませんつて。何があるように見えたのはきっと目の錯覚だらう。人は何もないものでも脳が勝手に別の何かだと判断する事があるらしい。つまりはそういう事だ。気にするとこれもきつと禿げるだらう。要注意だ。

して、アドレス帳に登録された名前を探す。あいつとは色々あつた末アドレスを交換するに至つたのである。

名前を見つけ、通話発信する。わあ、この想いや、届け！

開始一秒で出た。

「早っ！？」

『もしもし？ 誰？』

電話回線の向こうから聽こえてくるか細い声。……うん、少しばかり緊張したもんだが大丈夫だ。

「……ああ、画面見れば分かるだらうが」

『……ん、大仏殿さん？』

「違えよ大仏殿さんつて誰だよ」

『……その声と突つ込みは、晴希？』

「いやそれで何で判断基準が神原駿河と同じなんだよ」

しかも画面見れば分かるつて言つているのに。機械音痴？ いや違う。それなら一秒で通話に応じるられる筈がないからな。

……と言つて。

電話の相手は何を隠そつ、似非無口キヤラ」と杭瀬弥葉琉である。前の騒動の時、私が杭瀬を疎かにしたばかりにあいつは私から離れてしまった。結果的に良かつたものの、危うくあいつを独りに

してしまった所だったのだ。だからこそあれから話をしてやつたり、メールアドレスの交換をしたりした。

「いつの事を信頼して、それでいて時々は気にかけてやるつて約束した。』

『大仏殿尋人さんはね、一期の第五話に出てきたアニメオリジナルの登場人物なの』

「……あつそう」

何で菅原と同じ回なんだよ。いやあの後輩自分で違うつて言つてたし関係ないけどさ。つてかこいつにその話言つてないよね？ 何故被つたしと言つ他ないんだが。

「まあその大仏殿さんの事はいい。それより言つておきたい事がある」

『何？ やつぱり告白？』

……やつぱりって何だやつぱりって。ひょつとして期待でもしてんのか？

「いやしかし私は朱鷺羽と違つてレズじゃないからな？」

『そう…………え？』

「何でそんな予想外なリアクションを取るのかねお前は！」

この電話の相手はさつきからまるで動搖するよつた上ずつた声で喋つてゐるんだが、はつきりと言わせて貰おう。演技である。いやあ……呆れるね。さつきから私突つ込みに追われてばかりだし。確かに私はこいつを信頼すると言つたが、生憎盲信する気などは全くない。あんな事があつた後でもこいつはこんな[冗談ばかり]言つ事に変わりはないし、何より信じてやると言つた手前すぐさま騙されたというのもある。……うん、考えてみるとだんだんムカついてきた。決して言葉には出さないけど。

『晴希、五月蠅い』

「……ああ、うん、そうだな。悪い」

確かに電話口でこんな叫ばれても迷惑なだけだもんな。私は話を戻し、本題に入る。

「……あの転校生の事だよ」

『仕返しはよくない』

「いや、別にその気はないんだ」

向こうが余りある私の弱さを配慮出来てなかつたつてのもあるからな。「なんでそんな強いの?」とか言つてたしな。お前に何が分かるのかと。

現に私は見た目運動出来そうだとか言われる事があるが、体育の授業とかやつてられない。百メートル走さえも私にとつてはマラソンだ。どうだ恐れ入つたか。

『どうい事はつまり?』

「ああ」

『……星ヶ丘を晴希が攻略するつて事?』

「何でだよ!」

『晴希、五月蠅い』

「いやいやいや……」

一度目の文句に頭を抱えた。

それでも杭瀬は容赦をしない。

『確かに晴希が何だかんだで秋津ハーレムを増やしていくたいのは分かるけど……』

「ちょっと待て、秋津ハーレムって何だ初めて聞いたぞ」

新出単語に思わず戸惑つた。そして大体予想は出来てこるんだが、愚かにも私はそれを聞きたくなつてしまつた。

『いや、だから、邦崎さんと朱鷺羽と守坂と、あとメインヒロインの私だけど?』

「いや何『当然でしょ?』みたいな感じで言つてんの?」

それ私含めて皆ただの女子生徒だからな? そしてやつぱりお前はメインヒロインになるのかよ。

『つてかハーレム云々なら普通に内藤だらう』

『え? メインヒロインが?』

「ねえよ」

そんなんのないし、あつて欲しくもない。勿論あいつが実質ハーレムの主つて現状も認めたくはないのだが。

しかし本当にこいつはよく分からぬ奴だ……とはいえ、これらこいつともちゃんとやつてかなきゃならないんだよな、私は。なんせ私はこいつの数少ない仲間なんだから……時々、と書つかなり頻繁に殴りたくなつてくるけど。

『……まあ、大体の事は分かつた』

「ん？ ハーレムの事か？」

『いい加減そこから離れて』

お前が言つたんだろうに。正直ちよつとキレかけたぞ？

『晴希の選択は何も間違つてない』

「ああ、知つてる」

朱鷺羽もそう思つてくれていた。一富さんもやれと言つた。人の意見にそこまで影響される主義でもないんだが、ここまで言われば自分を疑う事なんてまず出来るわけがないだろ？

『……何だか腹が立つてくるのはどうして？』

「いや私に訊くなよ」

それを言つならこいつの方だ。先程も述べた通りこいつの発言にはたまに苛立たされたりする事がある。いや、苛立つとまではいかないんだがね。前ほどは苦手じゃなくなつたし、そう考へると私の沸点の方がかなり低くなつてしまつたのかもしねり……精進しなければ。

「あー……すまん、杭瀬」

『まあ冗談だけど』

「冗談かよ！」

謝つてすごく損した気分だ。

「まあ、とはいえる前にも太鼓判を押して貰つたのは素直に嬉しいよ

『晴希……ひょっとしてテレ期？』

「五月蠅い黙れ」

くそ、素直に言つて損した。私はあれだな、もつと内向的でクールにならなきやならんのかもしれない。

『でも、どう致しまして』

「くつ……」

私は屈辱に打ち震えた。電話の向ひの声が余りにも得意げだったからだ。

『それなら私からも一言 晴希は、十分強いよ

「…………は？』

『それじゃ。他に伝えたい事はあった？』

「いやちょっと待てよお』

『ないみたいね。それじゃ

「いやだから待てって！』

ツーシーと、無情にも電話の切れる音が響く。

「…………意味が分からん」

携帯を机に置き、やはり私は嘆息した。まあ確かに特に伝えるべきこともなかつたのだが。

星ヶ丘に続いてお前までそんな事を言つのか。つづづく謎ばっかりだ。この私が何となくで珍しくホールしてやつたと思つたらこれだ。電話しない方が良かったのかもしれないとか、そんな事も思つ。そのままベッドに倒れこみ、私が星ヶ丘に昏倒モノの一撃を見舞われるに至るまでの出来事を思い返してみる。

あれは今から……何時間前だったか。まあそれっぽく言つまでもないな。なんせ今日の出来事だ。

第七十一話 報い

「なあ、おかしいとは思わないか

朝。大柄の男子生徒、幡野克剣^{かつのり}は私の机の前で仁王立ちし、そんな事を言い始めた。一息ついて引き続き喋り始める。

「そりやああの騒動を終わらせたのはお前とあの影の薄い……なんだっけなあれ……」

杭瀬な。

「……まあいいや、あいつの働きが大きいだろ？。だがそれは結果論だろ。頑張ったにも拘らず^{かかわ}結果論だけで何もしなかつたというのは暴挙だ」

結果論は暴挙^{もつと}なるほど、それは尤もだ。

私も体育の授業は大抵見学だが、それをサボり呼ばわりされる言わはない。体力不足は免罪符などではなく、運動すると本気でダウンしてしまうレベルなんだから。確かに見た目だけは運動能力ありそうとか言われるが、これは仕方がない事だ。まあ別にそういうオーラを出している気は一切ないので、似非ではないと思う。

「いや、そもそも元から俺は仕事を完了していったと思うんだ。俺の仕事はお前のSOSを新聞部に伝える、それで終わりだつたんじやないだろうか。その後の事は言わばアフターサービス、俺の心優しい気遣いだ」

ほうほう、それは感心だ。

言われた事だけでなくその後の事も手伝ってくれるとは。新聞部は文芸部に負けず劣らず残念だが、その分いい奴らだったりもするんだな。お前の気遣いって所には若干引っかかるが。

「それに約束も確かにした筈だ。俺が仁科さんにそれを伝え終わったら、あれの終わった後にちゃんと報酬をくれると」

うん、確かにした。

ちなみに仁科さんってのは新聞部の部長だ。独特的の交渉術を得意と

するらしいが、生憎私にとっては一々水道水を勧めてくるのがうざつたいだけである。

「秋津、約束を守る事は大切だよな？」

当然だ。場合によりけりだとは思うが、約束するって事はその相手に大なり小なり自分の尊厳を預ける事だと思う。それを守らうとしないのは何より自分の為にならない。約束をするとはそういう事なのだ。そう言えば一年の時に嘉光と何か約束した気もするが……まあきっと氣のせいだろう。

「……それで、結局お前は何が言いたいんだ？」

呆れつつも本題を問うてみる。実を言うとこいつの今の話を聞くのは一度田ではない。というか毎日言われてて、本当にうんざりとしていた所なのだ。

「だから！」そこで幡野は体制を低くし、机を殴りつけ、こう叫んだ。「大人しくH口本を俺に渡してもらおうか！」

.....。

「お、おひ……」

はつきりと言わせて貰おう。引いた。えらく引いた。

「何でだよー？」

「だつて……なあ？」

何を言つたかと思つたらH口本を渡せときた。これに引かない奴が果たしているところのやう……いや、本当にいるからそんな驚いたのか。流石新聞部だな。

「いやだからH口本つて先に言つたのはお前じやん?」

「あのな」

そんな訴えをする幡野に溜息をくれてやり、私なりに諭してやる。

「下手な言いがかりはやめる。あれは確かにくれてやつたじゃないか」

「あれは！」再び机を殴る幡野。さつきから本当に五月蠅い。「俺の求めていたのとは全然違うじゃないか！」

何を言つた時に感動してそれから一步も動けなかつたく

せに。

「そんな事言つてしつかり読んでんだろ？ 分かつてんだよ」

「表紙でアウトだつたわ！ 何だあれ！」

表紙？ と言つてもあれはどつからどつ見ても「普通の……」

「いやだから……男の聖典だつ？ それ以上でもそれ以下でもない」

「確かに間違つてはいないが何かが致命的に違うだろ！ 普通の男子高校生がガチホモ見せられて喜ぶと思つたのか！？」

「……そういえばそうだな」

いやあ、盲点だった。

思えば私が報酬だと言つてくれてやつたのはまあ、ウホッでアーツな奴だつたわけだ。普通のエロ本は兄が何ともまあ余計なお世話で私に買つてきてくれるんだが、中学時代のクラスメイトから半ば押し付けられるよつた形で貰つたものがあり、それが幡野にくれてやつた物だ。上手く使えよ。

だが確かにこいつの言つている事は正しいな。完全に廃棄物のつもりで流してたから全くもつて気付かなかつたよ。

「だからさつひととエロ本を寄越せ。自分がされて嫌な事はするんじゃない」

そんな風に色々と台無しな事を言つ幡野。そしてその言葉は前後が矛盾以外の何物でもないとと思う。少なくとも私はエロ本貰つても嫌なだけだぞ。そもそも男子高校生じやないからな。

「まあそんな事はともかく、結論から言えば何だ？」

「エロ本が欲しい」

「……素直でよろしく」

……いやまあ、本音を言えば全然よろしくないんだけどな？ 当然だが。まず一女子高生がエロ本の話をしている時点でビックリがおかしいと思つ。

「分かった。面倒だから適当な時にくれてやるよ。どうせ私には不要だ」

「と言つて…… 使用済みか？」

「死ね」

そう言つて、とりあえず手に持つておいたシャーペンを幡野の拳に突き刺しておいた。

……ああ、随分とアレな話をしてたもんだな。

「おはよう晴希……って、幡野君は何やつてるの？」

と、そこに現れたのは邦崎綾女あやめだつた。

「さあ？ きっと体のツボか何かを刺激してんだる。ほら、シャーペンが刺さつてるだろ？」

「うん……」

何だか違和感を覚えつつも、邦崎は納得している様子だつた。

……本当に危なかつたと言わざるを得ない。

「」の邦崎という五年の付き合いのクラスメイトは一般的に言つ所の親友キャラに当たるんだろうが、いかんせん似非だ。いつもいつも、何かあればすぐに絶妙な間合いで私を困らせてきたのである。そんな奴に今のH日本の話などを聞かれたら……やめておこう。そんなの想像もしたくない。

「それはそつと、大変な事になつたんだよ！」

「……どうしたいきなり」

「内藤君のクラスに、転校生が来るんだつて！」

……あつそつ。知らなかつた。だがそれがどうかしたか。わざわざ強調してまで言つもんじや

「何……だと……！？」

……と思つたら幡野は頃垂れ、床に膝を着けていた。何なんだその驚きようは？

「もしかして、何か知つてゐるのか幡野？」

「いや……全然知らなかつた……これでも新聞部員なんだぜ……？」

何だ……何かと思えばそんな事か。それで自分の情報量の無さに

落ち込んだと。

「折角毎日部室に来て、モンハンをしてたってのに……」

「…………」
「ああ、うん、それは仕方ないんじゃないのか？ 寧ろそれでよく自分の情報量に一人前の自信が持てたもんだな。そんなんだから情報弱者などと言われるし、ノーマルなエロ本を手に入れたつもりがガチホモ系統のやつだつたりするんだよ。この情弱め。

しかしあ、一宮さん達はどうせこの事を知つてたんだろうな。結果的に知らされなかつたという点では私と同じか。

……と、ふと誰かの携帯のメロディーが鳴る。幡野は屈みこんだまま「ああ、俺のだ」と言いながら応答した。

「…………もしもし？ どうしたんですかそんなに慌てて……えっと、転校生が来たつて？ いえ、知つてますけど」

反射的に携帯をひつたくつた。

「もしもし？」

『もしもし……もしかするとその声と突つ込みは秋津さんですか？』
「…………何でその判断基準なんですか。第一今の一言のどこに突つ込みがありましたか？」

『やつぱり秋津さんですね』

落ち着きながらも推測が当たつたからなのか少し嬉しそうな声。

電話の相手はさつき言った新聞部の部長、仁科由宇さんだつた。

「…………まあ色々と言いたい事はあるんですが、一つだけ教えてもらえますか？」

『はい？』

「…………もしかしてやつていられない沈黙が続き、やがて電話がブツンと切

れた。
駄目だこの部……何かもう色々と……。

「…………」

「…………」

「…………もしかしてやつていられない沈黙が続き、やがて電話がブツンと切

れた。

「幡野、悪かった」

そして私は幡野に携帯を奪つた事とさつき情弱と心中で罵倒した事、一つの意味を込めて謝罪し、携帯電話を返してやつた。

第七十二話 恋は戦争、されど平和の為なら死ねる。

「あー……つまり、その転校生とやらがどうやらともでない美少女らしくて、そいつと一緒に拌みに行こうと?」

邦崎の話を私なりに要約し、果たしてそれが正しいかどうか確認をとつてみる。……等と書くと非常にシンプルだが、実際こいつの話は何とも支離滅裂でありその内容を理解するのに随分と手間を要した。テンパりすぎなんだよな本当。

ちなみに一度さつきの『美少女らしくて』と『そいつと一緒に』の間に『お前の大好きな内藤がかどわかされないか心配で』と入れてみたら猛烈な勢いで否定された。

「ふむ……」

長つたらしい説明は朝のホームルームが始まる頃によくわり、先生の話を右から左へ受け流しながら、多少私はその転校生云々という情報について考えてみる。

まず最初に言えることは、来たのが嘉光のクラスで良かつたってことだ。この辺りのあいつの主人公補正には一応感謝しておこう。仮に私のクラスに来られても面倒事になりそうな予感しかしないからな。あいつには正の補正が働いていて私には負の補正がかかっている。これには流石にお空に不平等を嘆かずにはいられないのだがそんな今更な話はさておきだ。

邦崎はあんなにも慌てているが、あれは嘉光がそのえらく美少女な転校生に取られそうだという焦燥なんだろう。しかしそんなもの私がらすればどうぞ勝手について話だ。ぶつちやけてしまえば、別にポジション的にも期待値の低そうな邦崎の味方をしてやる理屈もない。いや親友じゃないし。似非親友だし。

あと……ああ、ここで変にフォローしてやつてもこいつのためにはならないだろう。自分の問題は自分で乗り越えなければ。そう、決して面倒なわけではないのだ。

第一私があれだけフラグを放置したり時には叩き潰そうとしたりしても今も私の尻を追い続けている嘉光が、今更美少女の転校生程度で揺れ動くわけがないだろう。期待をするだけ損というのだ。そいつが何か訳ありでそのイベントの為に暫く時間と労力を傾けるなんて事が仮にあったとしても結局は相も変わらず私の下へと舞い戻つてくるのである。

余裕？ これは諦めというものだ。くそったれ。

とにかくまあそういう事で、別に私が何かしなくてはならないわけでもない。私の日常はいつも面倒で、それゆえ今日も平常運行である。

「余裕だな」

私の考えを読み取ったのか、もしくは我ならどうせこうだうとも推測したのか、幡野が横から口を出してきた。だから余裕じゃなくて……ふむ。

「……なんだお前、いたのか」

「最初からな。ってか最初にお前と話してたんだろうが」

「教室に戻らなくていいのか？」

「俺最初からここクラスだぞ！？ 犯めんなこらー。」

「最初最初うるせえな、初期設定なんてどうでもいいんだよ」

「おいこらー！」

「……何だお前。何をそんなに怒ってるんだ。カルシウムでも摂取したらどうだ」

ついつい心配になつた私はそつ労つてやる。我ながら親切だ。一
体どうした事か。

「カルシウムぐらい取つてるぞ！ ただ全部背に行つてるだけで！
それ結果的に不足してるので否定できないよな。

「ま、そんな野暮な話はどうでもいい」

私はそれだけ言つて黙つた。邦崎も幡野も何かを言つてきている
が知つた事か。私は疲れたんだ。モブキャラどもの話なんぞ必要な
い。

しかし一度そう断定はしてみたものの、正直不安と言つものはある。どうにかこの転校生の登場というイベントを何事もなく終わらせてほしいと願つてゐる。

まあそんな願いは微塵もなく打ち碎かれたわけだが。

だがこんなのは勿論終わりなんかじゃなくて、ただの始まりなのだ。

「これから私は杭瀬の言つ所の『攻略』をしなければならない。

「なあ、お前ギャルゲーやつた事あるか?」

「……ちょっと何を言つているか分からんんだけど」

だから翌日にて、具体的な手順の提示を杭瀬に煽つたわけだが、返答はこうだつた。話の分からないやつである。お前それでも文芸部員か。まあ存在意義の全く見つからない嘉光よりは幾分マシだとは思うが。

「だから昨日あれを攻略するつて言つたひ。その通りの意味だ」

「うん」

と相槌を打つ杭瀬。立て続けに私は言つ。

「だが生憎私はギャルゲーと名のつくものに手を染めた覚えはない。そしてその状態で挑むのは無謀が過ぎるというものだ。失敗は成功の素もとと言うが実際その通りで、才能だなんだというのを言い争うより先に経験を培つた方がいいのは自明の理だ。だが私のような素人でもそれなりの結果を残す方法と/orのはあるだろう」

「うん」

と相槌を打つ杭瀬。満足した私は引き続き話を進める。

「そう、自分の経験がないなら他人の経験を借りればいい。所謂軍師いわゆるというものを得れば戦えるのではなかろうかというわけだ。そう

「これは戦いだ。戦争だ。右手には折れぬ剣を、左手には砕けぬ盾を、心には死する覚悟を持つて臨むべき戦争だ」

「うん」

「私は困惑した。私にはギャルゲーがわからん。私は単なる一人の女子高生だ。だが私は人一倍フラグには敏感だつた。一見ただの面倒にしか思えないイベントだが、これを乗り越えればまた私の望む世界に近づくとこうまあなんだ……」

「うんうん」

「…………」

「…………うん？」

「その急かすような相槌はやめてくれ。

正直私も言つてる最中に恥ずかしくなつてきた。何が戦争だよ。死に行くとか死んでも嫌だよ。もう平和のためなら死ねるくらい。うん。

「晴希……」

杭瀬は深く感情の読めない、眼光を伴わない真っ暗な瞳を無言でこちらに向けてきていた。やめろ！ そんな目で私を見るな！ と思うとその表情もすぐに崩れ、前までは決して見せる事のなかつた柔らかな微笑みと共にこう言つた。

「晴希は、女子高生じゃないでしょ

「ファックだ」

とりあえず額を抑えながらもう一方の手で中指を突き立ててやつたが、依然として杭瀬はどこ吹く風である。スルースキル高いなこいつ。つくづく変な所で憧れる。

「……いいからどうなんだ。ギャルゲーはやつた事あるのか」

「晴希と違つてないけど、それが？」

今度は堂々と言いやがつた。さり気に私に変な疑いを被せながら。「いや私もないが、んじやまず私は何をやるべきだと思つ？」

前半の部分はやはりさり気に流しつつ、そう質問をしてみる。すると杭瀬は黙り込み数秒の思索の末また口を開いた。

「じゃあ晴希がギャルゲーを一切合財やつたことがないってていで話進めるけど」

「ああうんもうそれでいいよ」

つべづべ面倒なやつである。何だかハツ当たりのよつな気がしなくもないがそれもこの際どうでもいい。私はハツ当たりなんにしていてないし、私がギャルゲーをしていないというのも今どりあえずの話である。所謂Win-Winの関係つてやつ。何か違う気もするけど。

「どうして私に聞くの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？」

「ナチュラルに罵倒すんな」

そういうのは心の中に留めておけ。私みたいに。

「晴希もよく言つてるけど」

「うつむこ」

しかし思い返してみると確かにそうだつたかもしれない。じゃあ今忘れよつ。前も言つたがそういうのを気にしそぎると禿げる。「どうしてつて言つてもなあ……だつてお前キャラ的に案外やってそうだる」

「……どんな判断基準？」

いや、似非だからだよ。

「最近はそういうのが流行りなの？」

「きつとな」

田を合わせず私は答えた。無論根拠は無いけど。ソースは私つてやつだ。

「他に友達はいないの？ 幡野とか」

こいつまたナチュラルな罵倒を入れてきやがつた。

「あんな男は私の友達なんかじゃないし、きつとあればギャルゲーに手を出してみたはいいがどうしてもクリア出来ずに憤慨しているタイプだ」

「それは流石に偏見だと思つ」

「だがあいつはそういう奴だ」

もう私の中ではそういう残念な奴という事で結論づいている。秋津脳内議会において八対二で賛成派が圧倒的多数を占めたのは記憶に新しい。

それにもし私がそんな話を出せばあいつはまた嬉々として勘違いを犯し、新聞部を巻き込んで大々的に報道を始めるだろう。流石にロリコン疑惑に続いてギャルゲー好き云々で一度も校内新聞に載る趣味はない。

「ふうん……じゃあ邦崎は？」

「訊けるかアホ」

それこそ駄目だ。絶対やつてないだろうし、そんな話を出した途端邦崎は私の友ではなくなる。実際何度も私は「晴希」から「秋津さん」への位置変更を強いられてきたのだ。

「まあ冗談はとにかく……」

と杭瀬。おいたつきの全部冗談かよ。好き勝手やりすぎだろ。

「一富先輩からは、何も？」

「ああ。えらくアバウトな話だった」

「じゃあ、いいんじゃない？」

何が、と言い返すまでもなく今度は杭瀬が話を続ける。静かながら、いつも似非無口とはまた違う口調だ。

「その時になつたら問題は向こうから舞い込んでくるんだから、それから逃げない限りは。無理なんかしなくていいよ。晴希は今のその、レズで隠れエロゲー好きな晴希の今までいいんじゃない？」

「おい待てこら」

何かいつの間にか私に新たな要素が追加されていた。ギャルゲーに留まらずエロゲーまで来たか。そりやまあ高校生でもエロゲーやつてるやつは「ぐく一部にいるだろ」が、第一私は女だし。杭瀬にギャルゲーについて訊いたのは……まあそういう日もあるからだろ。

「それじゃ、私は本を読んでるから」

と言つてまた怪しげな本を取り出し、読み始めた。思うんだがこのが読んでもる本は普通の女子高生が読むにしては大きくてまるで

鈍器にできそうなものばかりで、手の平サイズの文庫とかを読んでる所なんて見た試しがない。まあつまりこいつこそが紛れもなく普通でないJKであるという事だが。

「……そのままいい、ねえ」

私は誰にも聞かれないように咳き、それを誤魔化すように無遠慮にひとつ溜息をついてみる。

杭瀬は変わった。

とは言つても別に私を弄らなくなつたとか、文字が横に並んで読みづらくなつた書籍化した携帯小説を読むようになったとかじゃなくて。それでもまあ小さくない変化ではあつたとは言つていい。

あいつはそれまで普通すぎるほど普通に溶け込んでいた世界から、その存在を露わにした。何だかやけに格好つけた言い方になつてしまつたが、要するに杭瀬弥葉琉がこの教室にいない存在から存在感の薄い存在にクラスチェンジしたって事だ。だからこそ幡野も名前こそ詰まつて出さなかつたもののあいつの話を振つてきたわけだし。

その覚悟に至るまでの経緯とかそういうあいつの心中を私は知る術もないが、いい事か悪い事かと言えばきっといい方なんだ。うつ心なしか表情も色々見せてくるようになつた気がするし。

自分のままでいいって言つてたのはそういう点で自分と照らし合させていたつてのもあるのかもしない。さつき話していた時も田を逸らしながらだつたが、それは嘘をついているのとはまた別の理由に感じられたし。

あと、これまで以上に私に無遠慮になつた。弄らなくなつたってのとは全く逆の変化だ。まあこれも私に積極的に心を開いてくれたつて事でどちらかといえば……いい事だ。非常に、非常に悔しい事だが。あとはもうちょっと私以外にもそれを分けてやってほしいものだ。いやほんと。お願い。期待できないけど。

「……ん？」

私は首を傾げた。何か引っかかる。だが他に杭瀬についての話が何かあつただろうか。いや、ない。

だからまあ、気のせいなんだろう。私はそう結論付け、自分の席についた。

この世界には謎が多い。この程度の事なんて言つてしまえば些細極まりないのだ。

第七十四話 されど君は私の弱さを知る事はない

参ったな、と思ひ。いやあ逆に照れるくらいだね。

どうやら私は昨日の事で完全に星ヶ丘の敵と見なされてしまったらしい。こちらとしては鞆で横殴りにされ気絶した私一機分の犠牲を無駄にしないためにも積極的に距離を詰めたいのだが、向こうはそれを許さず拒み続けている。これが戦いであつたなら私が明らかに精神的優位に立っていると考えていいかもしないが、生憎これは戦いではない。

敵と見なされた、とは言つたがこれをもう少し具体的に説明するとしてよ。

まずは杭瀬の言つ事に従い、これと言つて特別な接触をしない事にした。別にこれはまた星ヶ丘と話すのが嫌だつたとかそういう理由ではないのだが、まあ向こうがどう思つたのかはわからない。しかしやはりそういう風に映つたのかもしれないから顔を出すくらいの事はしてもよかつたのかもしない。まあ過ぎた事なのでどうしようもないが。杭瀬の言つ通りだとしたらある程度私は勝手な行動を取つて構わないだろうが、だからと言ってこの状況をうまくフオローしてくれるのかつて疑問は晴れない。

暇な体育を毎度のように見学で見送つて放課後に部室へ行くと、そこには既に先客がいた。とはいゝ私もそれほど早く部室に行くわけでもないし、下手に走つて行くとただできえ少ない体力が尽き果てかねないため校則をきちんと守り歩いて行くため寧ろ遅めと言つてもいいくらいだ。何らおかしい事はない。

まあ元から分かつっていた話だが、部室の真ん中には昨日に引き続き星ヶ丘がいた。ついでに嘉光も横に立つてゐるが、やっぱり様子はおかしかつた。いつもおかしいけどな、おつむとか。

と、星ヶ丘は私を見るなりこちらに顔を向けて正面に見据え、そ^{うして}口を開いた。

「秋津さん、昨日は『めんなさい』」

は？

まず呆気に取られた。まさかこんな素直に謝つてくれるとは。そして銀髪長身で思わず圧倒されるような見た目の相手が頭を下げてくる様子は何だか妙で、だからか何かが臭つた。

そして更に気にかかるのは『秋津さん』だ。この呼び名は似非親友モードになつた邦崎が得意とする　と言つていいのか分からないうが　呼び名だが、これは自分と相手の間に敢えて距離を作つている事の意思表示である。星ヶ丘も昨日は『あんた』などという何とも言い難い距離の呼び名だったはずだが、そこから早くも立ち位置を変えてきたらしい。

となれば一つの推測ができる。私は次の言葉をどうするか決めた。「ああ全くだ。お前を追いかけるだけで随分と疲れたんだぞ。まあ別にそれはいいけどな」

「『めんなさい、本当に』『めんなさい』」

ほつ……。

目を細め、頭を下げる星ヶ丘を見やる。嘉光が何か言おうとしていたが視線で黙らせた。今のこいつなんて全然怖くないね、ああ。やはりそうだ。この星ヶ丘の奇行は私を遠ざけるという意図つてのものだろう。

相手を気絶させるほど殴つて逃げたというならここまで大仰に謝る理由も分かるが、私はそこで私は鎌をかけてみたのだ。本来それに比べれば「追いかけるのに疲れた」なんてのはひどく小さな事で、しかし星ヶ丘はそれを指摘しなかつた。だからあいつは私があの程度のダメージで気絶まで至るくらいひ弱な事を知らない。

そしてそれでもこの謝りようだ。仮に知つていたとしても本当に謝るつもりがあるならそこまで言及するはずである。言わなかつたにしても少なくともそれを言うべきか判断するくらいの時間はあるべ

きだらう。だが星ヶ丘は何の躊躇いもなく頭を垂れた。

「それで、何で内藤と一緒にいるんだ？」

「ならばこちらも友好的に、しかし飽くまで距離を詰めて訊いてみる。」

「嘉光……内藤君に部室の案内をしてもらいたくて。ほひ、この部屋

つて色々あるじゃない？」

お前は昨日散々見てまわつただろうが。

心の中でそう突つ込みながらも「そうか」とだけ返しておいた。嘉光が何か言おうとしたが、星ヶ丘の踵が嘉光の足の甲に叩き付けられると黙つてしまつた。

まあしかしこれはいい事ではある。いや嘉光が痛そつなのも勿論いい事なのだが、私が言いたいのは星ヶ丘の方である。こいつはやはり嘉光にそれだけのアプローチを取つてゐるわけで、こんな事を言うのもなんだが利用しがいがある。打算で人付き合いをするのは好みではないが、あの変態とのフラグを折るためなら私はどこまでも冷徹になれるのだ。腹の探り合いなら任せろつてな。

「あー、ちなみにいつでも来ていいと思つぞ。たとえ部員じゃなくともな」

私は安心させるようにそつと口づいた。下手に逃げられても不都合だ。守坂つて前例もあるしな。これくらい言つておいても別に誰も咎めやしないだらう。

だがその目的に反し星ヶ丘は、

「ええ、その気になつたらね」

と答えた。経験則から言えば、これはもう来ない奴の台詞だ。杞憂ならばいいのだが、もしくは嫌味か何かか。

「晴希

「！？」

不意に背中から声をかけられ、心中でメタルギアぱりのアラート音が響いた。私は声にならない声を上げそうになつたのを押し殺し慌てて振り返る。

「」の声と行動

無論杭瀬だった。

「……黙つて私の後ろに立つな」

押さえている心臓がバクバクと鼓動を刻んでいる。正直言つてこれだけで過労しかねなかつた。杭瀬のこういった行動は久し振りに見た気がして、そのせいで意表を突かれたというのもある。

「今のは駄目だつた」

「あ？」

じゃあ何のリアクションが欲しかつたのだと抗議したい。大体私は実質单なる一女子高生であり、何らかの期待に応じたリアクションをする仕事などした試しがない。星ヶ丘やら何やらには強いとか言われているが、實際は鞆で殴られて氣を失う程度の体力だ。

「そうじゃなくて、いや」杭瀬は東側 分かりやすく言えば部室の奥の方 の机と椅子に目をやつた。「ここからはあっちで話すけど」

なるほど確かにこのまま話すのも何かおかしい氣がしたので、言われるがまま私はその席に座つた。幸いトラップとかは無かつた。あのブーブー鳴る奴とか。

「……晴希は私を何だと思つてるの？」

……それが分からぬから気にしてんだよ。 杭瀬は教室にいた時より存在感を更に消していた。まるで五月の、こいつが変わる以前のように。星ヶ丘の存在を考慮しての事だろうが、それにしても便利だなそれ。

「駄目だつた、じゃないかも」私の横に座り、茶の髪を整えながら杭瀬はまた静かに話し始めた。「でも逆効果だつたかもしれない」

「逆効果？」

私がそう問うと、「うん」と返事がきた。その返事の仕方はさつきの私の意味不明な演説を思い出して何だか嫌なんだが、そう意識するのもなんなので気にしないようにしておく。

「さつきの言葉、晴希は距離を詰める、腹を切るといつ態度を見せるつもりでそう言つたんだろうけど」

「腹を割る、な」

どうやら杭瀬が言いたかったのはその話だつたらしい。いつでも来ていゝ、つて話だ。しかし切腹してどうする。いやまあ割る方も割る方で割腹になるが。

「……その声と突つ込みは」

「もうそのネタは聞き飽きた。そして明らかに状況に合つてないよなそれ」

お前から話しかけてきたわけだし、大体もう話し始めて大分時間が経つてるしな。それならさつき私のモノローグの方がずっと状況に合つている。

「それじゃ話を戻す。晴希は星ヶ丘柊にもうと近づいてもらえるようにするためにそう言つたのかもしれないけど、でも向こうからしたら晴希の態度は余裕を見せてるみたいで怪しかったと思つの」

「ふむ……」

余裕、か。

「要するに、怪しそぎた、か……？」

首を傾げそう咳きながら、嘉光に話しかけている星ヶ丘に田をやつた。文芸部室のここが実はこつなつてるのかとか何とか聞いていりが、何か変な事を言つ度に毎回踏まれている嘉光の足の甲が痛そうだつた。まあまあ。

そうしていろいろうちに星ヶ丘と田が合つて、すぐ何もなかつたかのよう逸らされた。

前途多難だな。

なんて考えているうちに朱鷺羽と守坂が入ってきて、挨拶をしながら私のすぐ傍に席を取つた。

お前らやっぱりそこ指定席なのか。私基準で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3504j/>

白世界

2011年12月21日13時49分発行